岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 710 集

中平（なかたい）遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

２０２０

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

中平遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県九戸郡野田村の三陸沿岸道路建設に関連して平成 26・27・29・30 年度の４ヵ年にわたって発掘調査を実施した、中平遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、縄文時代に狩り場、古墳時代後期～平安時代と中近世に集落が営まれていたことが明らかとなりました。特に古墳時代後期～末の集落は、周辺の集落を含めた広がりが確認されたことから同時期の沿岸北部の集落遺跡を考える上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、野田村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和２年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　高　橋　嘉　行

例　　言

1　本報告書は、岩手県九戸郡野田村大字野田第13地割字大平野地内に所在する中平遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　今回の調査は、三陸沿岸道路建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課の指導・調整のもとに、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受け、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コードはJG60-0258、遺跡略号はNKT-14･15･17･18である。

4　年度ごとの野外調査及び室内整理期間、遺跡略号、調査担当者は次の通りである。

年度	遺跡略号	区分	期間	面積	担当者
H26	NKT-14	野外調査	2014.10.01 ～ 2014.11.21	2,600㎡	北田 勲・佐々木あゆみ
		室内整理	2014.12.01 ～ 2015.03.31	-	北田 勲
H27	NKT-15	野外調査	2015.08.03 ～ 2015.11.06	5,200㎡	北田 勲・伊藤 武・大坪華子
		室内整理	2015.11.01 ～ 2016.03.31	-	北田 勲
H29	NKT-17	野外調査	2017.11.01 ～ 2017.12.07	552㎡	北田 勲・藤田崇志・佐藤桃子
		室内整理	2017.12.16 ～ 2018.01.15	-	佐藤桃子
H30	NKT-18	野外調査	2018.04.05 ～ 2018.05.15	689㎡	北田 勲・遠藤 修・村上千華
		室内整理	2018.10.16 ～ 2018.12.31	-	北田 勲

5　本報告書の作成は、北田・伊藤が本文原稿、北田・伊藤・大坪・佐々木・佐藤が遺構図化、伊藤が遺物図化を行い、各々に文責を記した。またⅠ調査に至る経過は三陸国道事務所、Ⅵ自然科学的分析は１を（株）加速器分析研究所、２を古代の森研究舎、３を（株）古環境研究所、４をパリノ・サーヴェイ（株）が行った。全体の編集は北田が行った。

6　業務委託は、以下の通りである。

項目	委託先	委託内容
（1）	（株）スズマ測量設計	座標原点の測量
（2）	東邦航空（株）	航空写真撮影
（3）	（株）加速器分析研究所	放射性炭素年代測定
（4）	古代の森研究舎	炭化材同定（1）
（5）	（株）古環境研究所	炭化材同定（2）
（6）	パリノ・サーヴェイ（株）	貝類同定
（7）	花崗岩研究会	石器類石材同定

7　本書では以下の地形図を使用した。

・『1/25,000地形図陸中野田』（国土地理院）

・『1/50,000地形図陸中野田』（国土地理院）

8　野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関・方々から御指導・ご助言・ご協力をいただいた（敬称略・五十音順）。

井上雅孝（野田村教育委員会）、宇部則保（八戸市教育委員会）、鈴木博之（野田村教育委員会）

9　発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

10　調査成果の一部については、平成26・27・29・30年度調査概報（岩埋文第647・661・692・708集）、現地説明会資料等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

凡　　例

1　遺構図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

（1）遺構実測図の縮尺は、竪穴住居跡・柱穴状ピット・陥し穴状遺構・土坑・溝跡断面図 1/60、竪穴住居跡カマド・焼土遺構 1/30、掘立柱建物跡 1/60・1/80、塀跡 1/70、遺物包含層 1/100・1/300、円形周溝・方形周溝 1/150、溝跡平面図 1/60・1/150・1/200・1/250 で表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。

（2）推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した。

（3）層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。

（4）土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

2　遺物実測図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

（1）遺物実測図の縮尺は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器 1/3、剝片石器 2/3、礫石器 1/3、土製品 1/2、金属製品 1/2 で表した。

（2）スクリーントーンを使用して、遺物の状態を表した。

3　写真図版の用例は次の通りである。

（1）遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。

（2）遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

焼土(弱)	K20%
焼土(強)	K40%
炭化物	K60%
硬化面	K10%
還元化	K70%

遺物使用トーン凡例

黒色処理範囲	K25%
石器・土製品・金属製品断面	K30%
羽口断面	斜線
木部	縦線

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地・環境 …… 2
1　遺跡の位置 …… 2
2　地理的環境 …… 2
（1）地　　形 …… 2
（2）基本層序 …… 4
3　歴史的環境 …… 5

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 10
1　野外調査方法 …… 10
（1）調査方法 …… 10
（2）野外調査経過 …… 10
2　整理方法 …… 13
（1）遺構の整理 …… 13
（2）遺物の整理 …… 13
（3）遺物写真撮影 …… 13
（4）整理経過 …… 13
3　広報活動 …… 13

Ⅳ　検出遺構 …… 14
1　調査の概要 …… 14
2　縄文時代 …… 19
（1）概　　要 …… 19
（2）陥し穴状遺構（円形） …… 19
（3）陥し穴状遺構（溝状） …… 21
（4）包含層 …… 41
3　古　　代 …… 43
（1）概　　要 …… 43
（2）竪穴住居跡 …… 43
（3）土　　坑 …… 70
（4）焼土遺構 …… 71
（5）円形周溝 …… 72
（6）方形周溝 …… 74
（7）溝　　跡 …… 76
4　中近世 …… 77
（1）概　　要 …… 77

（2）掘立柱建物跡 …… 77
（3）塀　　跡 …… 81
（4）柱穴状ピット …… 82
（5）溝　　跡 …… 83

Ⅴ　出　土　遺　物 …… 87

1　縄　文　時　代 …… 87
（1）縄　文　土　器 …… 87
（2）石　　器 …… 87

2　弥　生　時　代 …… 87
（1）弥　生　土　器 …… 87

3　古　　代 …… 87
（1）土師器・須恵器 …… 87
（2）土　製　品 …… 101
（3）石　　器 …… 101
（4）金　属　製　品 …… 102
（5）木　製　品 …… 102
（6）動 物 遺 存 体 …… 102

4　近　　世 …… 102
（1）銭　　貨 …… 102

Ⅵ　自然科学的分析 …… 112

1　放射性炭素年代（AMS 測定） …… 112
（1）測定対象試料 …… 112
（2）測 定 の 意 義 …… 112
（3）化学処理工程 …… 112
（4）測　定　方　法 …… 112
（5）算　出　方　法 …… 112
（6）測　定　結　果 …… 113

2　炭化材同定（1） …… 116
（1）は　じ　め　に …… 116
（2）同定結果及び考察 …… 116

3　炭化材同定（2） …… 118
（1）は　じ　め　に …… 118
（2）試 料 と 方 法 …… 118
（3）結　　果 …… 118
（4）所　　見 …… 119

4　貝　類　同　定 …… 121
（1）試　　料 …… 121
（2）分　析　方　法 …… 121
（3）結　　果 …… 121
（4）考　　察 …… 121

Ⅶ　調査のまとめ …… 123
1　縄文・弥生時代 …… 123
2　古　　代 …… 123
3　中　近　世 …… 126
報告書抄録 …… 197

図版目次

凡例図
第１図　三陸沿岸道路事業図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 3
第３図　地形分類図 …… 4
第４図　基本層序柱状模式図 …… 5
第５図　周辺の遺跡 …… 7
第６図　年度別調査区とグリッド配置図 …… 11
第７図　調査全体図 …… 15
第８図　部分図１（北調査区）…… 16
第９図　部分図２（中央調査区周辺）…… 17
第10図　部分図３（南調査区）…… 18
第11図　SK24・55・59・61・62・73 陥し穴状遺構 …… 20
第12図　SK01 ～ 06 陥し穴状遺構 …… 22
第13図　SK07 ～ 10・12 陥し穴状遺構 …… 23
第14図　SK11・13 ～ 15・17 陥し穴状遺構 …… 25
第15図　SK18 ～ 21・35 陥し穴状遺構 …… 27
第16図　SK22・23・25・27 ～ 30 陥し穴状遺構 …… 28
第17図　SK31 ～ 34・36・37 陥し穴状遺構 …… 30
第18図　SK38 ～ 43 陥し穴状遺構 …… 32
第19図　SK44 ～ 48 陥し穴状遺構 …… 34
第20図　SK49 ～ 53 陥し穴状遺構 …… 36
第21図　SK54・56・58・60・63・65 陥し穴状遺構 …… 37
第22図　SK64・66 ～ 69・71 陥し穴状遺構 …… 39
第23図　SK70・75 ～ 78 陥し穴状遺構 …… 40
第24図　北側谷部包含層１ …… 42
第25図　SI01 竪穴住居跡（１）…… 44
第26図　SI01 竪穴住居跡（２）…… 45
第27図　SI02 竪穴住居跡 …… 46
第28図　SI03 竪穴住居跡（１）…… 47
第29図　SI03 竪穴住居跡（２）…… 48
第30図　SI04 竪穴住居跡（１）…… 49
第31図　SI04 竪穴住居跡（２）…… 50
第32図　SI05 竪穴住居跡 …… 51
第33図　SI06 竪穴住居跡 …… 53
第34図　SI07 竪穴住居跡（１）…… 54
第35図　SI07 竪穴住居跡（２）…… 55
第36図　SI07 竪穴住居跡（３）…… 56
第37図　SI08 竪穴住居跡 …… 58
第38図　SI09 竪穴住居跡（１）…… 59
第39図　SI09 竪穴住居跡（２）…… 60
第40図　SI10 竪穴住居跡（１）…… 61
第41図　SI10 竪穴住居跡（２）…… 62
第42図　SI11 竪穴住居跡 …… 63
第43図　SI12 竪穴住居跡（１）…… 64
第44図　SI12 竪穴住居跡（２）…… 65
第45図　SI13 竪穴住居跡 …… 66
第46図　SI14 竪穴住居跡 …… 68
第47図　SI15 竪穴住居跡 …… 69
第48図　SI16 竪穴住居跡 …… 69
第49図　SK16・26・57・72・74 土坑 …… 70
第50図　SF01 ～ 08 焼土遺構 …… 72
第51図　円形周溝１（１）…… 73
第52図　円形周溝１（２）…… 74
第53図　方形周溝１（１）…… 75
第54図　方形周溝１（２）…… 76
第55図　SB01 掘立柱建物跡 …… 78
第56図　SB02 掘立柱建物跡 …… 79
第57図　SB04 掘立柱建物跡 …… 80

第58図　SB05 掘立柱建物跡 …… 81
第59図　SB06 掘立柱建物跡 …… 82
第60図　塀跡１ …… 82
第61図　SD01 溝跡 …… 83
第62図　SD02・03・04 溝跡 …… 84
第63図　SD05 溝跡 …… 85
第64図　SD06・07 溝跡 …… 86
第65図　縄文・弥生土器、石器 …… 88
第66図　SI01 竪穴住居跡出土遺物 …… 89
第67図　SI02 竪穴住居跡出土遺物 …… 90
第68図　SI03 竪穴住居跡出土遺物 …… 91
第69図　SI04 竪穴住居跡出土遺物 …… 92
第70図　SI05 竪穴住居跡出土遺物 …… 93
第71図　SI06 竪穴住居跡出土遺物 …… 93
第72図　SI07 竪穴住居跡出土遺物（１）…… 94
第73図　SI07 竪穴住居跡出土遺物（２）…… 95
第74図　SI09 竪穴住居跡出土遺物 …… 96
第75図　SI10 竪穴住居跡出土遺物 …… 96
第76図　SI11 竪穴住居跡出土遺物 …… 96
第77図　SI12 竪穴住居跡出土遺物 …… 97
第78図　SI13 竪穴住居跡出土遺物 …… 98
第79図　SI14 竪穴住居跡出土遺物 …… 99
第80図　円形周溝１出土遺物 …… 99
第81図　SI16 竪穴住居跡出土遺物 …… 100
第82図　方形周溝１出土遺物 …… 101
第83図　SD03 溝跡出土遺物 …… 101
第84図　遺構外出土遺物 …… 101
第85図　時期別調査全体図 …… 124

表目次

第１表　周辺の遺跡分布表 …… ８
第２表　柱穴状ピット計測表 …… 103
第３表　縄文・弥生土器観察表 …… 106
第４表　土師器観察表 …… 106
第５表　土製品観察表 …… 109
第６表　石器観察表 …… 110
第７表　金属製品・銭貨観察表 …… 111
第８表　木製品観察表 …… 111
第９表　貝類観察表 …… 111

写真目次

写真図版１　遺跡遠景、近景（１）…… 129
写真図版２　遺跡近景（２）…… 130
写真図版３　遺跡近景（３）…… 131
写真図版４　遺跡近景（４）…… 132
写真図版５　SK24・55・59・61 陥し穴状遺構 …… 133
写真図版６　SK62・63・73 陥し穴状遺構 …… 134
写真図版７　SK01 ～ 04 陥し穴状遺構 …… 135
写真図版８　SK05 ～ 08 陥し穴状遺構 …… 136
写真図版９　SK09 ～ 11 陥し穴状遺構 …… 137
写真図版10　SK12 ～ 14 陥し穴状遺構 …… 138
写真図版11　SK15・18・19 陥し穴状遺構 …… 139
写真図版12　SK17・20・21 陥し穴状遺構 …… 140
写真図版13　SK22・23・25・27 陥し穴状遺構 …… 141
写真図版14　SK28 ～ 31 陥し穴状遺構 …… 142
写真図版15　SK32 ～ 35 陥し穴状遺構 …… 143
写真図版16　SK35・36・39 陥し穴状遺構 …… 144
写真図版17　SK37・38・40 陥し穴状遺構 …… 145
写真図版18　SK41 ～ 44 陥し穴状遺構 …… 146
写真図版19　SK45 ～ 48 陥し穴状遺構 …… 147
写真図版20　SK49 ～ 52 陥し穴状遺構 …… 148
写真図版21　SK53・54・56・58 陥し穴状遺構 …… 149
写真図版22　SK60・64・65 陥し穴状遺構 …… 150
写真図版23　SK66 ～ 69 陥し穴状遺構 …… 151
写真図版24　SK70・71・75・76 陥し穴状遺構 …… 152
写真図版25　SK77・78 陥し穴状遺構、SK16・26 土坑 …… 153
写真図版26　SK57・72・74 土坑、SF01 焼土遺構 …… 154

写真図版27　SF02 ～ 05 焼土遺構 …… 155
写真図版28　SF06 ～ 08 焼土遺構、北側谷部 …… 156
写真図版29　SI01 竪穴住居跡 …… 157
写真図版30　SI02 竪穴住居跡 …… 158
写真図版31　SI03 竪穴住居跡 …… 159
写真図版32　SI04 竪穴住居跡（１）…… 160
写真図版33　SI04 竪穴住居跡（２）…… 161
写真図版34　SI05 竪穴住居跡 …… 162
写真図版35　SI06 竪穴住居跡 …… 163
写真図版36　SI07 竪穴住居跡（１）…… 164
写真図版37　SI07 竪穴住居跡（２）…… 165
写真図版38　SI07 竪穴住居跡（３）…… 166
写真図版39　SI08 竪穴住居跡 …… 167
写真図版40　SI09 竪穴住居跡（１）…… 168
写真図版41　SI09 竪穴住居跡（２）…… 169
写真図版42　SI10 竪穴住居跡 …… 170
写真図版43　SI11 竪穴住居跡 …… 171
写真図版44　SI12 竪穴住居跡（１）…… 172
写真図版45　SI12 竪穴住居跡（２）…… 173
写真図版46　SI13 竪穴住居跡（１）…… 174
写真図版47　SI13 竪穴住居跡（２）…… 175
写真図版48　SI14 竪穴住居跡 …… 176
写真図版49　SI15 竪穴住居跡 …… 177
写真図版50　SI16 竪穴住居跡 …… 178
写真図版51　円形周溝（１）…… 179
写真図版52　円形周溝（２）…… 180
写真図版53　方形周溝（１）…… 181
写真図版54　方形周溝（２）…… 182
写真図版55　SB01・02 掘立柱建物跡 …… 183
写真図版56　SB04 掘立柱建物跡 …… 184
写真図版57　SB05・06 掘立柱建物跡 …… 185
写真図版58　SD01・02 溝跡 …… 186
写真図版59　SD03・04 溝跡 …… 187
写真図版60　SD05 ～ 07 溝跡 …… 188
写真図版61　土器（１）…… 189
写真図版62　土器（２）…… 190
写真図版63　土器（３）…… 191
写真図版64　土器（４）…… 192
写真図版65　土器（５）・土製品 …… 193
写真図版66　石器 …… 194
写真図版67　琥珀 …… 195
写真図版68　金属製品・銭貨・木製品・貝類 …… 196

Ⅰ　調査に至る経過

中平遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（普代～久慈）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年1月28日付け国東整陸二調第854-2号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化財課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年2月19日にわたり試掘調査を行い、平成25年3月18日付け教生第1724号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

路線名	計画延長	供用中	事業中
三陸沿岸道路	359km	252km	107km
うち岩手県	213km	122km	91km
宮古盛岡横断道路	66km	24km	42km
東北横断自動車道釜石秋田線	80km	80km	0km

H31.3.9時点

国土交通省東北地方整備局ホームページから転載

第1図　三陸沿岸道路事業図

Ⅱ　遺跡の立地・環境

1　遺 跡 の 位 置

中平遺跡は岩手県九戸郡野田村大字野田第13地割字大平野に所在し、国土地理院発行50,000分の1地形図NK-54-18-4（八戸4号）「陸中野田」の図幅に含まれ、北緯40度06分20秒、東経141度48分36秒に位置する。

遺跡は、野田村北部の中心市街地西側に位置し、野田村役場から南西約800ｍの明内川と泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は畑地・宅地で、標高は21.5～24.5ｍである。

第２図に示した通り、野田村は岩手県の北東部にあり、九戸郡内では南東端に位置している。九戸郡の近世における郡域は、北は三戸郡、西は二戸郡、南は岩手郡・閉伊郡に接していたが、平成18年に新制久慈市の発足（山形村と合併）によって、野田村と軽米町、洋野町（種市町と大野村が合併）、九戸村に分けられた。現在の九戸郡は、久慈市が離脱したことによって野田村を含む二町二村となっている。

野田村は、1889（明治22）年の町村制によって南にある玉川村と合併して発足した。江戸時代初期までは、西は上戸鎖村と下戸鎖村（現久慈市）、南は玉川村に接しており、北東の藩営牧野三崎野と宇部川中流域の宇部村（いずれも現久慈市）も村域に含まれていた（平凡社 1990）。現在は、東部は太平洋に面し、北～西部は久慈市、南部は下閉伊郡普代村・岩泉町に接しており、東西約11.3㎞、南北約13.8㎞の村域で、総面積は80.83㎢である。西部は北上高地に属し、東部は海岸段丘が続き、宇部川・泉沢川・玉川・安家川などの河川が西から東へ流れ、太平洋に注いでいる。宇部川・泉沢川の下流域にわずかに平地が見られるが、８割近くを山林原野が占めている。

主な産業は漁業で、野田・玉川・下安家の三港が第１種漁港に指定されており、サケ・マスの放流事業やホタテ貝の地まきなど養殖漁業が盛んに行われている。この他に、高原地帯では酪農と養豚の主産地化が進められている（1990 平凡社）。また、近年では、海水を鉄鍋で煮詰めて作る塩や山葡萄を熟成させて作ったワインなどを用いて、観光にも力を入れている。

2　地 理 的 環 境

（1）地　　形

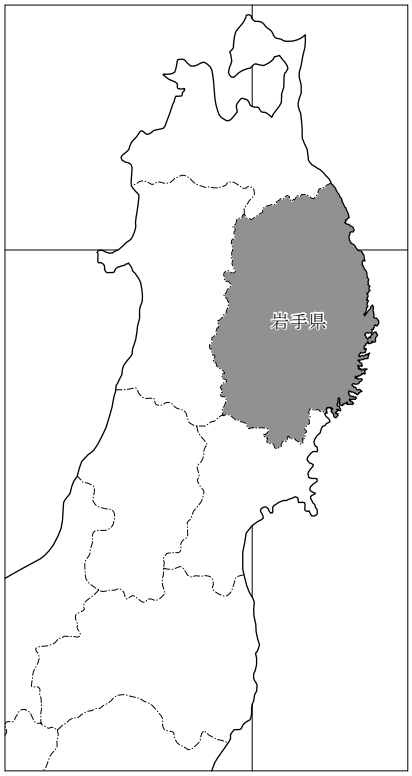
遺跡の所在する野田村は、南北に長い卵形をした北上山地の東側を縁取る三陸海岸北部地域に位置する。

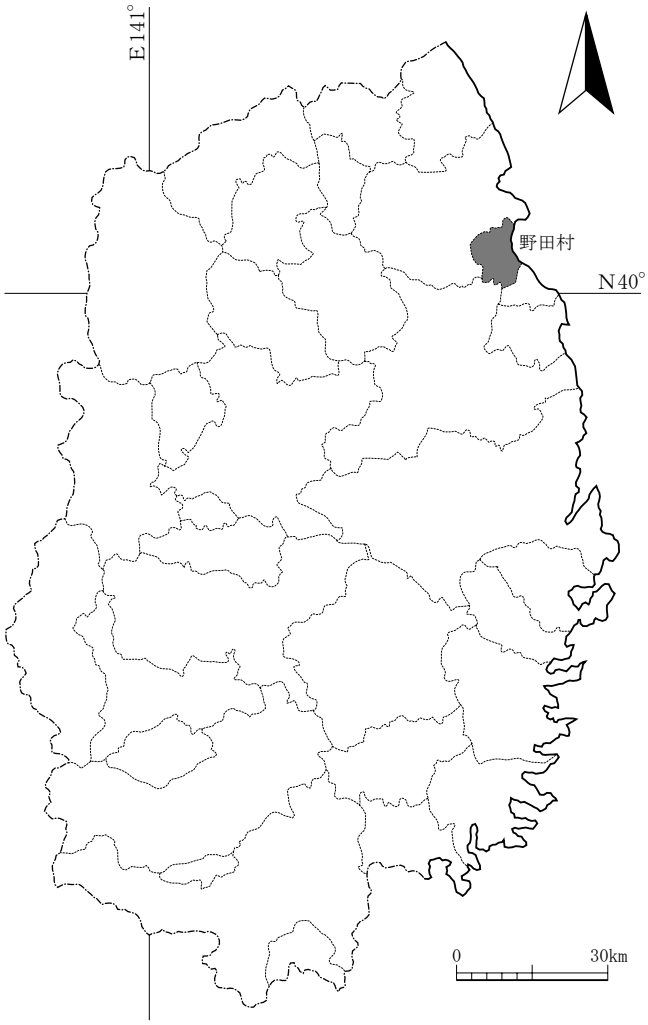
三陸海岸の海岸線の北半部は、あまり細かな湾入が見られず、切り立った海食崖が続くのに対し、宮古より以南では海岸線は屈曲に富み、数多くの湾入と岬が連なるリアス式海岸が発達する。

三陸海岸北部と南部の地形的差違は、鮮新世末を中心に進行した北上山地の曲隆に伴う海岸部の沈降が南部ほど大きかったことが最大の要因となっている。さらに海岸部が隆起に転じ、海成段丘の形成されはじめる中期更新世以降、海成段丘群の分布から推定すると、北部ほど隆起量の大きい傾動運動（宮古南方では沈降傾向）が進行したと推定される。

北部の海岸部は、中・古生層の硬岩からなる南部海岸に比較し、侵食されやすい花崗岩や白亜紀層が海食台形成に好都合であったと推定される（2005 小池）。

このように、三陸海岸北部では、海食崖の発達する直線的な海岸線と、その背後に更新世中・後期の海成段丘群が発達する。このため、海岸に沿っては広い台地状の平坦地が開け、河川は深い谷となって海に


岩手県


E141°
N40°
野田村
0
30km

和野
日向
中田
谷地中
広内
中沢
地京沢
山屋敷
新山
田子沢
長坂
大畑
港
秋田
城内
前浜
十府ヶ浦
平清水
明内
日市場
泉沢
米田
1:50,000 陸中野田

第２図　遺跡位置図

第３図　地形分類図　　1：50,000 地形分類図（陸中野田）

注いでいる（2005 小池・宮内）。

三陸海岸北部の野田村野田地域はまさに典型的で、やや弧を描く海岸線である十府ヶ浦の背後には水無面からなる海成段丘群が発達し、本遺跡が乗る台地状の平坦地が開けており、また明内川や泉沢川によって開析された河岸段丘が河川沿いに認められる地形となっている。北側の野田港付近や南側の玉川などは海食崖が発達している。

遺跡付近の地形は、西側の野田中学校付近は海成段丘から下る斜面地を形成しているが、東側の住宅地付近は明内川右岸の河岸段丘となり地形はほぼ平坦に変化する。県指定史跡の範囲は、海成段丘の平坦部に立地していると見られるが、近年の調査から、一帯の段丘上には大規模な古代集落が広がっていた可能性が高い。

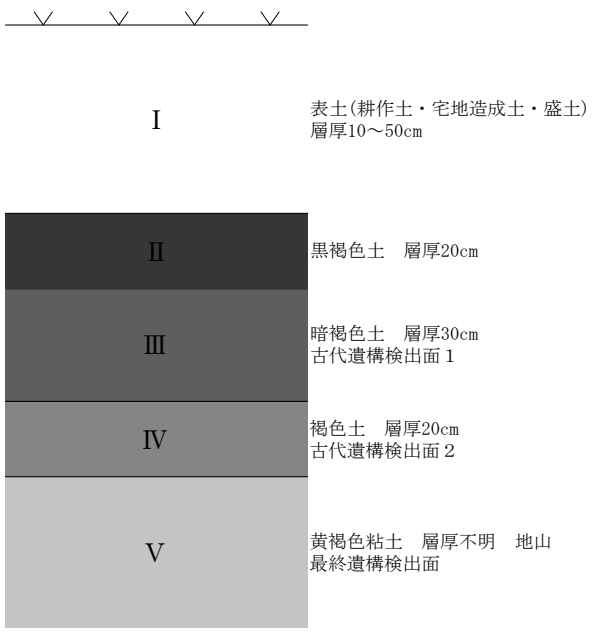
参考文献

小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編　2005 『日本の地形３　東北』（株）三秀舎
小池一之　2005 「2-2 リアス海岸の発達する三陸海岸」『日本の地形３　東北』（株）三秀舎
宮内崇裕　2005 「2-2（２）北上山地北部を削り込む高位段丘群」『日本の地形３　東北』（株）三秀舎

（２）基　本　層　序

第４図に、本遺跡の基本層序柱状模式図を示した。今回調査の基本層序は、Ⅰ～Ⅴ層の計５層で構成される。Ⅰ層は表土で、北調査区や中央調査区は現況が畑地であるため耕作土、南調査区は宅地が造成されていたことから、住宅基礎を含む砕石や盛土による宅地造成土、村道泉沢中平線や城内二又線、高見線の現道部分は道路工事による砕石、盛土層で構成される。Ⅱ層は黒褐色土で、層厚 20cmの旧表土層である。北調査区で確認されるが、南調査区では多くの箇所で削平されている。Ⅲ層は暗褐色土で、層厚 30cmの古代遺構検出面である。大半の古代遺構はこの層上面から掘り込まれたと見られるが、埋土もほぼ

同じことからこの面での遺構の確認は困難である。Ⅳ層は褐色土で、層厚 20cmの古代遺構検出面である。Ⅲ層よりも明るく、大半の古代遺構は本層上面で確認できる。ただし、縄文時代の陥し穴状遺構は埋土が同一層で埋まっている場合が多いことから、遺構を見逃す可能性もある。Ⅴ層は黄褐色粘土質シルトで構成され、上面が最終遺構検出面である。本層上面で、本層までの全ての遺構が確認される。上部には 10 ～ 20cm大の亜角礫を含む段丘礫層が確認できる。Ⅵ層は図に示していないが、陥し穴状遺構など深い遺構の底面で確認される花崗閃緑岩で構成される礫層である。



第４図　基本層序柱状模式図

３　歴 史 的 環 境

第５図、第１表に周辺の遺跡を示した。岩手県遺跡台帳（平成 30 年３月 31 日現在）によると、野田村には計 46 箇所の遺跡が登録されている。これと久慈市分の 19 箇所を加えた計 65 箇所を図表で掲載した。

中平遺跡は、昭和 27（1952）年に野田中学校校舎新築のための整地工事の際に、多量の土器が出土したことから、岩手県文化財専門委員であった伊東信雄、田中喜多美両氏によって竪穴住居址２棟が調査された。これに基づいて昭和 29（1954）年４月５日、中学校西側の村有林野約 700a が「野田竪穴住居址群」として県指定史跡になった。その後、昭和 40（1965）年４月と７月に２回、昭和 41（1966）年３月に１回の調査が岩手大学教養部草間俊一氏によって行われている（伊東信雄・田中喜多美 1956・草間 1967)。昭和 40 年７月は竪穴住居址５棟が調査され、一辺が４～６ｍの隅丸方形で、北辺にカマド１～２基が設置されることが確認されている。出土遺物は、土師器（ロクロ・非ロクロ）・須恵器・砥石・鉄製品・青銅器・琥珀玉などがある。草間は出土土器をＡⅠ（須恵器・ロクロ成形の土師器が伴出）とＡⅡ（有段丸底の坏など非ロクロ成形の土師器)、Ｂ（縄文土器・弥生土器）に分類し、土師器時代と須恵器土師器が共存する時代が存在することを指摘している。その上で、大半が後者の平安時代に属する住居であるとし、律令時代の大集落の存在を報告している。また、その後の昭和 41 年３月の調査では、竪穴住居址と推定される窪地の分布調査が行われ、計 185 箇所が確認されている。その後、中平遺跡の調査は行われてこなかったが、平成 21 年には村下水道事業に係る調査が岩手県教育委員会によって行われ、古代の竪穴住居跡 13 棟などが見つかっている（岩手県教委 2011)。平成 22 年には村道拡幅事業に伴う調査を当センターが行い、竪穴住居跡８棟のほか、陥し穴状遺構 14 基や今回の調査でも確認した円形周溝と方形周溝の一部が検出されている（岩文埋 2012)。平成 23 年には、昭和 41 年の分布調査で確認されていたうち、個人住宅建設に伴って 143 地点の調査が行われ、古代の竪穴住居跡５棟が見つかった（野田村教委 2013)。平成 24 年には、個人住宅建設に伴って 143 地点に近接する 141 地点の調査が行われ、昭和 27（1952）年に伊東・田中氏によって調査された竪穴住居跡２棟のうち、１棟を再検出して調査を行っている（野田村教委 2013)。同年に、個人住宅建設に伴って 84 地点・128 地点・309 地点についても調査が行われ、古代の竪穴住居跡を複数確認しており、84 地点では中世と考えられる竪穴建物跡１棟も見つかっている（野田村教委 2014)。また、中平遺跡 01 次・03 次・04 次・07 次調査も行われており、８世紀後半

～９世紀前半の竪穴住居跡を確認している（野田村教委 2016）。

野田村内では、前述した中平遺跡以外にも東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査が増加しており、古代集落の調査成果が蓄積されている。

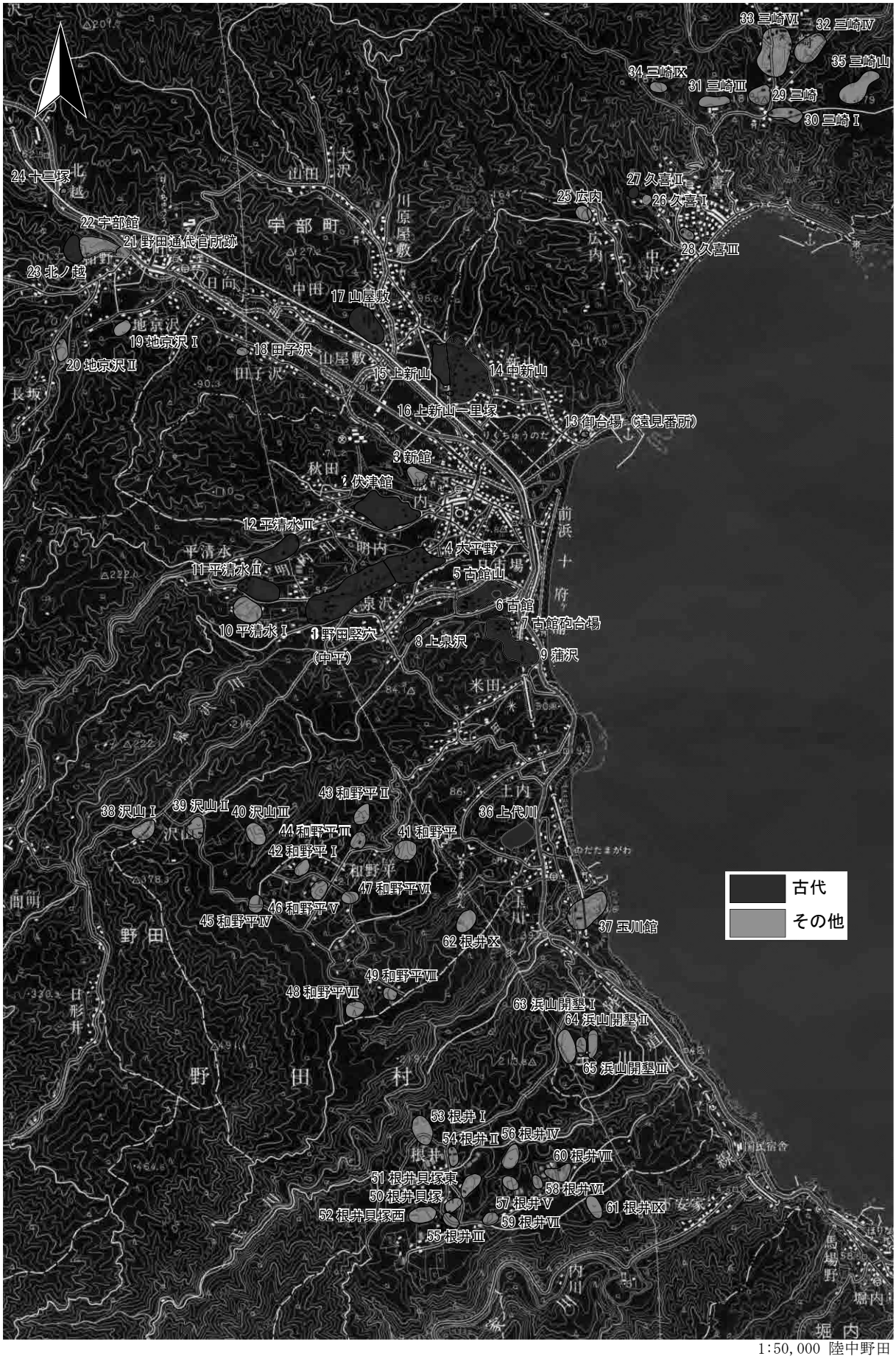
蒲沢遺跡は、米田南浜地区防災集団移転に伴って、平成 24 年度に野田村から委託を受けて岩手県教育委員会が調査を行った（野田村 2015）。調査の結果、南浜地区は縄文時代の陥し穴状遺構８基、縄文・弥生時代の竪穴住居跡２棟、古代の竪穴住居跡 13 棟など、米田地区は弥生時代前期の竪穴住居跡４棟、古代の竪穴住居跡１棟などが確認された。２地区で検出した古代の竪穴住居跡は、いずれ古墳時代後期～奈良時代（７世紀前葉～８世紀初頭）と考えられており、土師器の年代観から、Ⅰ期（７世紀前葉）１棟、Ⅱ期（７世紀中葉～後半）７棟、Ⅲ期（７世紀後半～８世紀初頭）２棟としている。Ⅰ～Ⅱ期は、上泉沢遺跡とほぼ同時期と見られ、距離も山を１つ挟んで東に南浜地区までは約 650 m、米田地区は約１㎞と近い。北西約 500 mに位置する古館山遺跡を入れると、１㎞圏内にほぼ同時期の３遺跡が集中する状況が捉えられる。

上泉沢遺跡は、平成 26 年度に三陸沿岸道路建設事業に伴う調査が行われ、古代の竪穴住居跡７棟のほか、縄文時代の陥し穴状遺構 60 基が確認された。古代の竪穴住居跡は重複せずに見つかっており、出土土師器から古墳時代後期～末に比定される５棟、奈良時代後半の１棟、出土遺物がなく不明な１棟に分けられている。古墳時代後期～末の竪穴住居跡は、大半が焼失していることから廃絶時の状況を良好に残しており、遺物が一括して出土している（岩文埋 2017）。

伏津館跡は、平成 25・26・29 年度に三陸沿岸道路建設事業に伴う調査が行われ、15 世紀後半に廃絶した中世城館や弥生・古代集落などの遺構・遺物を確認した。南調査区の調査区からは、古墳時代末の竪穴住居跡４棟が検出され、該期集落の広がりが推定される。調査地点は、今回の北調査区から明内川を挟んで北側に位置しており、段丘上に古代集落が点在していることが分かる（岩文埋 2019）。

参考文献

伊東信雄・田中喜多美　1956 『岩手の文化財』 岩手県教育委員会
岩手県教委　2011 『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成 21 年度）』岩手県文化財調査報告書第 132 集
岩手県教委　2018 『岩手県遺跡情報検索システム（平成 29 年度データ）』CD-ROM 版
岩文埋　2017 『上泉沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 674 集
岩文埋　2019 『伏津館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 695 集
草間俊一　1967 「野田村中平遺跡」『Artes Liberales』№２　岩手大学
野田村教委　2013 『中平遺跡発掘調査報告書 143 地点』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第１集
野田村教委　2013 『中平遺跡発掘調査報告書 141 地点』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第２集
野田村教委　2014 『中平遺跡 84 地点・128 地点・309 地点 大平野遺跡 20 地点 古館山遺跡 61 地点発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第４集
野田村教委　2015 『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第５集
野田村教委　2016 『平成 25 年度村内遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第６集



1:50,000 陸中野田

第５図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡分布表

No.	遺跡コード	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	調査経歴	文献	備考
1	JG60-0258	野田村	野田竪穴（中平）	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、陥し穴、縄文土器、土師器、須恵器、鉄器	野田村教委　日考協 草間（1965）野田村教委 草間（1969）岩手史学会 草　間 H21.10.13 ～ H21.10.23 発掘調査（範囲拡大）、H24.9.20 範囲拡大、H24.12.17 ～ H25.1.11 発掘調査（範囲拡大）	野田村中平遺跡（野田村教委 1967）日考年 18（日考協 1970）「中平・上明内調査概報」（野田村教委 1970）岩史研 No.58（岩手史学 1972）	昭和 29.4.5 県指定史跡
2	JG50-2353	野田村	伏津館	城館跡	縄文、弥生、古代、中世	陥し穴状遺構、竪穴住居跡、曲輪、堀跡、土塁、切岸、武者走り状遺構、堀立柱建物跡、縄文土器、石器、陶磁器、銭貨、茶臼、硯、石鉢、金属製品など	59 年調査、H25・26 調査	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 630・647・692・695 集	「伏津館」と「野田城」を統合して「伏津館」とする
3	JG50-2327	野田村	新館	城館跡	中世	平場、空堀	59 年調査、H24 調査	野田村文調報第３集	
4	JG60-0306	野田村	大平野		縄文・古代	竪穴住居跡、陥し穴、土坑、溝跡、土器	H21.12.7 ～ H21.12.10 発掘調査、H24.9.19 範囲拡大、H24.11.15 ～ H24.12.14 発掘調査（範囲拡大）		
5	JG61-0033	野田村	古館山	集落跡	縄文・古代	土師器、縄文土器（前期）宋銭、柱跡	野田村教委 斎藤（1970）県博 熊谷・高橋・小田野（1981 ～ 1984）	野田村文調報（村教委 1987）岩県博調報第３冊（県博 1987）	
6	JG61-0033	野田村	古館	城館跡	中世	堀	S59 調査、壊滅		
7	JG61-0035	野田村	古館砲台場	砲台跡		砲台跡	S59 調査、壊滅		
8	JG60-0367	野田村	上泉沢	散布地・集落跡	縄文・古代	陥し穴状遺構、竪穴住居跡（古代）、縄文土器、土師器	H24 県教委試掘、H26・27 県埋文調査	岩文調報第 674 集（岩文埋 2017）	
9	JG61-0076	野田村	蒲沢	散布地	縄文・古代	竪穴住居跡、陥し穴、土坑、土器、石器、動物遺体	H24.10.16 ～ 18 新規発見、H24.11.7 ～ H24.12.26 発掘調査		
10	JG60-0241	野田村	平清水Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、土偶	岩教委（2000）	岩文調報第 112 集（岩教委 2001）	壊滅
11	JG60-0224	野田村	平清水Ⅱ	散布地、集落跡	縄文・古代、平安	縄文土器（前後期）土師器、石匙、石鏃、磨製石斧、石製垂飾品、竪穴住居跡、住居状遺構、フラスコ状土坑	H13.8 ～ 10 発掘調査 岩教委（2000）、岩文埋（2001・2002）	岩文調報第 112 集（岩教委 2001）岩文埋調報第 449 集（岩文埋 2004）	壊滅
12	JG50-2275	野田村	平清水Ⅲ	集落	縄文・古代	土師器、蕨手刀	H12.6.9 新規 H25 調査		
13	JG51-1192	野田村	御台場（遠見番所）	砲台跡		土塁	S59 調査		
14	JG51-1032	野田村	中新山	散布地	縄文・古代	土師器、縄文土器、蕨手刀	岩教委（2007） H25 範囲拡大	岩文調報第 128 集（岩教委 2009）	
15	JG50-1308	久慈市	上新山	集落跡	古代	土師器、竪穴住居跡	S52 調査		
16	JG51-0051	野田村	上新山一里塚	一里塚	江戸		H25 新規		
17	JG50-0361	久慈市	山屋敷	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器、竪穴住居跡	S49 調査、H13 範囲拡大		
18	JG50-1200	久慈市	田子沢	散布地	縄文	縄文土器（前・後期）、石器			
19	JG50-0171	久慈市	地京沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期）			
20	JG50-0097	久慈市	地京沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後期）			
21	JG50-0121	久慈市	野田通代官所跡	中世居館跡・代官所跡	中世・近世	土塁	H26 北ノ越遺跡及び宇部館の発掘調査の際に確認		
22	JG50-0028	久慈市	宇部館（八幡館）	城館跡	中世	二重堀切、土塁、単郭、腰郭		岩文調報第 654 集（岩文埋 2016）	
23	JG50-0027	久慈市	北ノ越	集落跡	縄文・平安・中世	陥し穴、竪穴住居跡（縄文・平安）、竪穴建物跡（中世）、掘立柱建物跡（中世）	H25.5.20 ～ 21、三陸沿岸道路建設に係る試掘調査により新規発見。H26.5 ～ 9 発掘調査。H27　範囲拡張	岩文調報第 654 集（岩文埋 2016）	
24	JG40-2072	久慈市	十三塚	散布地	縄文	縄文土器（後期）、塚			
25	JG41-2192	野田村	広内	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石匙	日考年 草間（1966）	日考年 19（日考年 1971）	
26	JG41-2178	久慈市	久喜Ⅰ	散布地	弥生	弥生土器			

No.	遺跡コード	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	調査経歴	文献	備考
27	JG41-2166	久慈市	久喜Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器			
28	JG41-2291	久慈市	久喜Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（前・後期）、石鏃、磨石			
29	JG41-1288	久慈市	三崎	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石斧、磨石			
30	JG41-2301	久慈市	三崎Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器（前・中期）			
31	JG41-1294	久慈市	三崎Ⅲ	集落跡	縄文・弥生	縄文土器（中・後期）、弥生土器、陥し穴状遺構	S52 発掘調査		
32	JG41-1342	久慈市	三崎Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器（前・後期）、石器			
33	JG41-1238	久慈市	三崎Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）、石鏃、石斧			
34	JG41-1168	久慈市	三崎Ⅸ	散布地	縄文	縄文土器、弥生土器？、フレイク			
35	JG41-1379	久慈市	三崎山	集落跡	縄文	縄文土器（前・中・後期）、石斧			
36	JG61-2057	野田村	上代川	散布地	縄文・弥生・平安末～鎌倉	製鉄関連遺構、竪穴住居跡、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、羽口、炉壁、鉄滓	H24 県教委試掘調査 H28 県埋文調査	岩文調報第 692 集（概報） （岩文埋 2018）	
37	JG71-0112	野田村	玉川館	集落跡・城館跡	縄文・中世	縄文土器（？）、堀切			
38	JG60-2134	野田村	沢山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器			
39	JG60-2148	野田村	沢山Ⅱ	散布地	弥生	弥生土器（撚紋？）			
40	JG60-2244	野田村	沢山Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器			
41	JG60-2376	野田村	和野平	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石槍、石刀、石鏃			
42	JG60-2286	野田村	和野平Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器			
43	JG60-2332	野田村	和野平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）			
44	JG60-2352	野田村	和野平Ⅲ	散布地		石器（掻器）			
45	JG70-0204	野田村	和野平Ⅳ	集落跡？	縄文	縄文土器（後期？）			
46	JG70-0218	野田村	和野平Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器			
47	JG70-0322	野田村	和野平Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器			
48	JG70-0392	野田村	和野平Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器＜量多い＞			
49	JG70-0386	野田村	和野平Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器＜量多い＞			
50	JG71-2071	野田村	根井貝塚	集落跡・貝塚	縄文	縄文土器（後期）、石槍、石剣、動物遺存体	S57 ～ 60 岩県博調査	岩県博調報第３冊 （岩県博 1987）	
51	JG71-2062	野田村	根井貝塚東	貝塚？	縄文	縄文土器（晩期）、土師器			
52	JG70-2389	野田村	根井貝塚西	貝塚？	縄文	縄文土器、石器（掻器・剥片）			
53	JG70-2319	野田村	根井Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器＜量少ない＞			
54	JG71-2031	野田村	根井Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（？）			
55	JG71-2091	野田村	根井Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期？）			
56	JG71-2037	野田村	根井Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器			
57	JG71-2066	野田村	根井Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、磨石＜量多い＞			
58	JG71-2058	野田村	根井Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器、剥片＜量多い＞			
59	JG71-2095	野田村	根井Ⅶ	散布地		磨製石斧			
60	JG71-2140	野田村	根井Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、＜量少ない＞			
61	JG71-2183	野田村	根井Ⅸ	散布地	縄文	縄文土器			
62	JG71-0032	野田村	根井Ⅹ	散布地	縄文	縄文土器（？）			
63	JG71-1142	野田村	浜山開墾Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器			
64	JG71-1154	野田村	浜山開墾Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器			
65	JG71-1165	野田村	浜山開墾Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器			

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野外調査方法

（1）調　査　方　法

調査区は南北に長い形状をしており、現道によって３地点に分かれている。現道部分は平成 29・30 年度に調査を行った。北側の調査区（北調査区）2,600㎡、現道に挟まれた中央の調査区（中央調査区）1,600㎡、墓地に近い南側の調査区（南調査区）3,600㎡に分けられる。平成 26 年度調査は、北調査区 2,600㎡の精査と中央調査区 1,400/1,600㎡の表土除去を行っている。また、平成 27 年度調査は中央調査区 1,400㎡の精査と 200㎡の調査、南調査区 3,600㎡の調査を行った。平成 29 年度調査区は、北調査区と中央調査区の間の現道部分及び中央調査区と南調査区の間の現道部分の一部 552㎡について調査を行った。また、平成 30 年度調査区は、中央調査区と南調査区の間の現道部分及び南調査区南側の現道部分 689㎡について、調査を行っている。ちなみに、中央調査区と南調査区の間の現道の歩道部分については平成 22 年度に当センターで調査を実施しており、平成 21 年度には村下水道事業に係る調査が岩手県教委によって実施されている。

各遺構の調査方法については、陥し穴状遺構や土坑、ピットなど小型の遺構は二分法で行い、竪穴住居跡などの大型の遺構や複雑な堆積を呈する遺構は、随時四分法を用いて行った。また、各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図は CUBIC 社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行い、微細図・断面図は手取りで図化した。

遺構・遺物の写真撮影については、キヤノン EOS5DMark Ⅱ（デジタルカメラ・1,200 万画素）と中判カメラ６×4.5（モノクローム）を使用した。また、平成 26 年 11 月 14 日と平成 27 年 10 月 27 日には、各年度の調査区の航空写真撮影を実施した。

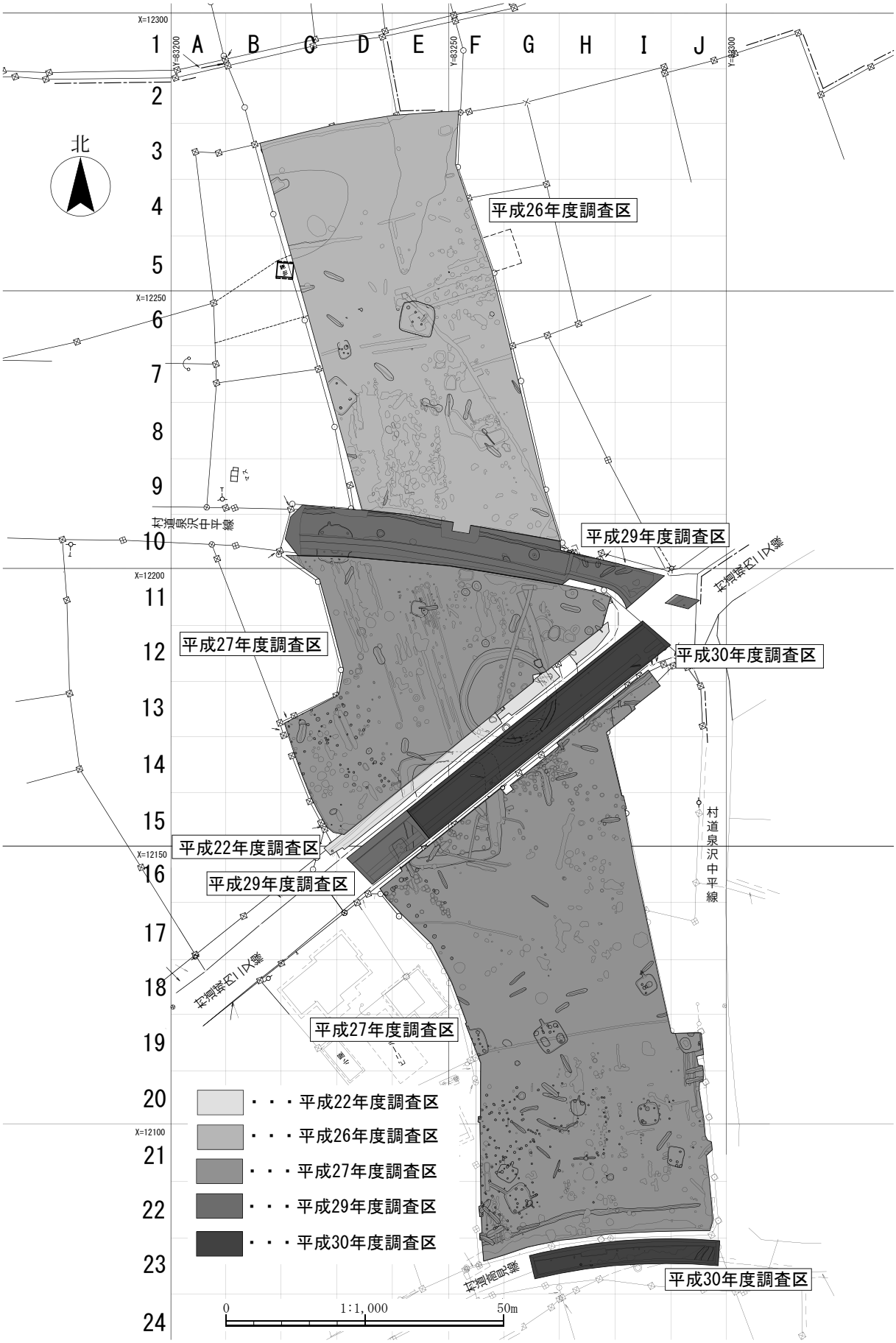
遺構実測図の縮尺は 1/20 を基本としたが、カマドや焼土・微細図は 1/10、その他の遺構や土層断面なども種類や規模により 1/50、1/100 などの縮尺を用いて遺構実測図（第一原図）を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。包含層など遺構外遺物は、出土地点・基本層位（または近接するセクション層位）を記入して取り上げた。

（2）野外調査経過

＜平成 26 年度＞

上泉沢遺跡現場から資材の搬入を行い、10 月１日から調査を開始した。本年度は北調査区の調査を優先して行うこととなっており、着手した。10 月２～３日に北調査区の試掘を行い、竪穴住居跡３棟を検出した。10 月３日からは重機による表土除去も開始した。除去した表土については隣接する箇所に排土置き場が確保出来なかったため、10 月 24 日から表土の搬出を行った。北調査区の表土除去は、搬出も含めて 10 月 30 日に完了した。10 月２週目からは、表土を剥ぎ終わった箇所から遺構検出・精査を進めた。10 月８・９日、（株）スズマ測量設計による基準点設置。11 月１日、野田村立体育館で行われた埋蔵文化財展に併



第６図　年度別調査区とグリッド配置図

せて、現地見学会を行った（一般参加者 50 名）。11 月 1 週目から中央調査区の重機による表土除去を開始、11 月２週目まで行う。11 月 14 日、航空写真撮影。11 月 21 日に北調査区の終了確認を行い、平成 26 年度の調査を終了・撤収した。

天候はまずまず安定しており、順調に作業を行うことが出来た。作業日数 55 日間、荒天による現場閉鎖は４日間であった。

＜平成 27 年度＞

８月３日から調査を開始した。８月３日、南調査区南側から表土除去を開始。８月７日までに約 1,000㎡を剥ぎ終わるが、排土の量が多く、搬出に時間がかかった。竪穴住居跡や陥し穴状遺構を複数確認。８月８日～ 16 日まで現場閉鎖。南調査区南側約 1,400㎡部分の調査は、８月 20 日で完了。遺構検出した箇所から、遺構精査を開始する。８月後半、遺構精査と重機による表土除去・排土運搬を並行して行う。９月１日から上泉沢遺跡の平成 27 年度調査を並行して開始。９月２週目、天候不順のため、作業が滞る。９月 16 日、南調査区南側 1,170㎡についての部分終了確認。９月後半、南調査区北側の精査に着手。南調査区は、竪穴住居跡と周溝以外は精査を完了。中央調査区の再検出を開始。中央調査区の再検出から、円形周溝、陥し穴状遺構を確認。10 月前半、重機による表土除去・排土運搬が完了。10 月 16 日、岩手日報取材、のだむら通信テレビ取材。10 月 24 日、現地説明会（一般参加者 70 名）。10 月 27 日、航空写真撮影。11 月４日、終了確認。11 月４～６日、重機による埋め戻し作業。11 月６日、調査終了し、撤収。作業日数 52 日間、荒天による現場閉鎖は６日間であった。

＜平成 29 年度＞

11 月１日から調査を開始した。調査は、伏津館跡の平成 29 年度調査と並行して行った。11 月１日から表土除去を開始、村道部分については、11 月 10 日までに除去を完了した。並行して、遺構検出を行い、平成 27 年度調査で確認していた竪穴住居跡の一部や陥し穴状遺構を確認した。確認した遺構から精査を開始した。11 月 13 日に迂回路の切り替え、11 月 14 日に中央調査区と南調査区の間の現道部分の一部について県生文課立ち合いで路盤砕石剥ぎ・表土除去を行った。道路建設の際、路面から 90㎝掘削されており、残存が良くないが、方形周溝の一部を検出した。この部分の精査は、11 月 17 日までに終了した。11 月 20 日、中央調査区と南調査区の間の現道部分の一部を片側通行にした上で、路盤・砕石搬入を行い、竪穴住居跡１棟を確認した。11 月 21 日までに精査を完了。11 月 24 日に現道マンホール部分について県生文課の工事立会が行われたが、遺構は確認されなかった。12 月６日、終了確認。12 月７日、調査を終了し撤収した。作業日数 15 日間、精査終了のための現場閉鎖 10 日間、荒天による現場閉鎖は０日間であった。

＜平成 30 年度＞

４月５日、調査を開始した。４月５日午前に委託者・県生文課立ち合いで遺構有無の確認のためトレンチ調査を行い、午後から引き続き表土除去を行う。表土除去は、４月２週目で完了。中央調査区と南調査区の間の現道である村道城内二又線部分は、道路工事の際に地山を 40㎝ほど削平されており、深さのある周溝や陥し穴のみ確認し精査を終了した。南調査区南側の村道高見線部分は、迂回路部分を残して精査を進めていたが、遺構が伸びないことから、４月 16 日に県生文課に確認いただいた上で調査終了した。４月 24 日終了確認。４月 26 日、調査終了し、撤収した。作業日数 15 日間、荒天による現場閉鎖は１日間であった。

2　整　理　方　法

（1）遺 構 の 整 理

遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が平面図を作成した。断面図は、担当調査員が第二原図を作成し、トレース図化を行った。作業は全てデジタル作業で行い、手取り図面についてもアドビイラストレータなどを用いて図化を行った。平面図及び断面図のレイアウトは、アドビインデザインを使用して行った。

遺構図版は、各々遺構順に掲載している。また、遺構名については、現場遺構名を優先し登録抹消となった場合は欠番としている。

（2）遺 物 の 整 理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。
本報告書掲載にあたっては、これらに掲載番号を付した。観察表の（　）内数値は残存値、＜　＞内数値は推定値である。

掲載遺物の選別、復元作業、登録、実測、拓影、トレース、写真撮影、版組の手順で行った。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器は水洗乾燥後、収納袋ごとに註記を行い、その後、遺構ごとに接合作業を行った。土製品は、水洗・註記を行った後、全点を掲載遺物とし作業を進めた。石器は、水洗・註記を行った後、担当調査員が全点を観察・選別し、実測などを行った。金属製品は、水洗乾燥後に調査員が全点を観察し、年代・特徴のある器種を抽出し掲載した。動物遺存体は、水洗乾燥後に担当調査員が粗分類を行い、詳細な同定についてはパリノ・サーヴェイ（株）に業務委託した。

（3）遺物写真撮影

遺物写真は、当センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影には、キヤノン EOS5D（デジタルカメラ・1,200 万画素）を使用した。

（4）整　理　経　過

・平成 26 年 12 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日（作業員 1 ～ 2 名）
・平成 27 年 11 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日（作業員 2 名）
・平成 29 年 12 月 16 日～平成 30 年 1 月 15 日（作業員 0 名）
・平成 30 年 10 月 16 日～ 12 月 31 日（作業員 1 名）

3　広　報　活　動

・調査概報　『平成 26 年度発掘調査報告書』岩文埋第 647 集　2015 年 3 月発行
・調査概報　『平成 27 年度発掘調査報告書』岩文埋第 661 集　2016 年 3 月発行
・調査概報　『平成 29 年度発掘調査報告書』岩文埋第 692 集　2018 年 3 月発行
・調査概報　『平成 30 年度発掘調査報告書』岩文埋第 708 集　2019 年 3 月発行
・平成 26 年度現地見学会資料　2014 年 11 月 1 日
・平成 27 年度現地説明会資料　2015 年 10 月 24 日

Ⅳ　検　出　遺　構

1　調 査 の 概 要

前章で触れた通り、調査区は南北に長い形状で、現道によって大きく３地点に分かれている。また、この現道３箇所（村道泉沢中平線・村道城内二又線・村道高見線の一部）についても、平成 29・30 年度に調査を実施した。現道を除く区域は、北側の調査区（北調査区）2,600㎡、現道に挟まれた中央の調査区（中央調査区）1,600㎡、墓地に近い南側の調査区（南調査区）3,600㎡に分けられる。

また、中央調査区と南調査区の間の現道の歩道部分については、平成 22 年度に当センターで調査を実施しており（岩文埋 2012)、加えて平成 21 年度には村下水道事業に係る調査が岩手県教委によって実施されている。村下水道事業に係る調査範囲は、今回掲載した平成 30 年度に調査を実施した箇所と一部重なっており、平成 30 年度では道路工事によって検出面から既に約 0.4 m掘削されており、それ以前の遺構分布状況が推定できる（岩手県教委 2011)。

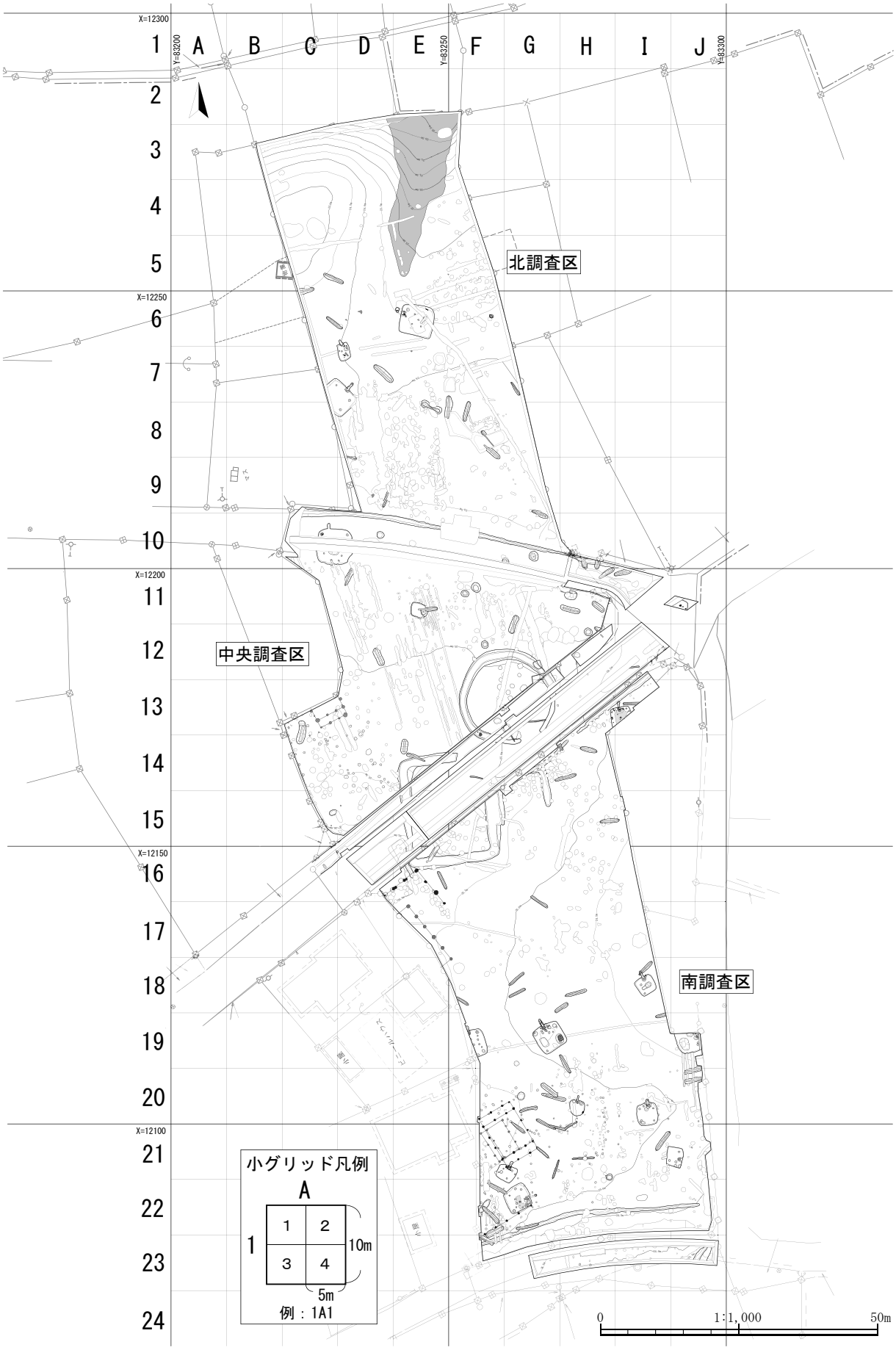
第７図に調査全体図、第８～ 10 図には北調査区、中央調査区、南調査区とそれぞれの間にある現道部分の確認した遺構分布状況を示した。遺跡は、海に向かって東西に長く広がる段丘上に立地しており、今回の調査区はこれを南北に断ち割った形になっている。全体図には、Ⅴ層黄褐色粘土質シルトで構成される地山直上で測量を行った等高線によって微地形を表した。地形は、中央調査区付近で標高 26.0 mと最も高く、南北の段丘縁に向かって３～６m下がっており、このうち遺構はちょうど平坦面が大きく広がるエリアに分布しているのが見て取れる。

平成 26 年度に調査を行った北調査区からは、縄文時代の溝状の陥し穴状遺構や古代の竪穴住居跡が確認されている。陥し穴状遺構は北西－南東方向に並んでおり、遺跡北側を東流する明内川に下りる獣道に沿って構築されたと考えられる。古代の竪穴住居跡は、中央から西側に分布しており、平坦面の続く調査区の西側に広がっていると見られる。

平成 27 年度に調査を行った中央調査区と、平成 29・30 年度に調査を行った現道部分からは、縄文時代の円形・溝状の陥し穴状遺構の分布、円形周溝１と方形周溝１とした末期古墳、西側に古代の竪穴住居跡が確認されている。縄文時代の円形の陥し穴状遺構が東側に分布しており、この付近に集まる獲物を狩る目的で仕掛けられたと考えられる。末期古墳は標高の最も高い箇所に造られており、また周辺には竪穴住居跡が構築されていないことから、居住域と墓域は明確に区分されていた可能性がある。

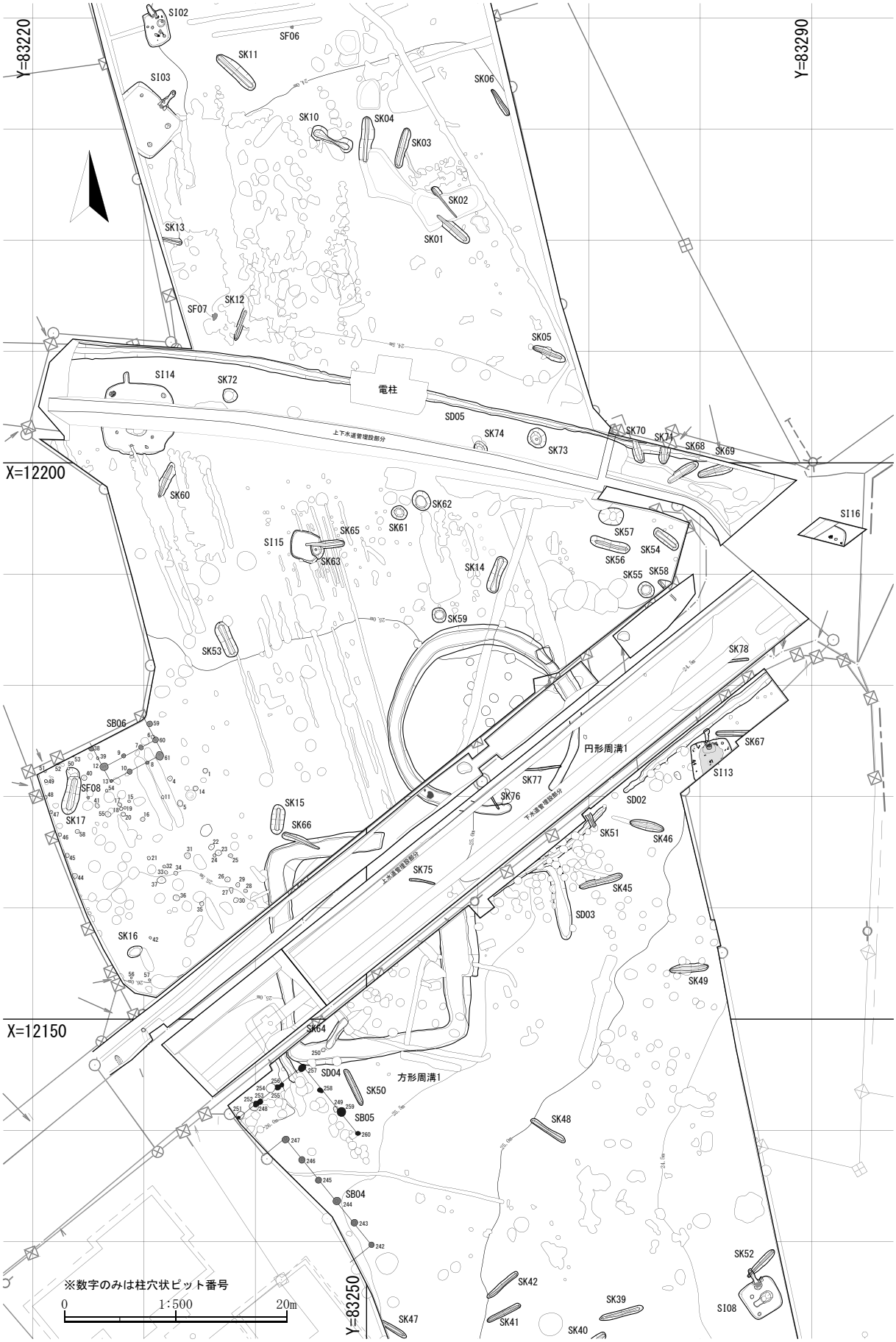
平成 27 年度に調査を行った南調査区と平成 30 年度の現道部分からは、縄文時代の溝状の陥し穴状遺構、古代の竪穴住居跡、中近世の掘立柱建物跡が確認されている。縄文時代の陥し穴状遺構は、微地形に沿うように構築されており、南西側には特に密集して分布している。古代の竪穴住居跡は中央から南側に多く確認されており、平安時代中期の遺構も見つかっている。西側からは、複数の柱穴状ピットが検出され、掘立柱建物跡が認められることから、調査区の西側に建物群が広がっている可能性がある。南端は、南に向かって標高が下がっており、一部流路と見られる溝跡も見つかっている。

次項から、縄文時代、古代、中近世に分けて、各遺構について記載する。

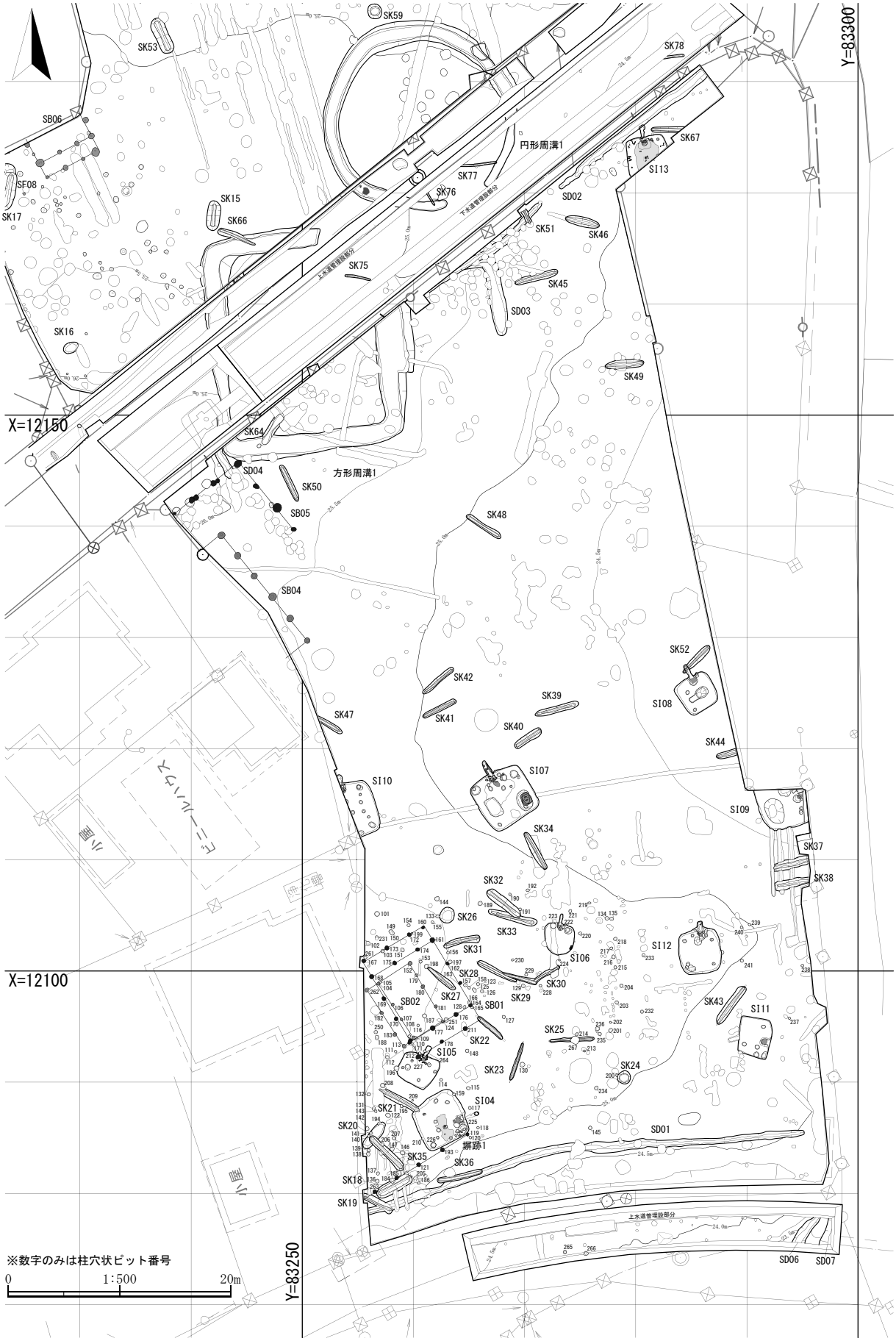

X=12300
X=12250
X=12200
X=12150
X=12100
Y=83200
Y=83250
Y=83300
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
A B C D E F G H I J
北調査区
中央調査区
南調査区
小グリッド凡例
A
1
1 2
3 4
10m
5m
例：1A1
0
1:1,000
50m

第７図　調査全体図

第８図　部分図１（北調査区）



第９図　部分図２（中央調査区周辺）



第10図　部分図3（南調査区）

２　縄　文　時　代

（１）概　　要

４ヵ年に亘る調査で、縄文時代の陥し穴状遺構が複数と遺物包含層が１箇所を確認した。陥し穴状遺構のタイプは、平面形が円形、溝状の２種類に分けられ、円形は中央調査区付近、溝状は調査区全域に認められる。遺物包含層は、北調査区北端の小さな谷部分に形成されており、少量ながら縄文時代前期前葉を中心とする土器などが見つかっている。本項では、陥し穴状遺構（円形）、陥し穴状遺構（溝状）、包含層の順に記載する。

（２）陥し穴状遺構（円形）

SK24 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版５）

南調査区南側の X＝12091・Y＝83280 付近に位置する。規模・形状は 1.20×1.17 mの円形、深さは 1.01 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK55 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版５）

中央調査区東側の X＝12188・Y＝83276 付近に位置する。規模・形状は 1.52×1.33 mの楕円形、深さは 0.98 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK59 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版５）

中央調査区中央の X＝12187・Y＝83258 付近に位置する。規模・形状は 1.33×1.25 mの円形、深さは 0.85 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK61 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版５）

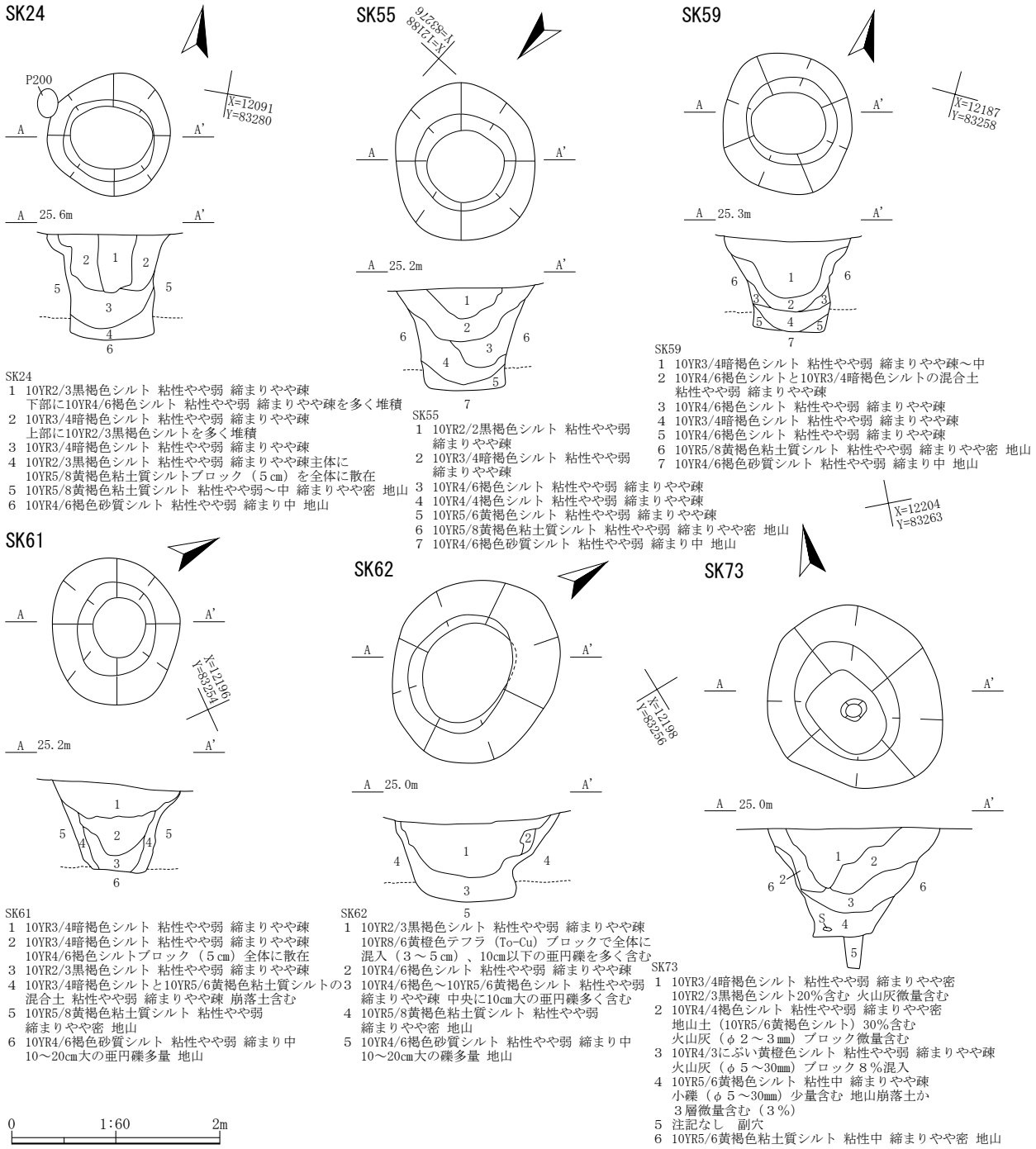
中央調査区北側の X＝12196・Y＝83254 付近に位置する。規模・形状は 1.40×1.23 mの楕円形、深さは 0.83 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK62 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版６）

中央調査区北側の X＝12198・Y＝83256 付近に位置する。規模・形状は 1.83×1.56 mの楕円形、深さは 0.74 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK63 陥し穴状遺構（第 21 図、写真図版６）

中央調査区中央の X＝12193・Y＝83244 付近に位置する。SI15・SK65 と重複しており、いずれも本遺構が古い。規模・形状は残存値で（1.25）×1.18 mの略円形、深さは（0.47）mである。底面中央には副穴１個を検出した。副穴の規模は、0.18×0.17 m、深さ 0.13 mである。出土遺物はないが、



第 11 図　SK24・55・59・61・62・73 陥し穴状遺構

重複関係と同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK73 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版６）

平成 29 年度北調査区の X＝12204・Y＝83263 付近に位置する。規模・形状は 1.85×1.68 m の略円形、深さは 1.030 m である。底面中央には副穴 1 個を検出した。副穴の規模は、0.24×0.20 m、深さ 0.30 m である。出土遺物はないが、1 層中に To-Cu テフラを微量確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

（３）陥し穴状遺構（溝状）

SK01 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版７）

北調査区南東側の X＝12221・Y＝83260 付近に位置する。北西側を撹乱によって失っており、規模・形状は残存値で（3.75）×0.93 mの溝状、深さは 1.12 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK02 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版７）

北調査区南東側の X＝12225・Y＝83257 付近に位置する。南半を撹乱によって失っており、規模･形状は残存値で(3.6)×0.63 mの溝状、深さは 1.0 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK03 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版７）

北調査区中央南側の X＝12230・Y＝83255 付近に位置する。規模・形状は 3.68×0.82 mの溝状、深さは 1.20 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK04 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版７）

北調査区中央南側の X＝12230・Y＝83251 付近に位置する。南端を撹乱で失っており、規模･形状は残存値で(4.25)×1.15 mの溝状、深さは 1.34 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK05 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版８）

北調査区南東隅の X＝12210・Y＝83268 付近に位置する。規模・形状は 3.13×0.80 mの溝状、深さは 0.71 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK06 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版８）

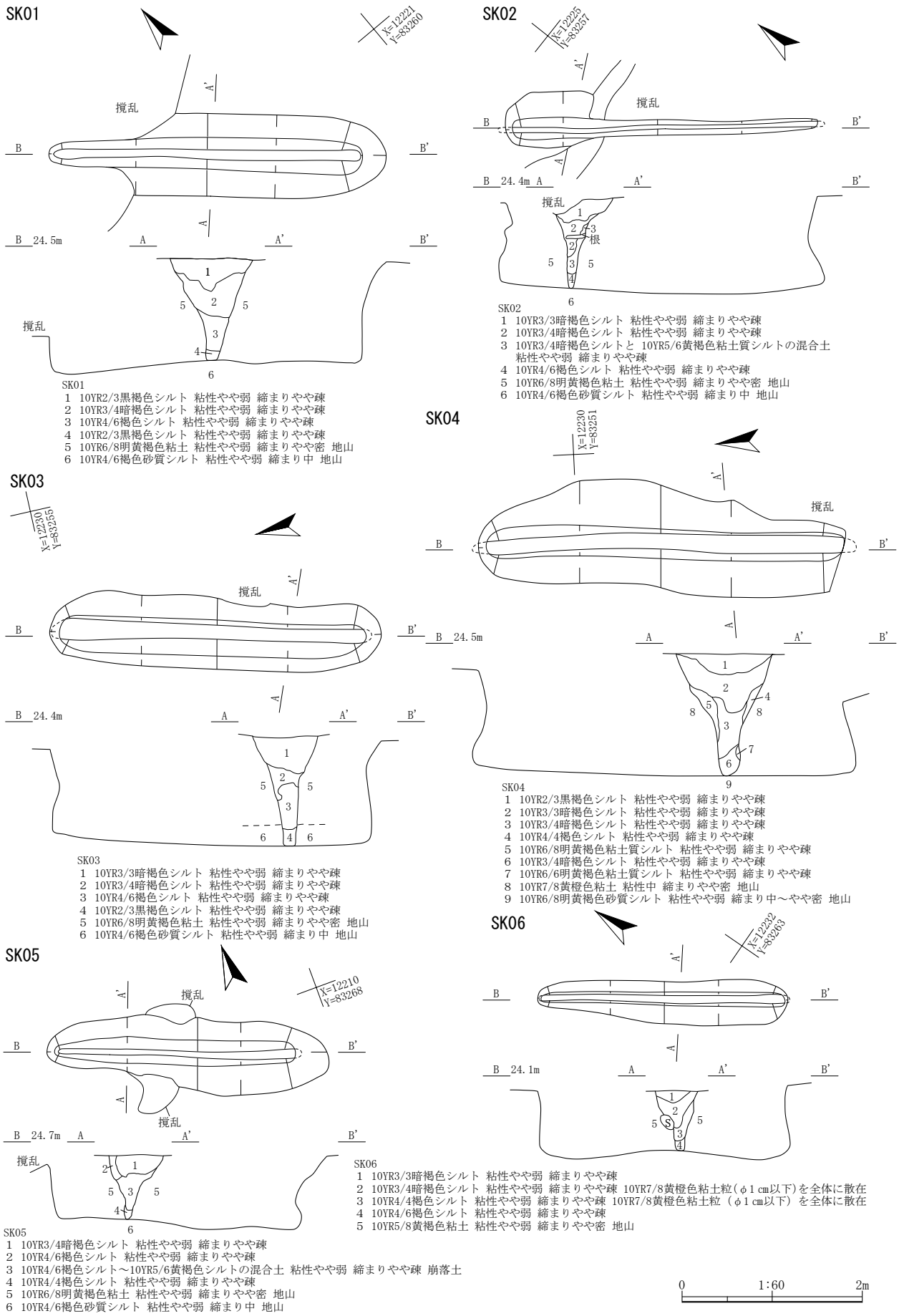
北調査区南東側の X＝12232・Y＝83263 付近に位置する。規模・形状は 2.77×0.47 mの溝状、深さは 0.66 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK07 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版８）

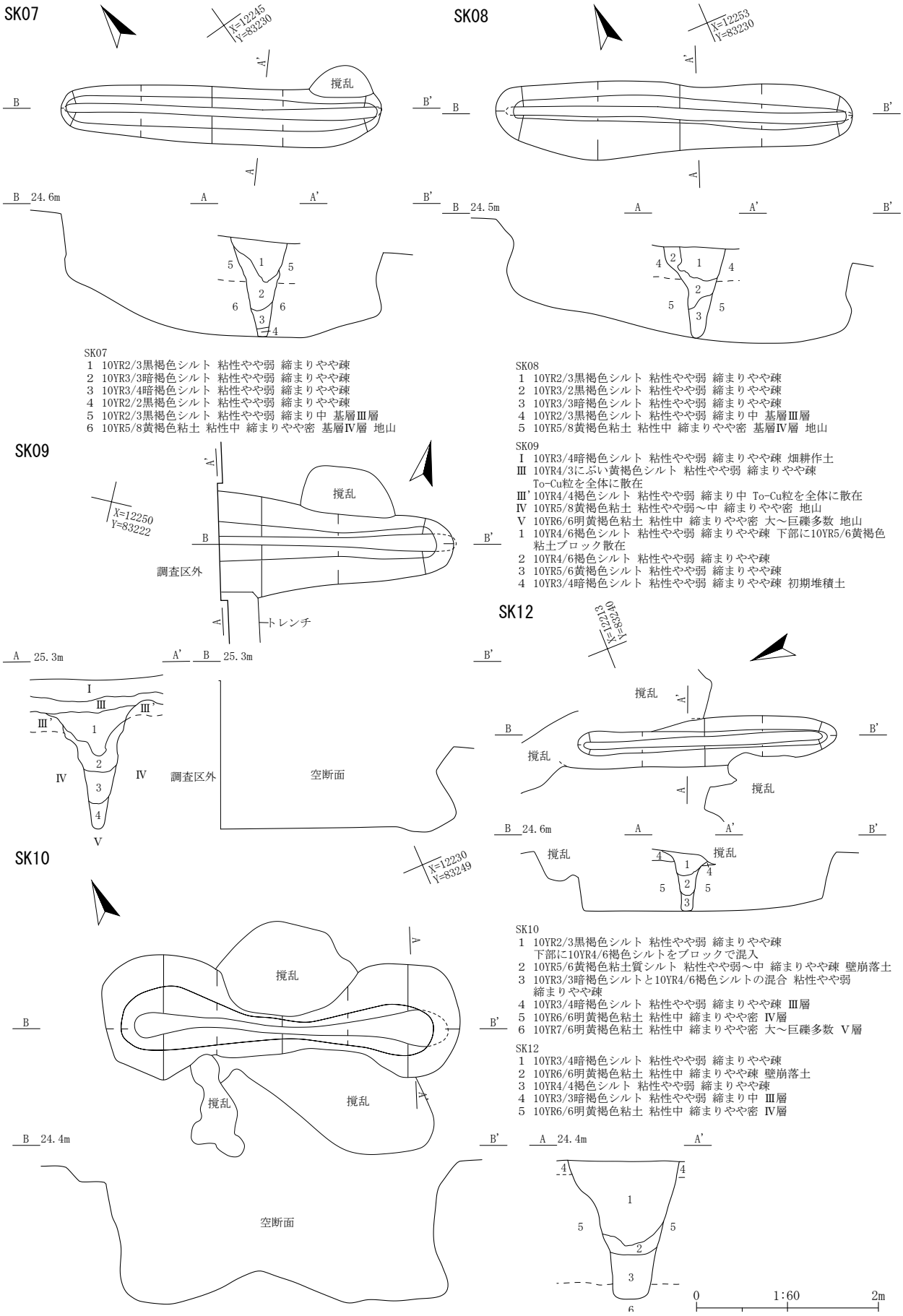
北調査区中央西側の X＝12245・Y＝83230 付近に位置する。規模・形状は 3.54×0.63 mの溝状、深さは 1.05 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK08 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版８）

北調査区中央西側の X＝12253・Y＝83230 付近に位置する。規模・形状は 3.90×0.87 mの溝状、深



第12図　SK01～06陥し穴状遺構



SK07
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　基層Ⅲ層
6　10YR5/8黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　基層Ⅳ層　地山

SK08
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　基層Ⅲ層
5　10YR5/8黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　基層Ⅳ層　地山

SK09
Ⅰ　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　畑耕作土
Ⅲ　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　To-Cu粒を全体に散在
Ⅲ'　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　To-Cu粒を全体に散在
Ⅳ　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや弱～中　締まりやや密　地山
Ⅴ　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　大～巨礫多数　地山
1　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　下部に10YR5/6黄褐色
　粘土ブロック散在
2　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR5/6黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　初期堆積土

SK10
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　下部に10YR4/6褐色シルトをブロックで混入
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや疎　壁崩落土
3　10YR3/3暗褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合　粘性やや弱
　締まりやや疎
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層
5　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　Ⅳ層
6　10YR7/6明黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　大～巨礫多数　Ⅴ層

SK12
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性中　締まりやや疎　壁崩落土
3　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　Ⅲ層
5　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　Ⅳ層

第13図　SK07～10・12陥し穴状遺構

さは 1.0 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK09 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版９）

北調査区中央西側の X＝12250・Y＝83222 付近に位置する。遺構西側は調査区外へと延びており、規模・形状は残存値で(2.57)×(1.1)mの溝状、深さは 1.28 mである。出土遺物はないが、To-Cu テフラを含むⅢ'層を掘り込んで作られていることから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK10 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版９）

北調査区中央南側の X＝12230・Y＝83249 付近に位置する。遺構中央を撹乱されているが、規模・形状は 3.90×1.38 mの両端が膨らむ溝状、深さは 1.52 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK11 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版９）

北調査区中央の X＝12236・Y＝83240 付近に位置する。規模・形状は 4.55×1.15 mの溝状、深さは 1.09 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK12 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 10）

北調査区南西隅の X＝12213・Y＝83240 付近に位置する。遺構北側と南西側に撹乱があって失われているが、規模・形状は推定値で＜3.10＞×0.53 mの溝状、深さは 0.63 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK13 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 10）

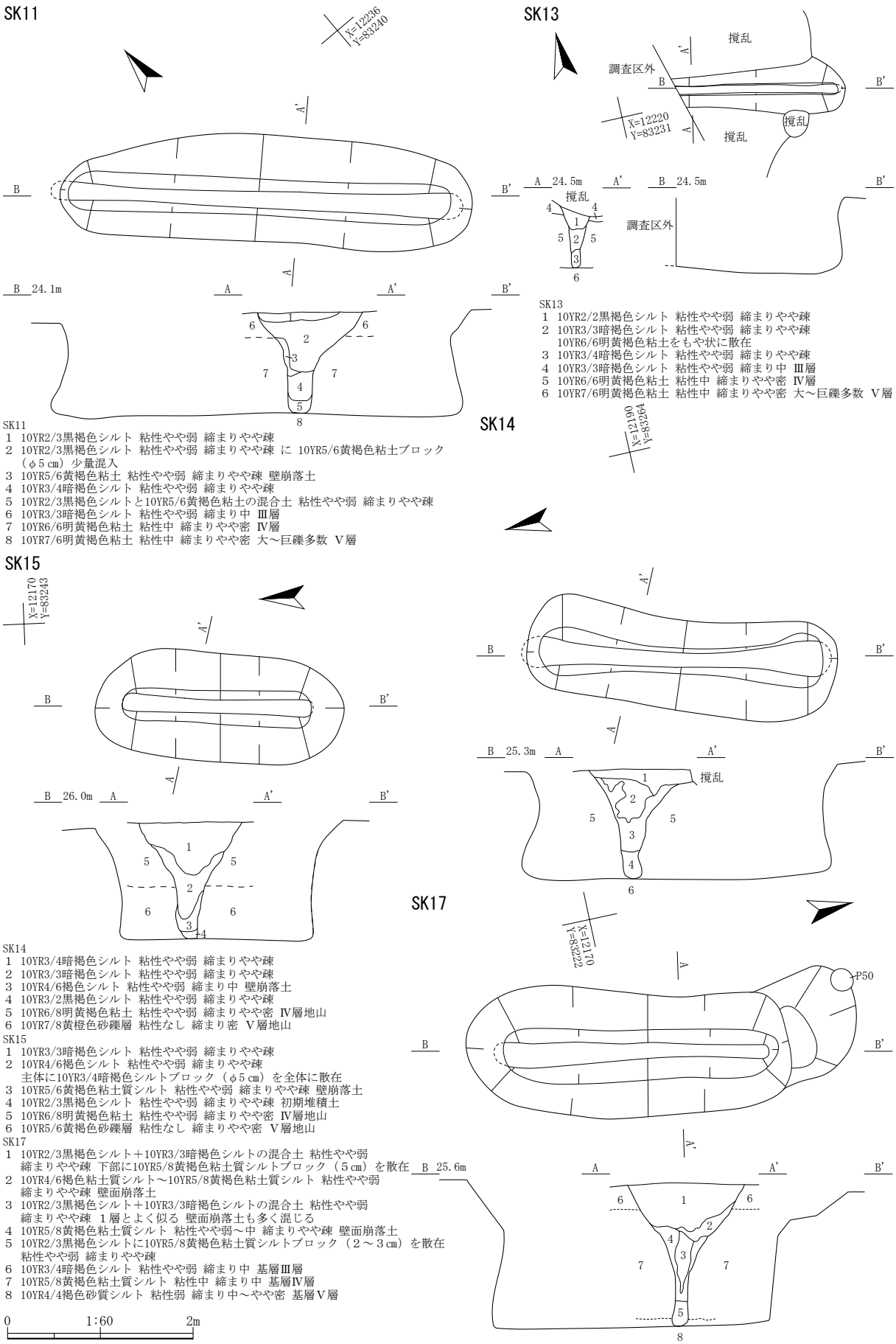
北調査区南西隅の X＝12220・Y＝83231 付近に位置する。遺構西側は調査区外、また遺構の大半が撹乱の影響を受けており、規模・形状は残存値で（1.83）×（0.62）mの溝状、深さは 0.60 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK14 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 10）

中央調査区中央東側の X＝12190・Y＝83264 付近に位置する。規模・形状は 3.90×1.04 mの両端がやや膨らむ溝状、深さは 1.17 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK15 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 11）

中央調査区南西側の X＝12170・Y＝83243 付近に位置する。規模・形状は 2.68×1.16 mの溝状、深さは 1.24 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。



第14図　SK11・13～15・17陥し穴状遺構

SK17 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 12）

中央調査区西端の X＝12170・Y＝83222 付近に位置する。規模･形状は 4.21×1.38 mの溝状､深さは 1.54 m である。遺構北側が段になっており､本遺構の一部と捉えた。出土遺物はないが､上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から､縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK18 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 11）

南調査区南西端の X＝12081・Y＝83256 付近に位置する。規模・形状は 3.77×1.13 mの溝状、深さは 1.28 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK19 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 11）

南調査区南西端の X＝12081・Y＝83256 付近に位置する。遺構東側で SD01 と重複しており、本遺構が古い。遺構西側は調査区外へと延びており、規模・形状は残存値で（2.83）×0.67 mの溝状、深さは 1.02 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK20 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 12）

南調査区南西端の X＝12086・Y＝83258 付近に位置する。遺構北西側で SK35 と重複しており、本遺構が新しい。規模・形状は 4.14×0.77 mの溝状、深さは 1.13 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK21 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 12）

南調査区南西端の X＝12087・Y＝83259 付近に位置する。遺構北西端を撹乱、南東端を SI04 に切られており、本遺構が古い。規模・形状は残存値で（4.14）×0.70 mの溝状、深さは 0.82 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK22 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 13）

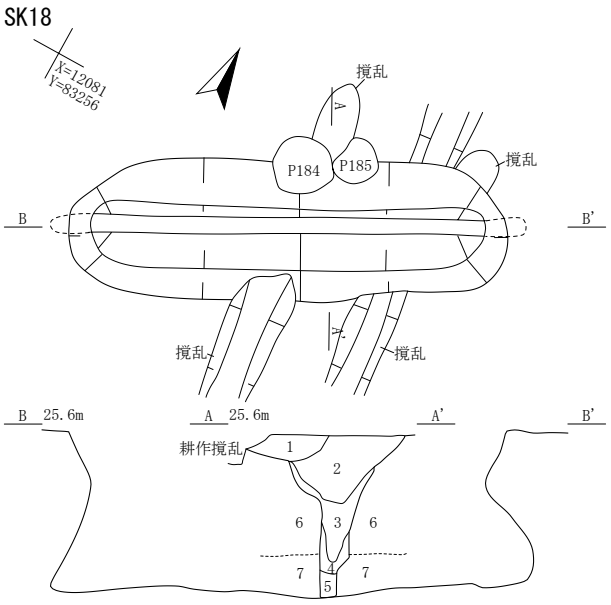
南調査区南西側の X＝12095・Y＝83268 付近に位置する。規模・形状は 3.52×0.47 mの溝状、深さは 0.80 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK23 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 13）

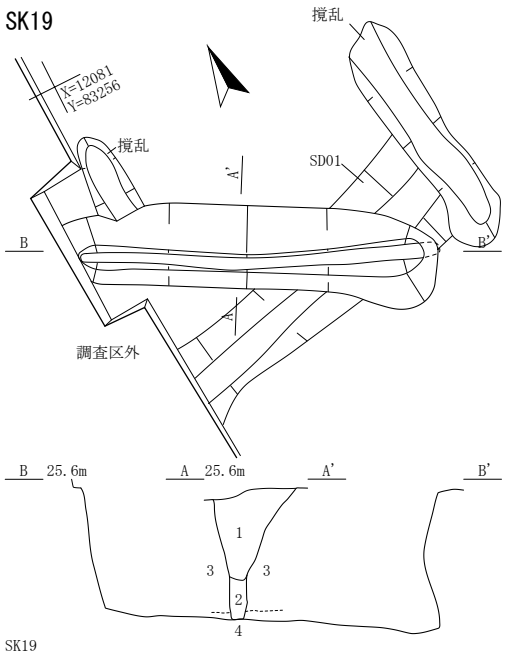
南調査区南西側の X＝12092・Y＝83270 付近に位置する。規模・形状は 3.90×0.35 mの溝状、深さは 0.83 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK25 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 13）

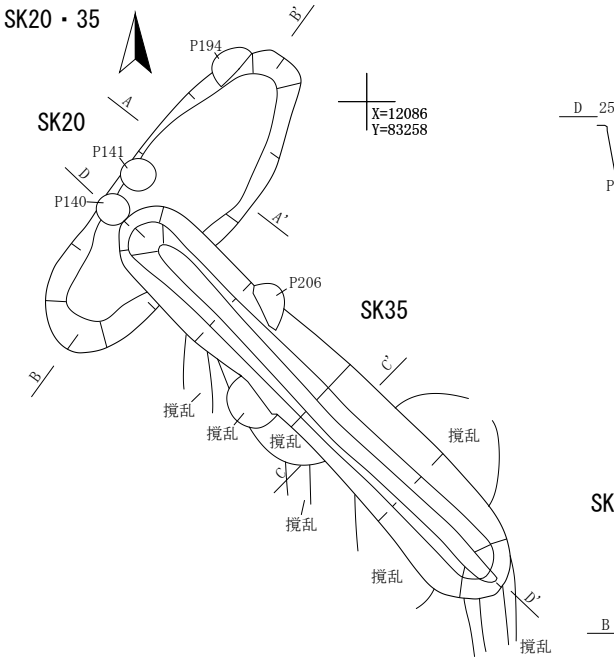
南調査区中央南側の X＝12095・Y＝83275 付近に位置する。中央を P204 に切られており、規模・形

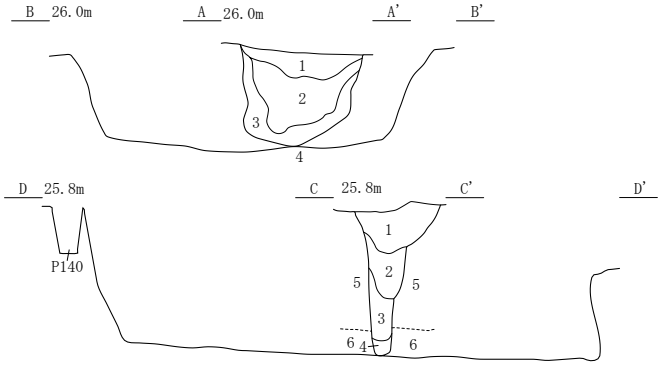


SK18
1　10YR3/4暗褐色シルト＋10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 耕作土 撹乱
2　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎主体に10YR5/8黄褐色粘土質シルトなど混合
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 崩落土 下部に10YR3/4暗褐色シルトを少量散在
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 崩落土
5　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
6　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 基層Ⅳ層
7　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中～やや密 基層Ⅴ層



SK19
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 部分的に10YR4/6褐色シルトブロック（５cm）を全体に散在
2　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 基層Ⅳ層
4　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中～やや密 基層Ⅴ層

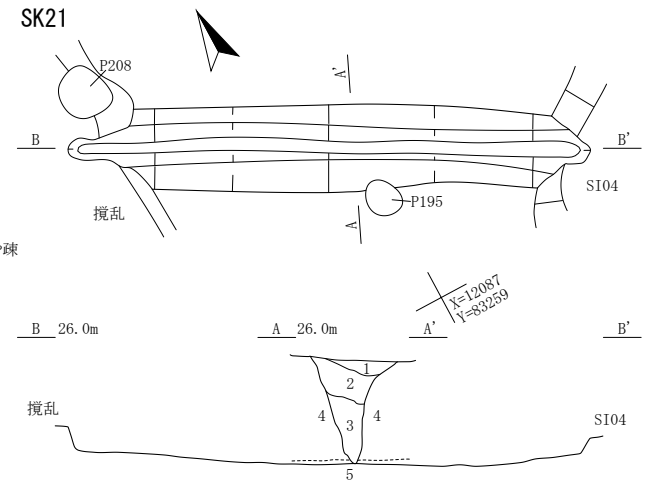




SK20
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/6褐色粘土質シルトブロック（５cm）を全体に散在
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中～やや密
6　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

SK35
1　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR4/6褐色シルト＋10YR3/3暗褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山

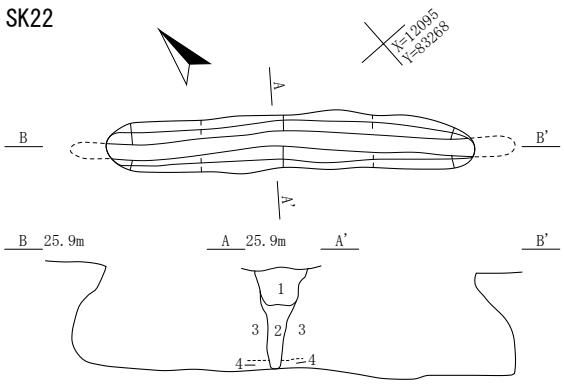
SK21
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎～中
3　10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中～やや密
5　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山



0　1:60　2m

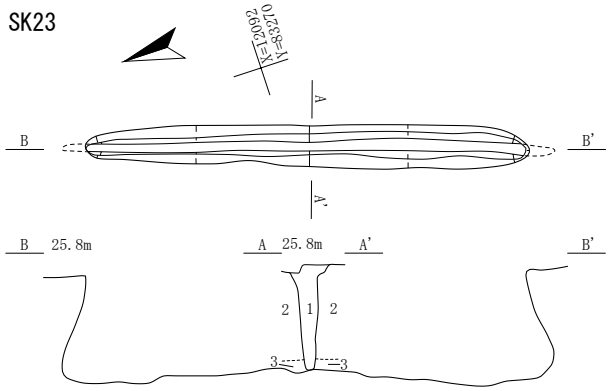
第15図　SK18～21・35陥し穴状遺構

SK22



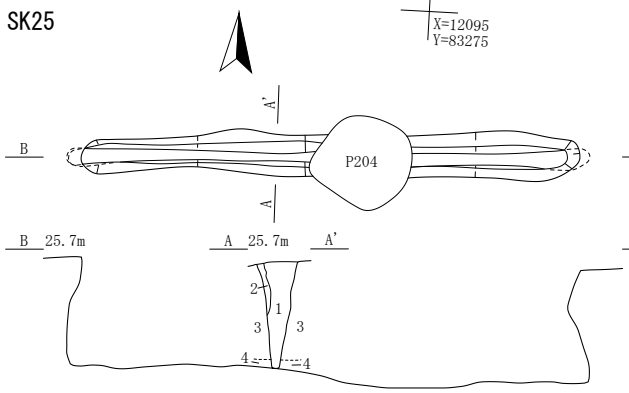
SK22
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎主体に10YR4/6褐色粘土質シルトを全体に混入する
2　10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 崩落土
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
4　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK23



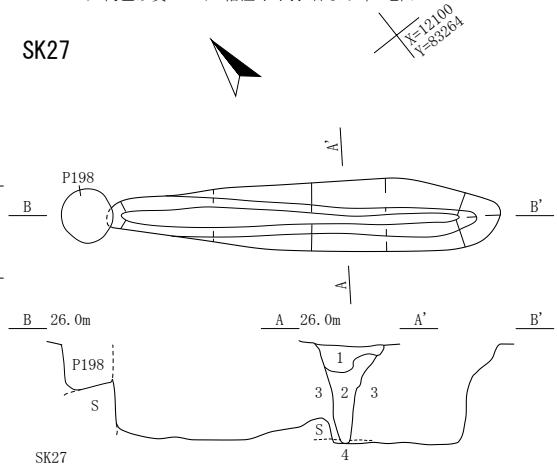
SK23
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
全体に10YR5/8黄褐色粘土質シルトブロック（5㎝）散在
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
3　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK25



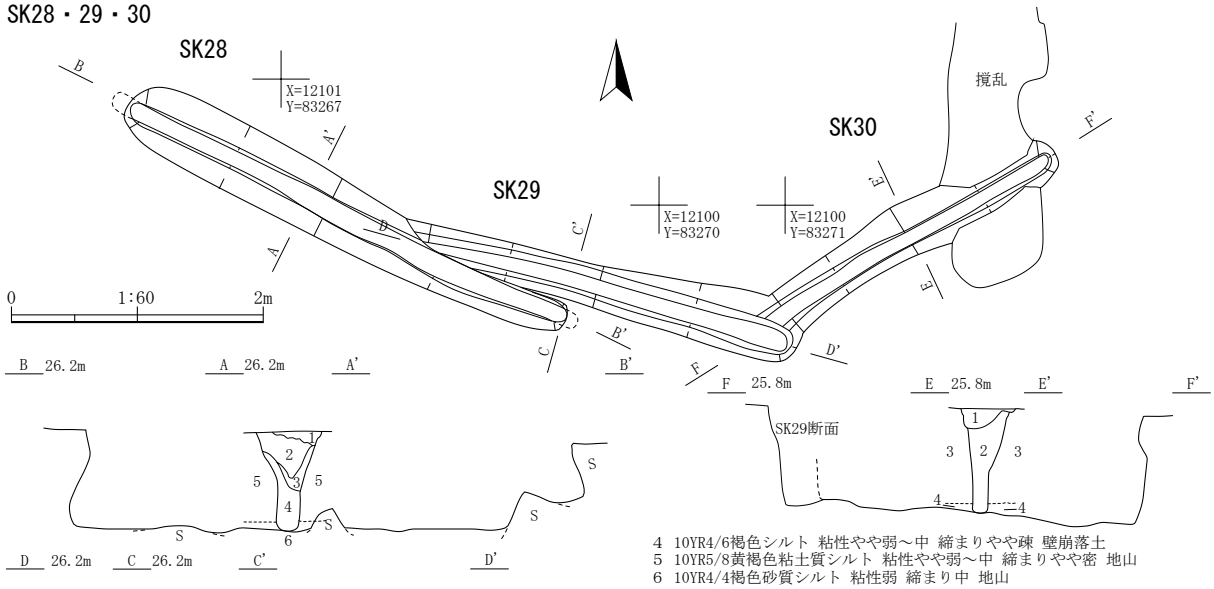
SK25
1　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 全体に10YR5/8黄褐色粘土質シルト粘性やや弱 締まりやや疎を散在
2　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
4　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK27



SK27
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎主体に10YR5/8黄褐色粘土質シルト地山ブロック（5㎝）散在
2　10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山崩落土
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
4　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK28・29・30



SK28
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 部分的に10YR3/4暗褐色シルト混在
3　10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
4　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 壁崩落土
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
6　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

SK29
1　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
5　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

SK30
1　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（5㎝）多く堆積 壁崩落土混じる
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
4　10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

第16図　SK22・23・25・27～30陥し穴状遺構

状は 4.15×0.35 mの溝状、深さは 0.84 mである。出土遺物はないが、上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK27 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 13）

南調査区南西側の X＝12100・Y＝83264 付近に位置する。北西端を P198 に切られており、規模･形状は推定値で＜3.12＞×0.58 mの溝状、深さは 0.77 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK28 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 14）

南調査区中央南側の X＝12101・Y＝83267 付近に位置する。SK29･30 と重複しており、本遺構が新しい。規模･形状は 4.08×0.53 mの溝状、深さは 0.98 mである。出土遺物はないが、上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK29 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 14）

南調査区中央南側の X＝12100・Y＝83270 付近に位置する。SK28・30 と重複しており、SK28 より古く、SK30 より新しい。規模・形状は残存値で（3.30）×0.50 mの溝状、深さは 0.72 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK30 陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 14）

南調査区中央南側の X＝12100・Y＝83271 付近に位置する。SK28・29 と重複しており、本遺構が最も古い。規模・形状は（2.60）×0.44 mの溝状、深さは 0.83 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK31 陥し穴状遺構（第 17 図、写真図版 14）

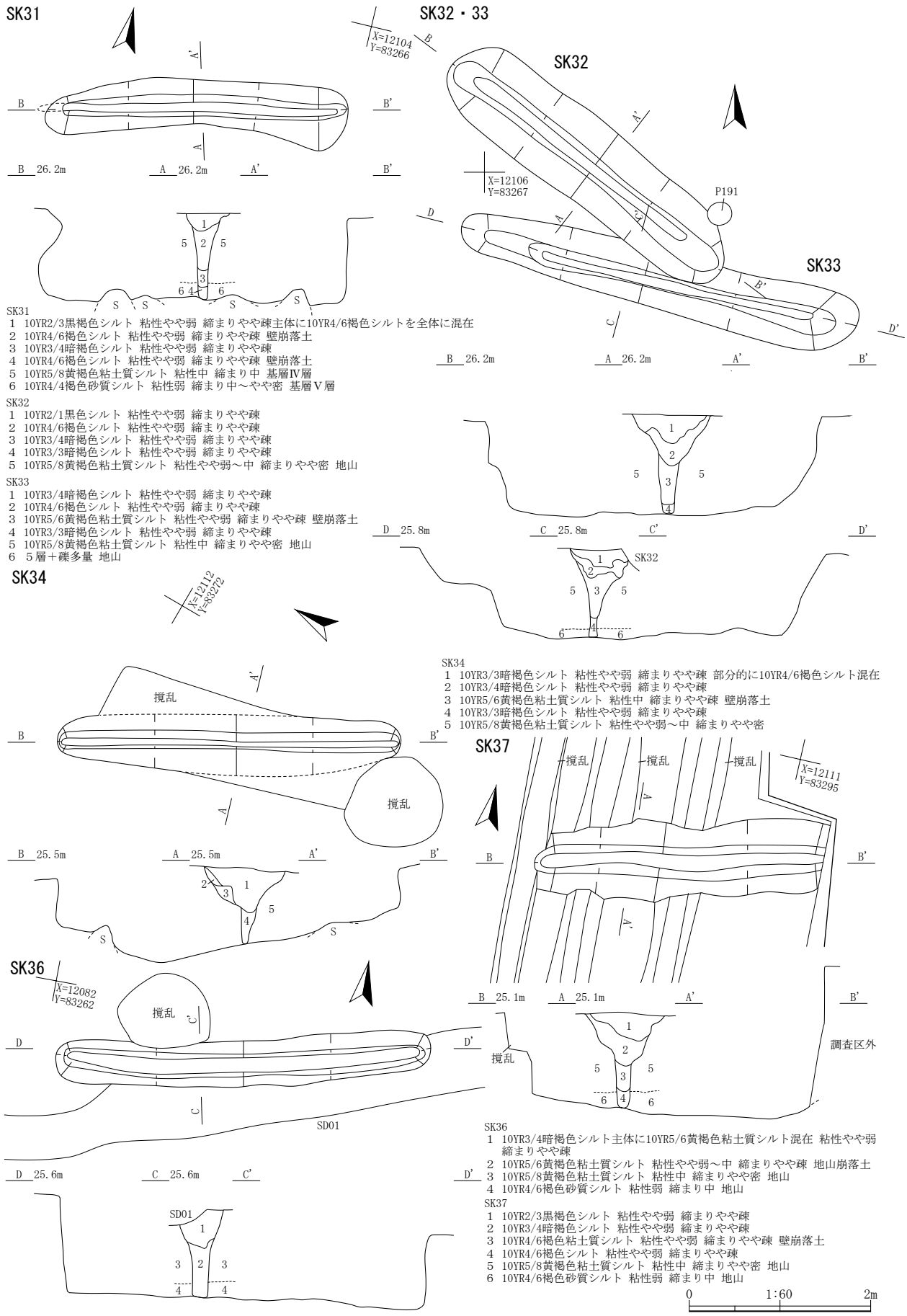
南調査区中央南側の X＝12104・Y＝83266 付近に位置する。規模・形状は 3.93×0.55 mの溝状、深さは 0.95 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK32 陥し穴状遺構（第 17 図、写真図版 15）

南調査区中央南側の X＝12106・Y＝83267 付近に位置する。SK33 と遺構南東端で重複しており、本遺構が新しい。規模・形状は 3.74×0.90 mの溝状、深さは 1.09 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK33 陥し穴状遺構（第 17 図、写真図版 15）

南調査区中央南側の X＝12106・Y＝83267 付近に位置する。SK32 と遺構中央で重複しており、本遺構が古い。規模・形状は 4.48×0.72 mの溝状、深さは 0.95 mである。出土遺物はないが、上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。



SK31
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎主体に10YR4/6褐色シルトを全体に混在
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 基層Ⅳ層
6 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中～やや密 基層Ⅴ層

SK32
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山

SK33
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
6 5層＋礫多量 地山

SK34
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 部分的に10YR4/6褐色シルト混在
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 壁崩落土
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密

SK36
1 10YR3/4暗褐色シルト主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルト混在 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 地山崩落土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
4 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

SK37
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

第17図　SK31～34・36・37陥し穴状遺構

SK34 陥し穴状遺構（第 17 図、写真図版 15）

南調査区中央の X＝12112・Y＝83272 付近に位置する。全体に撹乱の影響を受けており、規模・形状は推定値で 3.78×＜0.67＞mの溝状、深さは 0.84 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK35 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 15・16）

南調査区南西端の X＝12086・Y＝83258 付近に位置する。南東側で SK20 と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は 2.86×0.98 mの溝状、深さは 0.74 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK36 陥し穴状遺構（第 17 図、写真図版 16）

南調査区南西端の X＝12082・Y＝83262 付近に位置する。遺構南半を SD01、北側を撹乱によって切られており、本遺構が古い。規模・形状は推定値で＜4.12＞×＜0.53＞mの溝状、深さは 0.97 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK37 陥し穴状遺構（第 17 図、写真図版 17）

南調査区中央東端の X＝12111・Y＝83295 付近に位置する。遺構全体に筋状に入る撹乱の影響を受けており、規模・形状は残存値で（3.20）×0.88 mの溝状、深さは 1.05 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK38 陥し穴状遺構（第 18 図、写真図版 17）

南調査区中央東端の X＝12108・Y＝83291 付近に位置する。遺構全体に筋状に入る撹乱の影響を受けており、規模・形状は残存値で（3.06）×0.86 mの溝状、深さは 1.17 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK39 陥し穴状遺構（第 18 図、写真図版 16）

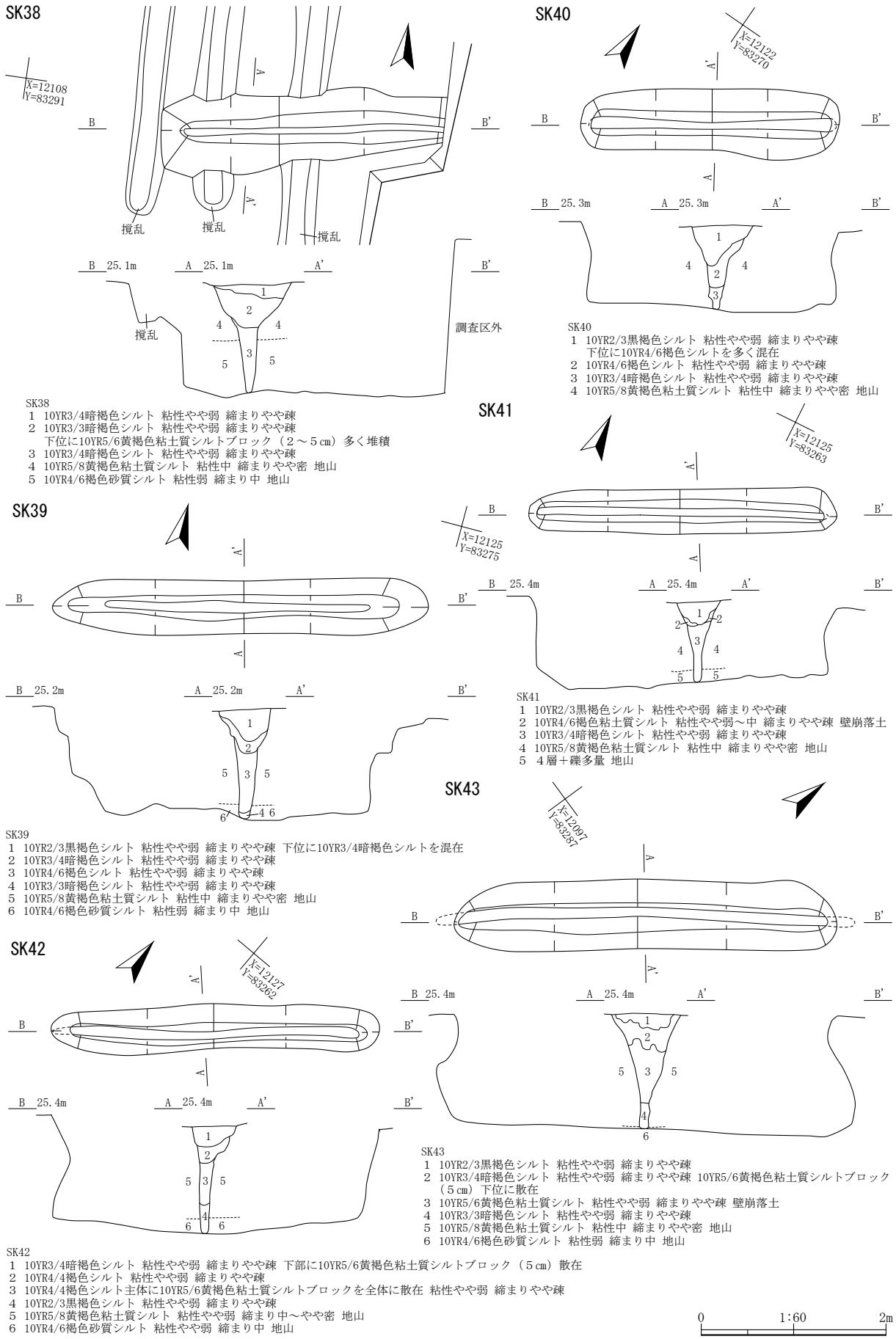
南調査区中央の X＝12125・Y＝83275 付近に位置する。規模・形状は 4.05×0.60 mの溝状、深さは 1.17 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK40 陥し穴状遺構（第 18 図、写真図版 17）

南調査区中央の X＝12122・Y＝83270 付近に位置する。規模・形状は 2.80×0.77 mの溝状、深さは 0.90 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK41 陥し穴状遺構（第 18 図、写真図版 18）

南調査区中央の X＝12125・Y＝83263 付近に位置する。規模・形状は 3.34×0.48 mの溝状、深さは



第18図　SK38～43陥し穴状遺構

0.86 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK42 陥し穴状遺構（第 18 図、写真図版 18）

南調査区中央の X＝12127・Y＝83262 付近に位置する。規模・形状は 3.55×0.50 mの溝状、深さは 1.16 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK43 陥し穴状遺構（第 18 図、写真図版 18）

南調査区南東側の X＝12097・Y＝83287 付近に位置する。規模・形状は 4.52×0.75 mの溝状、深さは 1.25 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK44 陥し穴状遺構（第 19 図、写真図版 18）

南調査区中央東端の X＝12120・Y＝83287 付近に位置する。遺構東側は調査区外へ延びており、規模・形状は残存値で（1.88）×0.62 mの溝状、深さは 1.44 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK45 陥し穴状遺構（第 19 図、写真図版 19）

南調査区北東側の X＝12164・Y＝83270 付近に位置する。遺構北半に撹乱の影響を受けており、規模・形状は 4.05×0.60 mの溝状、深さは 1.31 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK46 陥し穴状遺構（第 19 図、写真図版 19）

南調査区北東側の X＝12169・Y＝83273 付近に位置する。規模・形状は 3.14×0.85 mの溝状、深さは 1.02 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

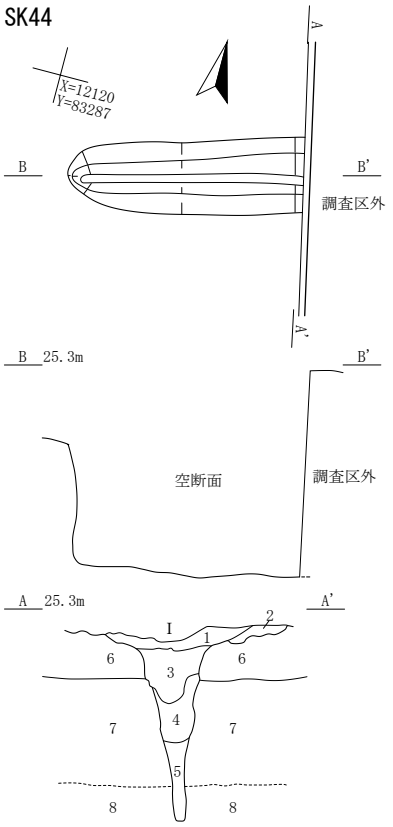
SK47 陥し穴状遺構（第 19 図、写真図版 19）

南調査区中央西端の X＝12123・Y＝83253 付近に位置する。遺構西側は調査区外へと延びており、規模・形状は残存値で（2.5）×0.5 mの溝状、深さは 0.96 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

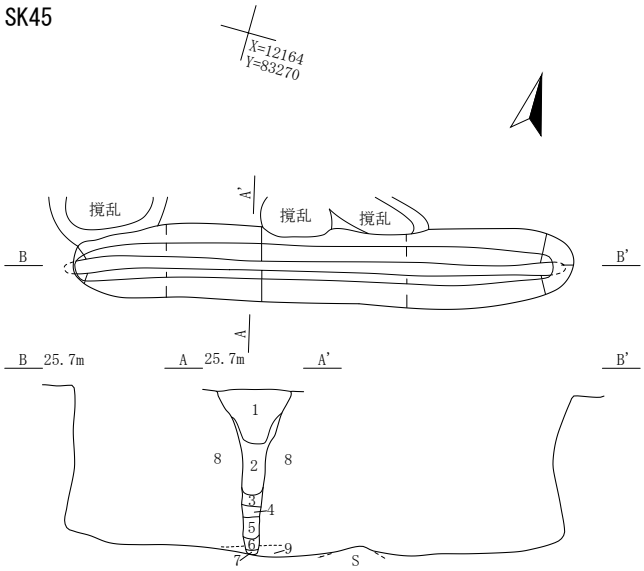
SK48 陥し穴状遺構（第 19 図、写真図版 19）

南調査区中央北側の X＝12140・Y＝83265 付近に位置する。規模・形状は 3.65×0.57 mの溝状、深さは 0.65 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK44



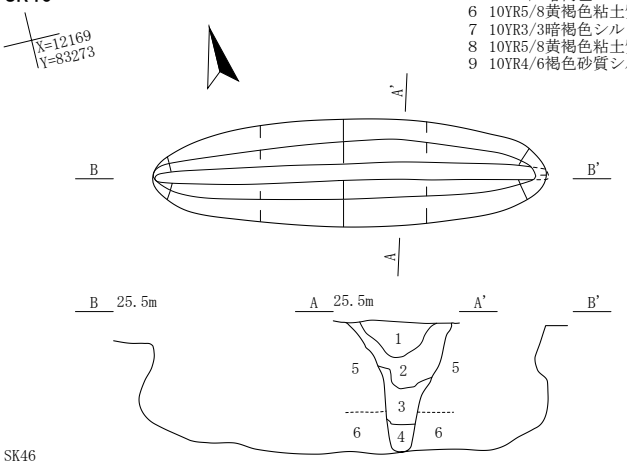
SK45



SK44
- Ⅰ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 耕作土 植根多し
- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性弱 締まりやや疎
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR4/6褐色シルトを多く堆積する
- 4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 5 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 6 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 基層Ⅱ層
- 7 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
- 8 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

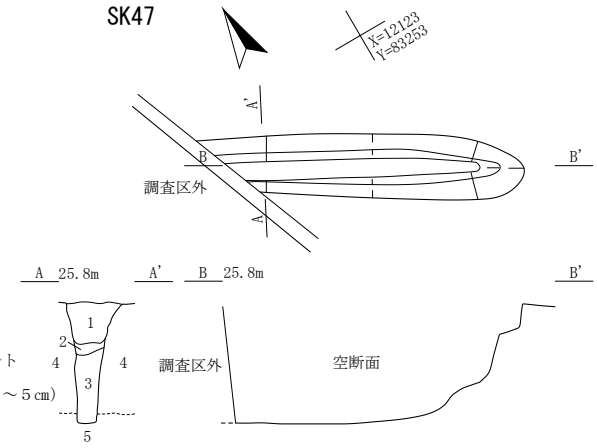
SK45
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR3/4暗褐色と10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土を多く堆積 粘性やや弱 締まりやや疎
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山ブロック（2㎝）全体に散在
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 5 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 6 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 崩落土
- 7 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山ブロック（1㎝）全体に散在
- 8 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
- 9 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK46



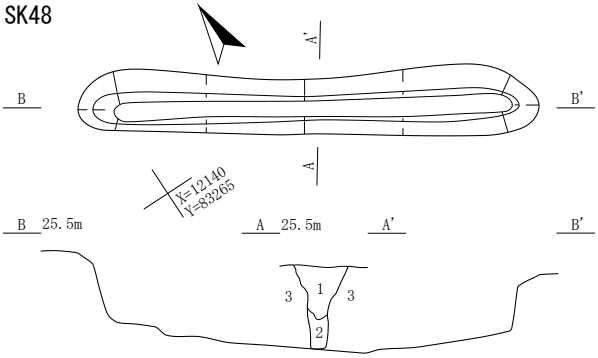
SK46
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎　下部に10YR5/8黄褐色粘土質シルト粘性やや弱 締まりやや疎を堆積
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎　10YR3/4暗褐色シルトブロック（2～5㎝）少量散在
- 3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 崩落土
- 4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
- 6 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK47



SK47
- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
  下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを露状に堆積
- 2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 崩落土
- 3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
- 4 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
- 5 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK48



SK48
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色地山ブロック（5㎝）少量散在
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山ブロック（2㎝）少量散在
- 3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第19図　SK44～48陥し穴状遺構

SK49 陥し穴状遺構（第 20 図、写真図版 20）

南調査区北東側の X＝12155・Y＝83277 付近に位置する。規模・形状は 3.61×0.78 mの溝状、深さは 0.89 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK50 陥し穴状遺構（第 20 図、写真図版 20）

南調査区北西隅の X＝12145・Y＝83250 付近に位置する。規模・形状は 3.57×0.55 mの溝状、深さは 0.75 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK51 陥し穴状遺構（第 20 図、写真図版 20）

南調査区北東端の X＝12169・Y＝83269 付近に位置する。遺構北側は道路側溝によって失われており、南端は撹乱されている。規模・形状は残存値で（1.40）×0.55 mの溝状、深さは 1.34 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK52 陥し穴状遺構（第 20 図、写真図版 20）

南調査区中央東端の X＝12129・Y＝83285 付近に位置する。遺構南西側で SI08 と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は 3.35×0.68 mの溝状、深さは 1.18 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK53 陥し穴状遺構（第 20 図、写真図版 21）

中央調査区中央西側の X＝12183・Y＝83239 付近に位置する。規模・形状は 3.35×1.27 mの溝状、深さは 1.53 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉遺構に構築されたと考えられる。

SK54 陥し穴状遺構（第 21 図、写真図版 21）

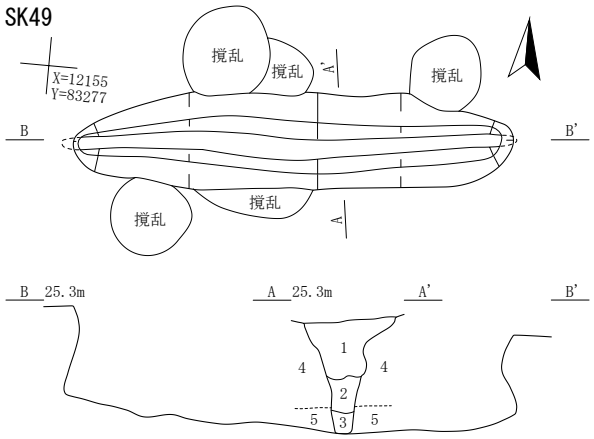
中央調査区東端の X＝12192・Y＝38277 付近に位置する。規模・形状は 2.67×0.97 mの溝状、深さは 1.10 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK56 陥し穴状遺構（第 21 図、写真図版 21）

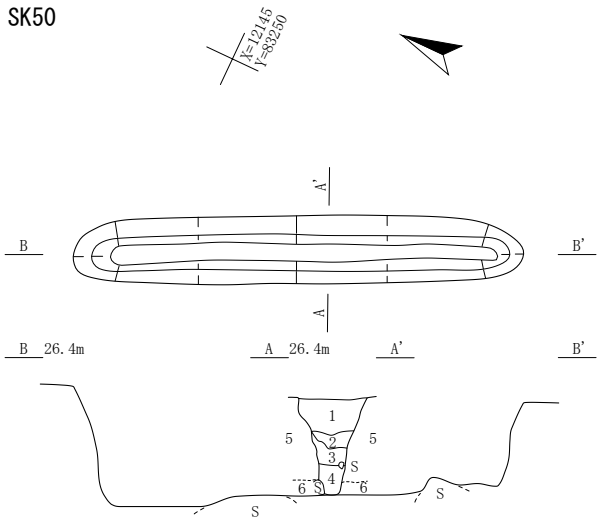
中央調査区東端の X＝12194・Y＝83273 付近に位置する。規模・形状は 3.64×0.90 mの溝状、深さは 1.13 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK58 陥し穴状遺構（第 21 図、写真図版 21）

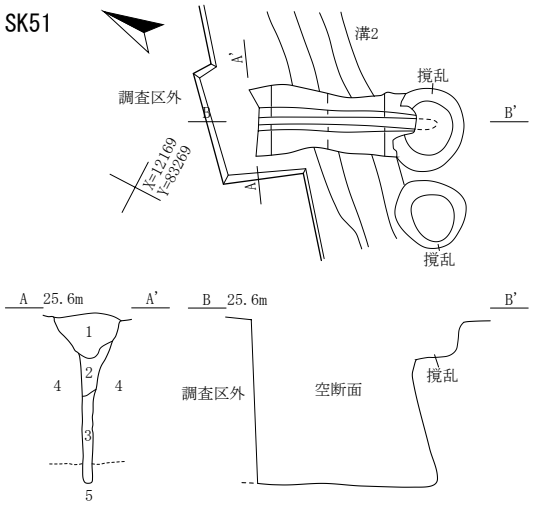
中央調査区東端の X＝12190・Y＝83277 付近に位置する。遺構南側は調査区外へと延びており、平成 22 年度調査で 14 号陥し穴状遺構が確認されていることから、同一遺構の可能性がある（岩文埋

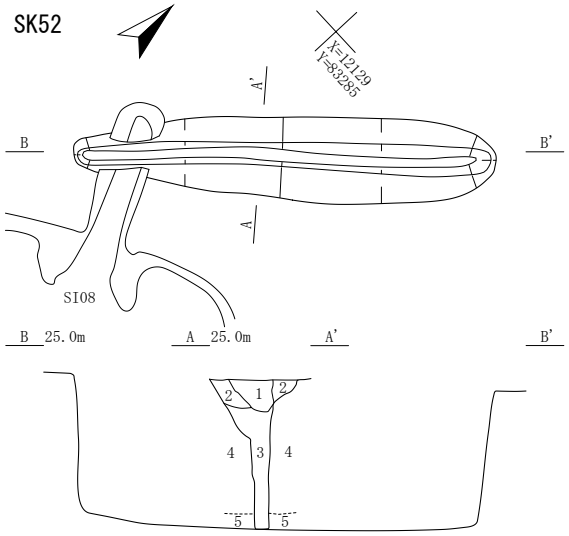


SK49
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（５cm）全体に散在
2　10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや疎 崩落土
3　10YR3/4暗褐色シルトと２層の混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 崩落土
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
5　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山



SK50
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（５cm）散在
2　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に10～20cm大の礫多量 地山
6　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山 ５層より礫多い

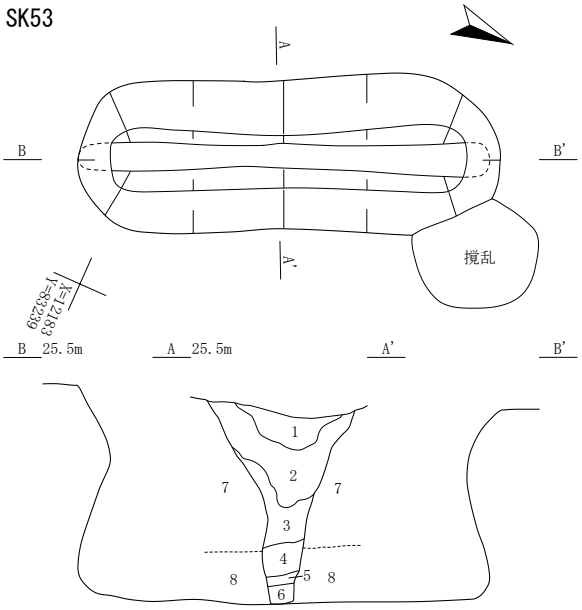




SK51
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
5　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK52
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
6　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

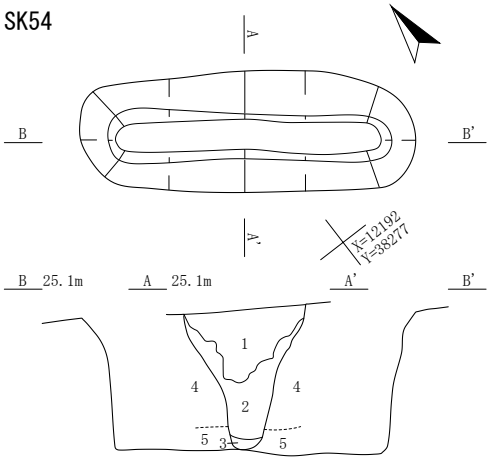
SK53
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　壁際に10YR5/6黄褐色粘土質シルト（地山崩落土）を多く混在する
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR3/4暗褐色シルトを部分的に混在
　粘性やや弱 締まりやや疎～中 地山崩落土層
4　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
　ブロック（５cm）全体に散在
5　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや疎 ８層の崩落土層
6　10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 使用時からの堆積土
7　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山



0　1:60　2m

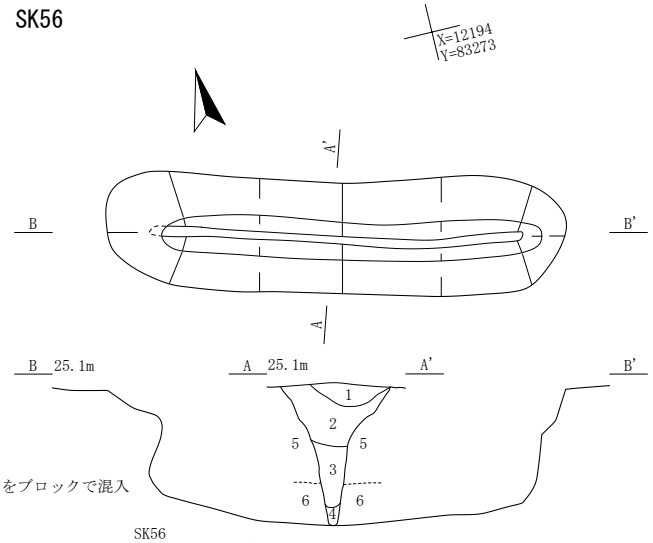
第 20 図　SK49 ～ 53 陥し穴状遺構

SK54



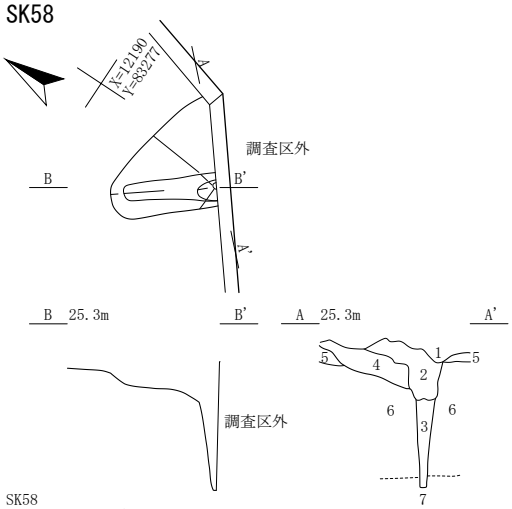
SK54
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR4/6褐色シルトをブロックで混入
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
5　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 20cm大の礫多量 地山

SK56



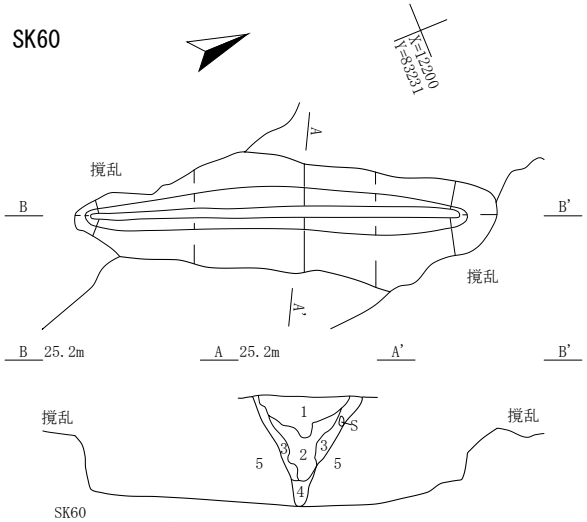
SK56
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（５cm）散在
3　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

SK58



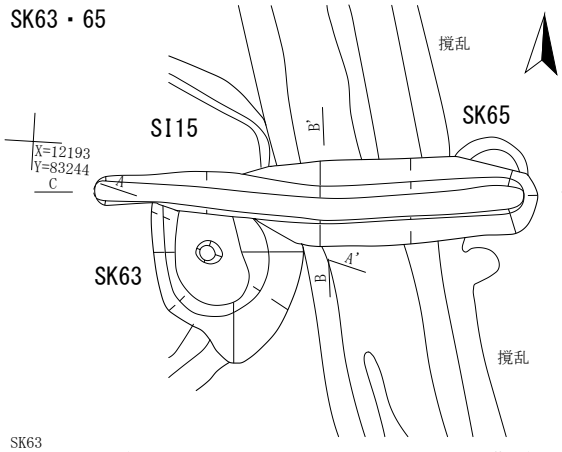
SK58
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 砕石層（３～５cm大の砂利）表土
2　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/6褐色シルトブロック
　（２～５cm）全体に散在
3　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/4褐色シルトブロック
　（２～５cm）全体に散在
5　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山漸移層
6　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

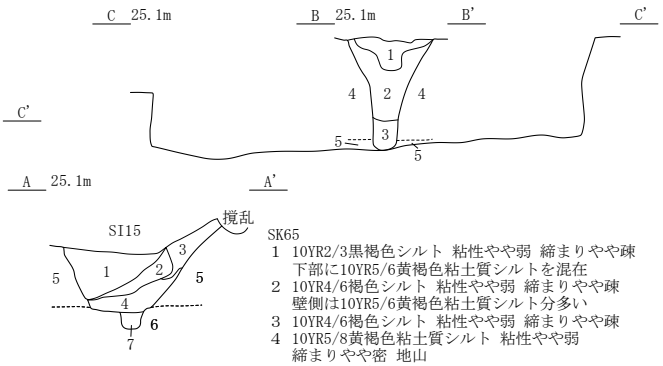
SK60



SK60
1　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（５cm）全体に散在
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　10YR3/4暗褐色シルトブロック（５cm）全体に散在 崩落土
4　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK63・65





SK63
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを混在
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁側は10YR5/6黄褐色粘土質シルト分多い
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR3/4暗褐色シルトを一部混在
4　10YR4/6褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山
7　注記なし 副穴

SK65
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを混在
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　壁側は10YR5/6黄褐色粘土質シルト分多い
3　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱
　締まりやや密 地山
5　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山
※SK63と重複し、本遺構が新しい。また、SI15と重複するが、本遺構が古い。

0　1:60　2m

第21図　SK54・56・58・60・63・65 陥し穴状遺構

2012)。規模・形状は残存値で（0.85）×（0.87）ｍの溝状、深さは 1.10 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK60 陥し穴状遺構（第 21 図、写真図版 22）

中央調査区北西隅の X＝12200・Y＝83231 付近に位置する。遺構北端と南端に撹乱の影響を受けており、規模・形状は残存値で（3.35）×0.90 ｍの溝状、深さは 0.86 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK64 陥し穴状遺構（第 22 図、写真図版 22）

中央調査区北西側の X＝12149・Y＝83246 付近に位置する。遺構南端で方形周溝 1 と重複しており、本遺構が古い。また、北側に撹乱の影響を受けている。規模・形状は残存値で（3.42）×0.85 ｍの両端がやや膨らむ溝状、深さは 1.15 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK65 陥し穴状遺構（第 21 図、写真図版 22）

中央調査区中央北側の X＝12193・Y＝83244 付近に位置する。遺構西側で SI15、SK63 と重複しており、SI15 より古く、SK63 より新しい。また、撹乱の影響を受けている。規模・形状は残存値で（3.52）×0.68 ｍの溝状、深さは 0.90 ｍである。出土遺物はないが、円形基調の SK63 と直接重複関係にあり、これよりも新期となることから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK66 陥し穴状遺構（第 22 図、写真図版 23）

中央調査区中央南側の X＝12166・Y＝33242 付近に位置する。遺構東半を方形周溝 1 に切られており、本遺構が古い。規模・形状は残存値で（3.60）×0.63 ｍの溝状、深さは 1.00 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

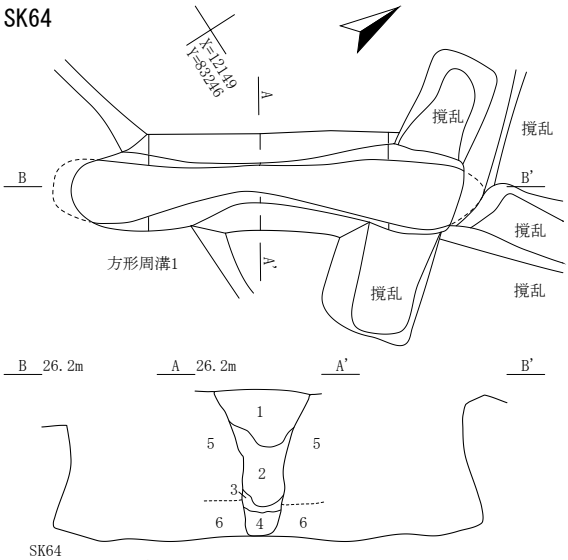
SK67 陥し穴状遺構（第 22 図、写真図版 23）

中央調査区北東端の X＝12176・Y＝83285 付近に位置する。遺構東側は調査区外へと延びており、規模・形状は残存値で（2.60）×0.50 ｍの溝状、深さは 1.01 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK68 陥し穴状遺構（第 22 図、写真図版 23）

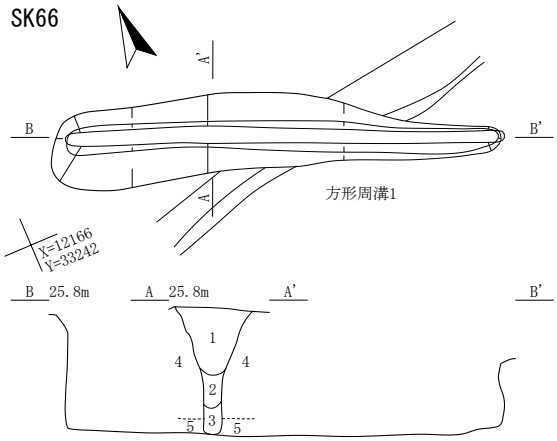
H29 調査区北側東端の X＝12201・Y＝83279 付近に位置する。遺構南西側は撹乱の影響を受けている。規模・形状は残存値で（3.22）×0.84 ｍの溝状、深さは 1.07 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK64



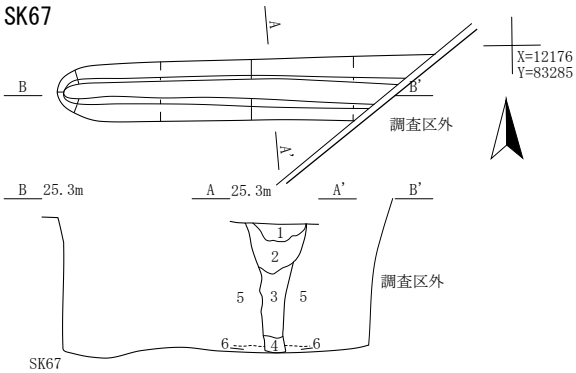
SK64
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR4/4褐色シルトを下部中心に散在
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
6　10YR4/6褐色砂質シルト　粘性やや弱　締まり中　地山

SK66



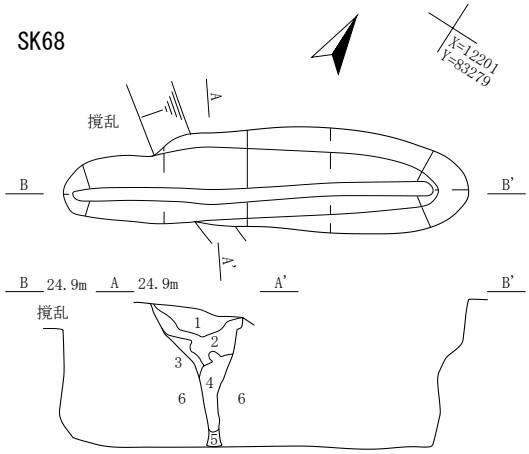
SK66
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
5　10YR4/6褐色砂質シルト　粘性やや弱　締まり中　10～20cm大の礫多く含む　地山

SK67



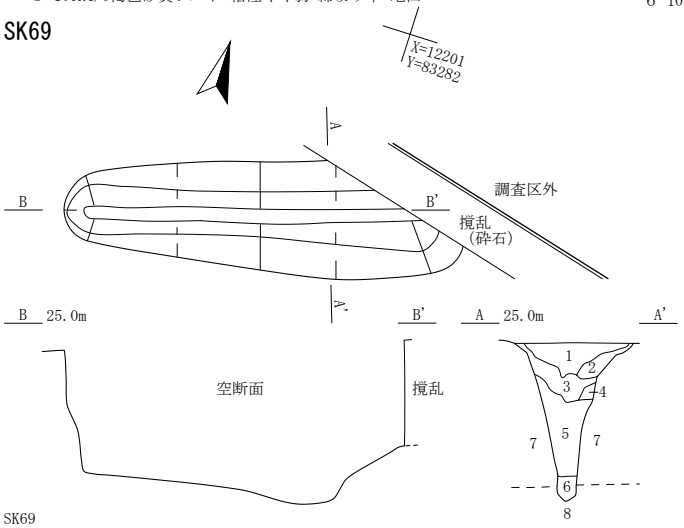
SK67
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径２～５cm）全体に散在
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
5　10YR4/6褐色砂質シルト　粘性やや弱　締まり中　地山

SK68



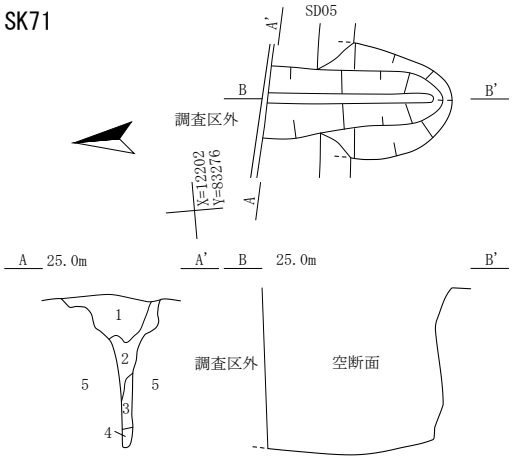
SK68
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR2/3黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（２～３cm）下位に含む
3　10YR5/6黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　地山崩落土層
4　10YR5/6黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎に10YR2/3黒褐色シルト
　ブロック（５cm）を２%散在　壁面崩落土
5　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　初期堆積土層
6　10YR5/6～8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SK69



SK69
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR2/3黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（２～３cm）下位に含む
3　10YR2/3黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや疎に10YR2/3黒褐色シルトブロック（５cm）を２%散在
5　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　初期堆積土層
7　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや密　地山
8　10YR5/4にぶい黄褐色砂礫層　10cm以下の亜角礫多量　地山

SK71



SK71
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎～中
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎～中
　10YR5/6黄褐色シルトブロック（３～５cm）10%混入
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締まりやや中
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR5/6黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　地山

0　1:60　2m

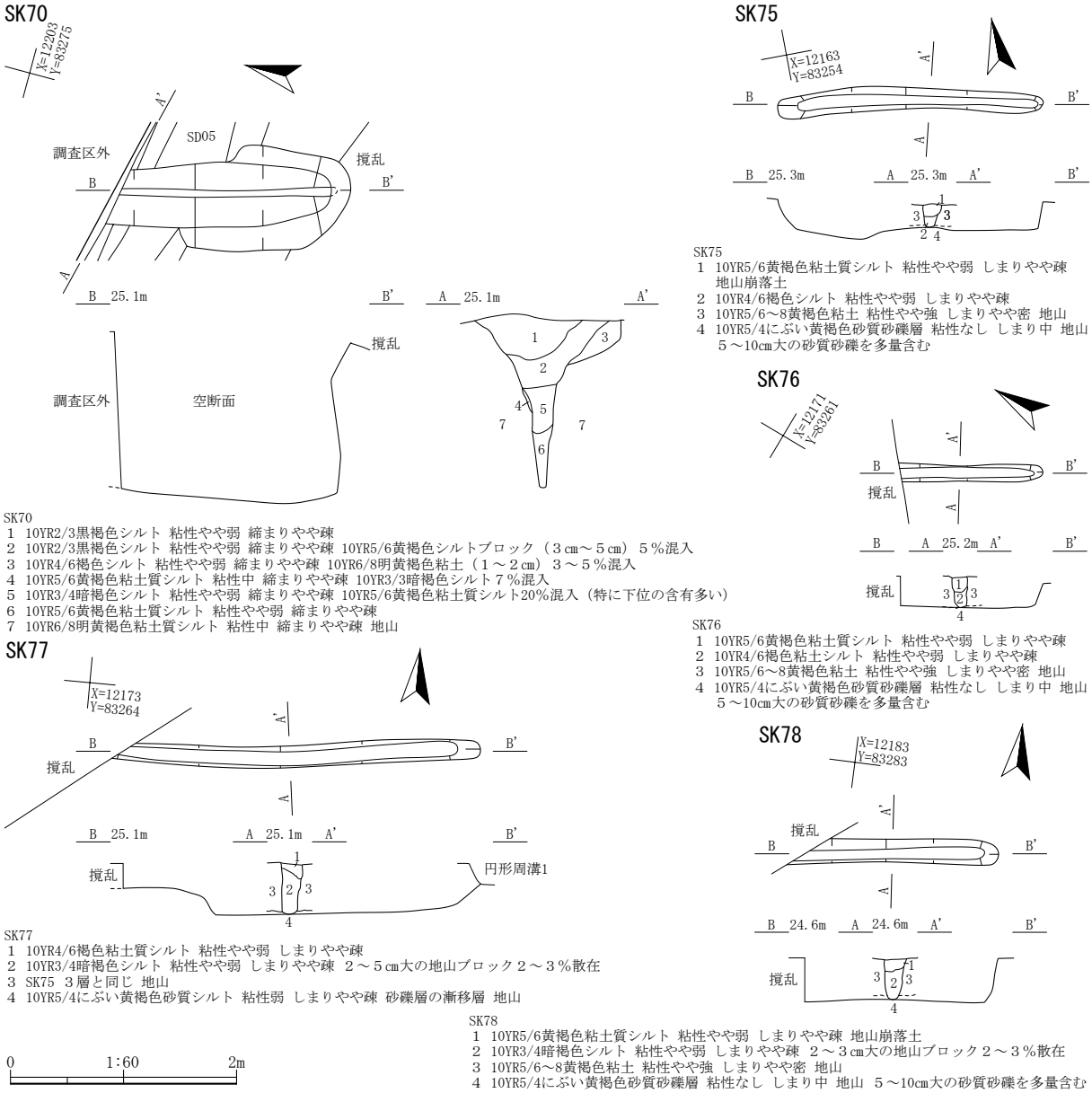
第22図　SK64・66～69・71 陥し穴状遺構

SK69 陥し穴状遺構（第 22 図、写真図版 23）

H29 調査区北側東端の X＝12201・Y＝83282 付近に位置する。遺構東側は調査区外へと延びており、規模・形状は残存値で（2.64）×0.93 ｍの溝状、深さは 1.25 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK70 陥し穴状遺構（第 23 図、写真図版 24）

H29 調査区北側東端の X＝12203・Y＝83275 付近に位置する。遺構北側は調査区外へと延びており、規模・形状は残存値で（2.08）×0.93 ｍの溝状、深さは 1.5 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。



SK70
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色シルトブロック（３cm～５cm）５％混入
3 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/8明黄褐色粘土（１～２cm）３～５％混入
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 10YR3/3暗褐色シルト７％混入
5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルト20％混入（特に下位の含有多い）
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 地山

SK75
1 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎 地山崩落土
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや疎
3 10YR5/6～8黄褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 地山
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質砂礫層 粘性なし しまり中 地山 ５～10cm大の砂質砂礫を多量含む

SK76
1 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎
2 10YR4/6褐色粘土シルト 粘性やや弱 しまりやや疎
3 10YR5/6～8黄褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 地山
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質砂礫層 粘性なし しまり中 地山 ５～10cm大の砂質砂礫を多量含む

SK77
1 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや疎 ２～５cm大の地山ブロック２～３％散在
3 SK75 ３層と同じ 地山
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや疎 砂礫層の漸移層 地山

SK78
1 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎 地山崩落土
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや疎 ２～３cm大の地山ブロック２～３％散在
3 10YR5/6～8黄褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 地山
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質砂礫層 粘性なし しまり中 地山 ５～10cm大の砂質砂礫を多量含む

第 23 図　SK70・75 ～ 78 陥し穴状遺構

SK71 陥し穴状遺構（第 22 図、写真図版 24）

H29 調査区北側東端の X＝12202・Y＝83276 付近に位置する。遺構北側は調査区外へと延びており、また遺構中央を SD05 に切られている。規模・形状は残存値で（1.47）×0.92 mの溝状、深さは 1.2 m である。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK75 陥し穴状遺構（第 23 図、写真図版 24）

H30 調査区中央西側の X＝12163・Y＝83254 付近に位置する。遺構全体が道路工事によって大きく削平されており、規模・形状は残存値で（2.35）×（0.23）mの溝状、深さは残存値で（0.2）mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK76 陥し穴状遺構（第 23 図、写真図版 24）

H30 調査区中央の X＝12171・Y＝83261 付近に位置する。全体が道路工事によって大きく削平されている。遺構北側は調査区外へと延びており、また南側で円形周溝 1 に切られている。規模・形状は残存値で（1.25）×（0.17）mの溝状、深さは（0.25）mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK77 陥し穴状遺構（第 23 図、写真図版 25）

H30 調査区中央の X＝12173・Y＝83264 付近に位置する。全体が道路工事によって大きく削平されている。遺構北側は調査区外へと延びており、また南側で円形周溝 1 に切られている。規模・形状は残存値で（3.10）×（0.21）mの溝状、深さは（0.45）mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK78 陥し穴状遺構（第 23 図、写真図版 25）

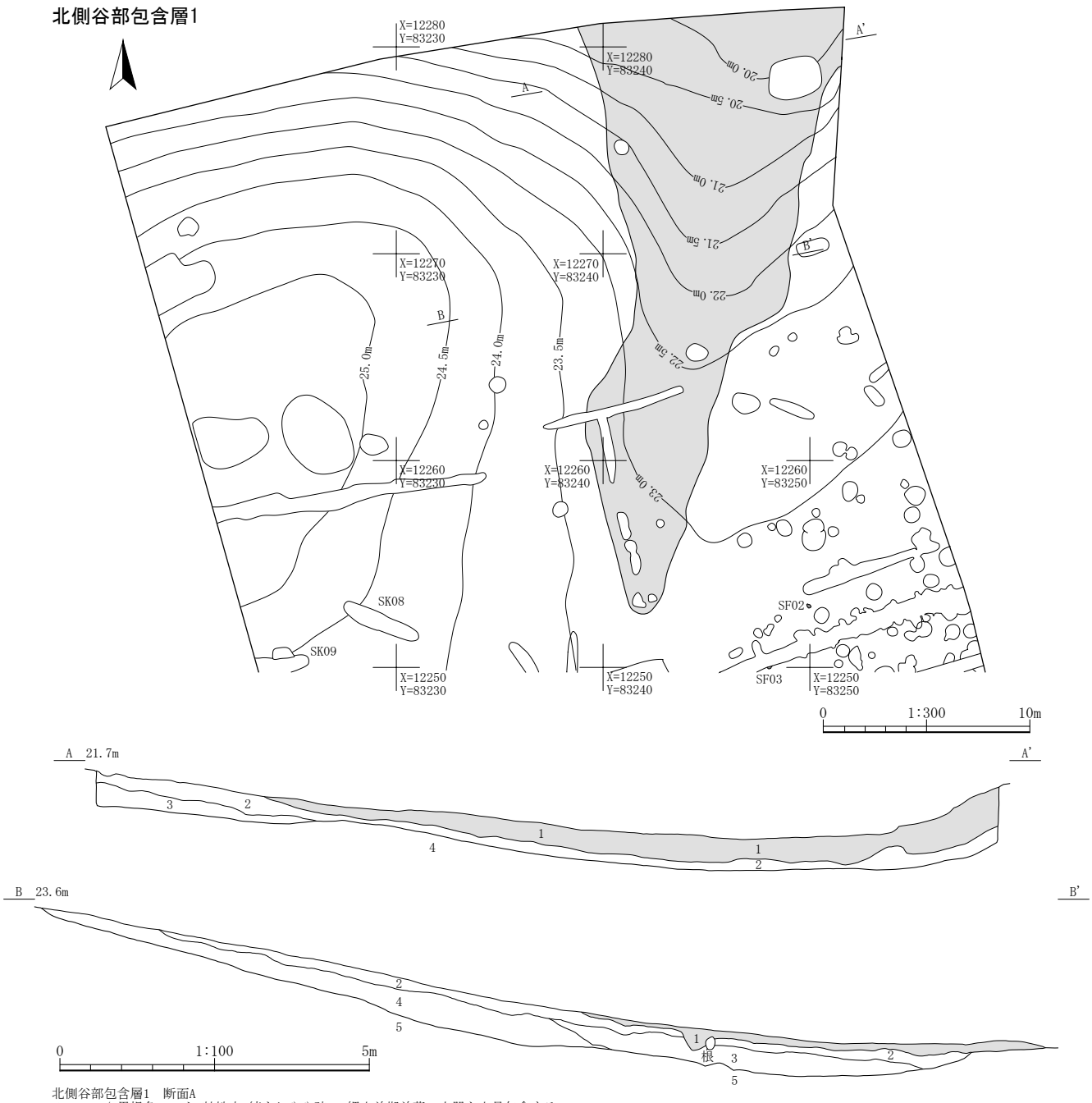
H30 調査区北東側の X＝12183・Y＝83283 付近に位置する。遺構全体が道路工事によって大きく削平されており、また北側を下水道管工事で切られている。規模・形状は残存値で（1.70）×（0.22）mの溝状、深さは（0.35）mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

（4）包　含　層

北側谷部包含層 1（第 24 図、写真図版 28）

北調査区北端の X＝12252 ～ 12282・Y＝83239 ～ 83253 の範囲に位置する。東西の小丘陵に挟まれた小さな谷状の地形部分に黒褐色土が堆積しており、この中に包含層が形成されている。小谷は北向きに緩く傾斜する標高 20.0 ～ 23.5 mにあり、面積は約 200㎡である。距離 10 mで 1 m標高が下がる斜面で、遺物は低い箇所にやや多く認められる。

この包含層を横断する 2 箇所の断面 A・B を設定した。断面 A は計 4 層で構成され、1 層は層厚 0.1 ～ 0.4 mの黒褐色シルト、2 層は層厚 0.1 ～ 0.3 mの暗褐色～黒褐色シルト、3・4 層は大～巨礫を多く含む地山で、1 層中に縄文時代前期前葉の遺物を包含している。また、断面 B は計 5 層で構成され、1 層は層厚 0.1 ～ 0.2 mの黒褐色シルト、2 層は層厚 0.1 ～ 0.2 mの暗褐色～黒褐色シルト、3 層は層厚



北側谷部包含層1　断面A
1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎 →縄文前期前葉の土器を少量包含する
2　10YR3/4暗褐色シルト～10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 層の西側(３分の１)は暗褐色シルト、東側(３分の２)にかけて黒褐色シルトに変化している
3　10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや疎 岩盤層 1㎝～30㎝の礫を多く含む
4　10YR5/6黄褐色シルト 粘性中 締まり密 地山

北側谷部包含層1　断面B
1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎 →縄文前期前葉の土器を少量包含する
2　10YR3/4暗褐色シルト～10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 層の西側は暗褐色シルト、中間から東側にかけて黒褐色シルトに変化している
3　10YR2/3黒褐色シルト 粘性中 締まり中
4　10YR3/4暗褐色シルト～10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 西側は暗褐色シルト、中間から東側にかけて黒褐色シルトに変化している
5　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 西側（３分の１）は褐色シルト、東側（３分の２）にかけて暗褐色シルト

第24図　北側谷部包含層１

0.4ｍの黒褐色シルト、４層は層厚0.2～0.5ｍの暗褐色～黒褐色シルト、５層はにぶい黄褐色～暗褐色シルトの地山～地山漸移層で、断面Ａと同様に１層中に縄文時代前期前葉の遺物を包含している。

出土遺物は、縄文時代前期前葉を中心とする土器2,281.8ｇである。このうち、土器２点を掲載した。出土遺物から、縄文時代前期前葉を中心に形成された遺物包含層と考えられ、調査区内には同一時期の遺構は確認されなかったことから、調査区外の東側、もしくは西側に該期集落の存在が推定される。

3　古　　代

（1）概　　要

4ヵ年に亘る調査から、古墳時代後期～末の竪穴住居跡12棟、平安時代中期の竪穴住居跡3棟、古代～中世の竪穴住居跡1棟の計16棟と、円形・方形周溝各1基、土坑、焼土が確認された。最も標高の高い箇所に円形・方形周溝が構築され、この周辺には竪穴住居は構築されず、居住域と墓域が明確に分かれて分布していることが分かった。各遺構の廃絶時期は、出土遺物と埋土中に堆積するTo-aテフラの有無、堆積する深さから推定される。遺構の堆積速度は遅く、古墳時代後期～末に廃絶された遺構でも、平安時代までは窪地として認識できる状態だったと見られる。

（2）竪 穴 住 居 跡

SI01 竪穴住居跡（第25図・第26図、写真図版29）

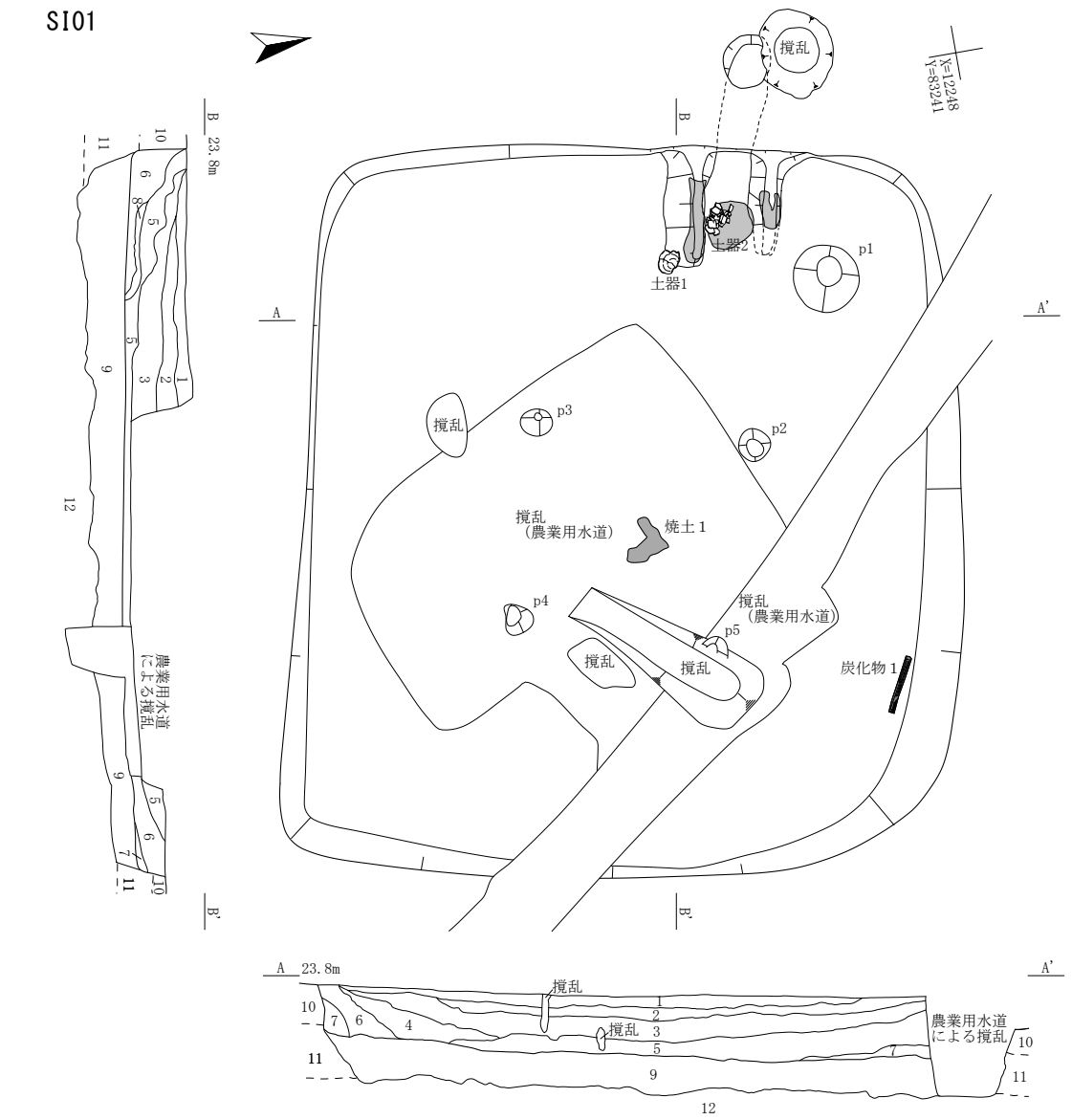
北調査区中央のX＝12248・Y＝83241付近に位置する。遺構中央に農業用水道の蛇口が設置されており、これに引き込むための水道管によって大きく撹乱されている。規模・形状は、6.05×5.5 mで西辺にカマドが1基設置される南北辺がやや長い隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、ほぼ平坦に構築されている。層厚は0.2～0.3 mで、西側がやや深く掘り込まれている。撹乱部分以外の遺構の残存は良好で、北壁が約0.5 m、南壁が約0.4 m、東壁が約0.25 m、西壁が約0.45 mあり、床面から外傾しながら急斜度に立ち上がっている。埋土は、貼床も含めて9層で構成される。埋土上位の2層中にはブロック状のTo-aテフラが混入しており、二次堆積したものと考えられる。床面に、貯蔵穴1基と柱穴状ピット4基を確認した。貯蔵穴はカマド東側に設置されており、径0.55 mの円形で深さは0.13 mである。底面から、小形の12土師器甕が出土している。柱穴状ピットはいずれも深さ0.3 m以下と浅い。西壁の中央やや東寄りにカマド1基を検出した。カマドの袖部分は芯材を用いない粘土を積み上げただけの構造で、右袖はやや短いが左袖の残存を見ると1 m程度壁から張り出して構築されていたと考えられる。袖部のカマド内側は燃焼部脇を中心に強く被熱している。燃焼部は、径0.4 mの不整円形で橙色に強変している。煙道はこの燃焼部から徐々に立ち上がって煙出しへと延びる構造で、横断面は0.1×0.3 mの扁平な形状に押し潰されている。長さは約1.2 mあり、刳り抜かれている。燃焼面上に土器2の16土師器甕、左袖の外側に土器1の11土師器坏が出土しており、カマド崩落時に潰れて残ったと見られる。その他に、13～15土師器甕を掲載した。

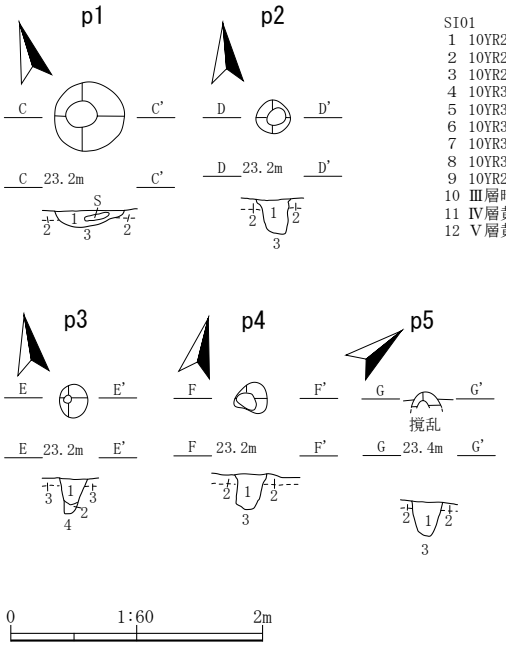
また、遺構北東側の埋土下位から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施したところ、430～493calAD（55.9％・1σ）の較正年代値を得たが土器の年代観と齟齬が生じている。加えて、床面北東隅から出土した柱状の炭1について樹種同定を実施したところ、コナラ属コナラ節の同定結果を得た。

床面からの出土遺物と、埋土上位に確認したTo-aテフラの堆積状況から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

SI02 竪穴住居跡（第27図、写真図版30）

北調査区中央東側のX＝12241・Y＝83232付近に位置する。やや小型の黒褐色プランとして検出した。規模・形状は、3.1×2.15 mの東西辺が長い隅丸長方形を呈する。床面は貼床が施されており、ほぼ平坦に作られている。貼床は壁際がやや深く掘り込まれており、層厚は0.15～0.2 mである。遺構の残存は良好で、北壁0.25 m、南壁0.27 m、西壁0.25 mあり、東壁は東に向かって傾斜して



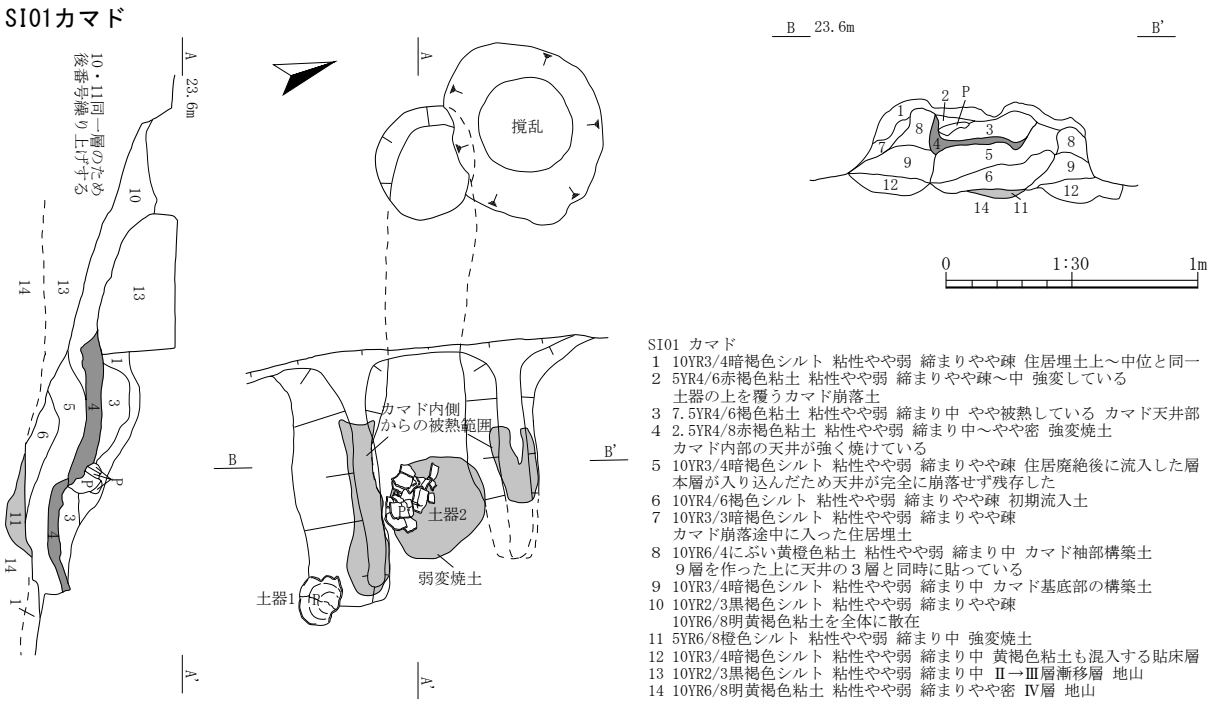


SI01
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締まりやや疎
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締まりやや疎　To-a堆積層　φ1cm～5cmのブロック状に散在
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締まりやや疎
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締まり中　まとまって流入した土か
5　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締まり中
6　10YR3/2黒褐色シルト　粘性中　締まり中
7　10YR3/4暗褐色シルト～10YR4/6褐色シルトの混合土　粘性弱　締まり密　壁崩落土か(Ⅲ層起源)
8　10YR3/4暗褐色シルト～10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性中　締まり中　カマド崩落土(黄褐色土)30%混入
9　10YR2/3黒褐色シルト+10YR5/6黄褐色粘土の混合土　粘性やや弱　締まり中　貼床
10　Ⅲ層暗褐色シルト
11　Ⅳ層黄褐色粘土　地山
12　Ⅴ層黄褐色砂礫混入層　地山

SI01 p1
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物（φ5㎜）2%
2　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　貼床
3　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや密　地山
SI01 p2
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物（φ5㎜）2%
2　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　貼床
3　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや密　地山
SI01 p3
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物（φ5㎜）2%
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや密　土圧がかかって硬化　柱の下にあった土か
3　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　貼床
4　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや密　地山
SI01 p4
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　下部に黄褐色粘土
2　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　貼床
3　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや密　地山
SI01 p5
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物（φ1㎝以下）2～3%散在
2　貼床
3　地山

第25図　SI01 竪穴住居跡（1）

SI01カマド



第 26 図　SI01 竪穴住居跡（２）

いるため、0.1 m弱と浅い。いずれも、外傾しながら緩やかに立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて計 10 層で構成され、埋土中位の７層ににぶい黄橙色の To-a テフラが二次堆積している。また、７層の上部にある５層には明赤褐色の強変焼土が堆積しており、焼土下位に炭化物を多く含むことから、廃絶後にしばらく経ってから焼失した可能性がある。床面に、貯蔵穴１基と柱穴状ピット５基を確認した。柱穴状ピットには、主柱穴とするような規則性は認められない。また、貯蔵穴としたｐ１と柱穴状ピットｐ３は同一箇所にあり、ｐ３が新しい可能性もある。北壁の中央にカマド１基を検出した。カマド袖部は礫を並べて芯材とし、灰白色や黄褐色の粘土を貼って構築されており、カマド内には天井石に使ったと見られる折れた扁平礫が出土している。燃焼部の中央には、支脚に用いたと見られる礫が１個設置されている。燃焼部の規模は 0.3×0.4 mの不整形で、中央は強く被熱している。また、燃焼面直上には８層暗赤褐色シルト、煙道部には７層赤褐色シルトの焼土が堆積しており、被熱したカマドと煙道天井部が崩落したと見られる。煙道は燃焼面からほぼ水平に延びて煙出し部へ抜ける構造で、1.0×0.5 mの規模で刳り貫かれている。

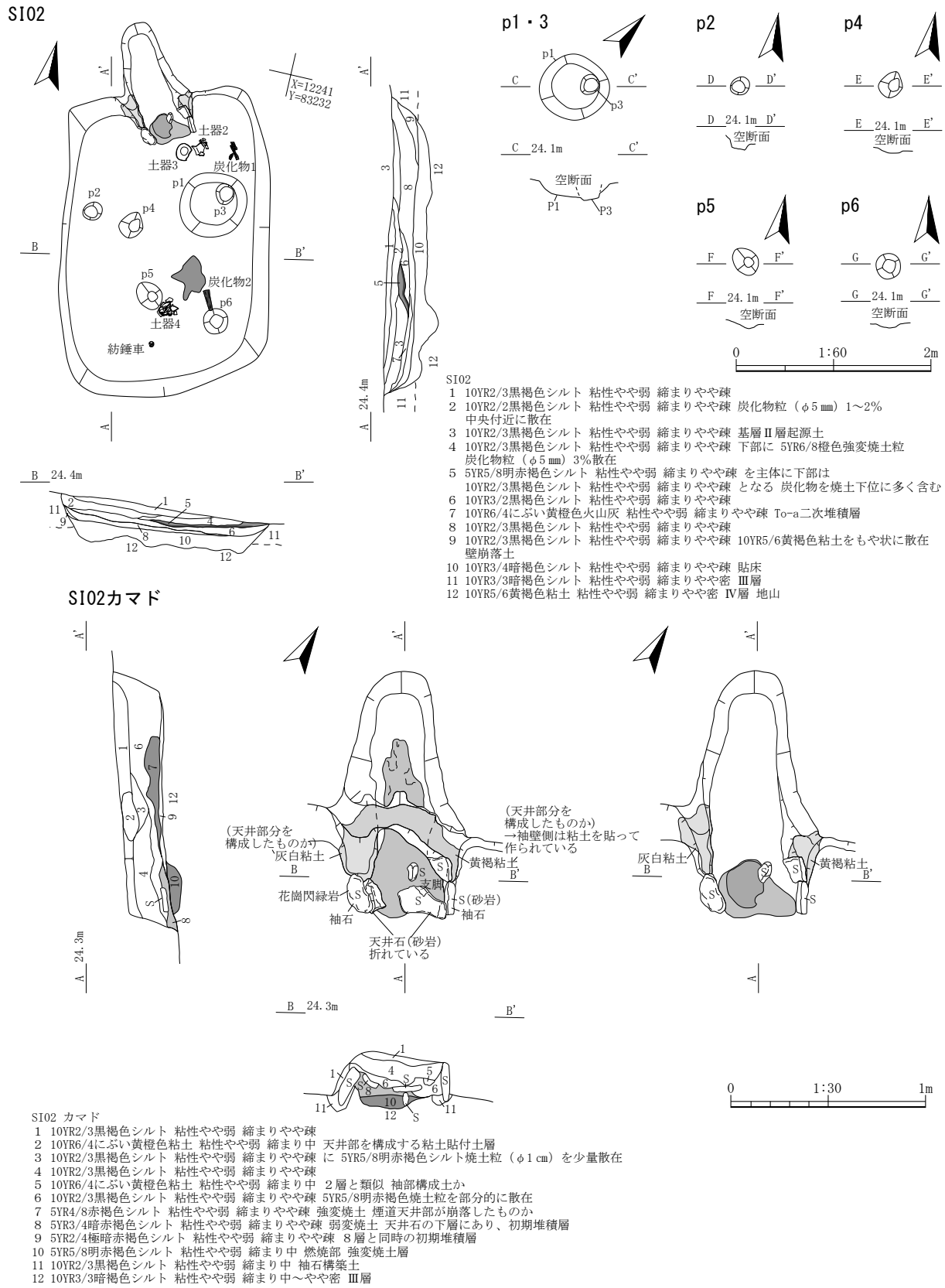
床面を中心に、17・18 土師器坏、19 ～ 22 土師器甕、70 土製紡錘車が出土し掲載した。

また、床面から出土した炭化物１・２について放射性炭素年代測定を実施したところ、炭化物１が 680calAD－714calAD（40.4％・1σ）、炭化物２が 689calAD－725calAD（40.7％・1σ）の較正年代値を得ており、土器の年代観と概ね調和的である。加えて、これらの炭化物について樹種同定を実施したところ、炭化物１はコナラ属コナラ節、炭化物２はカエデ属の同定結果を得た。

床面からの出土遺物と、埋土中位に確認した To-a テフラの堆積状況、放射性炭素年代測定値から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

SI03 竪穴住居跡（第 28 図・第 29 図、写真図版 31）

北調査区中央西端の X＝12233・Y＝83234 付近に位置する。調査区西壁にかかっている方形の黒褐色プランとして検出した。遺構上部から東側にかけて大きく撹乱の影響を受けている。規模・形状は、



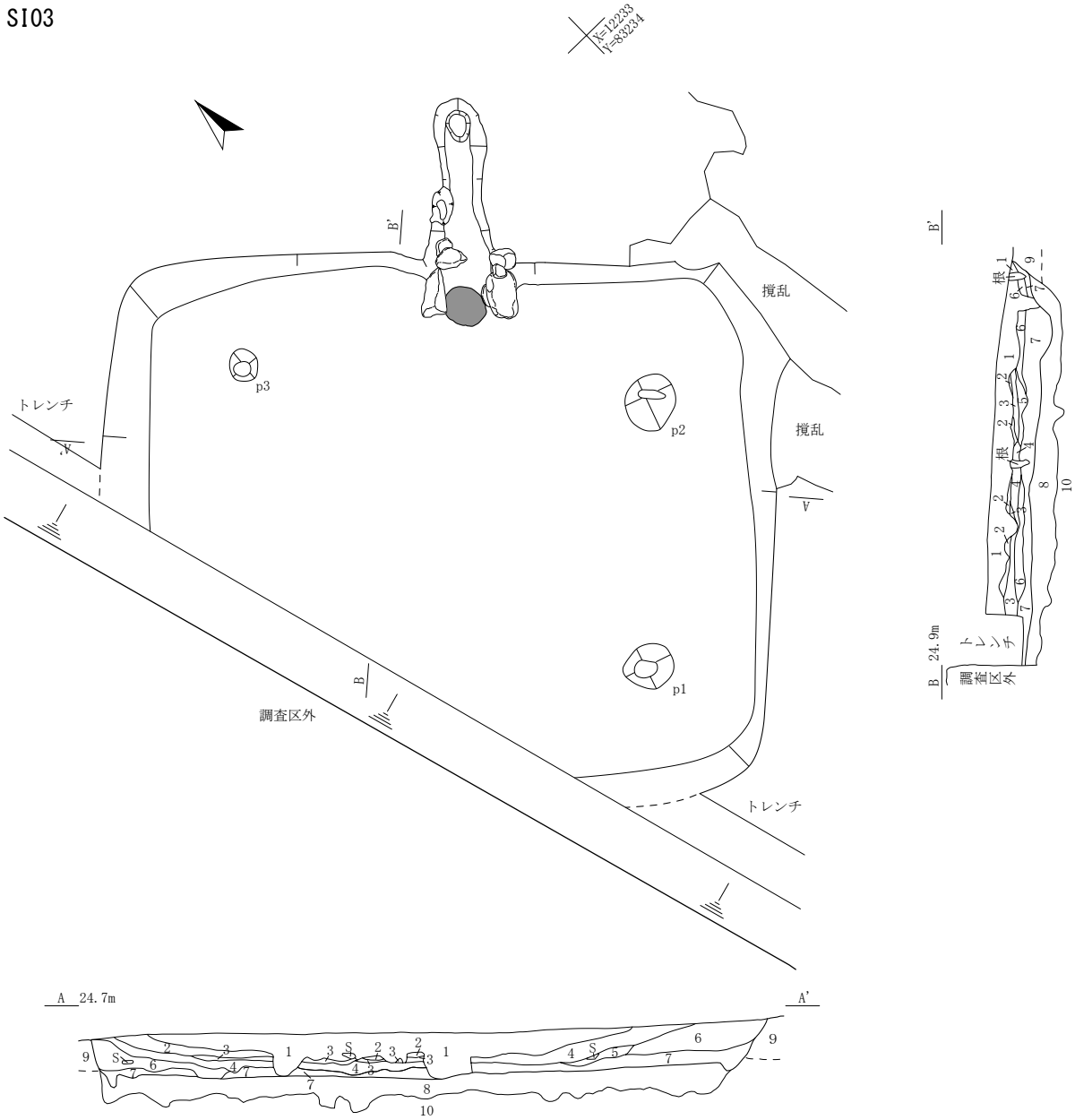
SI02
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（φ5㎜）1～2%
　中央付近に散在
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　基層Ⅱ層起源土
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　下部に 5YR6/8橙色強変焼土粒
　炭化物粒（φ5㎜）3%散在
5　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　を主体に下部は
　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　となる　炭化物を焼土下位に多く含む
6　10YR3/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
7　10YR6/4にぶい黄橙色火山灰　粘性やや弱　締まりやや疎　To-a二次堆積層
8　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
9　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土をもや状に散在
　壁崩落土
10　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　貼床
11　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや密　Ⅲ層
12　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや密　Ⅳ層　地山

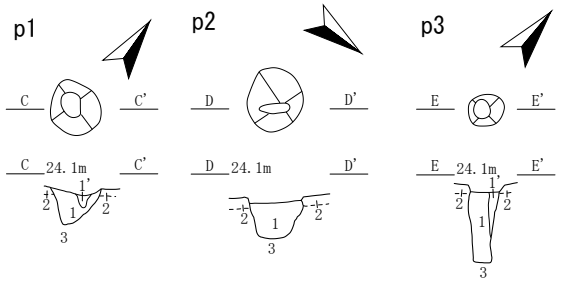
SI02 カマド
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR6/4にぶい黄橙色粘土　粘性やや弱　締まり中　天井部を構成する粘土貼付土層
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　に 5YR5/8明赤褐色シルト焼土粒（φ1㎝）を少量散在
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR6/4にぶい黄橙色粘土　粘性やや弱　締まり中　２層と類似　袖部構成土か
6　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　5YR5/8明赤褐色焼土粒を部分的に散在
7　5YR4/8赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　強変焼土　煙道天井部が崩落したものか
8　5YR3/4暗赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　弱変焼土　天井石の下層にあり、初期堆積層
9　5YR2/4極暗赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　８層と同時の初期堆積層
10　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　燃焼部　強変焼土層
11　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　袖石構築土
12　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まり中～やや密　Ⅲ層

第 27 図　SI02 竪穴住居跡

南西隅から南西辺にかけてが調査区外にあるため残存値で、(4.8)×6.0 mのカマドのある北東辺、南西辺が長い隅丸長方形を呈する。床面は貼床が施されており、ほぼ平坦に作られている。貼床は北

SI03





SI03
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR7/4にぶい黄橙色To-aテフラ二次堆積層 下位は10YR3/2黒褐色と混合
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物(φ2㎜以下)を全体に散在
6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（φ5㎜）1～2%散在
10YR6/8明黄褐色粘土を部分的にブロックで混入
8 10YR5/6黄褐色粘土と 10YR2/3黒褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まり中 貼床
9 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 Ⅲ層
10 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 Ⅳ層

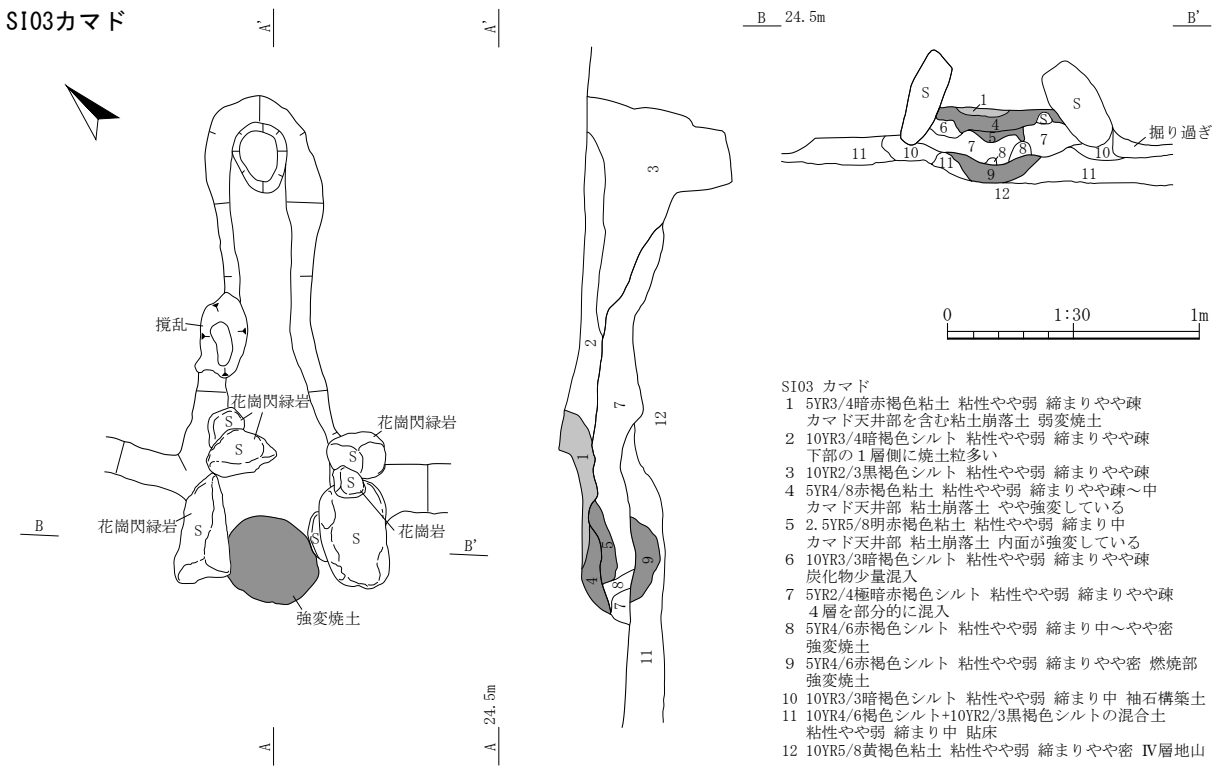
SI03 p1
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
1'10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 柱痕か
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR5/6黄褐色粘土ブロックを全体に散在 貼床
3 10YR5/6黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SI03 p2
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 ブロック（φ5㎝）を全体に散在
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR5/6黄褐色粘土ブロックを全体に散在 貼床
3 10YR5/6黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SI03 p3
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
1'10YR2/2黒褐色シルト主体に 10YR5/6黄褐色粘土ブロック（φ2～5㎝）散在
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR5/6黄褐色粘土ブロックを全体に散在 貼床
3 10YR5/6黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第28図　SI03竪穴住居跡（1）



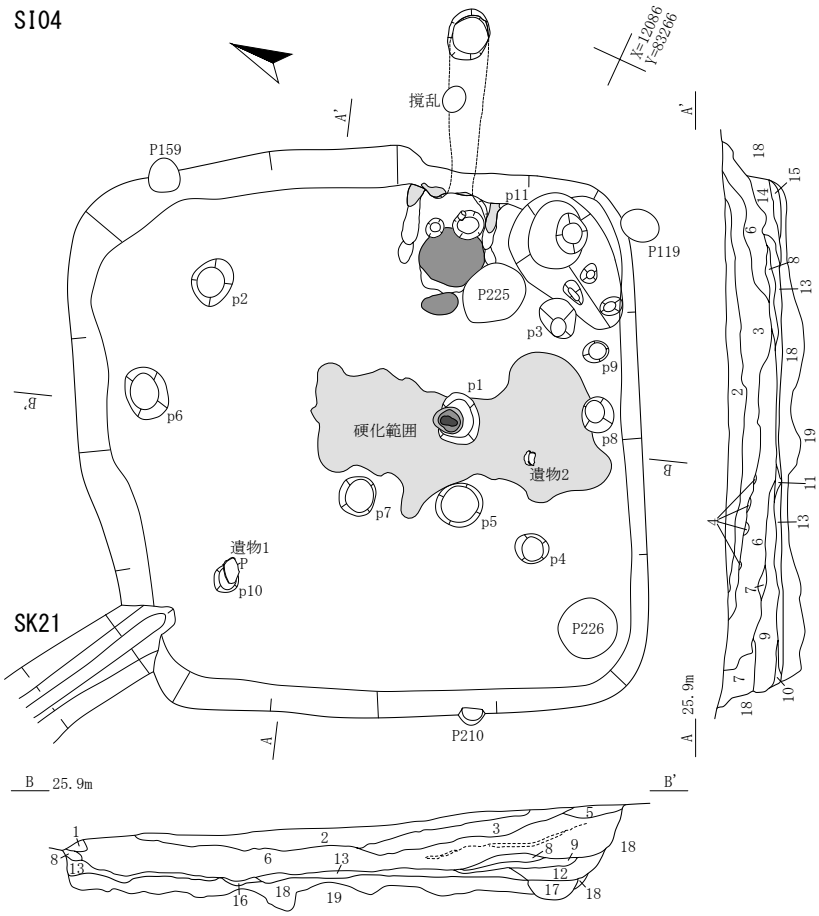
第 29 図　SI03 竪穴住居跡（２）

西辺と南東辺の壁際がやや深く掘り込まれており、層厚は 0.1 ～ 0.25 mである。遺構の残存は良好で、北東壁 0.16 m、南東壁 0.35 m、北西壁 0.32 mあり、南西壁は調査区外である。いずれも、外傾しながら緩やかに立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて８層で構成され、埋土中位の３層ににぶい黄橙色の To-a テフラが二次堆積している。床面に、柱穴状ピット３基を確認した。いずれも主柱穴と見られるが、床面からの深さにばらつきがあり、ｐ１が 0.3 m、ｐ２が 0.32 m、ｐ３が 0.62 mである。北東壁の中央にカマド１基を検出した。カマドは礫を芯材にする造りで、礫の隙間を粘土で埋めていたと考えられる。芯材の礫は直立していたと考えられるが、土圧の影響で左右いずれも内傾した状態で見つかった。また、煙道のカマド側には煙道入口に組んでいたと思われる礫をいくつか出土している。燃焼面の規模・形状は 0.38×0.33 mの楕円形を呈しており、深さ５㎝まで赤褐色に強く被熱している。また、燃焼面直上や煙道内には天井部の崩落土と見られる７・８層が認められることから、当初は刳り貫かれていたと考えられる。煙道の規模は、1.6×0.5 mで煙出し部の底面がピット状に掘り込まれている。

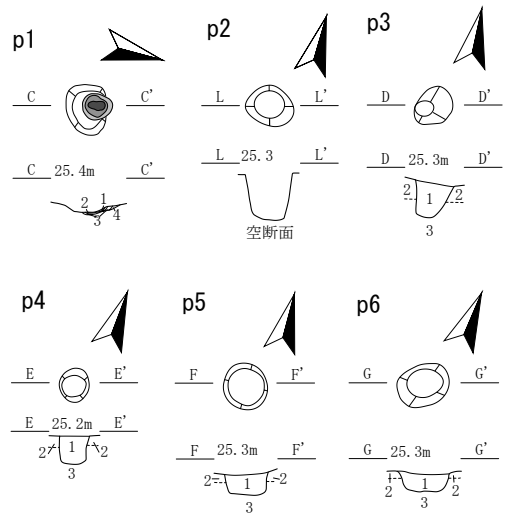
遺構内の出土遺物は少ないが、23 ～ 25 土師器甕、85 ～ 87 方割石が出土し掲載した。遺構内の出土遺物と、埋土中位に確認した To-a テフラの堆積状況から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

SI04 竪穴住居跡（第 30 図・第 31 図、写真図版 32・33）

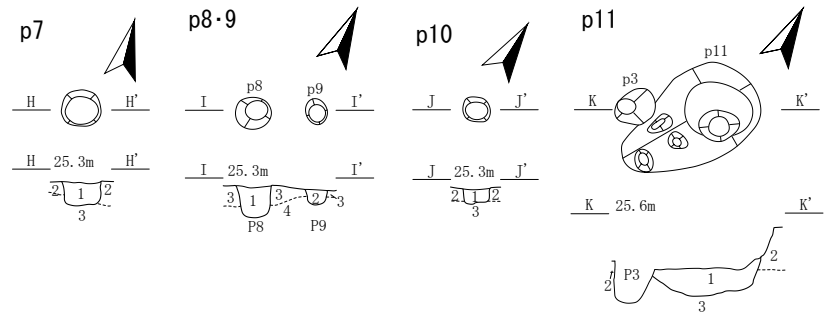
南調査区南西隅の X＝12086・Y＝83266 付近に位置する。遺構北西隅で SK21 と重複しており、本遺構が新しい。また、P119・159・210・225・226 と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は、4.5×4.54 mの隅丸方形を呈する。床面は貼床が施されており、ほぼ平坦に作られている。貼床は、ほぼ均等に掘り込まれた掘り方に、層厚は 0.1 ～ 0.15 mで施されている。遺構の残存は良好で、北壁が 0.57 mと高く、南壁 0.21 m、東壁 0.45 m、西壁 0.45 mである。廃絶後の崩落で東西壁がやや開



SI04
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR4/6褐色粘土質シルトを全体に散在
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR6/4にぶい黄橙色テフラ 粘性なし 締まり中
To-aテフラ二次堆積層
5 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/8黄褐色粘土質シルトを筋状に流入堆積
7 10YR2/3黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト
粘性やや弱 締まりやや疎
8 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中
締まりやや疎 地山崩落土
9 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/8黄褐色粘土質シルト粒を全体に散在
10 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱
締まりやや疎 地山崩落土
11 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
12 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱
締まりやや疎 地山壁崩落土
13 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
14 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱
締まりやや疎 地山壁崩落土
15 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
上部に10YR7/3にぶい黄橙色シルト
粘性やや弱 締まりやや疎を混在 カマド袖部貼土か
16 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
炭化物多量 P1小鍛冶ピット埋土
17 10YR4/6褐色シルト＋10YR3/4暗褐色シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや疎 ピット埋土
18 10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR3/3暗褐色
シルトブロック（1～2㎝）全体に散在 貼床
19 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中
締まり中～やや密 地山



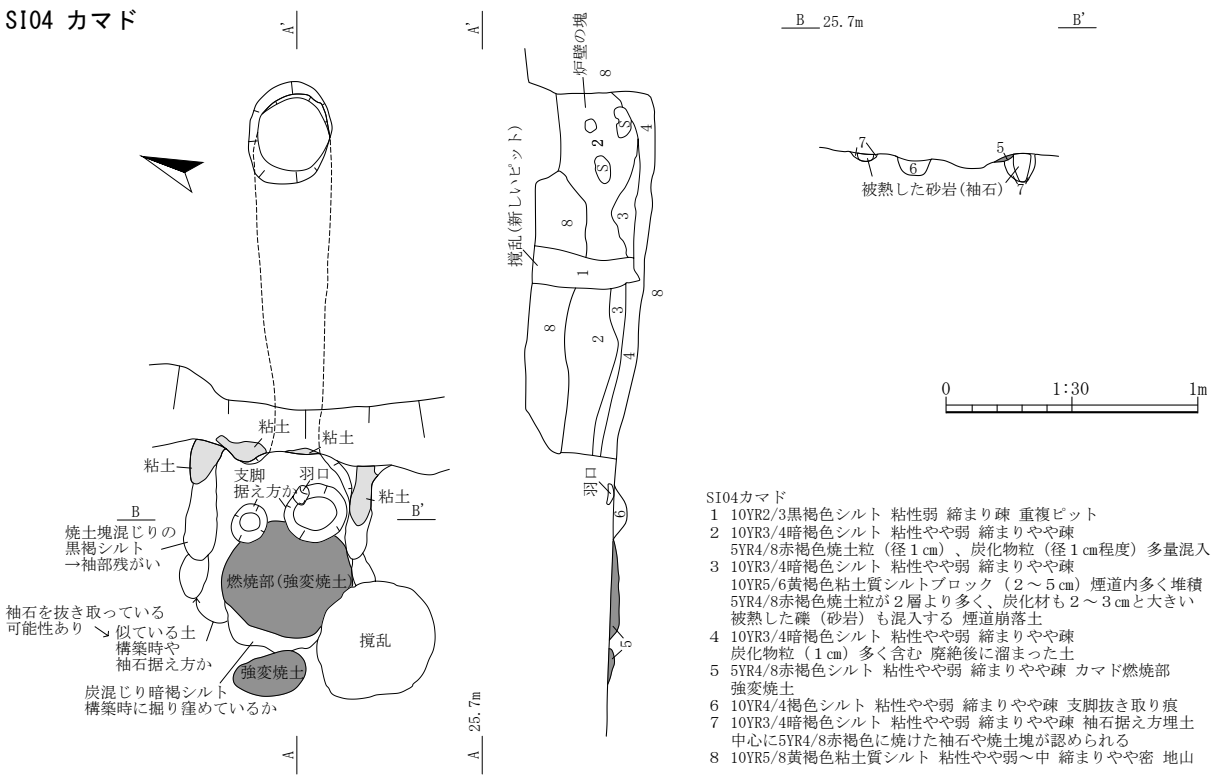
SI04 p1
1 5G6/1緑灰色還元層 粘性なし 締まり密 ガリガリに硬化 還元焔焼成
2 2.5YR4/8赤褐色シルト 粘性なし 締まり密 ガリガリに硬化 還元層下の影響層 強変焼土
3 2.5YR6/6橙色シルト 粘性なし 締まり密 ガリガリに硬化 レンガ状 外側の影響層 強変焼土
4 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性なし 締まり密 地山が強い熱により硬化
SI04 p2
注記なし
SI04 p3
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜）少量
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
3 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山
SI04 p4
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜）少量
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
3 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山
SI04 p5
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山
3 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山
SI04 p6
1 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎～中 貼床か
3 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山
SI04 p7
1 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎～中 貼床か
3 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山
SI04 p8･9
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎～中 貼床か
4 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山



SI04 p10
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
上面が10YR3/3暗褐色シルト混在
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中
締まりやや疎～中 貼床か
3 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山
SI04 p11
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
炭化物粒（径１～２㎝）２％散在
2 10YR5/8黄褐色シルト 粘性やや弱～中
締まりやや密 地山
3 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中 地山

0　1:60　2m

第30図　SI04 竪穴住居跡（1）



第 31 図　SI04 竪穴住居跡（２）

いているが、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて 18 層で構成され、埋土上位の４層ににぶい黄橙色の To-a テフラが二次堆積している。床面に、ｐ１～ 10 の柱穴状ピット 10 基、ｐ11 貯蔵穴１基を確認した。主柱穴は位置から、ｐ２（深さ 0.35 ｍ）、ｐ３（深さ 0.3 ｍ）、ｐ４（深さ 0.23 ｍ）、ｐ10（深さ 0.12 ｍ）の４基が想定される。また、床面中央やや南寄りに小鍛冶ピットと考えられるｐ１を確認した。規模・形状は 0.4×0.3 ｍの不整円形で、深さ５㎝の底面に緑灰色に還元した被熱痕跡を伴う。被熱痕跡は径 0.2 ｍで、中央は還元色に変化、同心円状に赤褐色、橙色に影響している。このピット埋土からは少量の鍛造剝片が出土していることから、小鍛治作業が行われたと考えられる。東壁の南寄りにカマド１基を検出した。カマド袖部は壁から続く粘土の一部が残存するのみで、芯材に用いていたと考えられる礫は廃絶時に既に抜き取られた可能性がある。袖石据え方と見られる窪みには、設置した袖石の一部が残っていた。燃焼部には並んだ２箇所の窪みがあり、支脚据え方と見られる。燃焼部の規模・形状は、0.51×0.48 ｍの不整円形で、灰を掻き出したのかやや掘り窪んでいる。燃焼部は赤褐色に強く被熱しており、焼土は厚さ２㎝まで及んでいる。煙道は、燃焼部からやや下がりながら水平に伸びており、約 1.2 ｍ延びて煙出し部まで急斜度に立ち上がっている。煙道は刳り抜き式で、廃絶後しばらくして天井の一部が崩落している。カマド内から、76 羽口が出土しており、ｐ１の小鍛治に用いられたと考えられる。

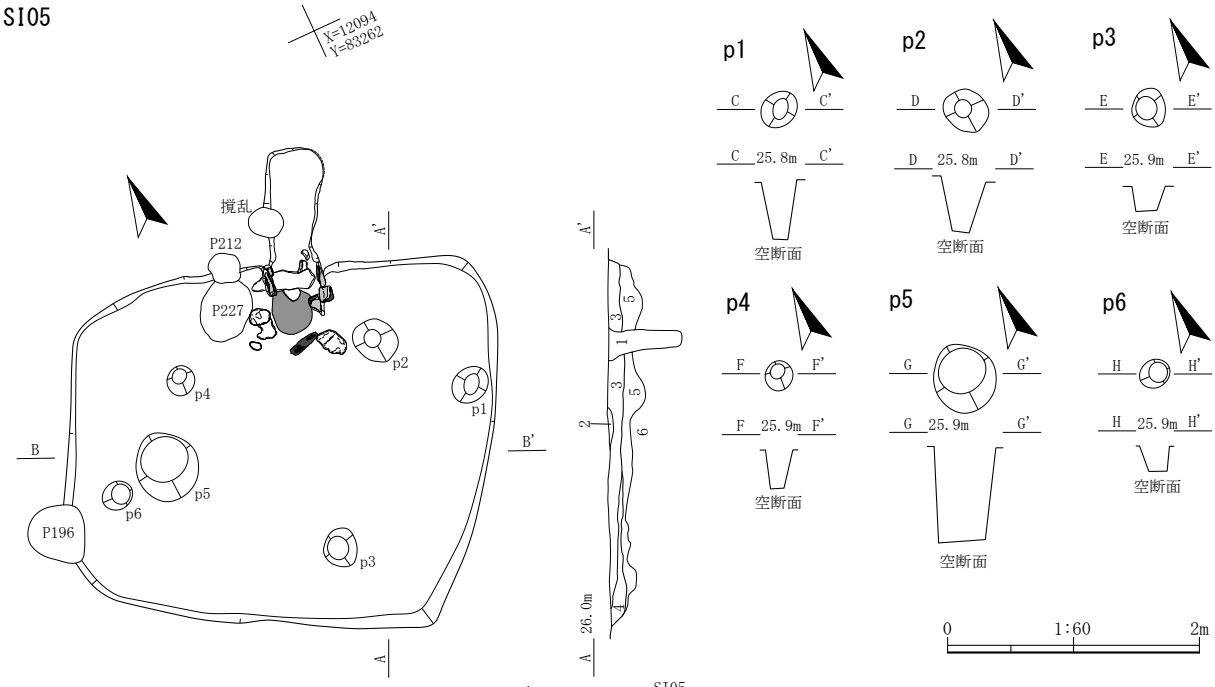
遺構内から、26・27 土師器坏、28 ～ 30 土師器甕、31 須恵器大甕、75 ～ 77 羽口、83 金床石が出土し掲載した。床面から出土した遺物と、埋土上位に確認した To-a テフラの堆積状況から、平安時代中期の９世紀前半に所属すると考えられる。

SI05 竪穴住居跡（第 32 図、写真図版 34）

南調査区南西側の X＝12094・Y＝83262 付近に位置する。遺構西側で P196・212・227 と重複してお

り、本遺構が古い。また、遺構内としているが、断面観察からｐ２・５も本遺構より新しい柱穴状ピットである。規模・形状は、3.38×2.94 mの隅丸方形を呈する。床面は貼床が施されており、ほぼ平坦に作られている。貼床は、北側がやや深めに掘り込まれた掘り方に、層厚は 0.1 ～ 0.2 mで施されている。遺構の残存は検出面から浅く、北壁 0.1 m、南壁 0.12 m、東壁 0.08 m、西壁 0.12 mで、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて５層で構成される。埋土

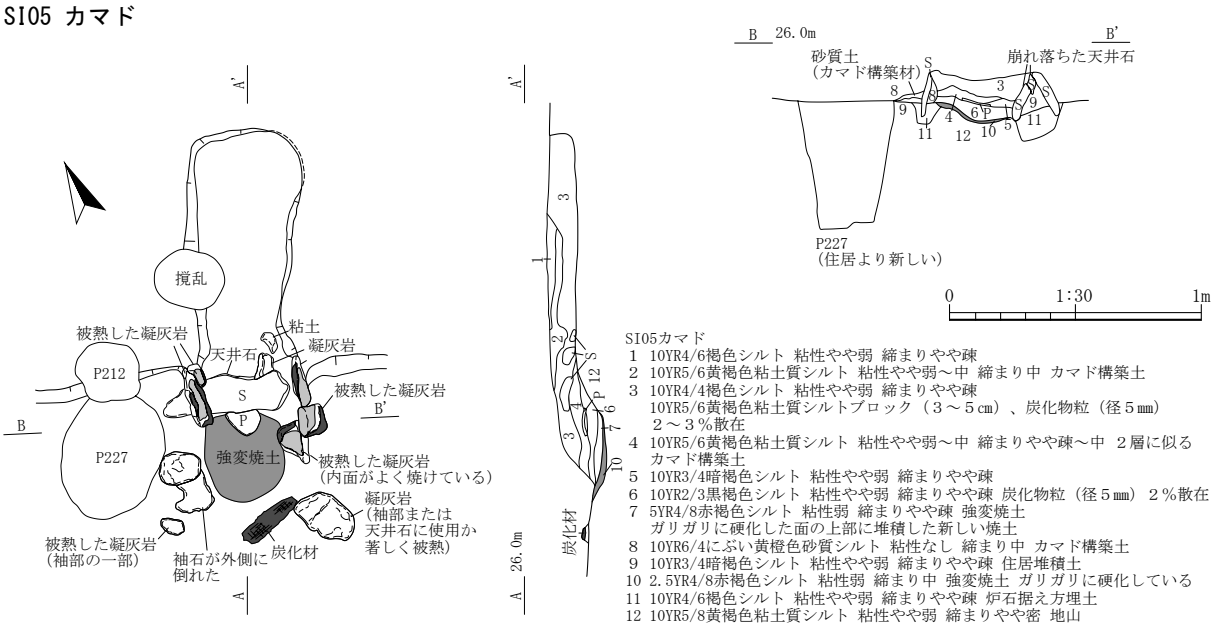
SI05



SI05
1　10YR3/4暗褐色砂質シルト　粘性弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色シルトブロック、10YR2/3黒褐色シルトブロック（５～10cm）全体に散在
埋め戻し土（新しいピット）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎～中
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
炭化物粒（径５㎜）１～２％散在
4　10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まり中
全体に10YR3/4暗褐色も混じって濁っている　流入土
5　10YR5/6黄褐色～10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まり中　貼床
6　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性中　締まりやや密　地山

SI05 p1～6
注記なし

SI05 カマド



SI05カマド
1　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まり中　カマド構築土
3　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（３～５cm）、炭化物粒（径５㎜）２～３％散在
4　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや疎～中　２層に似るカマド構築土
5　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
6　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（径５㎜）２％散在
7　5YR4/8赤褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎　強変焼土
ガリガリに硬化した面の上部に堆積した新しい焼土
8　10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト　粘性なし　締まり中　カマド構築土
9　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　住居堆積土
10　2.5YR4/8赤褐色シルト　粘性弱　締まり中　強変焼土　ガリガリに硬化している
11　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炉石据え方埋土
12　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

第 32 図　SI05 竪穴住居跡

上位に To-a テフラが二次堆積していた可能性があるが、表土剥ぎで失われている。床面に、ｐ１～６の柱穴状ピット６基を確認した。このうち、ｐ２・５は前述の通り本遺構より新しい。よって、本遺構に伴う柱穴状ピットは、ｐ１（深さ 0.45 m）、ｐ３（深さ 0.2 m）、ｐ４（深さ 0.3 m）、ｐ６（深さ 0.2 m）の４個である。北壁の中央にカマド１基を検出した。カマド袖部には壁から続く粘土の一部が残存しており、また芯材に用いていたと考えられる礫は元位置を留めた状態で出土した。また、袖石に置くように据えられていたと見られる天井石も残存しており、煙道側は折れてカマド内に、焚き口側は南側に散在していた。燃焼部の規模・形状は、0.32×0.35 mの不整円形で、やや掘り窪んだ形をしている。赤褐色に強く被熱しており、深さ１～２㎝まで影響している。煙道は、燃焼面からやや上がりながら煙出しまで延びており、急斜度に立ち上がっている。煙道の規模は、1.1×0.45 mで、検出面から浅いが２層に天井崩落土が堆積していることから、刳り抜き式の煙道であったと考えられる。カマド燃焼部付近から、32 土師器甕、33 土師器壺が出土した。これらのカマド出土遺物から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

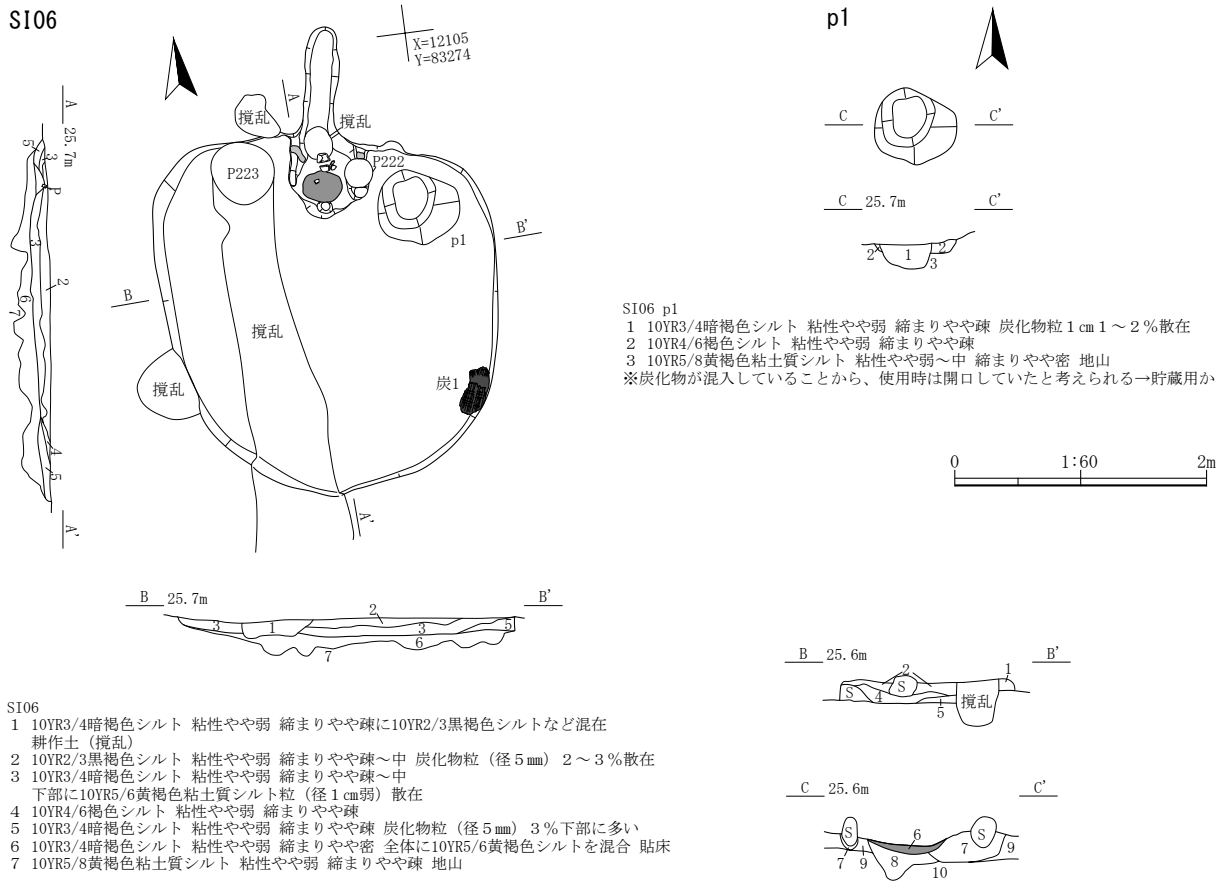
SI06 竪穴住居跡（第 33 図、写真図版 35）

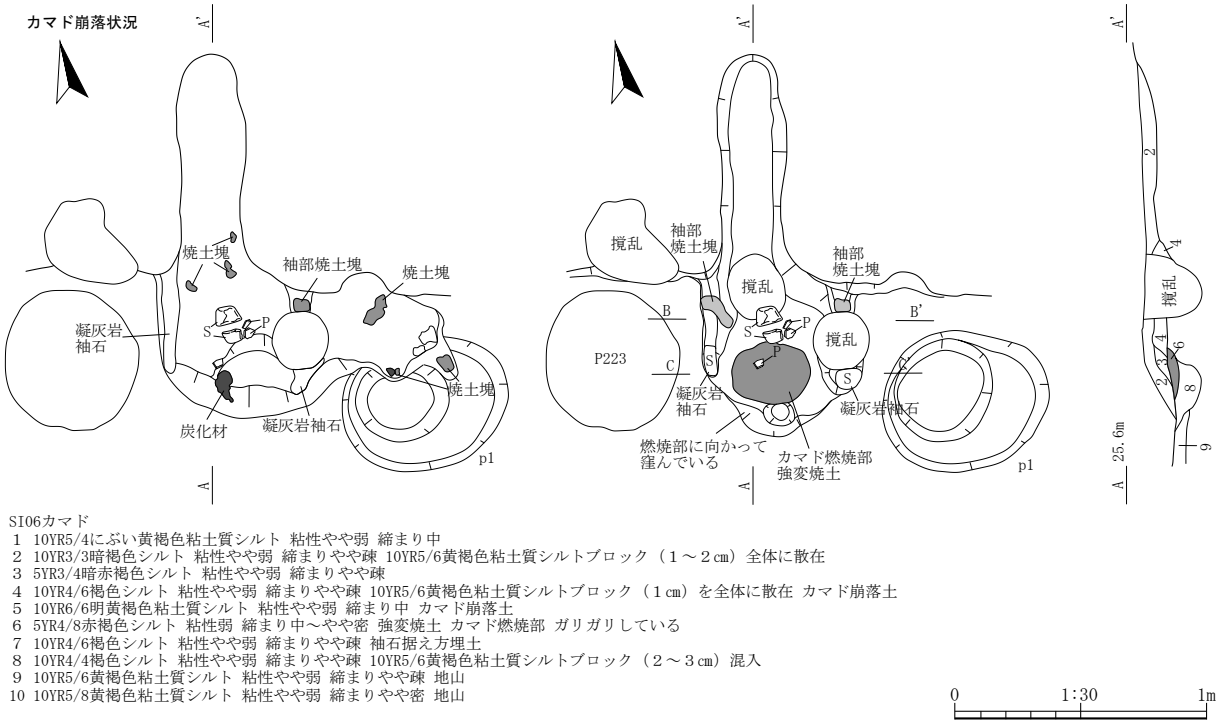
南調査区中央南側の X＝12105・Y＝83274 付近に位置する。カマド付近を P222・223 に切られており、本遺構が古い。また、南北に走る耕作による撹乱にも切られている。規模・形状は、2.8×2.7 mの不整円形に近い隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、ほぼ平坦に作られている。貼床は、西側が浅く、東側に向かってやや深めに掘り込まれた掘り方に、層厚は 0.1 ～ 0.15 mで施されている。遺構の残存は検出面から浅く、北壁 0.08 m、南壁 0.05 m、東壁 0.11 m、西壁 0.06 mで、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて６層で構成される。埋土上位に To-a テフラが二次堆積していた可能性があるが、表土剥ぎで失われている。カマド東側の床面に、ｐ１貯蔵穴を１基確認した。0.65×0.57 mの不整円形で、深さは 0.18 mである。北壁の中央にカマド１基を検出した。カマド袖部は壁から直線的に延びており、凝灰岩に粘土を貼り付けて構築されている。袖部の長さは約 0.4 mで、カマド天井部を構成していた焼土塊が認められる。燃焼部はやや窪んだ底面にあり、0.3×0.24 mの楕円形に赤褐色の強い被熱痕跡が見られる。煙道は燃焼部から直線的に延びており、1.1×0.28 mの規模で徐々に立ち上がる断面形状である。煙道埋土中に黄褐色粘土ブロックを多く混入することから、刳り抜き式の煙道の可能性がある。

埋土から 34 土師器坏、カマド燃焼面直上から 35 土師器甕を出土し掲載した。これらの出土遺物から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

SI07 竪穴住居跡（第 34 図・第 35 図・第 36 図、写真図版 36 ～ 38）

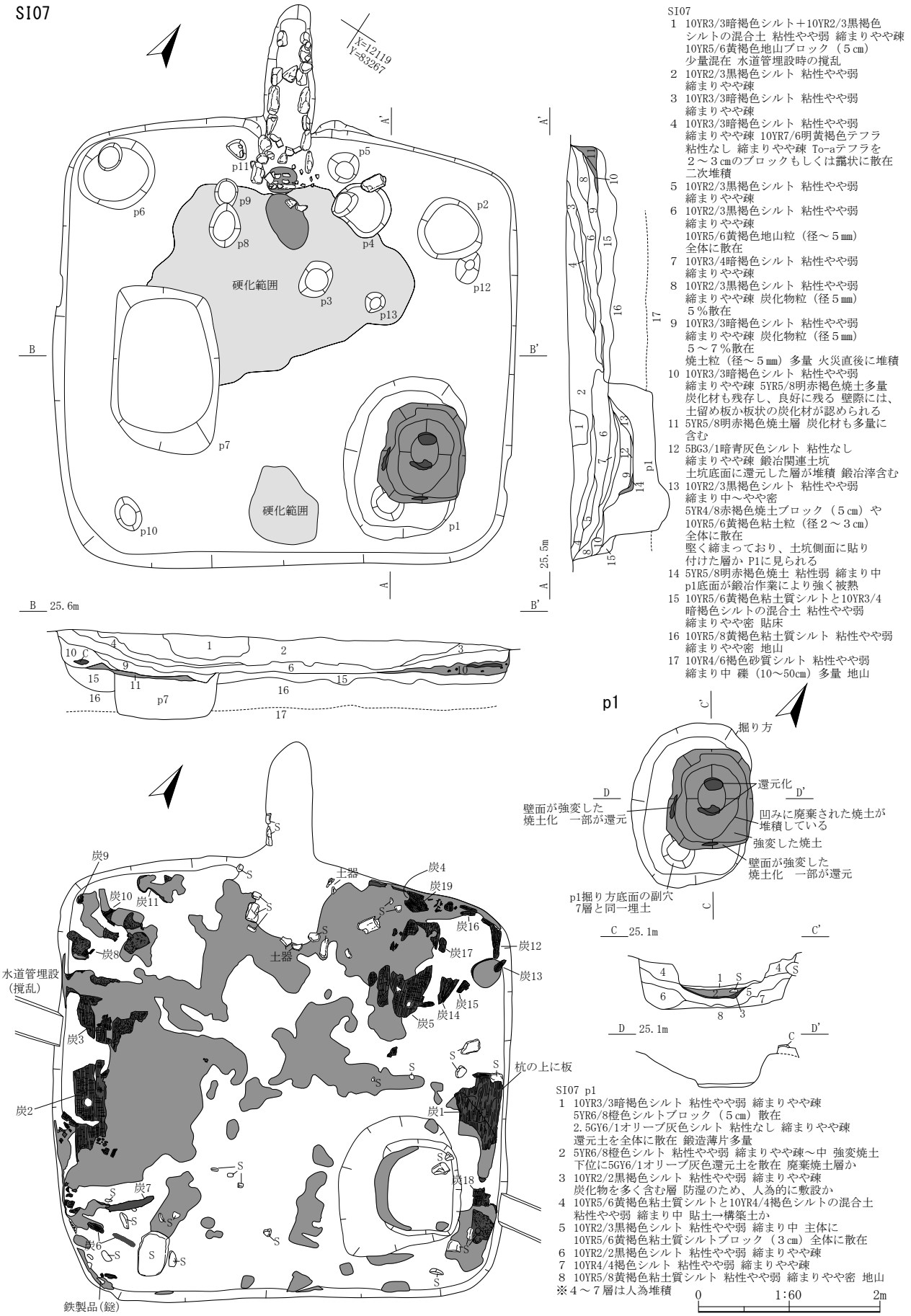
南調査区中央の X＝12119・Y＝83267 付近に位置する。遺構中央付近を東西に走る上水道管に切られて撹乱されている。規模・形状は、5.1×4.95 mの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、ほぼ平坦に作られている。貼床は、西側から北側にかけてがやや深めに掘り込まれた掘り方に、層厚は 0.05 ～ 0.25 mで施されている。遺構の残存は良好で、北壁 0.3 m、南壁 0.35 m、東壁 0.28 m、西壁 0.41 mあり、外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて 15 層で構成される。埋土中位の４層中には、明黄褐色の To-a テフラが二次堆積している。また、床面直上の９～11 層には、焼土や炭化物を多量に含む層が堆積していることから、焼失直後に堆積した層と分かる。第 34 図下に焼土・炭化物の出土状況を示した。焼土は床面の広い範囲に認められ、西壁や東壁際からは壁に設置していたと考えられる炭化した板片が出土している。特に東壁際から出土した炭１は杭



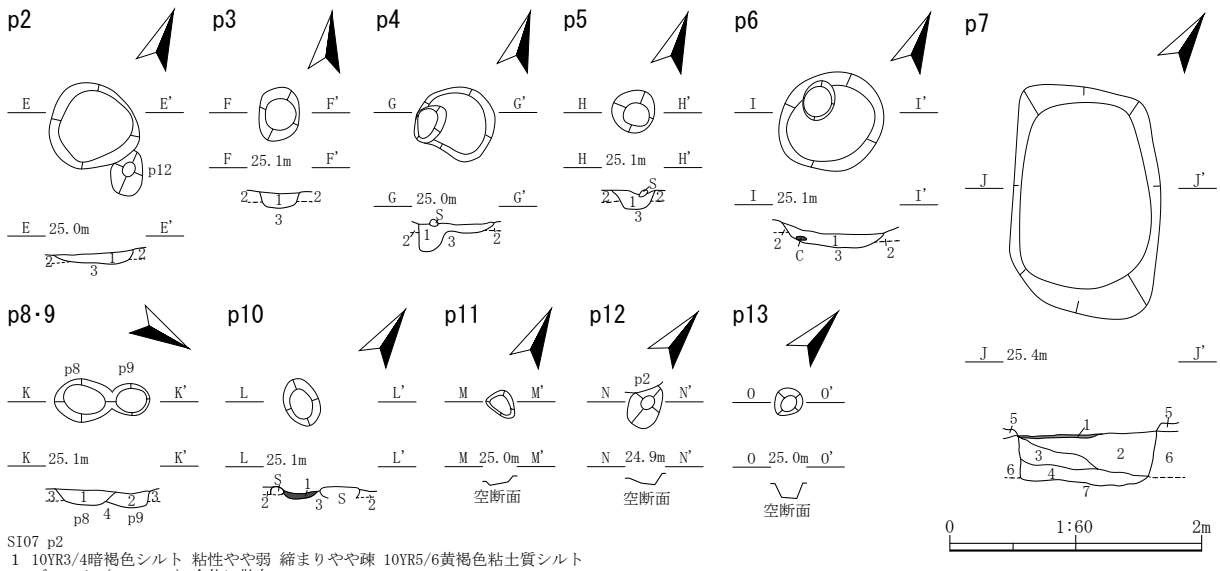


第 33 図　SI06 竪穴住居跡

の上に板が認められることから、杭によって土留めに壁際に立てた板を押さえていた状況が見て取れる。また、炭５など床面中央にも炭化した板材が見られることから、上屋に使用していたものが焼け



第34図　SI07 竪穴住居跡（1）



SI07 p2
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（1～2㎝）全体に散在
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p3
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（1～2㎝）散在
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p4
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p5
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 遺物多い
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p6
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部中心に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（1㎝）、炭化物（2㎝）少量散在
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p7
1 5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 強変焼土 焼失時に床面が被熱した層 元は貼床の一部と考えられる
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（5㎝）全体に散在
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックを散在
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
6 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
※2・3層は人為堆積。掘ってすぐに埋め戻されたか。

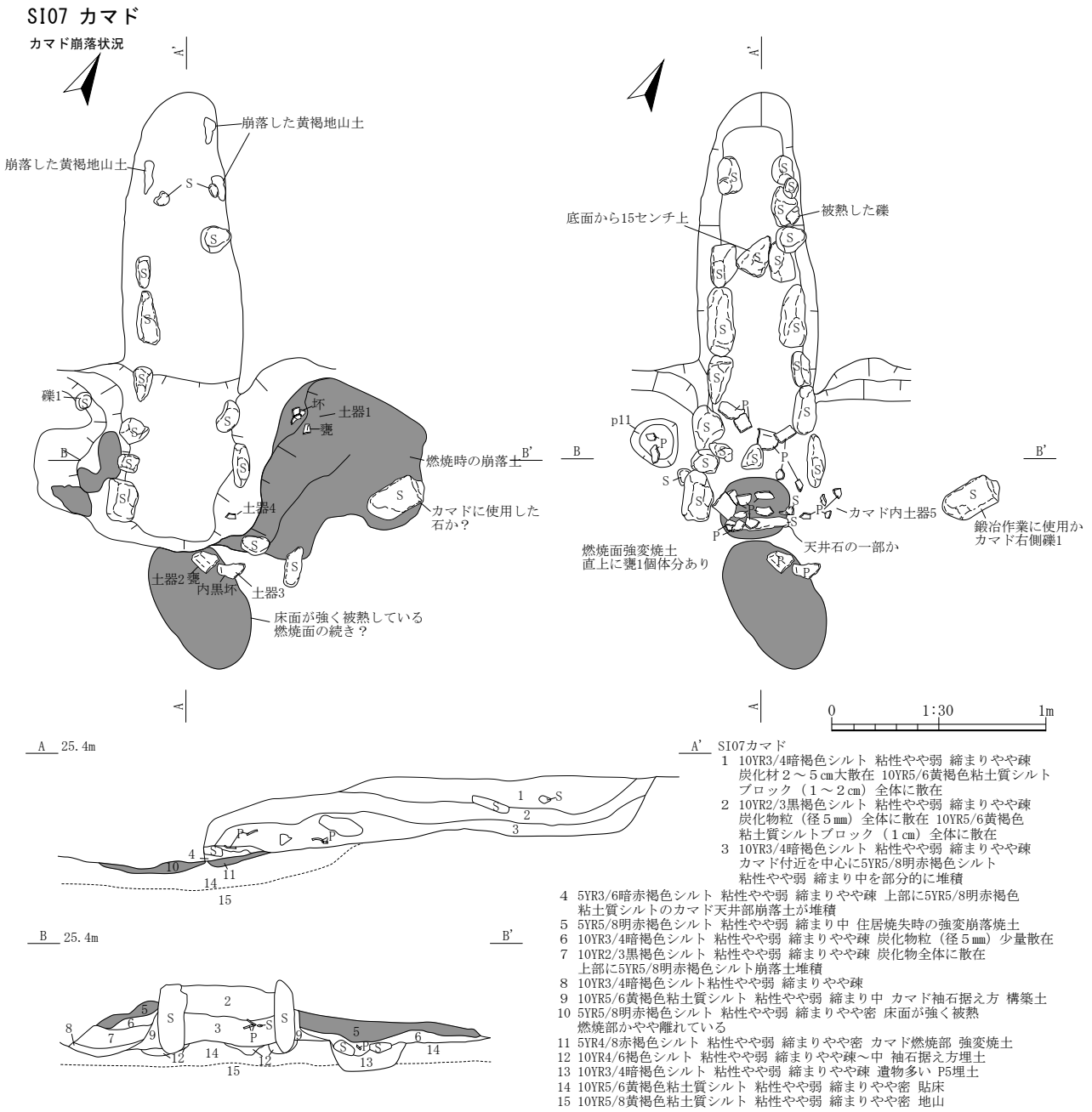
SI07 p8・9
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトを露状に堆積 炭化物粒（径5㎜）1％含む
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径5㎜）1％含む
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
4 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p10
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI07 p11～13
注記なし

第35図　SI07 竪穴住居跡（2）

落ちた可能性もある。出土した炭化材の一部について樹種同定を実施したところ、炭1の杭はコナラ節、炭1の板はクリ、いずれも板材の炭2・3・5はクリ、壁際の杭と思われる炭12・16はコナラ節、焼け落ちた屋根材と見られる炭19はヨシ属の成果を得た。床面に、p1小鍛冶ピット、p2・6・7貯蔵穴、p3～5・8～13柱穴状ピット8個を確認した。主柱穴は位置から、p6（深さ0.35 m）、p10（深さ0.04 m）、p12（深さ0.05 m）の柱穴状ピット3個が想定される。p1小鍛冶ピットは、床面南東隅から見つかった。炉部分は中央東寄りの1.1×0.94 mの方形で、壁面・底面ともに強変焼土化している。底面中央には0.4×0.3 mの楕円形の範囲がオリーブ灰色に還元しており、この直上からは鍛造剝片が多量に出土した。橙色の強変焼土下には炭化物層があり、防湿の目的で人為的に敷設されたと見られる。1.8×1.35 m、深さは0.5 mの不整な長方形の掘り方が鍛冶炉の地下構造と考えられ、埋土4～7層は人為的に埋め戻されている。また、床面西側のp7もほぼ同形状の長方形を呈しており、規模は1.8×1.18 m、深さは0.4 mである。埋土上位は人為的な埋め戻しと見られることから、p1の前身として使用されたピットの可能性もある。北壁の中央にカマド1基を検出した。カマドは礫を芯材にする造りで、袖部から煙道部まで直線的に並べられている。カマドは礫の隙間を粘土で埋めていたと考えられ、壁から延びる袖基部は粘土で構築されている。袖部の長さは0.68 mで、燃焼面直上に礫片が散らばっており、天井石と見られる。燃焼部の規模・形状は、



第 36 図　SI07 竪穴住居跡（3）

0.34×0.28 mの楕円形に強く被熱しており、深さ３㎝まで影響している。また、燃焼部の南側に0.64×0.38 mの楕円形に床面が強く被熱しており、燃焼部の続きか、焼失時の影響と考えられる。煙道は、燃焼面からほぼ水平に延びており、煙出しで外傾しながら急斜度に立ち上がっている。煙道の規模は、1.4×0.56 mで煙出し部付近の底面はやや掘り込まれている。煙道部まで礫が並べられていることから、掘り込み式の煙道と考えられ、扁平礫や板材で天井を閉じていた可能性がある。

カマドや床面を中心に、36 須恵器坏、37 ～ 40 土師器甕、41・42 須恵器壺、80 ～ 82 磨石、84 台石、119・120 鉄鏃、123 鍋と考えられる不明鉄製品、１束になって見つかった 24 ～ 27 鎹、131 盤状木製品が出土し掲載した。84 は金床石として鍛冶作業に用いられた可能性がある。

また、床面から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、661calAD－694calAD（50.4％・1σ）の較正年代値を得ているが、土器の年代観と齟齬が生じている。

カマド・床面からの出土遺物と埋土中位に堆積したTo-aテフラ二次堆積層から、平安時代中期の９世紀前半に所属すると考えられる。

SI08 竪穴住居跡（第37図、写真図版39）

南調査区中央東側のX＝12127・Y＝83283付近に位置する。遺構北側でSK52と重複しており、本遺構が新しい。規模・形状は、3.23×3.34 mの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、床面中央のｐ４に掘り込まれているが、それ以外はほぼ平坦に作られている。貼床は掘り方が南側がやや深めに掘り込まれており、層厚0.1～0.18 mで施されている。遺構の残存は良好で、北壁0.35 m、南壁0.2 m、東壁0.17 m、西壁0.34 mである。壁は、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて10層で構成され、埋土上位の１層ににぶい黄橙色のTo-aテフラが二次堆積している。床面から、ｐ１貯蔵穴、ｐ２・３柱穴状ピット、ｐ４土坑を確認した。ｐ４は床面中央にあり、遺構西側が浅く、東側が深い形状で、規模は1.93×0.94 m、深さは0.4 mである。断面観察から別遺構の重複も考慮したが、１層にTo-aテフラが堆積していることからもこれより古い時期に構築されたと考えられる。北壁の中央やや東寄りにカマド１基を確認した。カマドの袖基部は壁から続いており造り付けと考えられ、これに袖石の礫が据えられていたと考えられるが既に抜き取られていた。燃焼部は一段掘り窪められており、0.46×0.45 mの不整形で深さ４㎝まで明赤褐色に影響している。煙道は燃焼面からやや下がりながら延びており、煙出し部直下がピット状に窪んでいる。規模は1.3×0.38 mの刳り抜き式の煙道で、廃絶後に煙道天井の一部が崩落して堆積している。

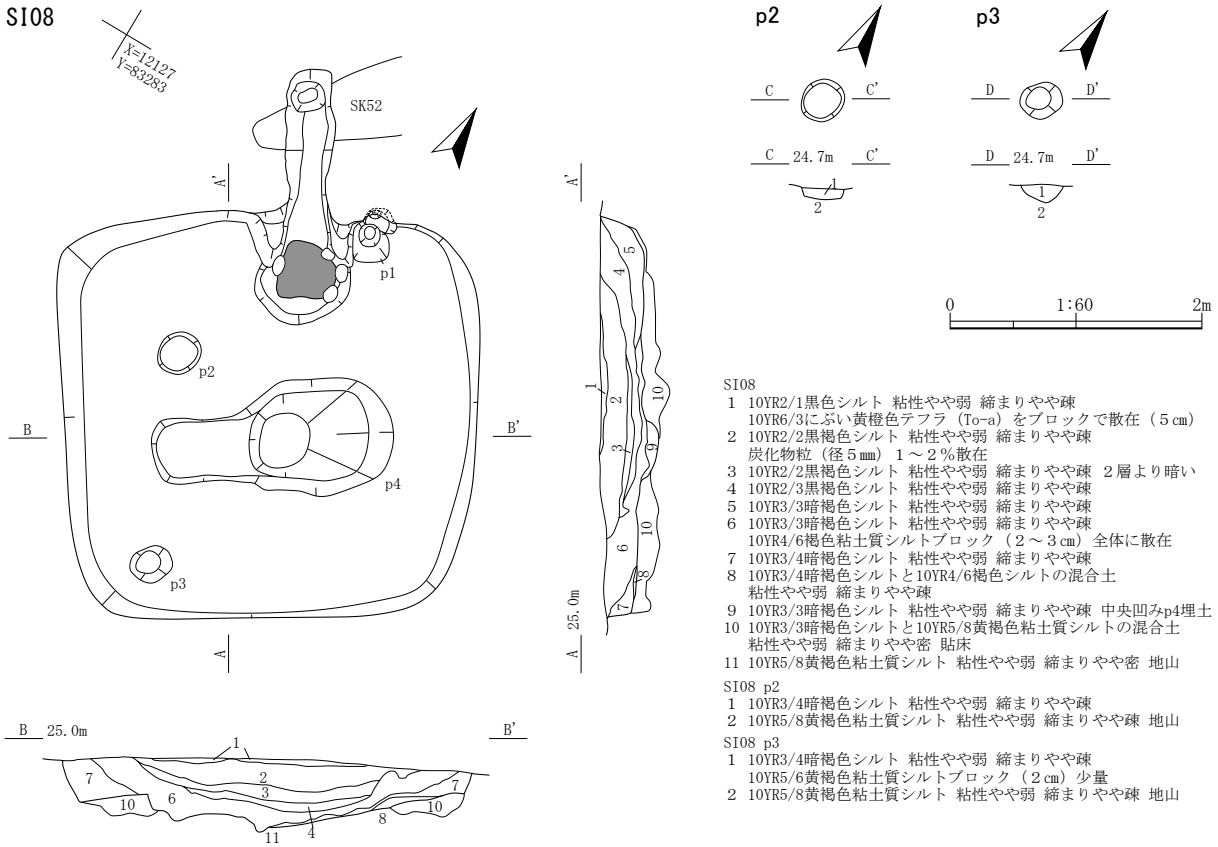
出土遺物は小片のみで時期を特定することが難しいが、埋土上位ににぶい黄橙色のTo-aテフラが二次堆積していることと他遺構の堆積状況から、古墳時代後期～末に推定される。

SI09 竪穴住居跡（第38図・第39図、写真図版40・41）

南調査区中央東端のX＝12117・Y＝83294付近に位置する。遺構北側と東側は調査区外へと延びている。また、遺構全体が溝状の撹乱に切られている。規模・形状は、残存値で（4.5）×（3.7）mの隅丸方形を呈すると考えられる。床面西側に土坑があり、これに切られているがほぼ平坦に貼床が施されている。遺構の残存は良好で、南壁0.45 m、西壁0.48 m、いずれも外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて19層で構成される。埋土中位の６層下位に橙色のTo-aテフラが部分的に二次堆積している。また、６・７・11層中は炭化物、10・11層は焼土でほぼ構成され、床面付近には特に多く堆積している。第38図下に焼土・炭化物の出土状況を示したが、床面に広く分布している。ただし、ｐ４上部には認められないことから見ても、ｐ４は焼失・廃絶後まもなく掘削された遺構と考えられる。床面に広がる多量の焼土・炭化物の状況から、焼失した可能性が高い。出土した炭化材の一部について樹種同定を実施したところ、炭１の柱状はコナラ節、炭２～４の板材はクリの成果を得ている。床面東側の調査区際から、カマドの一部を確認した。煙道などは調査区外にあり、カマド袖部の一部と燃焼面を検出した。カマド袖部は礫を芯材としており、粘土で隙間を埋めていたと考えられる。燃焼部の焚き口側は一段掘り窪められており、燃焼面の規模は0.4×0.4 mの不整円形で深さ３㎝まで赤褐色に影響している。カマド北側の床面には天井石に用いていたと考えられる長方形礫が床面から見つかっている。

出土遺物は少なく、埋土中位から出土した43土師器甕を掲載した。

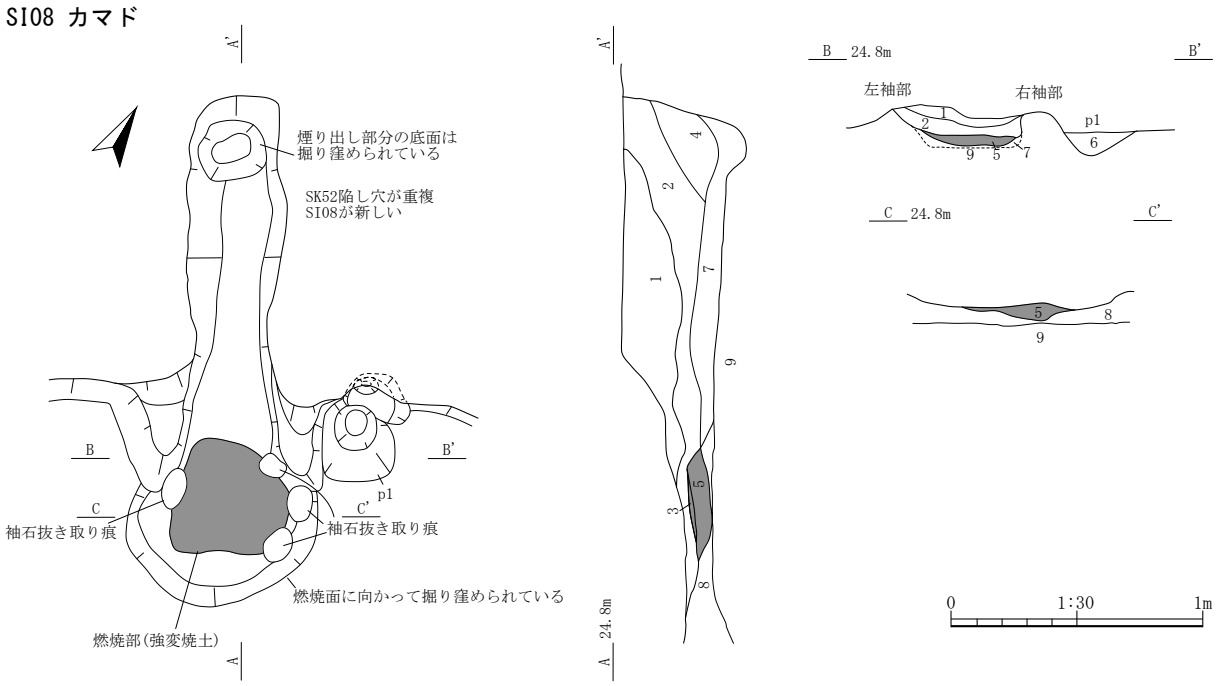
また、床面から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、789calAD－872calAD（61.4％・1σ）の較正年代値を得ており、土器の年代観と概ね調和的である。



SI08
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR6/3にぶい黄橙色テフラ（To-a）をブロックで散在（５cm）
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　炭化物粒（径５mm）１～２％散在
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　２層より暗い
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
6　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR4/6褐色粘土質シルトブロック（２～３cm）全体に散在
7　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
8　10YR3/4暗褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土
　粘性やや弱　締まりやや疎
9　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　中央凹みp4埋土
10　10YR3/3暗褐色シルトと10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土
　粘性やや弱　締まりやや密　貼床
11　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI08 p2
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　地山

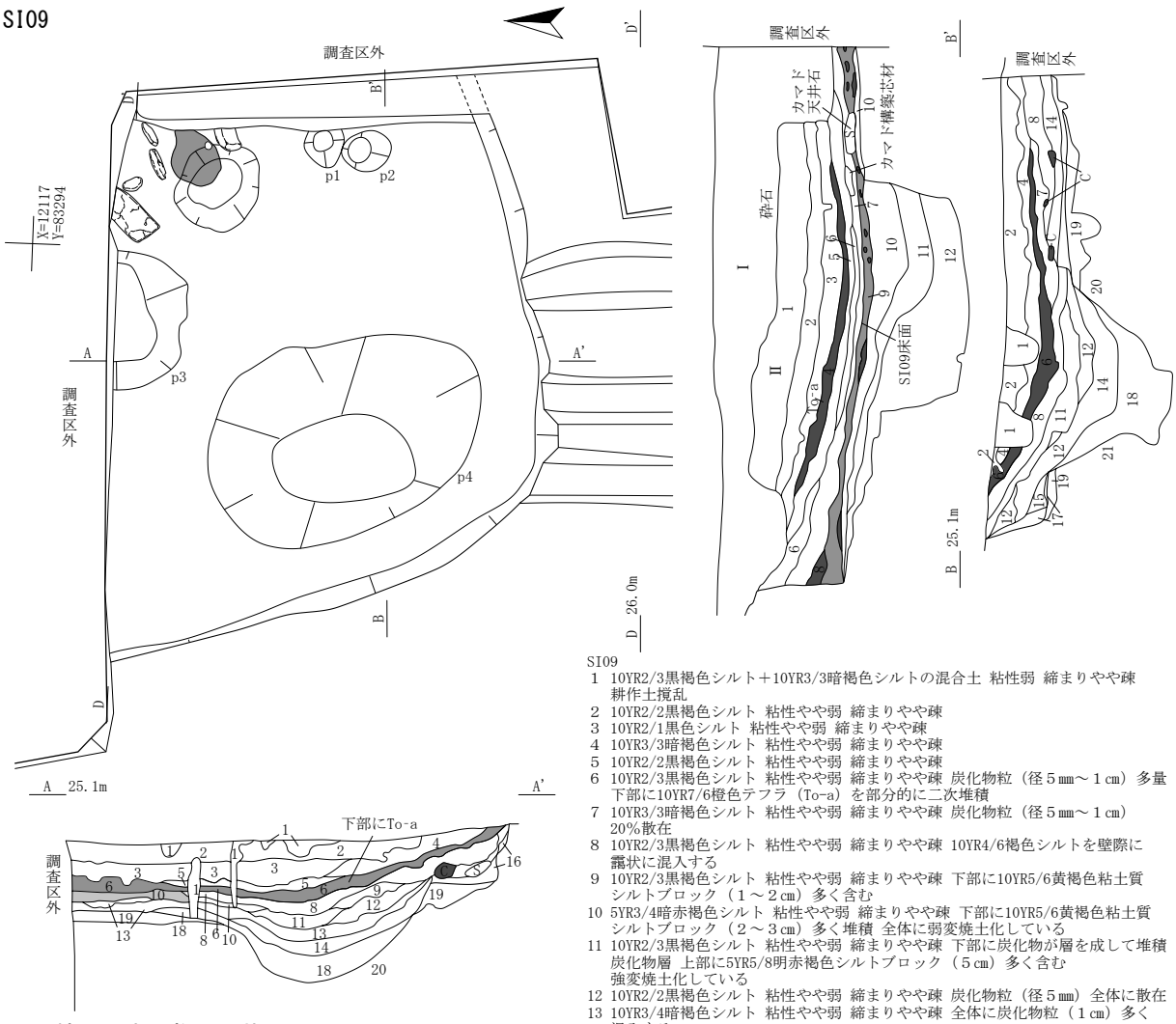
SI08 p3
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）少量
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　地山



SI08カマド
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（５～10 cm）を全体に散在　掘り込み式煙道の天井部分が崩落した層
2　5YR2/4極暗赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　5YR4/8赤褐色シルトブロック（５cm）を上部中心に散在　廃絶後の煙道天井部分崩落層と初期に堆積した土
3　5YR4/6赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　強変焼土　使用時からの堆積層＋影響層
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　廃絶後の流入土
5　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱～中　締まりやや密　強変焼土　３層よりも明るい
6　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）少量　カマド右側p1堆積土
7　10YR4/4褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土　粘性やや弱　締まりやや疎
8　10YR3/4暗褐色シルトと10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土　粘性やや弱　締まりやや密　地山
9　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

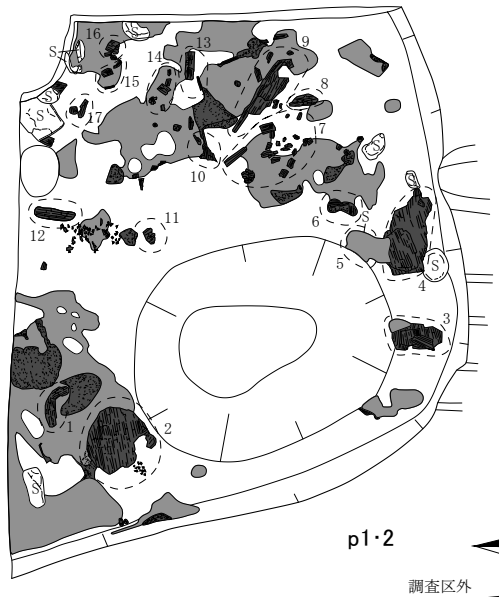
第 37 図　SI08 竪穴住居跡

SI09



SI09 焼土・炭化物出土状況

※破線番号=炭化材取り上げ番号



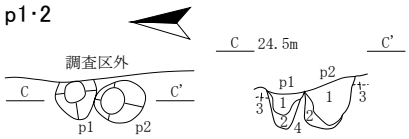
SI09

1　10YR2/3黒褐色シルト＋10YR3/3暗褐色シルトの混合土 粘性弱 締まりやや疎 耕作土撹乱
2　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜～１㎝）多量 下部に10YR7/6橙色テフラ（To-a）を部分的に二次堆積
7　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜～１㎝）20%散在
8　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/6褐色シルトを壁際に露状に混入する
9　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（１～２㎝）多く含む
10　5YR3/4暗赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２～３㎝）多く堆積 全体に弱変焼土化している
11　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に炭化物が層を成して堆積 炭化物層 上部に5YR5/8明赤褐色シルトブロック（５㎝）多く含む 強変焼土化している
12　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜）全体に散在
13　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 全体に炭化物粒（１㎝）多く混入する
14　10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜）全体に散在
15　10YR2/3黒褐色シルト＋10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土
16　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に炭化材を多量に含む
17　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土
18　10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 流入した地山土
19　10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
20　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SI09北調査区際

1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜～１㎝）多量 下部に10YR7/6橙色テフラ（To-a）を部分的に二次堆積
5　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/6褐色シルトを壁際に露状に混入する
6　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックを全体に散在 炭化物粒多い
7　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックを全体に散在 ６層よりも炭化物粒多い
8　10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土 炭化物混入
9　5YR4/8赤褐色シルトや10YR5/6黄褐色粘土質シルトなど混在 焼土層 炭化物多量混入
10　10YR3/4暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（３～８㎝）の混合土 粘性やや弱 締まりやや密 地山
11　10YR3/3暗褐色シルト主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを大きなブロックで混入 粘性やや弱 締まりやや疎 人為的な埋め戻し土 P3埋土
12　10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山

※P3はSI09よりも古い土坑。貼床を敷設する際は開口していたが、敷設時に同時に埋め戻された。遺物の出土なし。



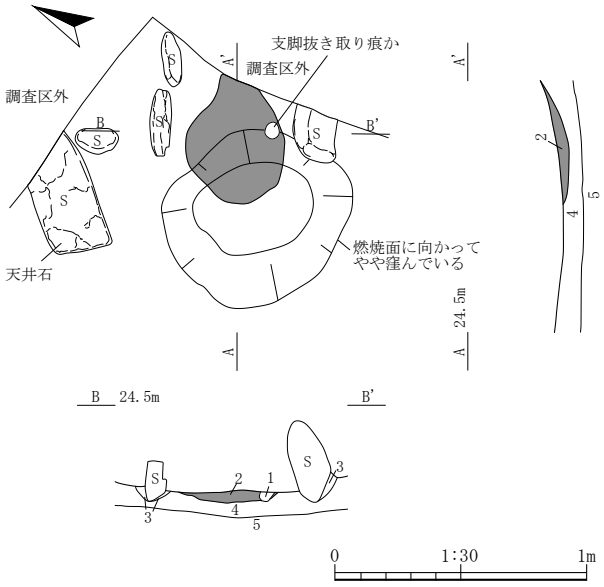
SI09 p1・2

1　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（１～２㎝）全体に散在
2　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR3/4暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密
4　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第38図　SI09 竪穴住居跡（1）

SI09 カマド



SI09カマド
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　支脚抜き取り痕か
2　5YR4/8赤褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　強変焼土　燃焼部
3　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　袖石据え方埋土
4　10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土　粘性やや弱
　締まりやや密　貼床
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

第 39 図　SI09 竪穴住居跡（２）

出土遺物と、埋土中位に堆積する橙色の To-a テフラ二次堆積層、放射性炭素年代測定値から、平安時代中期の９世紀前半に所属すると考えられる。

SI10 竪穴住居跡（第 40･41 図､写真図版 42）

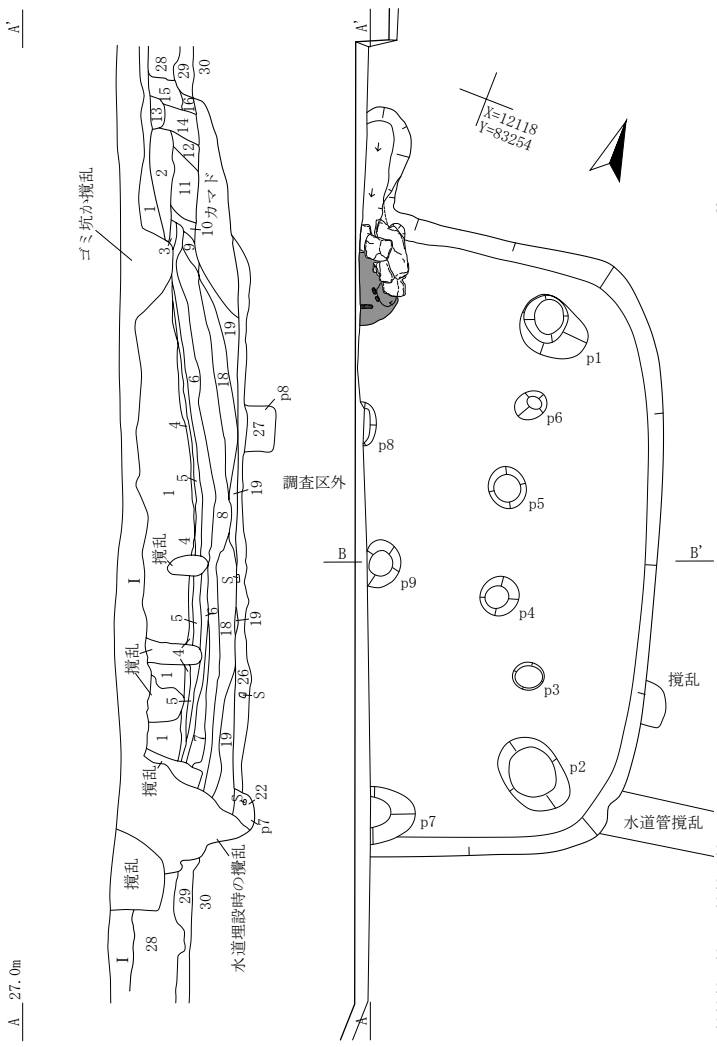
南調査区中央西端の X＝12118・Y＝83254 付近に位置する。調査区西壁にかかって検出しており、遺構西半は調査区外へと続いている。遺構南端で、東西に走る現代の上水道管に切られている。規模・形状は、残存値で 5.1×(2.4) m の隅丸方形を呈すると考えられる。床面には貼床が施されており、層厚 0.05 ～ 0.2 m の掘り方をほぼ平坦に整地している。遺構の残存は、西側が調査区外となっているがそれ以外は良好で、北壁 0.55 m、南壁 0.43 m、東壁 0.24 m である。壁は、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて 26 層で構成され、調査区境界のため表土剥ぎで失われた層位も残存している。埋土上位の４・５・７層には、にぶい黄橙色～黄橙色の To-a テフラが二次堆積している。床面から、ｐ１～９の柱穴状ピットを９個確認した。このうち、ｐ８は貼床が敷設される以前の遺構である。主柱穴は、ｐ１・２と思われるが、いずれも浅い。北壁の中央にカマド１基を確認した。カマドはちょうど調査区境界にかかって検出しており、カマド東半のみ確認できた。カマド袖部は礫を芯材としており、袖石がカマド内側へ倒れ込むようにして見つかった。袖石の上には天井石が直接渡されていたと見られるが、一部を残して燃焼面上に崩落して検出した。燃焼部の規模・形状は、西半が調査区外となるが 0.58×(0.3) m の略円形と見られる。赤褐色に強変しており、深さ３㎝まで被熱している。煙道は燃焼面からやや上がりながら延びており、煙出しへ向かって外傾しながら緩やかに立ち上がっている。煙道の規模は残存値で 1.2×0.36 m の刳り抜き式の煙道で、廃絶後に煙道天井の一部が崩落して堆積している。

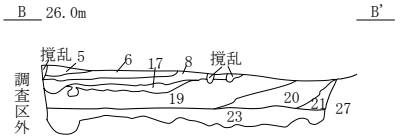
出土遺物は少ないが、遺構埋土を中心に 44 土師器甕、45 土師器甑の２点を出土し掲載した。埋土出土遺物のみで時期を特定することが難しいが、埋土上位ににぶい黄橙色の To-a テフラが二次堆積していることと他遺構の堆積状況から、古墳時代後期～末に推定される。

SI11 竪穴住居跡（第 42 図、写真図版 43）

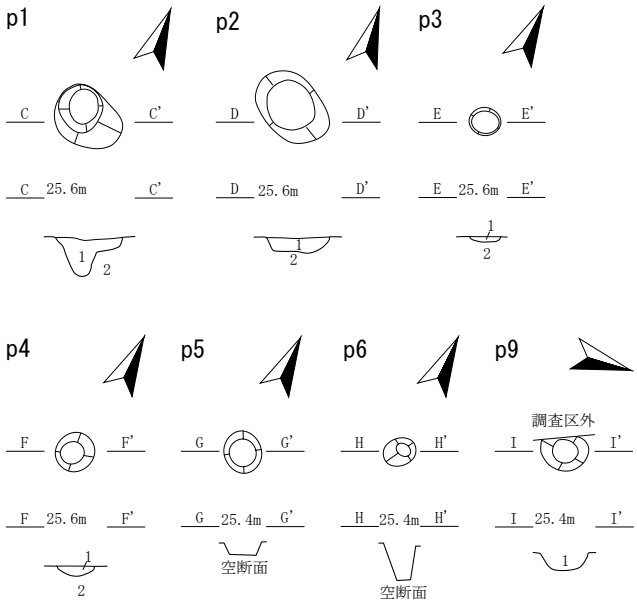
南調査区南東側の X＝12093・Y＝83293 付近に位置する。遺構の一部を撹乱によって切られている。規模・形状は、3.55×3.0 m の東西辺がやや長い隅丸長方形を呈する。床面には貼床が施されており、ほぼ平坦に構築されている。掘り方は、遺構中央が浅く、壁際がやや深く掘り込まれており、層厚 0.04 ～ 0.12 m に施されている。遺構の残存は検出面から浅く、北壁 0.1 m、南壁 0.08 m、東壁 0.07 m、西壁 0.13 m で、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて９層で構成される。埋土上位に To-a テフラが二次堆積していた可能性があるが、表土剥ぎで失われている。カマド東側の床面に、ｐ１・２貯蔵穴を確認した。ｐ１は南東隅にあり、0.65×0.42 m の不

SI10





SI10
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒を全体に散在 カマド崩落土
3 ２層よりも黄褐色分が多く、黄色みが強い カマド崩落土
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR8/8黄橙色テフラ（粒径は細かく粉状）を２～３cm大のブロックで全体に混入する
5 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR7/4にぶい黄橙色テフラ（４層と同じく粒径は極細かく、粉状）を靄状に散在→To-aテフラか
6 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR7/4にぶい黄橙色テフラ（５層とほぼ同じ）をごく僅かに混入（１～２%）
8 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山粒を筋状に含む→崩落のため
9 10YR5/6黄褐色～10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 カマド上部の崩落土もしくは壁面崩落土
10 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土
11 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色地山粒を靄状に含む カマド煙道崩落土
12 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色地山粒を全体に含む（11層より多い） カマド煙道崩落土層
13 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 カマド煙出部埋土 左側は２層に切られる
14 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山粒を全体に含む カマド煙出部埋土 左側は２・12層に切られる
15 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 カマド煙出部埋土
16 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
17 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山粒を全体に含む
18 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山ブロック（２～３cm）も多く含む
19 10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（１cm以下）１～２%散在
20 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色地山粒を全体に含む
21 20層とほぼ同じだが、地山ブロックを多く含む 壁面崩落土
22 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径１～２cm）２%散在 底面に10YR7/6明黄褐色粘土ブロック堆積 p7埋土
23 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 焼土・炭化物粒（１cm）全体に散在
24 5YR4/8赤褐色シルト 粘性弱 締まりやや密 強変焼土 燃焼部
25 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 袖石据え方埋土
26 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
27 10YR4/4褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 p8埋土 貼床以前に掘られたピット
28 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 基層
29 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山漸移層
30 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山



SI10 p1
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色地山粒（径２cm）全体に散在
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

SI10 p2
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径１cm）２%散在
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

SI10 p3
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質地山ブロック（２cm）少量散在
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

SI10 p4
1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質地山ブロック（２cm）少量散在
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

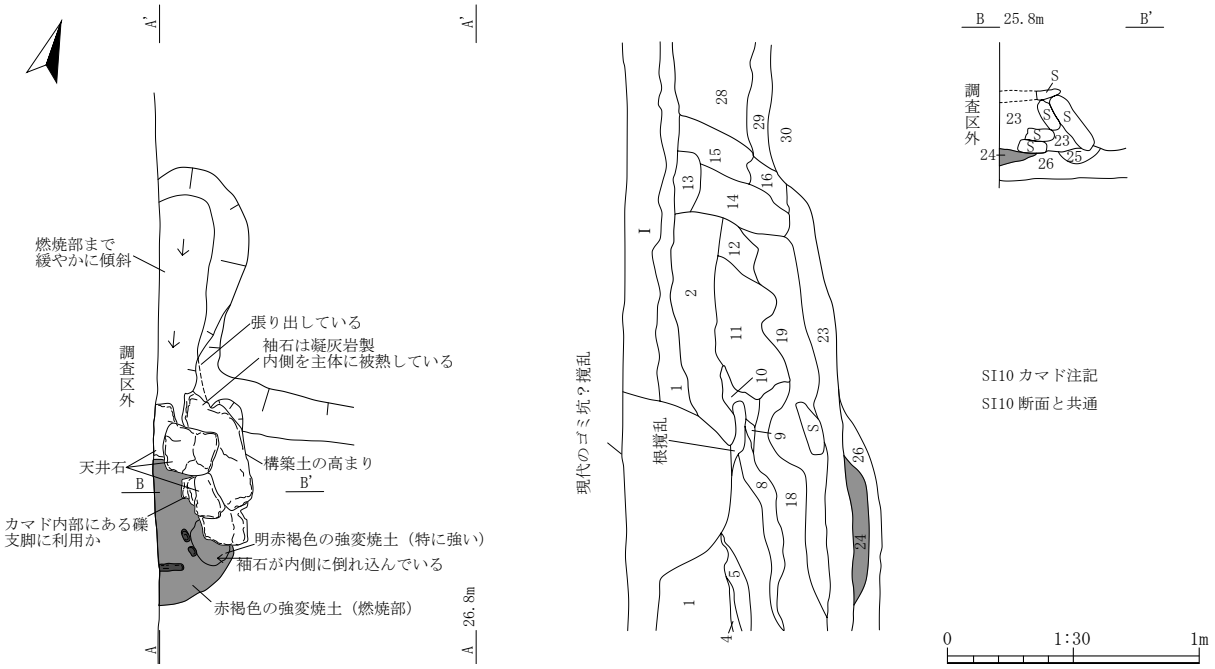
SI10 p5･6
注記なし

SI10 p9
1 10YR4/4褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 貼床以前に掘られたピット
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第40図　SI10 竪穴住居跡（1）

SI10カマド



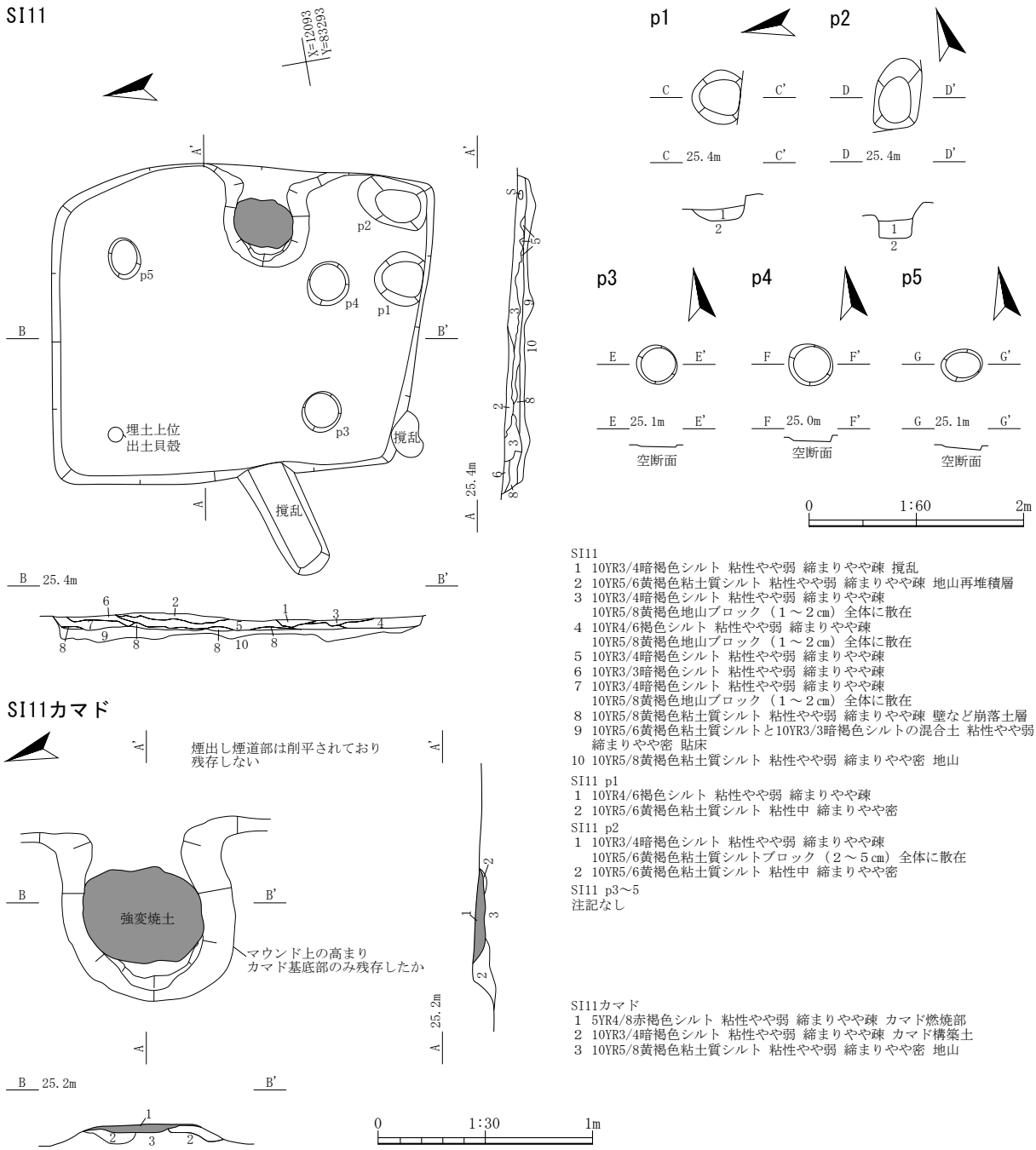
第 41 図　SI10 竪穴住居跡（２）

整な楕円形で、深さは 0.17 ｍである。また、ｐ２はｐ１の西隣にあり、0.5×0.45 ｍの円形で、深さは 0.12 ｍである。ｐ３～５は主柱穴と見られるが、非常に浅い。東壁の中央やや南寄りにカマド１基を確認した。遺構を地山黄褐色粘土質シルト直上で検出したため、遺構をやや掘り下げて確認している。このため、煙道は掘り下げによって失われ、燃焼部が露出した状態で確認した。燃焼部は、マウンド状の高まりの上にあり、おそらくカマド基底部のみが残存したと見られる。燃焼部の規模は、0.55×0.42 ｍの楕円形で赤褐色に深さ４㎝まで強く被熱している。

出土遺物は少ないが、南東隅の遺構埋土から 46 土師器甕が一括で出土し掲載した。また、遺構北西隅の埋土上位から貝殻を一括で出土した。おそらく遺構廃絶後に投棄されたものと考えられる。この貝類について同定を実施したところ、ウニ類の棘や殻、ヒメコザラ（シボリガイ型）、エゾアワビ、チシマフジツボが確認できた。これら出土遺物の特徴から、古墳時代後期～末に推定される。

SI12 竪穴住居跡（第 43 図・第 44 図、写真図版 44・45）

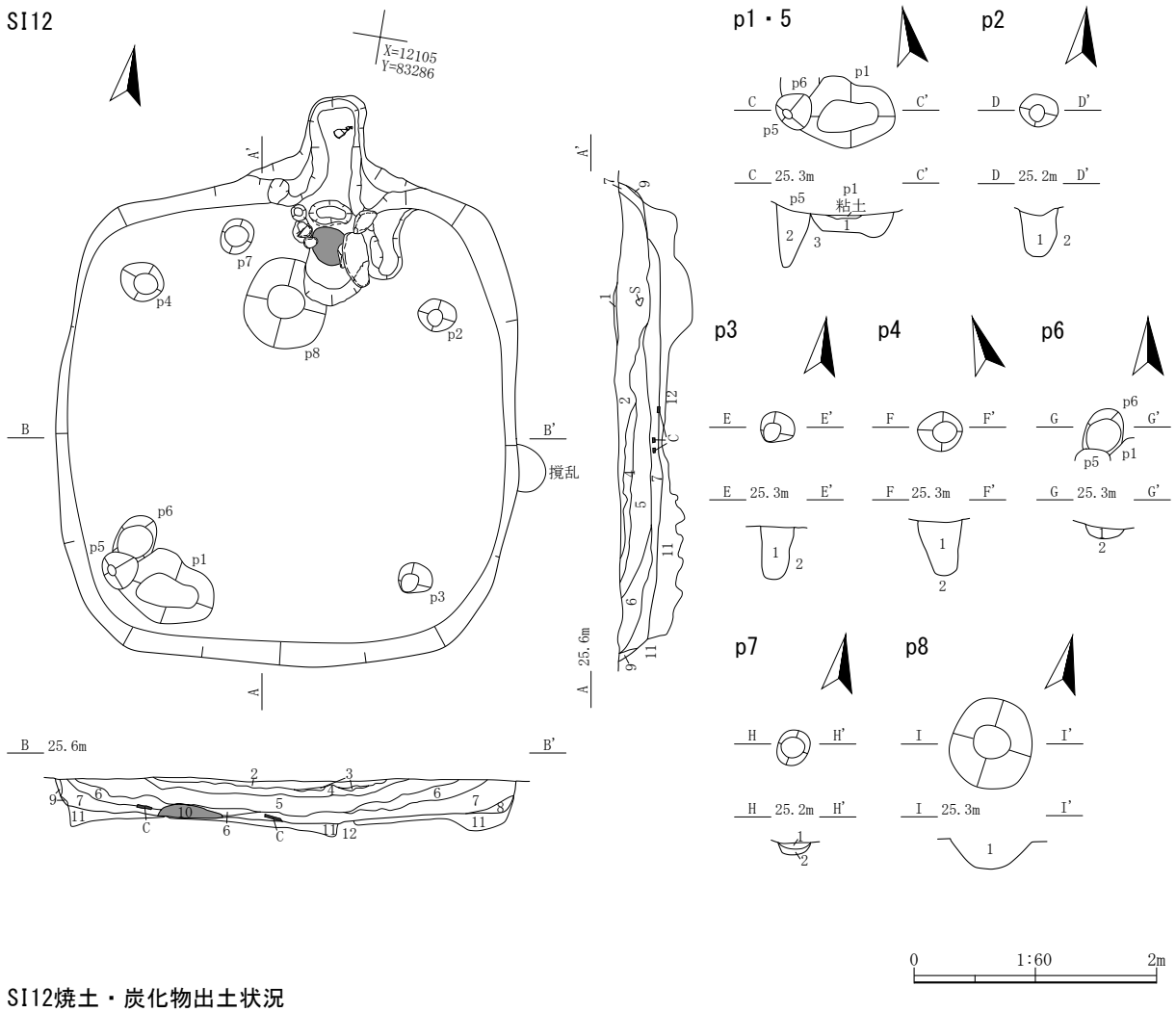
南調査区南東側の X＝12105・Y＝83286 付近に位置する。規模・形状は、4.0×3.8 ｍの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、層厚 0.05 ～ 0.25 ｍで、壁際が深く掘り込まれた掘り方をほぼ平坦にするよう作られている。このうち、ｐ８は掘り方掘削時に深く掘り窪んだ部分である。遺構の残存は良好で、北壁 0.16 ｍ、南壁 0.25 ｍ、東壁 0.26 ｍ、西壁 0.21 ｍである。壁は、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて 11 層で構成され、埋土上位の１層に明黄褐色の To-a テフラが二次堆積している。床面に近い７層には炭化材を多量に含み、平面的にも上屋が崩落した形の炭化材や焼土の広がりが観察されることから、焼失したものと判断される。出土した炭化材の一部について樹種同定を実施したところ、炭２～５の柱状はいずれもコナラ節の成果を得た。床面からは、ｐ１貯蔵穴、ｐ２～７柱穴状ピットの７個が確認された。主柱穴は、ｐ２～５の４個と考えられ、床面からの深さは 0.35 ～ 0.5 ｍである。ｐ１貯蔵穴は床面南西隅にあり、深さ 0.2 ｍで埋土上位ににぶい黄橙色粘土を堆積している。北壁の中央やや東寄りにカマド１基を確認した。カ



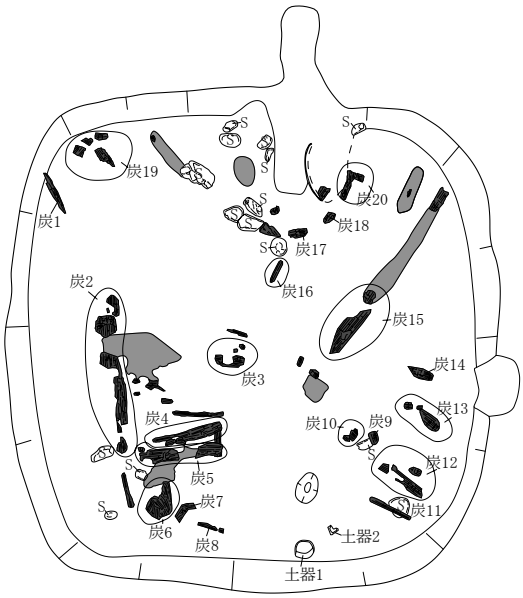
第 42 図　SI11 竪穴住居跡

マドの袖基部は壁から続いており造り付けと考えられ、さらに粘土を貼り付けていると見られる。これを延長するように袖石の礫が据えられていたと考えられ、右側の袖石は残存しているが左側は残っていなかった。燃焼部は燃焼面に向かって一段掘り窪められており、0.32×0.28 mの楕円形で深さ４㎝まで明赤褐色に強く変色している。燃焼面直上にはカマド崩落時もしくは使用時からの焼土が約８㎝の厚さで堆積している。煙道は燃焼面からほぼ水平に延びており、煙出し部で外傾しながら急斜度に立ち上がっている。検出時には煙出し部が明瞭に確認できたことと煙道部の堆積状況に天井部が崩落した痕跡が見られることから、刳り抜き式の煙道であった可能性が高い。煙道の規模は 1.1×0.52 mと短く燃焼面の煙道側がやや窪んでいる。

また、床面から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、618calAD－



SI12焼土・炭化物出土状況



SI12
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR6/6明黄褐色テフラ粘性やや弱　締まりやや疎を部分的に混入　To-aテフラと考えられる
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性弱～やや弱　締まり疎　２層よりやや明るい
4　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土粒（径１～２㎜）全体に散在
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（径１～５㎜）２～３％散在
7　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　上部に炭化材１～５㎝を多く含む
8　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルト地山ブロックを堆積　壁面崩落土
9　10YR4/6褐色～10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　壁面崩落土
10　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化材の上にのる強変焼土
11　10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR3/3暗褐色シルトを全体に混在　粘性やや弱　締まりやや密　地山
12　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI12 p1・5
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　中央付近に10YR7/4にぶい黄橙色粘土粘性中　締まりやや密を堆積
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI12 p2
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２～３㎝）散在
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI12 p3
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２～３㎝）散在
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI12 p4
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２～３㎝）散在
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

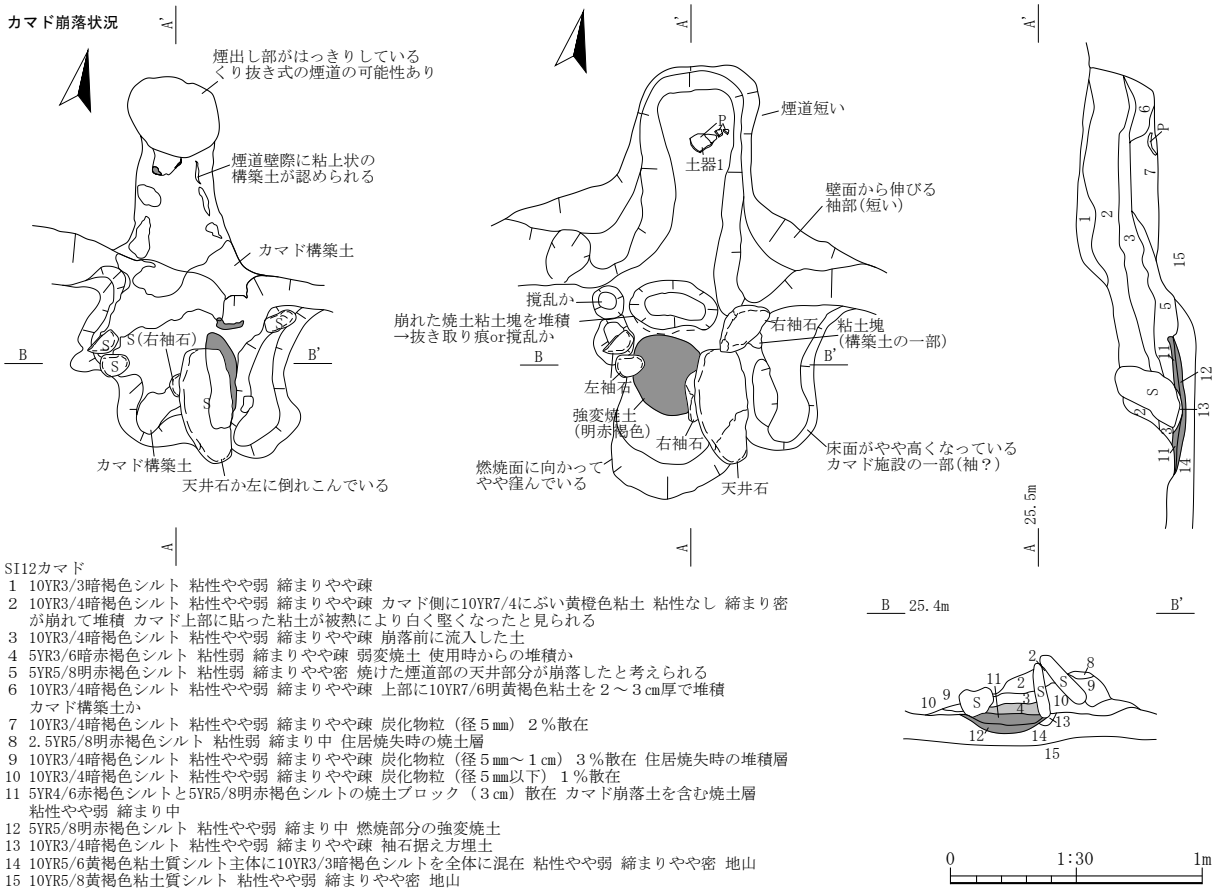
SI12 p6
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI12 p7
1　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（径５㎜）１％散在
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

SI12 p8
1　貼床と同一層

第43図　SI12竪穴住居跡（1）

SI12カマド



SI12カマド
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　カマド側に10YR7/4にぶい黄橙色粘土　粘性なし　締まり密が崩れて堆積　カマド上部に貼った粘土が被熱により白く堅くなったと見られる
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　崩落前に流入した土
4　5YR3/6暗赤褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎　弱変焼土　使用時からの堆積か
5　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性弱　締まりやや密　焼けた煙道部の天井部分が崩落したと考えられる
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　上部に10YR7/6明黄褐色粘土を２～３㎝厚で堆積　カマド構築土か
7　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（径５㎜）２％散在
8　2.5YR5/8明赤褐色シルト　粘性弱　締まり中　住居焼失時の焼土層
9　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（径５㎜～１㎝）３％散在　住居焼失時の堆積層
10　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物粒（径５㎜以下）１％散在
11　5YR4/6赤褐色シルトと5YR5/8明赤褐色シルトの焼土ブロック（３㎝）散在　カマド崩落土を含む焼土層　粘性やや弱　締まり中
12　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　燃焼部分の強変焼土
13　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　袖石据え方埋土
14　10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR3/3暗褐色シルトを全体に混在　粘性やや弱　締まりやや密　地山
15　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

0　1:30　1m

第 44 図　SI12 竪穴住居跡（２）

652calAD（68.2％・1σ）の較正年代値を得ており、土器の年代観と概ね調和的である。

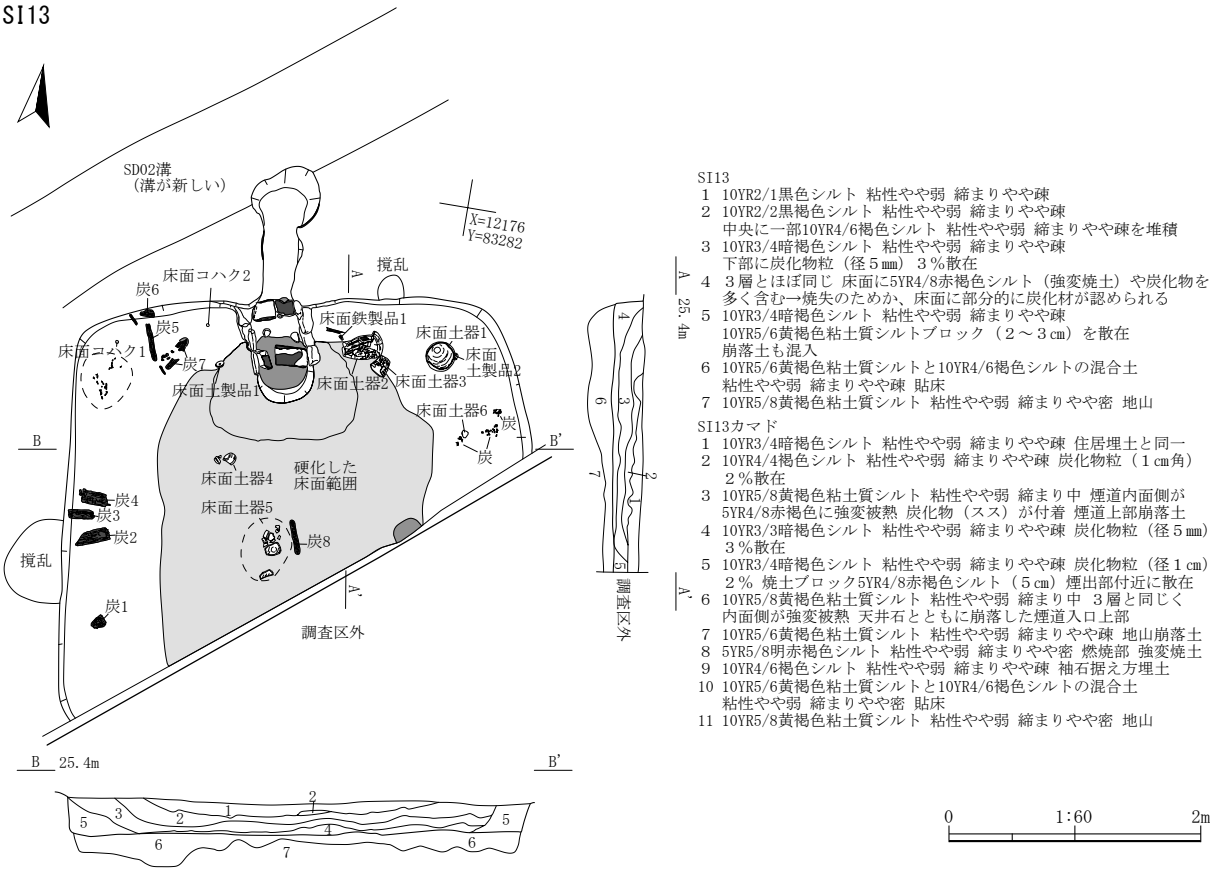
カマドや床面を中心に、47・48 土師器坏、49 ～ 51 土師器甕、71 土製紡錘車が出土し掲載した。

出土遺物と、埋土上位に堆積する明黄褐色の To-a テフラ二次堆積層、放射性炭素年代測定値から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

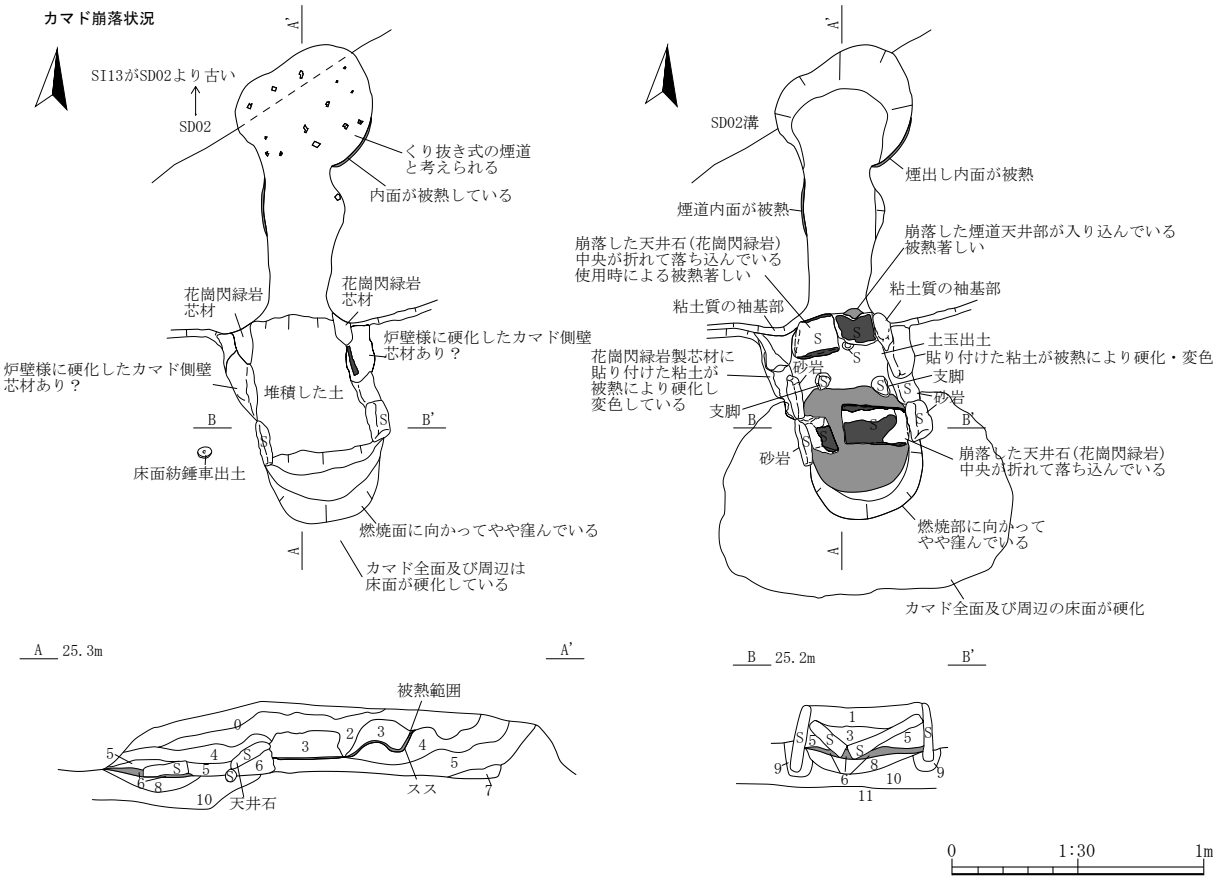
SI13 竪穴住居跡（第 45 図、写真図版 46・47）

南調査区北東隅の X＝12176・Y＝83282 付近に位置する。遺構北側で SD02 と重複しており、本遺構が古い。また、遺構南側は調査区外へと延びている。規模・形状は、残存値で 3.7×(3.3)ｍの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、層厚 0.03 ～ 0.25 ｍで、壁際が深く掘り込まれた掘り方をほぼ平坦にするよう作られている。遺構の残存は良好で、北壁 0.23 ｍ、東壁 0.21 ｍ、西壁 0.3 ｍである。壁は、概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて６層で構成され、床面に近い３・４層には炭化材を含み、平面的にも上屋が崩落した形の炭化材や焼土の広がりが観察されることから、焼失したものと判断される。出土した炭化材の一部について樹種同定を実施したところ、炭１～４の柱状はいずれもコナラ節の成果を得た。床面からは、床面中央付近に硬化面が広がるものの柱穴などは検出されなかった。北壁中央にカマド１基を確認した。カマドの袖基部は壁から直線的に延びており、さらに左右２個ずつの袖石の礫が立てて設置されている。袖石の間には、天井石に用いていたと見られる花崗閃緑岩質の扁平礫が中央で折れて落ち込んでいた。袖基部付近にも折れた天井石が確認でき、この間のカマド内には支脚と見られる立てた礫が２個並んで出土した。

SI13



SI13カマド



第45図　SI13竪穴住居跡

燃焼部は燃焼面に向かって一段掘り窪められており、0.42×0.4 mの楕円形で深さ６㎝まで明赤褐色に強く変色している。燃焼面直上にはカマド崩落時もしくは使用時からの焼土が４㎝の厚さで堆積している。煙道の規模は1.3×0.3 mで、断面形は燃焼面からほぼ水平に延びており、煙出し部で外傾しながら急斜度に立ち上がっている。検出時には煙出し部が明瞭に確認できたことと煙道部断面の３層下部が被熱していることから、刳り抜き式の煙道であった可能性が高い。

床面を中心に、52・53 土師器坏、54 ～ 56 土師器甕、72・73 土製紡錘車、74 土玉、121・122 刀子が出土し掲載した。これらの床面から出土した土器から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

SI14 竪穴住居跡（第 46 図、写真図版 48）

中央調査区北西端のＸ＝12208・Ｙ＝83230 付近に位置する。南側の平成 27 年度の中央調査区と北側の平成 29 年度村道泉沢中平線部分にあり、境界部分には水道管が横断して埋設されている。規模・形状は東西に走る水道管に分断されているが、6.2×6.35 mの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、層厚 0.05 ～ 0.25 mの掘り方をほぼ平坦にするよう作られている。遺構は、水道管や道路側溝などの撹乱によって大きく乱れており残存は不良である。全体に削平されており、北壁 0.16 m、南壁 0.05 m、東壁 0.05 m、西壁 0.03 mで、壁は概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床（断面Ｂ・４層、断面Ｃ・３層）も含めて４層で構成され、断面Ｂ・３層はｐ１床面土坑の埋土である。遺構全体が削平されているため、埋土が残存せずに掘り方のみが確認された部分もある。床面からは、ｐ１・２床面土坑（貯蔵穴）のほか、ｐ３～５柱穴状ピットの５個が確認された。主柱穴は、ｐ４・５の２個と撹乱された水道管埋設箇所に残りの２個があると考えられ、計４個配置されている。床面からの深さは 0.25 ～ 0.28 mである。ｐ２貯蔵穴は床面北西隅にあり、径 0.58×0.5 m、深さ 0.15 mで、中から土師器甕・甑が各１点出土した。北壁の中央西寄りにカマドと考えられる１基を確認した。カマドは大半が削平で既に失われており、煙道の一部のみが検出された。煙道の規模は 1.0×0.47 mで、北側に直線的に延びている。埋土には褐色土ブロックが見られるが、天井の存在など構造は不明である。また、この他の燃焼部などは認められなかった。

埋土及びｐ２貯蔵穴から、57 土師器坏、58 土師器甕、59 土師器甑が出土し掲載した。これらの出土した遺物から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

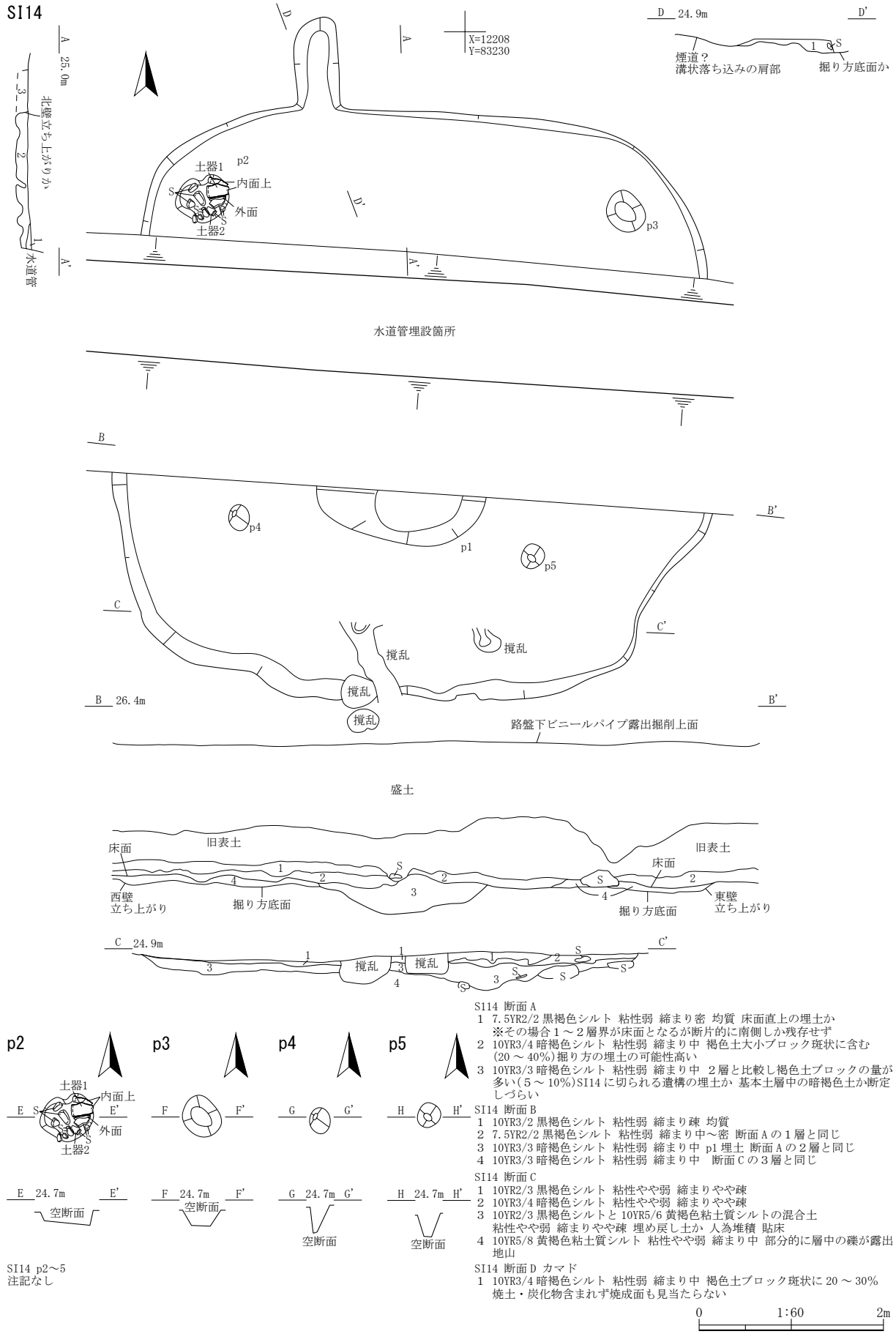
SI15 竪穴住居跡（第 47 図、写真図版 49）

中央調査区北側のＸ＝12194・Ｙ＝83246 付近に位置する。SK63・65 と重複しており、本遺構が新しい。また、耕作などによる多くの撹乱の影響を受けている。規模・形状は、2.95×2.6 mの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、層厚 0.05 ～ 0.2 mに掘り込まれた掘り方をほぼ平坦にするよう作られている。遺構の残存は良好で、北壁 0.32 m、南壁 0.28 m、東壁 0.34 m、西壁 0.31 mで、壁は概ね外傾しながら急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて７層で構成され、埋土中からは火山灰など鍵層の堆積は確認できない。また、床面からカマドや柱穴など床面施設は検出されなかった。

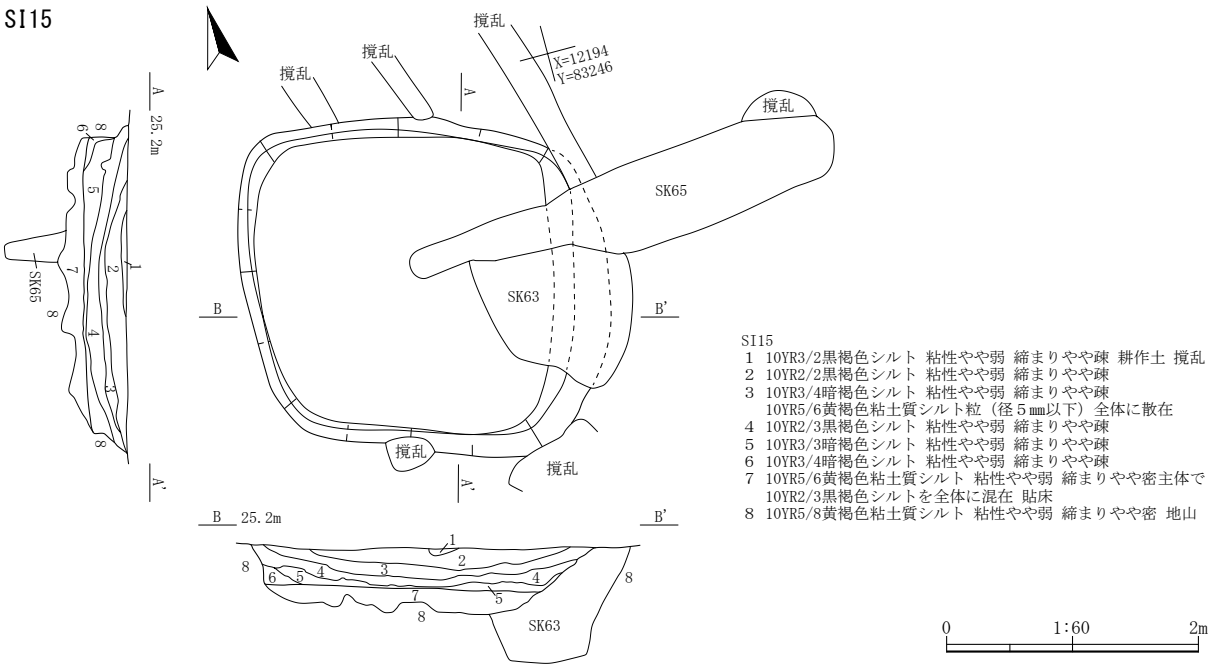
出土遺物がなく、また埋土にも火山灰などの堆積が認められなかったことから、詳細な時期は不明であるが、周辺の検出遺構から古代～中世と広く捉えておきたい。

SI16 竪穴住居跡（第 48 図、写真図版 50）

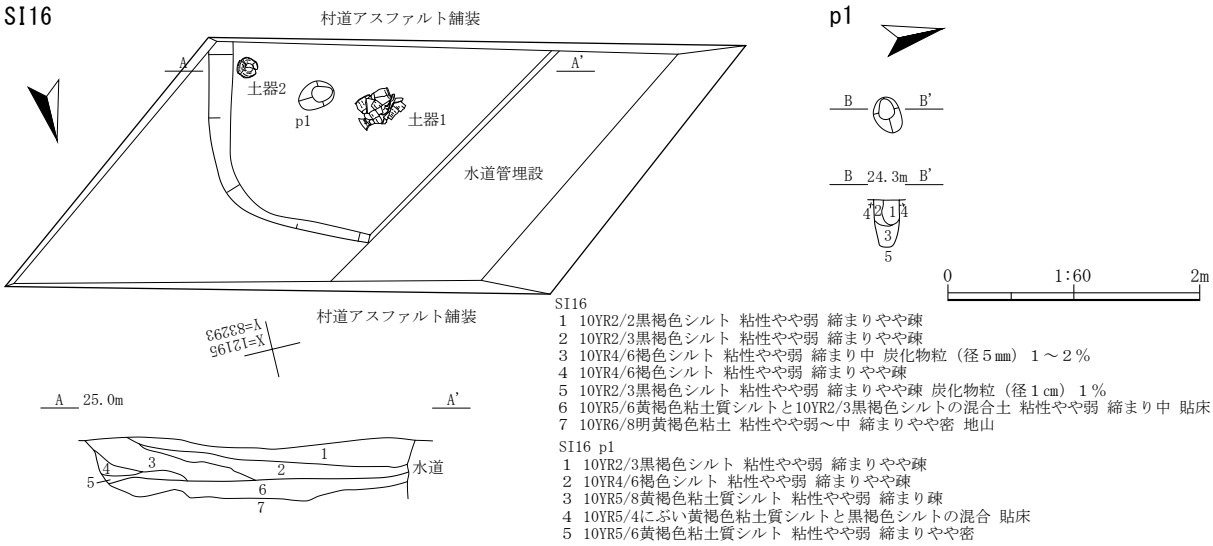
平成 30 年度に調査を行った村道城内二又線の交差点部分にあり、水道工事のために舗装をカット



第 46 図　SI14 竪穴住居跡



第 47 図　SI15 竪穴住居跡



第 48 図　SI16 竪穴住居跡

したX＝12195・Y＝83293付近に位置する。調査範囲は4.3×2.0ｍの平行四辺形をしており、西側は水道管が埋設されている。竪穴住居の北東隅のみが検出されており、規模・形状は2.7×1.6ｍの隅丸方形を呈する。遺構は東壁と北壁の一部のみが確認でき、このうち東壁は0.32ｍ残存している。床面には貼床が施されており、層厚0.07～0.18ｍの掘り方をほぼ平坦にするよう作られている。遺構の西側は、南北に走る水道管埋設によって壊されている。埋土は貼床も含めて６層で構成され、床面に近い３・４層には炭化物が少量含まれている。床面の北西隅から、ｐ１柱穴状ピット１個が確認され、床面からの深さは0.38ｍあり、主柱穴と考えられる。この他、調査範囲内からカマドや柱穴など床面施設は検出されなかった。

床面からの出土遺物を中心に、60土師器坏、61～63土師器甕の４点が出土し掲載した。図に示した土器１が61・62土師器甕、土器２が60土師器坏と63土師器甕である。床面からの出土土器から、

古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

（3）土　　坑

SK16 土坑（第 49 図、写真図版 25）

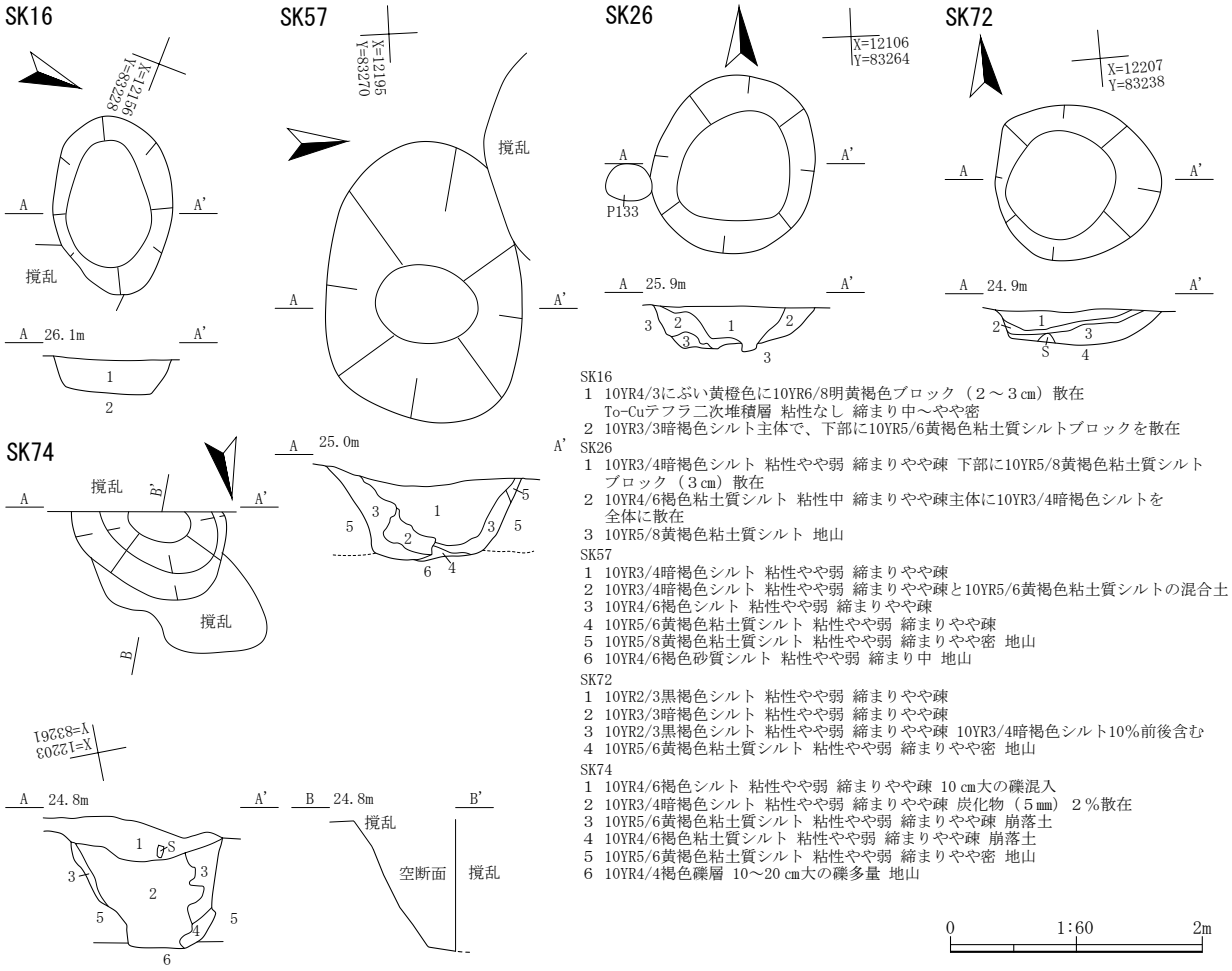
中央調査区南西隅の X＝12156・Y＝83228 に位置する。規模・形状は、1.43×0.95 mの楕円形、断面鍋底形で深さは 0.28 mである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居跡などと同時期に想定される。

SK26 土坑（第 49 図、写真図版 25）

南調査区中央西側の X＝12106・Y＝83264 に位置する。規模・形状は、1.42×1.3 mの略円形、断面皿形で深さは 0.36 mである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居跡と同時期に想定される。

SK57 土坑（第 49 図、写真図版 26）

中央調査区東側の X＝12195・Y＝83270 に位置する。規模・形状は、2.24×1.56 mの楕円形、断面鍋底形で深さは 0.6 mである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居跡と同時期に想定される。



第 49 図　SK16・26・57・72・74 土坑

SK72 土坑（第 49 図、写真図版 26）

平成 29 年度に調査を行った村道泉沢中平線部分にあり、X＝12207・Y＝83238 付近に位置する。規模・形状は、1.3×1.24 mの略円形、断面皿形で深さは 0.27 mである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居跡と同時期に想定される。

SK74 土坑（第 49 図、写真図版 26）

平成 29 年度に調査を行った村道泉沢中平線部分にあり、X＝12203・Y＝83261 付近に位置する。遺構南半は東西に走る水道管埋設部分に切られている。規模・形状は、残存値で 1.22×（0.7）mの卵形、断面逆台形で深さは 0.95 mである。出土遺物はなく、形状から縄文時代の円形陥し穴状遺構にも似るが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居跡と同時期に想定したい。

（4）焼　土　遺　構

SF01 焼土遺構（第 50 図、写真図版 26）

北調査区中央東端の X＝12245・Y＝83258 付近に位置する。掘り方の規模・形状は 0.8×0.66 mの不整円形で、深さは 0.2 mである。また、上面にある燃焼部の規模・形状は、0.7×0.52 mの不整円形で、層厚 0.03 mまで赤褐色に強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

SF02 焼土遺構（第 50 図、写真図版 27）

北調査区中央東側の X＝12254・Y＝83250 付近に位置する。規模・形状は 0.23×0.17 mの不整形で、深さは 0.04 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

SF03 焼土遺構（第 50 図、写真図版 27）

北調査区中央東側の X＝12250・Y＝83249 付近に位置する。撹乱によって遺構北側が失われているが、規模・形状は残存値で 0.23×（0.07）mの不整形で、深さは 0.06 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

SF04 焼土遺構（第 50 図、写真図版 27）

北調査区中央西側の X＝12246・Y＝83235 付近に位置する。規模・形状は 0.75×0.6 mの不整形で、深さは 0.1 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代遺構と同時期に想定される。

SF05 焼土遺構（第 50 図、写真図版 27）

北調査区中央西側の X＝12245・Y＝83232 付近に位置する。規模・形状は 0.35×0.19 mの不整形で、深さは 0.06 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

SF06 焼土遺構（第 50 図、写真図版 28）

北調査区中央の X＝12240・Y＝83243 付近に位置する。規模・形状は 0.28×0.26 mの不整円形で、深さは 0.03 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

SF07 焼土遺構（第 50 図、写真図版 28）

北調査区南西隅の X＝12214・Y＝83236 付近に位置する。規模・形状は 0.68×0.49 mの不整形で、深さは 0.08 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

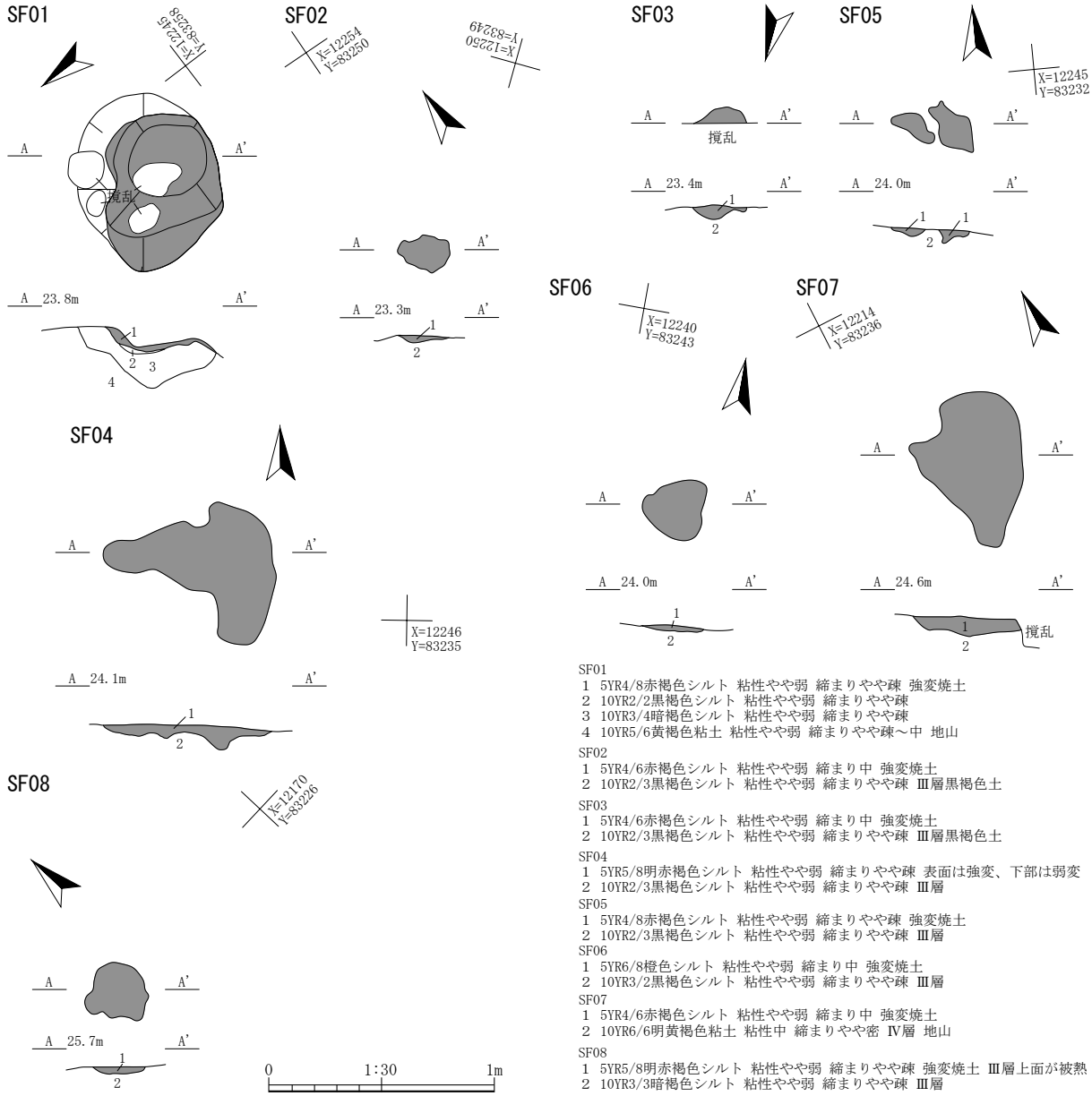
SF08 焼土遺構（第 50 図、写真図版 28）

中央調査区西端の X＝12170・Y＝83226 付近に位置する。規模・形状は 0.24×0.24 mの不整円形で、深さは 0.03 mまで強く被熱している。出土遺物はないが、隣接する古代の遺構と同時期に想定される。

（5）円　形　周　溝

円形周溝 1（第 51 図・第 52 図、写真図版 51・52）

中央調査区南側から平成 22 年度調査区を挟んで、平成 30 年度調査区の村道城内二又線部分までの X＝12168 ～ 12185・Y＝83252 ～ 83268 付近に位置する。規模・形状は、17.3×18.0 mの円形を呈する。



SF01
1　5YR4/8赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　強変焼土
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや疎～中　地山

SF02
1　5YR4/6赤褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　強変焼土
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層黒褐色土

SF03
1　5YR4/6赤褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　強変焼土
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層黒褐色土

SF04
1　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　表面は強変、下部は弱変
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層

SF05
1　5YR4/8赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　強変焼土
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層

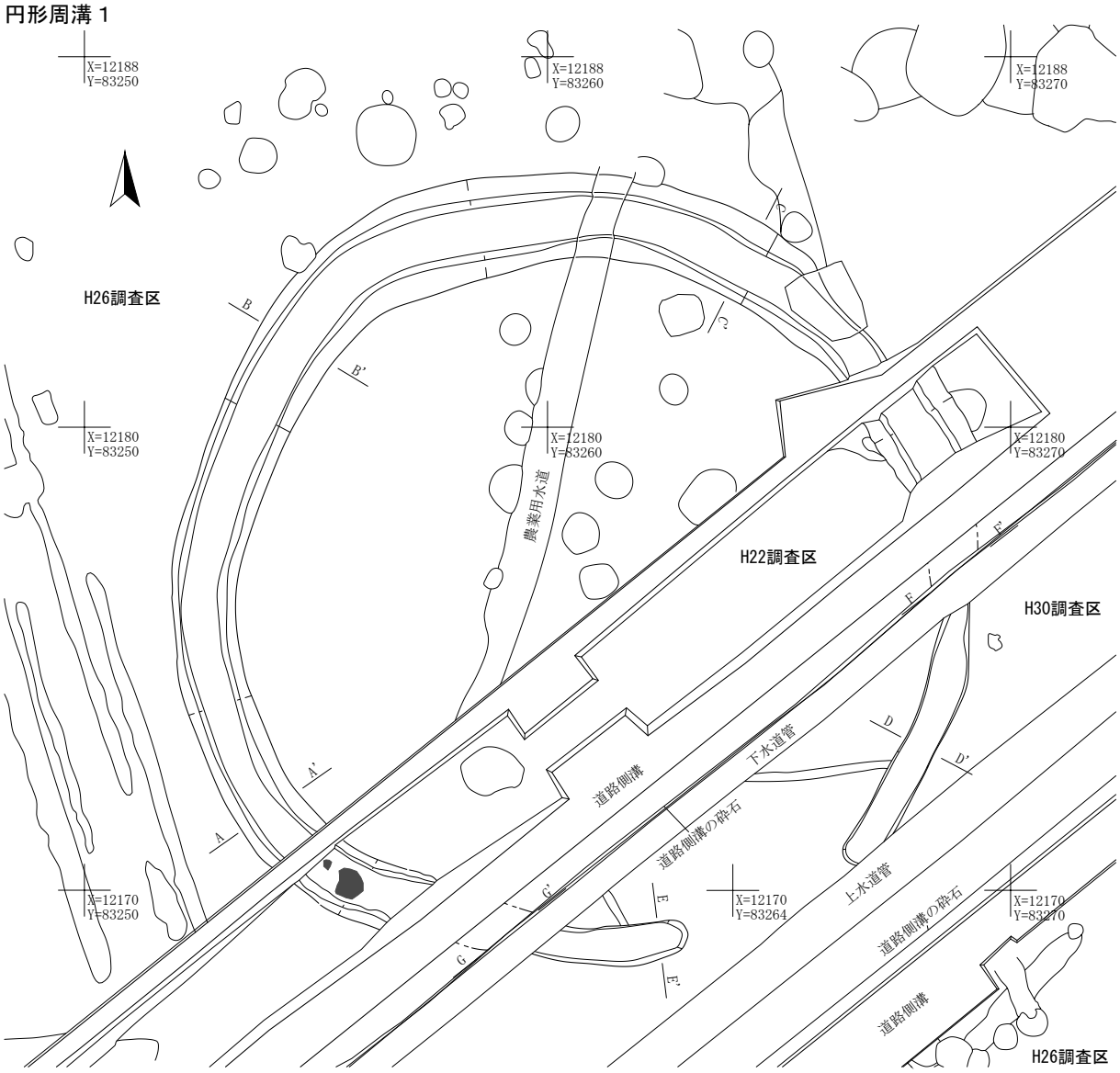
SF06
1　5YR6/8橙色シルト　粘性やや弱　締まり中　強変焼土
2　10YR3/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層

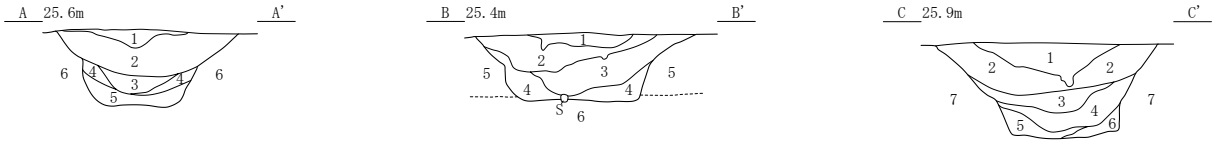
SF07
1　5YR4/6赤褐色シルト　粘性やや弱　締まり中　強変焼土
2　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性中　締まりやや密　Ⅳ層　地山

SF08
1　5YR5/8明赤褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　強変焼土　Ⅲ層上面が被熱
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　Ⅲ層

第 50 図　SF01 ～ 08 焼土遺構

円形周溝１





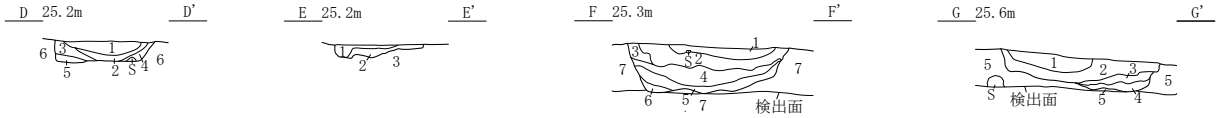
円形周溝1 断面Ａ
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを靄状に含む 炭化物粒（径５㎜以下）２～３％
3　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に炭化物粒（径１㎝）２～３％
4　10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面上部崩落土
5　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 底面直上に10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径１㎝）散在 使用時の壁崩落土
6　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

円形周溝1 断面Ｂ
1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（５㎝）散在 内部盛土からの流入土
4　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 内側を中心に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを多く含む
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 ５層とほぼ同じだが、10～20㎝大の礫を多く含む 地山

円形周溝1 断面Ｃ
1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 外側に10YR3/3暗褐色シルトを多く堆積
3　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質地山シルトを筋状に流入 崩落土
4　10YR5/6～5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 内側から多く流入 内部盛土の流入土
5　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6　10YR5/6黄褐色粘土質シルトに10YR3/3暗褐色シルトを筋状に堆積 粘性やや弱 締まり中 初期の内部盛土の流入土
7　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

0　1:60　2m
※断面

第 51 図　円形周溝１（１）



円形周溝1 断面D
1 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 マウンド部が崩れた流入土
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色～10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR4/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色粘土質シルトの地山ブロック１～２㎝ 壁際に堆積→壁面崩落
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 使用時のマウンド盛土流入層
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや密 締まりやや密 地山

円形周溝1 断面E
1 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 マウンド方向からの流入土
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山再堆積土
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 地山

円形周溝1 断面F
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色 地山粒１～２㎜全体に散在 ２～３㎜の炭化物１％含む
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色 地山粒１～２㎜全体に散在 ２～３㎜の炭化物１％含む 筋状に水成堆積
3 10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 マウンドからの流入土
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 マウンドからの流入土
5 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 上部と下部にφ1㎝の黄褐色地山ブロック散在→崩落土
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 壁面崩落土
7 10YR5/6～8黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

円形周溝1 断面G
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 １～２㎜の地山粒多量に含む 筋状に堆積→水成
2 10YR3/4暗褐色シルトで１層と同じだが、10YR5/6黄褐色粘土質シルトを筋状に２～３層挟む
3 10YR4/6褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 マウンドからの流入土
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR3/4暗褐色シルトがマウンド方向から流入する 内側がやや深く掘りこんでいるか
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

第52図　円形周溝１（２）

南端の平成30年度調査区部分が約7.0ｍ周溝が途切れており、馬蹄形を呈していたとも考えられるが、平成30年度調査区は道路工事によって舗装面から１ｍ以上下がっていることから既に失われたとも考えられ、断定できない。平成22年度調査の際に、遺構の一部が確認されており、その際は２号溝跡と５号溝跡と命名して登録していた（岩文埋 2012）。残存する周溝の幅は、断面Ａが1.42ｍ、断面Ｂが1.74ｍ、断面Ｃが1.73ｍ、断面Ｄが0.77ｍ、断面Ｅが0.7ｍ、断面Ｆが1.28ｍ、断面Ｇが1.25ｍで、残存が良好な断面Ｂ・Ｃあたりが遺構の存続期に近いと考えられる。深さは、断面Ａが0.6ｍ、断面Ｂが0.54ｍ、断面Ｃが0.75ｍ、断面Ｄが0.15ｍ、断面Ｅが0.1ｍ、断面Ｆが0.35ｍ、断面Ｇが0.24ｍで、やはり残存が良好な断面Ｃが深い。断面形状は逆台形で、開口していた時からの崩落でやや広がっていると考えられる。遺構の性格から、周溝を掘削した土を内部に土盛りしていると見られ、周溝に堆積している土の大半はこのマウンド側からの崩落した流入土であると考えられる。断面Ａ・Ｆには埋土上～中位に炭化物を含んでおり、内部盛土上で何らかの火を焚く行為が行われていたと見られる。遺構は、道路工事や耕作によって全体が削平されており、内部に存在したマウンドはほとんど残存しておらず、主体部も既に失われている。

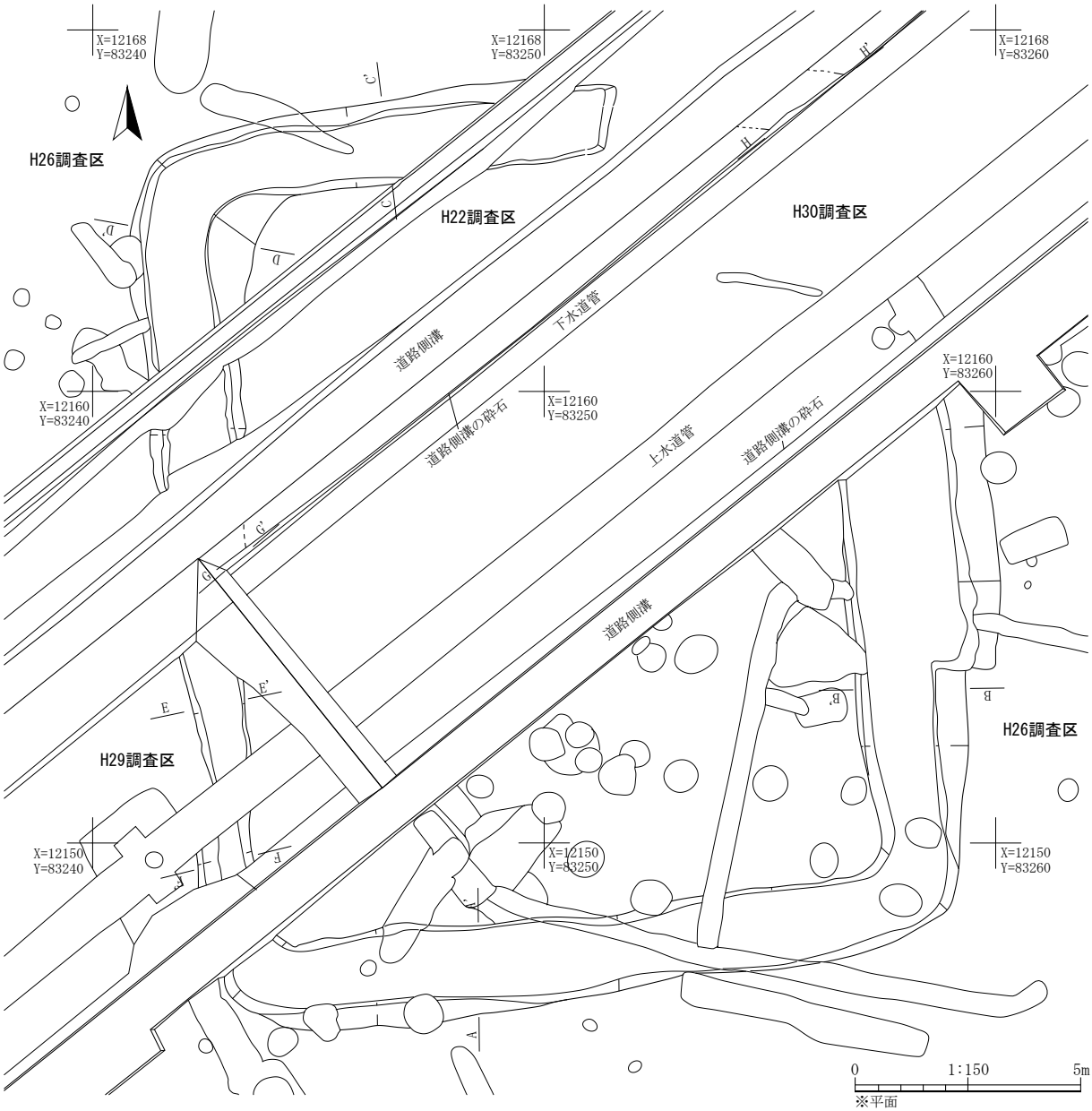
断面Ｃ付近の周溝埋土下位（埋土４層中）から、78羽口が出土し掲載した。内径が2.4㎝と小型で、鍛冶施設を有するSI04出土の羽口とほぼ同形であることから、同じ時期に使用された可能性がある。土器など時期を特定できる遺物は出土しなかったが、方形周講１との位置関係と、周辺の遺構分布から古墳時代後期～末に所属する末期古墳と考えられる。

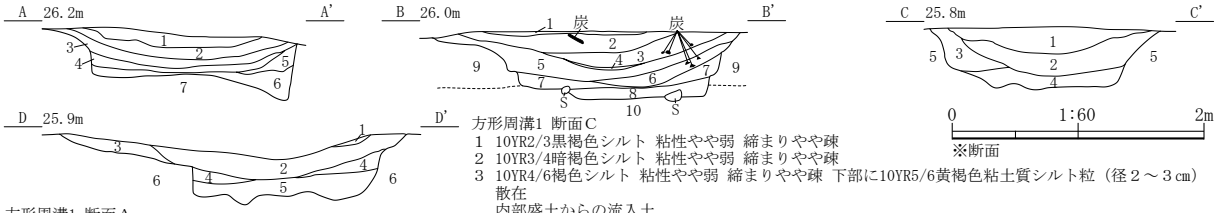
（６）方　形　周　溝

方形周溝１（第53図・第54図、写真図版53・54）

中央調査区南端から平成22年度調査区、平成30年度調査区の村道城内二又線部分を挟んで、南調査区北端までのＸ＝12167～12145・Ｙ＝83240～83260付近に位置する。規模・形状は、20.15×18.1ｍの南北がやや長い方形を呈する。北東端の平成22年度調査区部分で周溝が短く途切れているが、撹乱による削平が影響しているとも考えられ、断定できない。平成22年度調査の際に、遺構の一部が確認されており、その際は３号溝跡と４号溝跡と命名して登録していた（岩文埋 2012）。残存する周

方形周溝１





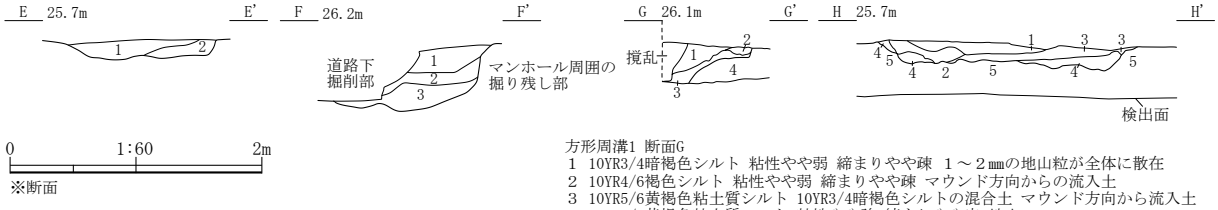
方形周溝1 断面Ａ
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5　10YR3/4暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 内部盛土からの流入土
6　５層とほぼ同一層だが、10YR5/6黄褐色粘土質シルトが多い ５層と同じく、使用時からの内部盛土からの流入土
7　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

方形周溝1 断面Ｂ
1　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR4/4褐色シルト 上部に炭化物粒（径５㎜）を部分的に集中
3　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 上部に10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径１㎝）散在 内部盛土からの流入土
4　炭化物層 約１㎝の厚さで、３層底面に堆積
5　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁際に10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径１～２㎝）散在 内部盛土からの流入土
6　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物粒（径５㎜）散在 10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径１㎝）散在 内部盛土からの流入土
7　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR2/3黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトを互層で堆積 内部盛土からの流入土
8　10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR4/4褐色シルトを混在 内部盛土からの流入土
9　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
10　10YR5/8黄褐色粘土質シルト ９層に10～20㎝大の礫を多く含む 地山

方形周溝1 断面Ｃ
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径２～３㎝）散在
内部盛土からの流入土
4　10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR4/6褐色シルトブロックなど散在 内部盛土からの流入土
5　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

方形周溝1 断面Ｄ
1　10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 内部盛土からの崩落土もしくは初期に盛った堆積土
4　10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒（径１～２㎝）少量散在
5　10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR4/6褐色シルトブロックなど混在 内部盛土からの流入土
6　10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

第53図　方形周溝１（１）



方形周溝1 断面E
1 10YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり疎 比較的均質 褐色土粒５％
2 7.5YR5/6明褐色粘土質シルト 粘性中 締まり弱 大小ブロックの集合体で隙間に暗褐色土が挟まる

方形周溝1 断面F
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性弱 締まり中 上半やや明色
2 10YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり疎 比較的均質 褐色土粒５％
3 7.5YR5/6明褐色粘土質シルト 粘性中 締まり弱 大小ブロックの集合体で隙間に暗褐色土が挟まる

方形周溝1 断面G
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 １～２㎜の地山粒が全体に散在
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 マウンド方向からの流入土
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 10YR3/4暗褐色シルトの混合土 マウンド方向から流入土
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

方形周溝1 断面H
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 φ５㎜以下の炭化物１％ 全体にφ１～２㎜の地山粒 多量含む
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 全体にφ１～２㎜の地山粒多量に含む
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 全体にφ１～２㎜の地山粒多量に含む筋状に水成堆積する
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト主体に10YR3/4暗褐色シルト30％程度混在する 粘性やや弱～中 締まり中 掘削後に埋め立てたか
5 10YR5/6～8黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 地山

第54図　方形周溝１（２）

溝の幅は、断面Ａが2.0ｍ、断面Ｂが2.45ｍ、断面Ｃが1.8ｍ、断面Ｄが2.74ｍ、断面Ｅが0.15ｍ、断面Ｆが残存値で（1.3）ｍ、断面Ｇが残存値で（0.7）ｍ、断面Ｈが2.02ｍで、残存が良好な断面Ａ・Ｂ・Ｄあたりが遺構の存続期に近いと考えられる。深さは、断面Ａが0.47ｍ、断面Ｂが0.54ｍ、断面Ｃが0.5ｍ、断面Ｄが0.42ｍ、断面Ｅが0.15ｍ、断面Ｆが0.47ｍ、断面Ｇが0.33ｍ、断面Ｈが0.15ｍで、やはり残存が良好な断面Ｂ・Ｃが深い。断面形状は逆台形で、開口していた時からの崩落でやや広がっていると考えられる。遺構の性格から、周溝を掘削した土を内部に土盛りしていると見られ、周溝に堆積している土の大半はこのマウンド側からの崩落した流入土であると考えられる。断面Ｂには埋土上～中位の２～４・６層に炭化物を多く含んでおり、内部盛土上で何らかの火を焚く行為が行われていたと見られる。遺構は、道路工事や耕作によって全体が削平されており、特に主体部などが存在すると見られる中央付近は大きく削り取られていることから、内部に存在したマウンドは残存していない。

断面Ａ付近の周溝埋土などから64～67土師器坏が出土し掲載した。このうち、64が非ロクロ成形でその他はロクロ成形である。

また、周溝から出土した炭化物３点について放射性炭素年代測定を実施したところ、断面Ｂ埋土中位は689calAD－750calAD（56.6％・1σ）、断面Ｂベルト埋土は801calAD－846calAD（35.9％・1σ）、断面Ａ北側底面は804calAD－842calAD（30.9％・1σ）の較正年代値を得ており、ロクロ成形の土師器の年代観と概ね調和的である。

周溝埋土から出土した土器と、周溝底面の放射性炭素年代測定値から、平安時代中期の９世紀前半に所属する末期古墳と考えられる。

（７）溝　　跡

SD03 溝跡（第62図、写真図版59）

南調査区北端のＸ＝12157～12164・Ｙ＝83264～83268付近に位置する。SD02と重複しており、本遺構が古い。また、撹乱に切られている。南北方向から西へ曲がるＬ字形の溝で、長さは南北方向が6.0ｍ、東西方向が2.0ｍで、西側はSD02に切られ、これより西側は平成30年度調査区である村道城内二又線となるが道路工事によって失われている。断面形状は箱形で、深さは0.44ｍである。

出土遺物は、断面Ｄ付近の埋土下位から68土師器坏が１点のみ出土している。ロクロ成形による坏で、外面に「十」の墨書が認められる。出土遺物から、平安時代前期の９世紀前半に所属すると見られ、方形周溝１の末期古墳に関連する遺構の可能性がある。

4　中　近　世

（1）概　　要

4ヵ年の調査から、中近世の掘立柱建物跡5棟、塀跡1箇所を確認した。掘立柱建物跡5棟は中央調査区と南調査区から見つかっており、いずれも標高の高い平坦地が続く西側にあることから、遺構は調査区の西側に広がりを持つと考えられる。該期の出土遺物は、遺構外から出土した寛永通寶2点のみで詳細な時期は不明であるが、野田村教育委員会によって2012年に調査を行った際、北調査区西側の中平遺跡84地点から中世と考えられる張り出しを持つ竪穴建物跡1棟が検出されている（野田村教委2014）。このことから、本調査区周辺にも中世遺構の広がりが想定されることから、中近世と時期に幅を持たせた。

（2）掘立柱建物跡

SB01 掘立柱建物跡（第55図、写真図版55）

南調査区南西側のX＝12100・Y＝83263付近に位置する。SB02と重複するが、新旧関係は不明である。建物の規模は、梁間3間の長さ21.1尺（6.4 m）、桁行5間の長さ32.3尺（9.8 m）で、北面と南面の2面に庇が付く掘立柱建物である。主軸方向は北西－南東方向、W－31°－Nである。計22個の柱穴で構成されると考えられ、梁間側に下屋が付いている。

身舎の柱間寸法は、梁間側が7.9尺（2.4 m）が多用されており、東端のみが5.3尺（1.6 m）となる。桁行側は7.3尺（2.2 m）、7.9尺（2.4 m）が用いられているが、ほぼ同じ基準で設計されたと見られる。庇の長さは4.9尺（1.5 m）となり、身舎よりも短く作られている。

身舎と庇の柱穴の規模に違いは認められないことから、一連した上屋構造を持つ入母屋造りの建物であった可能性がある。

出土遺物がなく時期不明だが、中世～近世と広く捉えておきたい。

SB02 掘立柱建物跡（第56図、写真図版55）

南調査区南西側のX＝12098・Y＝83261付近に位置する。SB01と重複するが、新旧関係は不明である。建物の規模は、梁間2間の長さ14.8尺（4.5 m）、桁行3間の長さ19.6尺（5.95 m）で、西面の1面のみに庇が付く掘立柱建物である。主軸方向は北西－南東方向、W－33°－Nである。計12個の柱穴で構成されると考えられ、桁行側に庇が付いている。

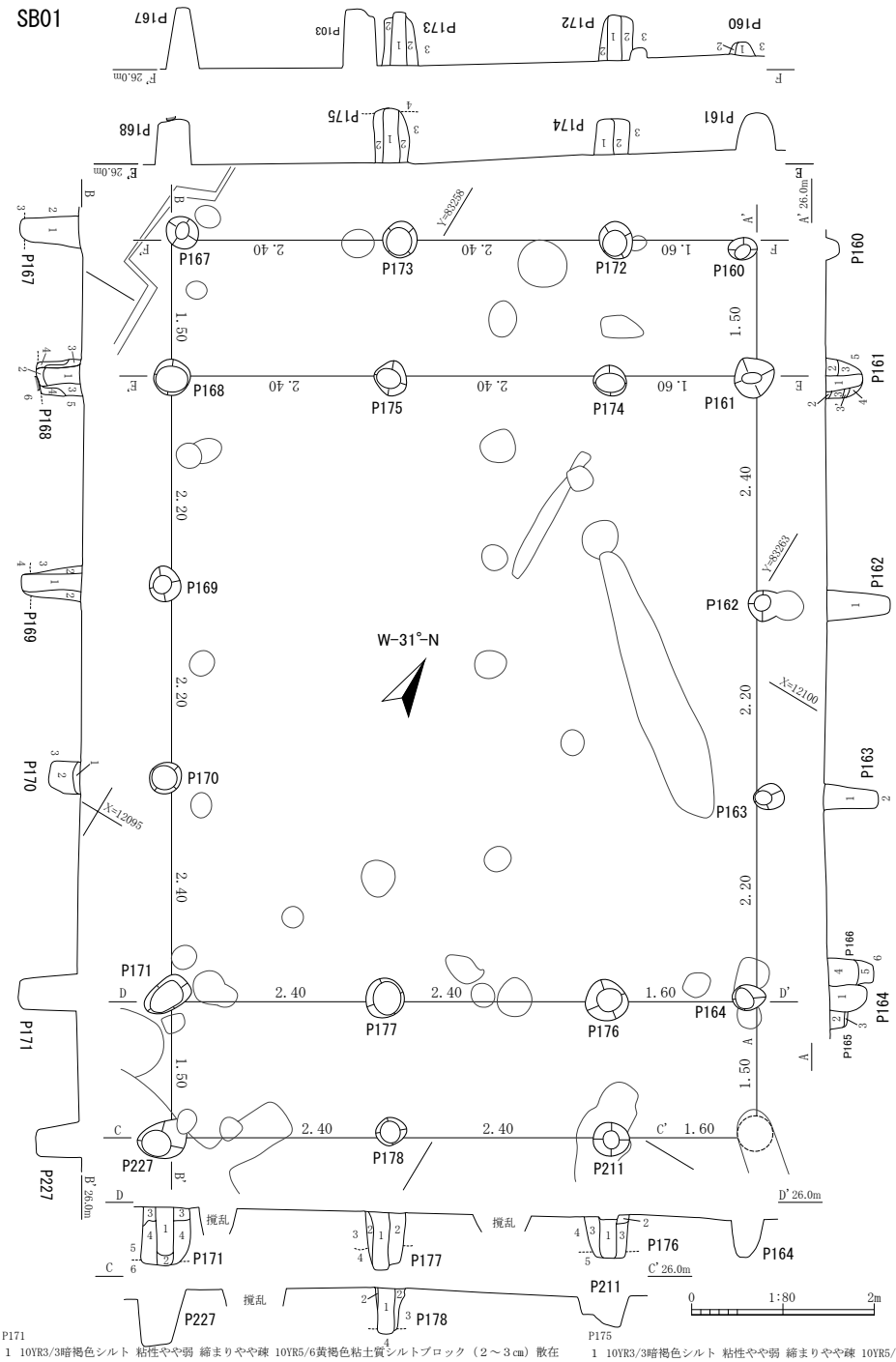
身舎の柱間寸法は、梁間側が10.9尺（3.3 m）、桁行側は4.5尺（1.35 m）、7.3尺（2.2 m）、7.9尺（2.4 m）など様々な寸法が用いられているが、それぞれは誤差の範囲で一定の基準で設計されたと見られる。庇の長さは4.0尺（1.2 m）となり、身舎よりも短く作られている。

身舎と庇の柱穴の規模に違いは認められないことから、一連した上屋構造を持つ入母屋造りの建物であった可能性がある。

出土遺物がなく時期不明だが、中世～近世と広く捉えておきたい。

SB04 掘立柱建物跡（第57図、写真図版56）

南調査区北西端のX＝12131・Y＝83247付近に位置する。調査区境界の西壁にかかって検出され、遺構の大半は調査区外へと延びている。調査区内で確認されたのは建物の東側の桁行のみで、桁行5

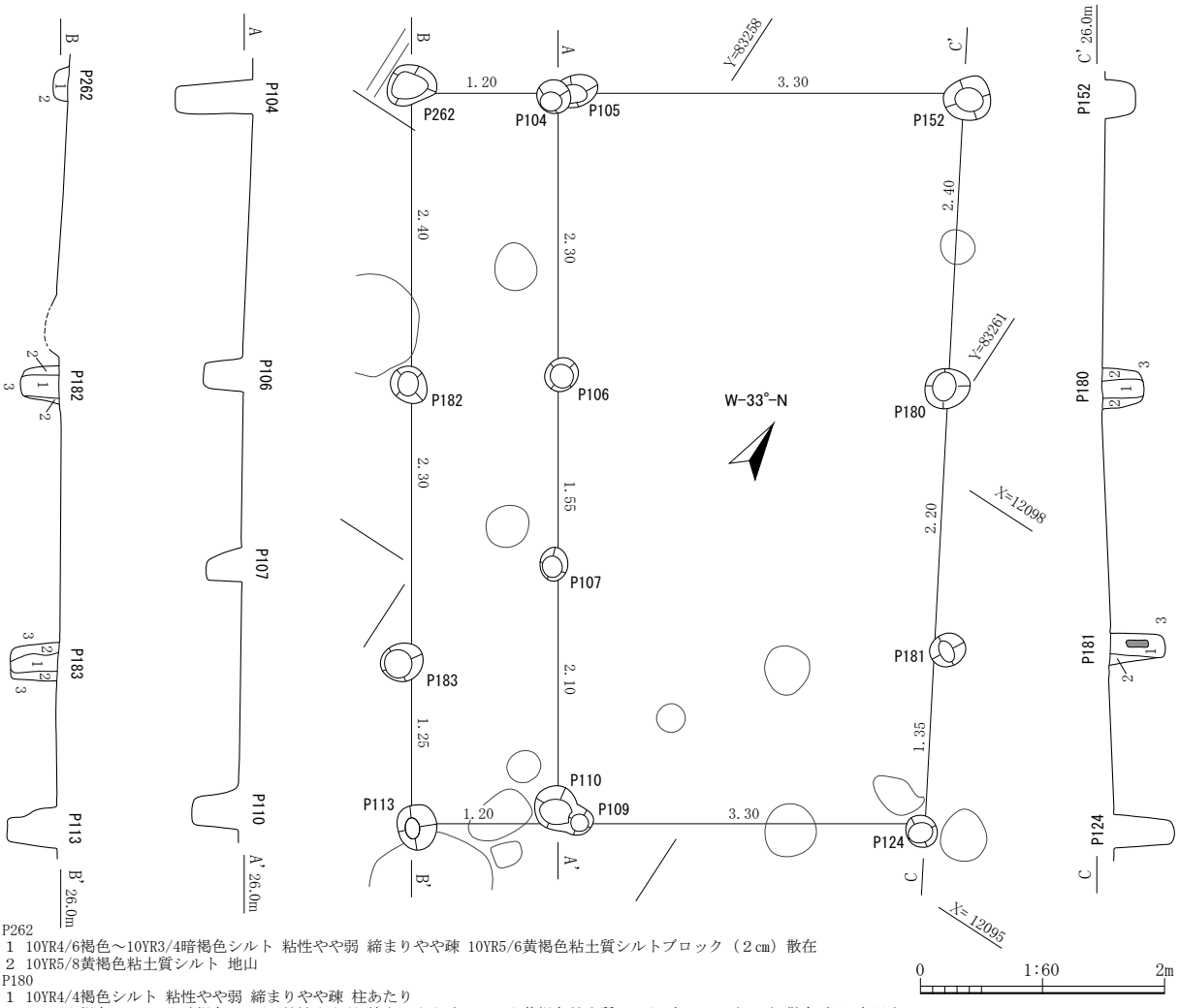


P160
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P161
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（5㎝）堆積
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
P162
1 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在
P163
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
P164・165・166
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 P164埋土
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 P165埋土
3 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 P165埋土
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 P166埋土
5 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 P166埋土
6 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
P167
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
3 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P168
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック多量 上屋の重さで堅く締まっている
3 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（5㎝）散在
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
6 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P169
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
4 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P170
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトを混在
2 10YR4/6褐色シルト主体に10YR3/3暗褐色シルトや10YR5/6黄褐色粘土質シルトをブロックで混在
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山

P171
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック多量 上屋の重さで堅く締まっている
3 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 地山埋め戻し土 若干、10YR3/4暗褐色シルト混在
5 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
6 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P172
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P173
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
P174
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
P175
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
4 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P176
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
4 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
5 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P177
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
4 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P178
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2～3㎝）散在 柱あたり
2 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（2㎝）散在 掘り方埋土
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 地山
4 10YR4/6褐色砂質シルト 地山
P211・227
注記なし

第55図　SB01 掘立柱建物跡

SB02



P262
1　10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）散在
2　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　地山
P180
1　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　柱あたり
2　10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）散在　掘り方埋土
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　地山
P181
1　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　角礫長さ約15cm混入　柱あたり
2　10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）散在　掘り方埋土
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　地山
P182
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２～３cm）散在　柱あたり
2　10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）散在　掘り方埋土
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　地山
P183
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２～３cm）散在　柱あたり
2　10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック（２cm）散在　掘り方埋土
3　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　地山
P104・106・107・110・113・124・152
注記なし

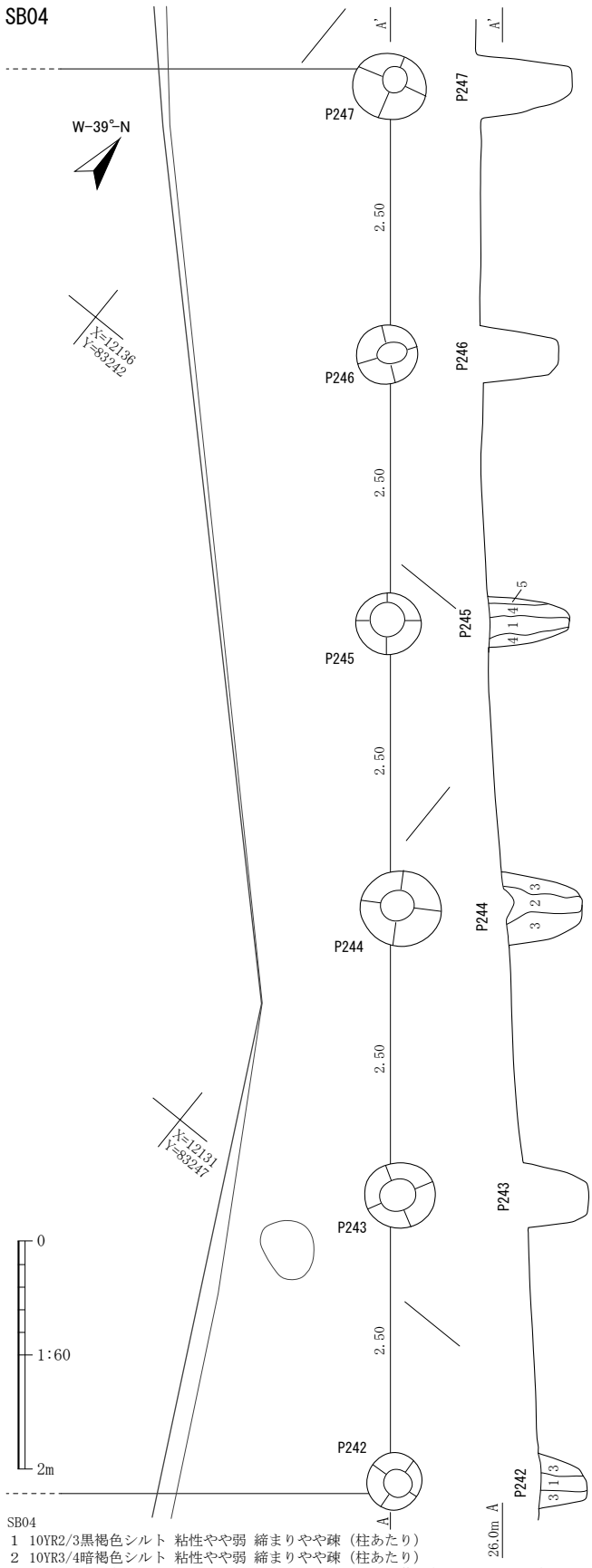
第 56 図　SB02 掘立柱建物跡

間の長さ 41.2 尺（12.5 m）の規模を持つ掘立柱建物である。主軸方向は北西－南東方向、W－39°－Nである。調査区内では計６個の柱穴が検出されているが、これが身舎の桁行か、庇かは不明である。

柱間寸法は 8.2 尺（2.5 m）間隔で統一されており、この寸法を基準に設計されたと見られる。見つかった柱穴からは、建物の構造を推定するのは難しい。また、出土遺物がなく時期不明だが、中世～近世と広く捉えておきたい。

SB05 掘立柱建物跡（第 58 図、写真図版 57）

南調査区北西隅の X＝12140・Y＝83246 付近に位置する。L 字に曲がる柱穴列として確認しており、建物の推定範囲で SB04 と重複するが新旧関係は不明である。建物の規模は、残存値で梁間３間の長



第 57 図　SB04 掘立柱建物跡

さ 24.7 尺（7.5 m）、桁行 3 間の長さ 25.2 尺（7.65 m）で、西側の桁行は調査区外、南側の梁間は確認できなかった。主軸方向は北西－南東方向、W－39°－ N である。計 7 個の柱穴で構成されると考えられ、北側の梁間は作り直されている。

柱間寸法は 8.2 尺(2.5 m)、8.4 尺(2.55 m) が用いられており、この寸法を基準に設計されたと見られる。8.2 尺（2.5 m）の寸法は SB04 とも共通しており、SB04 の一部か、これに巡らされた塀の可能性もある。

出土遺物がなく時期不明だが、他と同じく中世～近世と広く捉えておきたい。

SB06 掘立柱建物跡（第 59 図、写真図版 57）

中央調査区中央西側の X＝12175・Y＝83229 付近に位置する。調査区境界の北壁にかかって検出され、遺構の大半は調査区外へと延びている。調査区内で確認されたのは建物の南側の下屋と梁間のみである。建物の規模は、梁間 3 間の長さ 17.2 尺（5.2 m）、残存する桁行 1 間の長さ 5.0 尺（1.5 m）以上の規模を持つ掘立柱建物である。主軸方向は北西－南東方向、W－28°－ N である。調査区内では計 10 個の柱穴が検出されており、梁間側に下屋が付いている。

身舎の柱間寸法は、梁間側が 4.5 尺(1.35 m)、5.8 尺（1.75 m）、6.9 尺（2.1 m）、桁行側は 5.0 尺（1.5 m）、6.6 尺（2.0 m）など様々な寸法が用いられており、一定した基準は見出せない。下屋の長さは 5.0 尺（1.5 m）で、SB01 と同じ長さである。

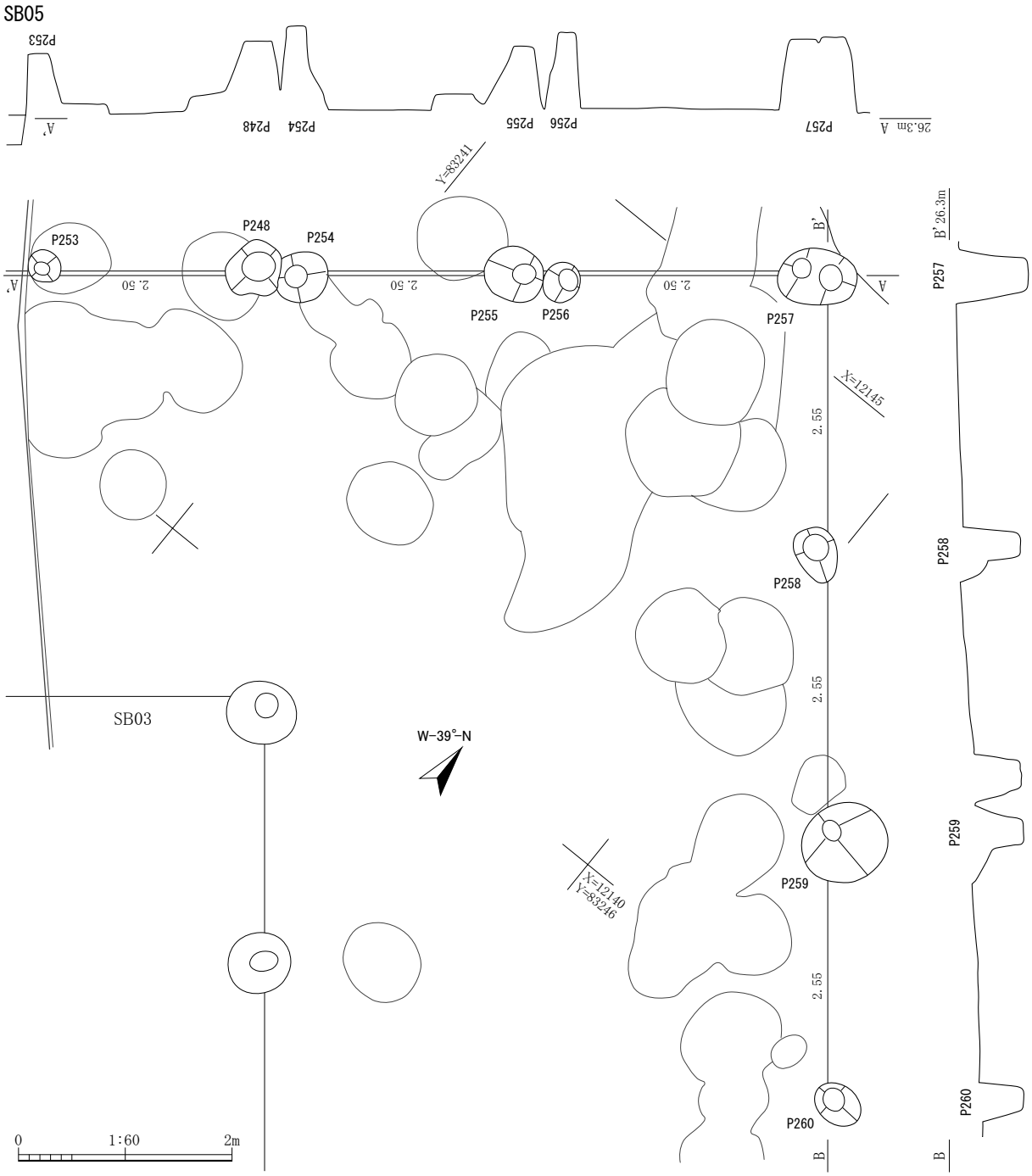
身舎と下屋の柱穴の規模に違いは認められない。建物の規模から、付属屋的な性格を有する可能性がある。

出土遺物がなく時期不明だが、他と同じく中世～近世と広く捉えておきたい。

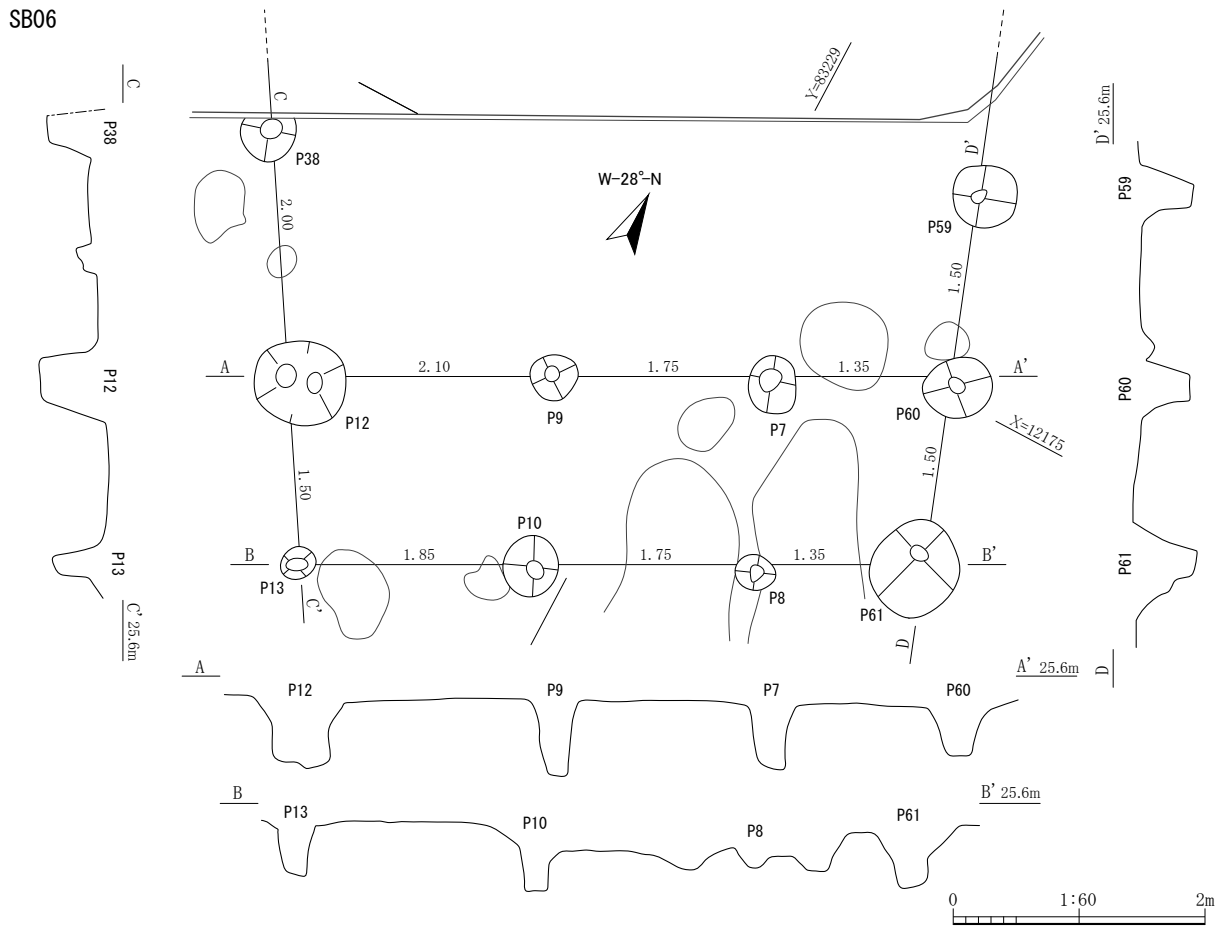
（3）塀　　跡

塀跡 1（第 60 図）

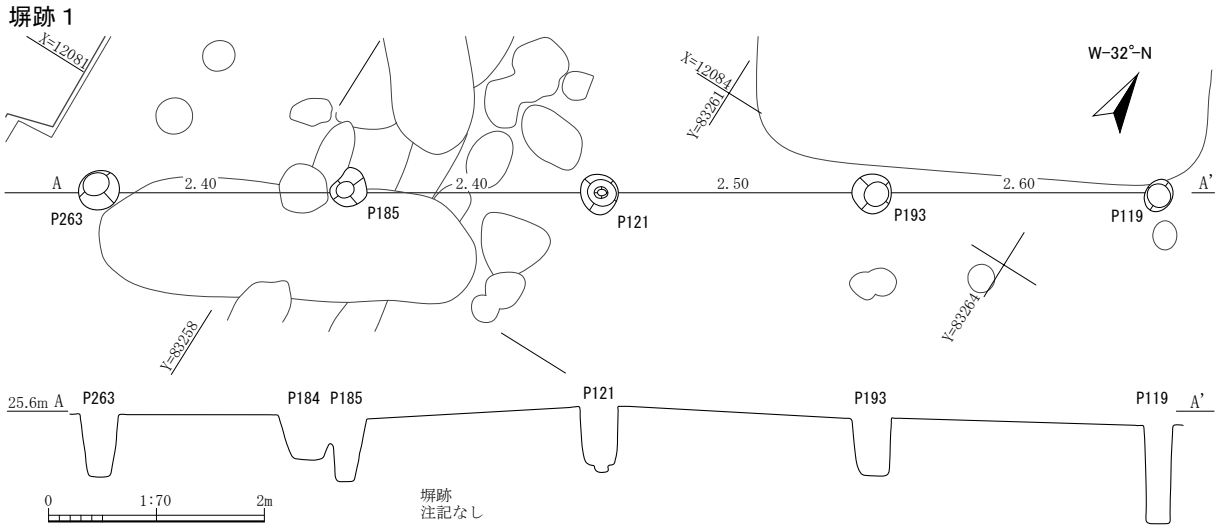
南調査区南西隅の X＝12081・Y＝83258 付近に位置する。計 5 個の柱穴で構成され、南西側の調査区外へ延びている可能性がある。柱間寸法は 7.9 尺（2.4 m）、8.2 尺（2.5 m）、8.6 尺（2.6 m）と多くの寸法が用いられている。塀の向きは北東－南西方向のW－32°－Nで、SB01・02 とほぼ同じ方向であることから、関連する遺構の可能性がある。



第 58 図　SB05 掘立柱建物跡



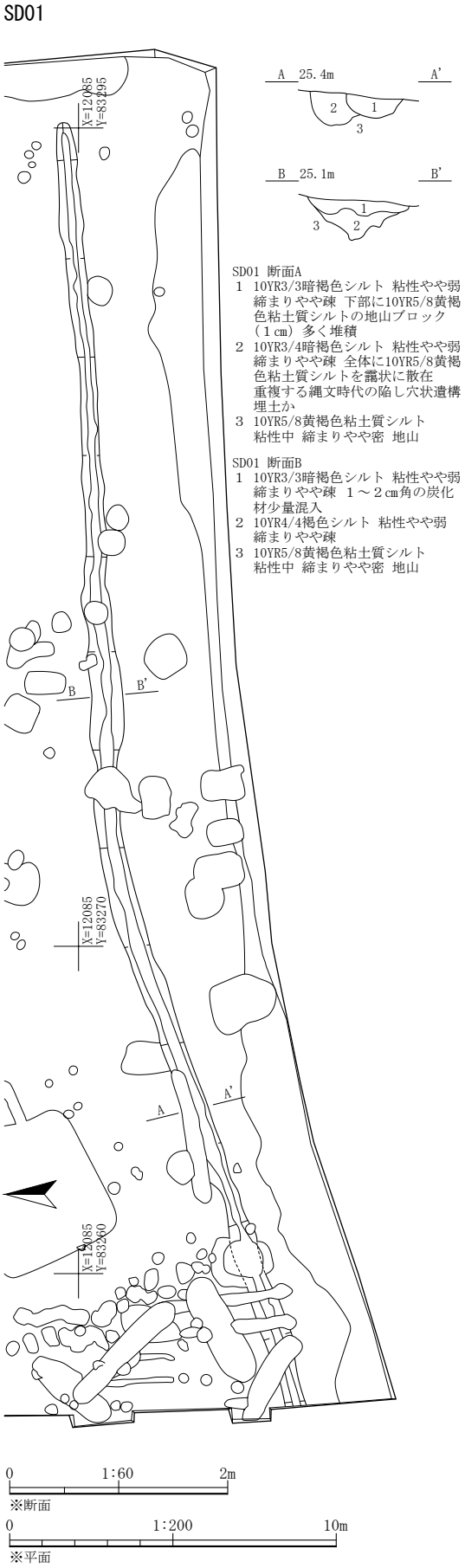
第 59 図　SB06 掘立柱建物跡



第 60 図　塀跡 1

（4）柱穴状ピット（第 7 ～ 10 図、第 3 表）

中央・南調査区と平成 30 年度調査区である村道高見線部分から、計 222 個の柱穴状ピットを確認した。このうち、掘立柱建物跡を構成する柱穴 60 個、塀跡 1 を構成する柱穴 5 個の計 65 個について所属する遺構が推定されており、いずれにも所属しない柱穴状ピットが計 157 個である。



第 61 図　SD01 溝跡

（5）溝　　跡

SD01 溝跡（第 61 図、写真図版 58）

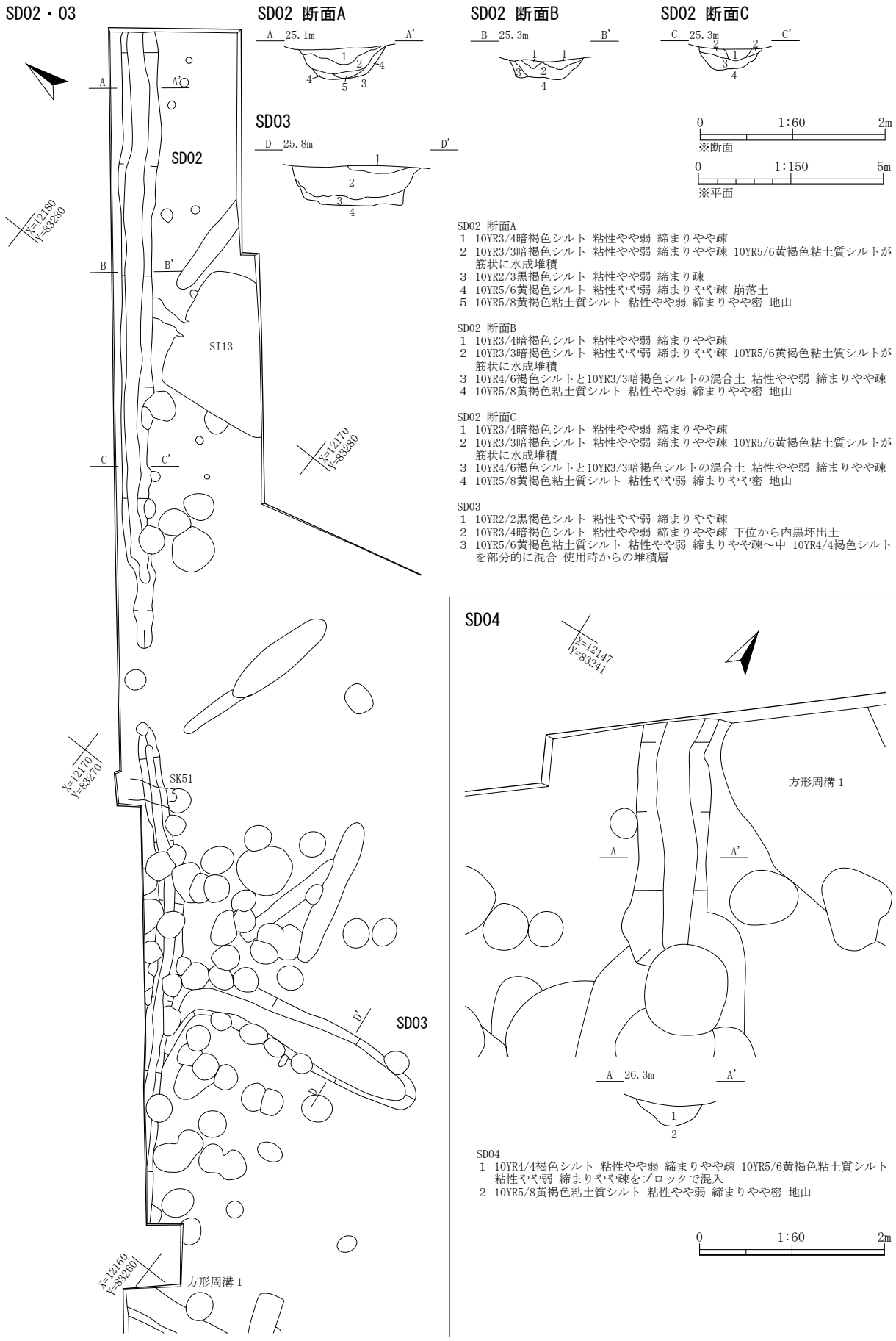
南調査区南端の X＝12078 ～ 12086・Y＝83256 ～ 83295 の範囲に位置する。SK19・36 と重複するが、いずれも本遺構が新しい。また、多くの撹乱に切られている。規模は、長さ 40.0 m、幅 0.5 ～ 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m程度で断面形はU～V字形、東西の調査区外へと延びている。底面標高は、西端が 25.18 m、中央が 24.82 m、東端が 24.61 mから、西から東へ向かって底面標高が下がっている。このことから、地形に沿って西から東へ排水を行った道路側溝の可能性がある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、現在の道路形状に似ることから、道路が舗装される以前まで長期間使用されていたと考えられる。

SD02 溝跡（第 62 図、写真図版 58）

南調査区北端の X＝12160 ～ 12181・Y＝83261 ～ 83286 の範囲に位置する。SI13 や SD03、SK51 と重複するが、いずれも本遺構が新しい。また、多くの撹乱に切られている。規模は、途切れているが長さ 32.0 m、幅 0.5 ～ 1.0 m、深さ 0.2 ～ 0.35 m程度で断面形はU字・箱形で、東西の調査区外へと延びている。底面標高は、西端が 25.68 m、中央が 25.21 m、東端が 24.69 mから、西から東へ向かって底面標高が下がっている。このことから、地形の沿って西から東へ排水を行った道路側溝の可能性がある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、現在の道路形状と道路側溝位置に沿うことから、道路が舗装される以前まで長期間使用されていたと考えられる。

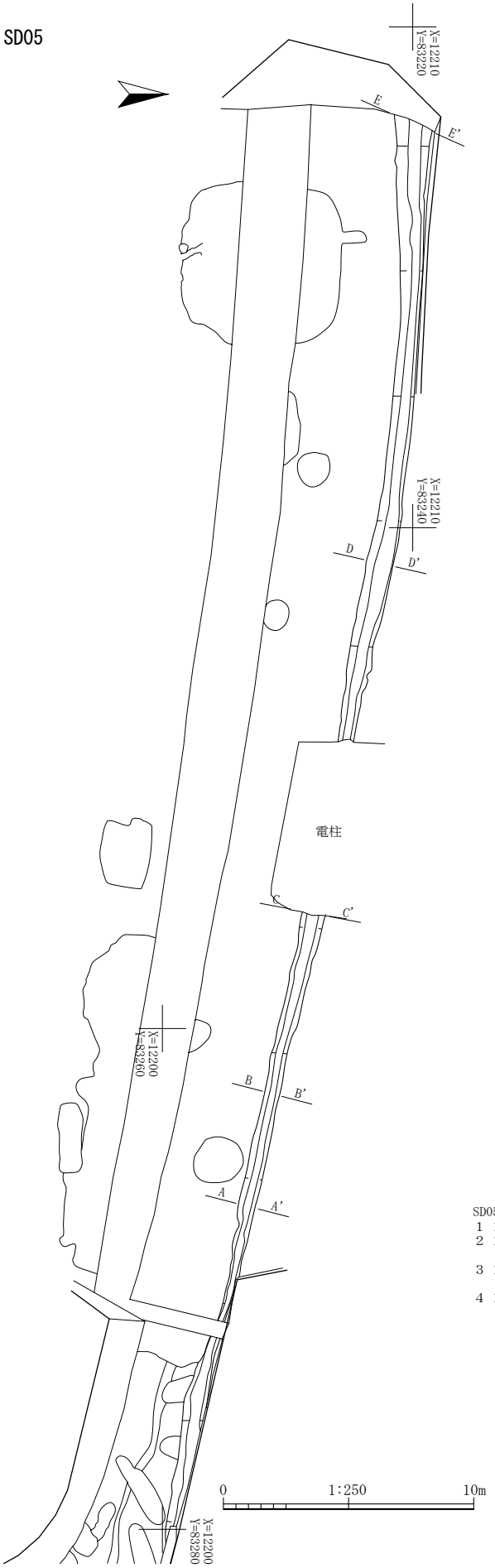
SD04 溝跡（第 62 図、写真図版 59）

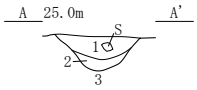
南調査区北西端の X＝12147・Y＝83241 付近に位置する。遺構北側は平成 30 年度調査区である村道城内二又線部分に延びているが、道路工事によって失われている。また、遺構南端は撹乱に切られている。規模は残存値で、長さは（2.64）m、幅は 0.8 m、深さは 0.22 mで断面U字形である。出土遺物はなく時期不明だが、SB05 に隣接することからこの時期に推定した。



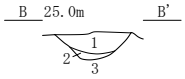
第 62 図　SD02・03・04 溝跡

SD05

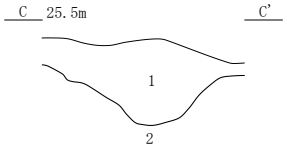




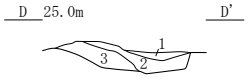
SD05 断面 A
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/4 褐色シルトを 30%含む
2　10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR5/6 黄褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎
　水成堆積か
3　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山



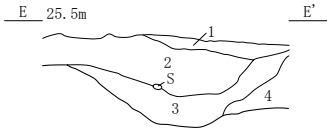
SD05 断面 B
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎　10YR4/4 褐色シルトを 30%含む
2　10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR5/6 黄褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎
　水成堆積か
3　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山



SD05 断面 C
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎
2　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山



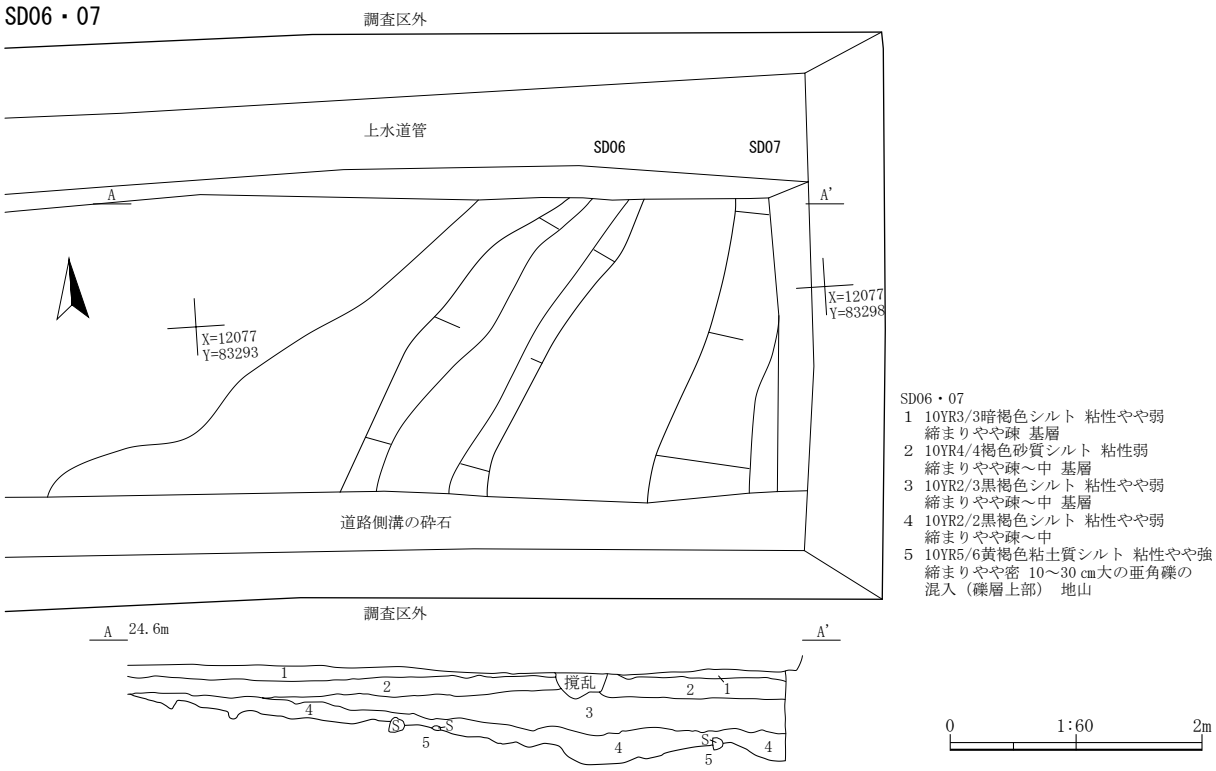
SD05 断面 D
1　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山ブロック７%含む
3　10YR4/3 にぶい黄橙色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 火山灰含む 当時の地山



SD05 断面 E
1　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 掘削土か
2　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり疎 礫（φ１～10㎜）少量含む 炭化物粒
　（φ３～５㎜）微量含む
3　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 礫（φ１～５㎜）少量含む 炭化物粒
　（φ１～５㎜）少量含む
4　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 火山灰微量含む 炭化物粒微量含む

0　1:60　2m

第 63 図　SD05 溝跡



第 64 図　SD06・07 溝跡

SD05 溝跡（第 63 図、写真図版 60）

平成 29 年度調査区である村道泉沢中平線部分にあり、X＝12200 ～ 12210・Y＝83223 ～ 83280 の範囲に位置する。SK70・71 と重複するが、いずれも本遺構が新しい。また、電柱などの撹乱に切られている。規模は、長さ 58.0 m、幅 0.4 ～ 1.0 m、深さ 0.22 ～ 0.40 mで断面形はU字形、東西は調査区外へと延びている。底面標高は、西端 24.56 m、中央 24.52 m、東端 24.48 mで、ほぼ平坦ながら西から東へ向かって底面標高が下がっている。このことから、地形の沿って西から東へ排水を行った道路側溝の可能性がある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、現在の道路形状と道路側溝位置に沿うことから、道路が舗装される以前まで長期間使用されていたと考えられる。

SD06 溝跡（第 64 図、写真図版 60）

平成 30 年度調査区である村道高見線部分の X＝12077・Y＝83295 付近に位置する。SD07 と並列して検出しており、北東から南西方向に向かって延びている。規模は、長さ 2.7 m、幅 0.6 ～ 1.0 m、深さ 0.1 mで、断面は浅い皿形を呈する。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、ここに記載した。地形が下がる部分に位置することから、自然流路として機能していた可能性がある。

SD07 溝跡（第 64 図、写真図版 60）

平成 30 年度調査区である村道高見線部分の X＝12076・Y＝83298 付近に位置する。SD06 と並列して検出しており、北東から南西方向に向かって延びていると見られる。規模は、長さ 2.35 m、幅 1.2 m 以上、深さ 0.15 mで、断面は浅い皿形を呈する。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、ここに記載した。地形が下がる部分に位置することから、自然流路として機能していた可能性がある。

Ⅴ　出　土　遺　物

１　縄　文　時　代

（１）縄　文　土　器

（第 65 図、写真図版 61）

１～３の３点を掲載した。１は、尖底深鉢形と思われる土器で、胴部のみ残存する。胎土が粗く、植物質繊維を多量に含む土器で、外面に羽状 LR・RL 結束第一種を横位展開する。縄文前期初頭～前葉の土器である。２は、山形突起を有する深鉢形土器で、口縁・胴部の３破片を掲載した。口縁部に単軸絡条体第３類を施文。胴部は羽状 LR・RL 非結束を施す。胎土に植物質繊維を多量に含む。３と同じ円筒下層ｄ式である。３は、深鉢型の胴部破片で、縄文 RL の上に多軸絡条体Ｒを部分的に施文する。胎土に植物質繊維を多量に含む。（北田）

（２）石　　器

（第 65 図、写真図版 61）

７～ 10 の４点を掲載した。弥生時代の石器の可能性もあるが一括で記載する。７は、有茎石鏃で先端部と茎部を欠く。８は凹基の石鏃で、先端部を欠損する。９は横型の石匙である。10 は、スクレイパー類で、左側縁に加工が施されている。４点はいずれも頁岩製である。（北田）

２　弥　生　時　代

（１）弥　生　土　器

（第 65 図、写真図版 61）

４～６の３点を掲載した。いずれも深鉢で、４は、縦位の縄文 RL、５は、縦位の縄文 RL に横位沈線。６は、横位沈線上に交互刺突文を施す。４・５は同一個体の可能性がある。いずれも弥生中期後半に比定される。（北田）

３　古　　代

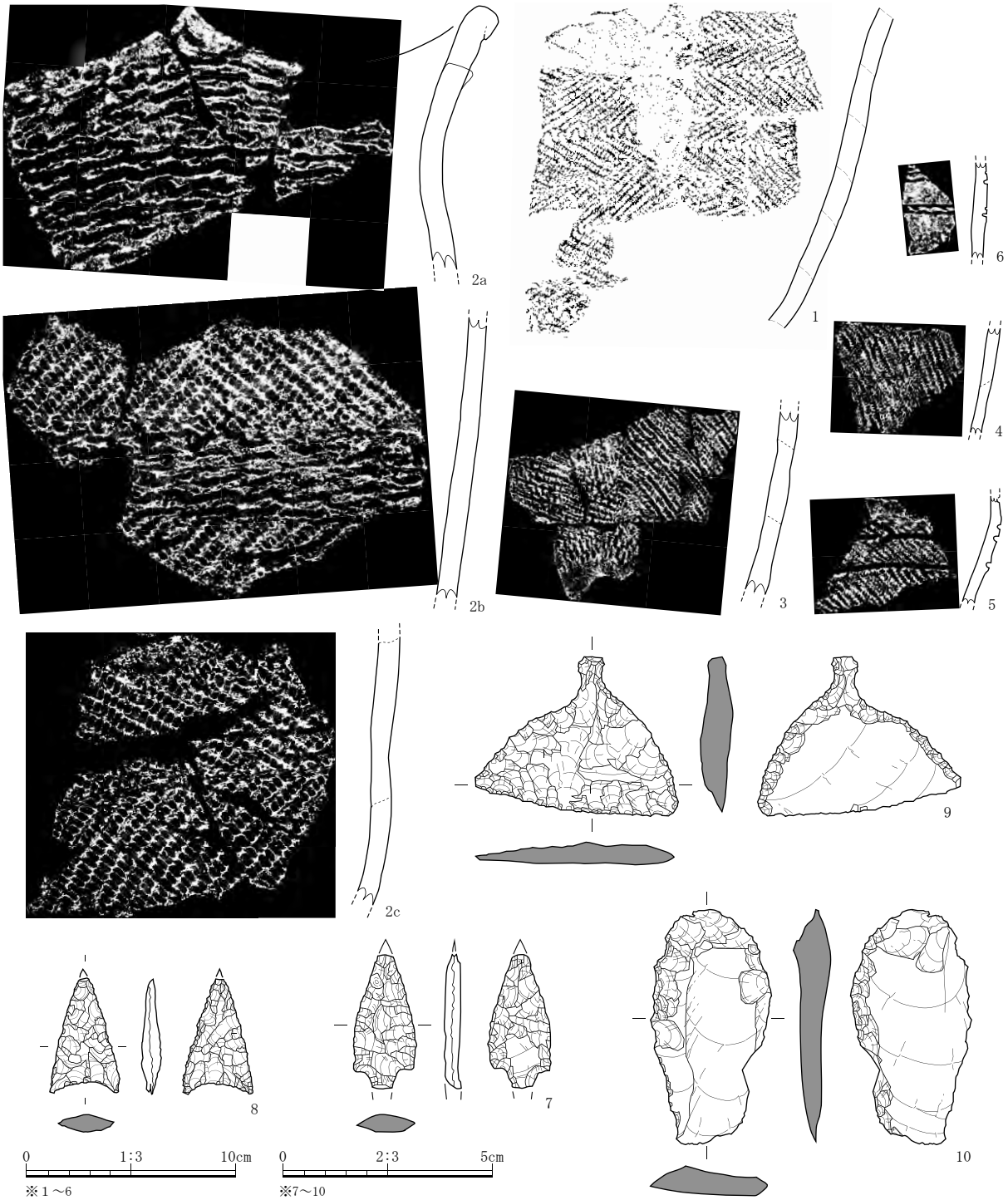
（１）土師器・須恵器

（第 66 ～ 72・74 ～ 79・81 ～ 84 図、写真図版 61 ～ 65）

59 点を掲載した。大半が遺構内から出土しており、竪穴住居の年代観と同じ古墳時代末と平安時代に位置づけられる。検出遺構ごとに掲載する。

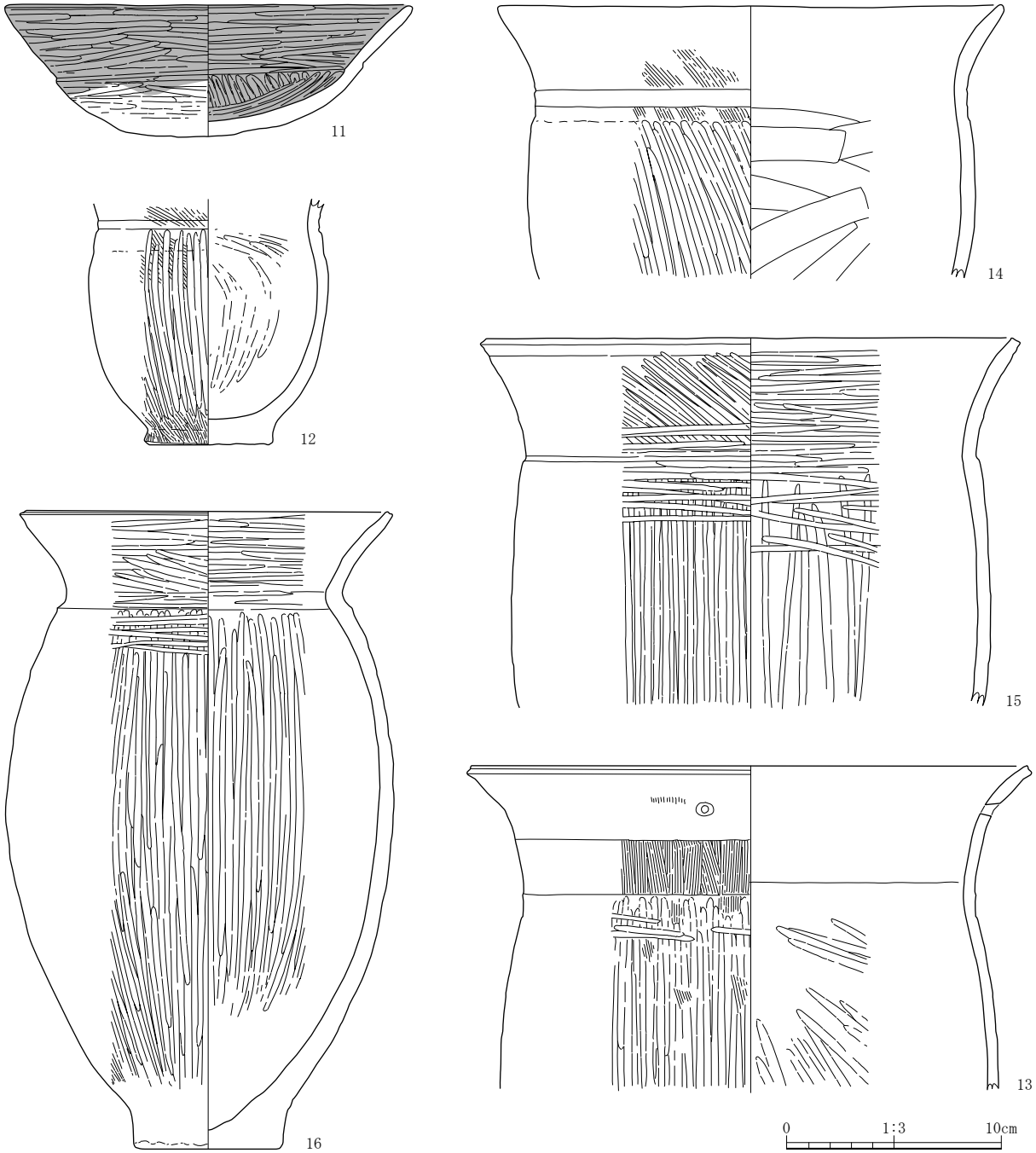
＜SI01 竪穴住居跡＞

11 は、非ロクロ成形内黒の有段杯であるが、外面の段より上方も黒色化する。外面全体と内面の段より上方は横方向の密なミガキで仕上げる。内面の見込みには、見込み内を往復する直線的なミガキが多方向に施されているが、これは工具の動きを上下、あるいは左右に一定にし、土器を回転させながら施したためと思われる。ミガキの端部がＵ字状に折れ曲がっていることから、その際工具を土器から離さずに連続して動かしていたことがうかがえる。12 は、非ロクロ成形で短胴の小型甕である。



第 65 図　縄文・弥生土器、石器

体部外面は縦方向のミガキで仕上げるが、上半と下端部には前段階の縦や斜め方向のハケ目が残る。体部内面もおそらく縦方向のミガキと思われるが、不明瞭で判別し難い。外面全体には煤や炭化物が付着する。13 は、非ロクロ成形の甕である。体部と頸部との境はなだらかで、口縁に向けて緩やかに外反する。頸部が長く、上半には小孔が１つ穿たれている。本来は２孔あったと思われるが、一方は欠損しており確認できない。体部外面は縦方向の密なミガキで、最終段階で頸部下に横方向ミガキも数条施す。ミガキの隙間に僅かに前段階の縦方向のハケ目が認められる。同一個体と思われる体部下半の破片もあり、その下半部外面には縦方向のハケ目が明瞭に残る。体部内面は不明瞭だが粗いミ



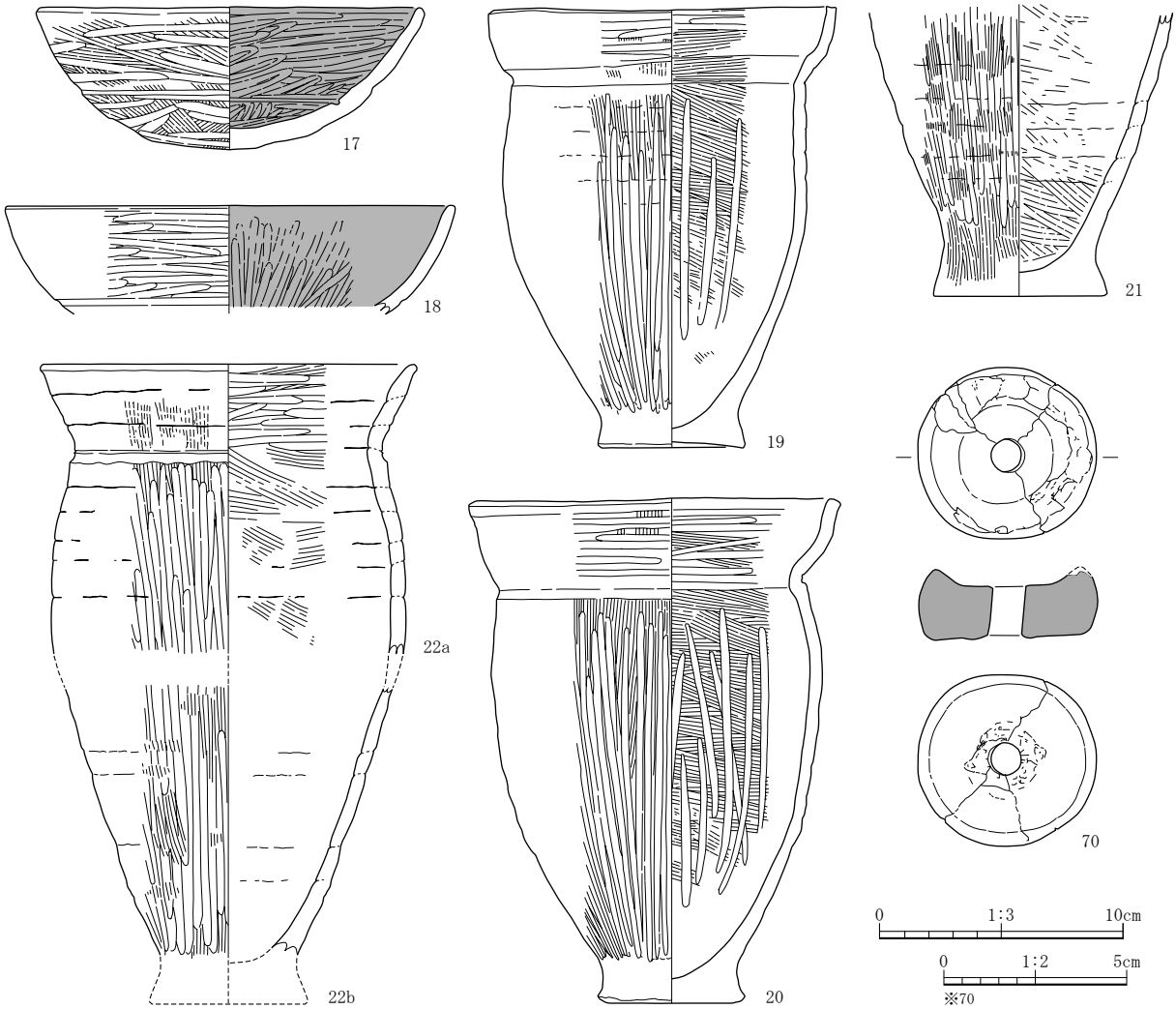
第 66 図　SI01 竪穴住居跡出土遺物

ガキと判断した。頸部内外面はヨコナデだが、外面下半にはナデをめぐらさず、意図的に縦方向のハケ目を残している。口縁端部は凹線状に窪む。14 は、非ロクロ成形の甕である。13 と同じく体部と頸部との境がなだらかで、口縁部に向けて緩やかに外反する。体部外面は縦方向の密なミガキで仕上げる。内面は一見、横あるいは斜め方向のケズリのようにも見えるが、砂粒の動きが顕著でなく板ナデと判断した。頸部内外面は表面が磨滅しており、ミガキが施されていたかの判別できない。外面には斜め方向のハケ目がかすかに認められる。15 は、非ロクロ成形の甕である。体部の膨らみが小さく、頸部は長く外反する。口縁端部はシャープで、外傾する面をもつ。体部内外面ともに縦方向のミガキを施すが、外面は密で、内面は隙間が広く非常に粗い。頸部内面は横方向のミガキで、それが体部の上方にも及ぶ。頸部外面は斜め方向の密なミガキで、最終段階で頸部のくびれ附近に横方向のミガキ

を施して仕上げる。頸部のミガキは上端にまで達しておらず、内外面共に口縁部付近にはヨコナデが残る。全体にハケ目は認められない。16 は、非ロクロ成形の甕である。体部最大径がほぼ中央で、口縁径よりも大きい。体部内外面ともに縦方向の密なミガキによって仕上げる。他の甕のようなハケ目は全く認められない。頸部は大きく外側に開き、その内外面ともに横方向のミガキで、外面のミガキは体部の上端にも及ぶ。口縁端部には凹線状の窪みが認められる。

＜SI02 竪穴住居跡＞

17 は、非ロクロ成形で内黒の有段杯である。丸底で体部は内湾する。外面全体は多方向のハケ目の上に非常に粗い横方向のミガキを施す。内面は外面に比べれば密なミガキだが、雑で若干の隙間が認められる。内面の段は外面の段とは無関係な位置に沈線によって表現しており、11 よりも新しい時期のものと判断できる。18 は、非ロクロ成形で内黒の有段杯である。外面の段はわずかに凹む程度で鈍い。外面は隙間のある横方向の粗いミガキで、内面は縦方向のミガキがみられる。19・20 は、非ロクロ成形の甕である。形態・調整方法ともによく似た甕で、20 が一回り大きい。体部外面上半には縦方向のハケ目が認められるが、最終全体を縦方向の粗いミガキで仕上げる。体部内面は横方向のハケ目上に、間隔の空いた非常に粗いミガキを施す。頸部は内湾し、受口状となり、口縁端部には面をもつ。頸部内外面ともに横方向のミガキを施すが、雑なため、体部から続くハケ目が残る。19



第 67 図　SI02 竪穴住居跡出土遺物

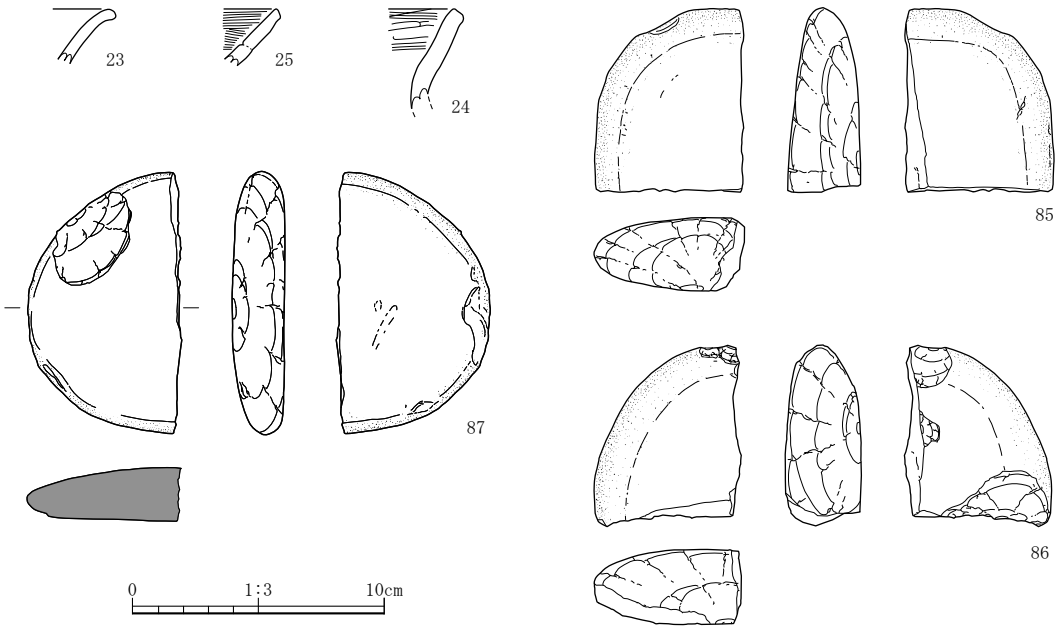
の体部上半には粘土紐の痕跡が明瞭に認められる。21 は、非ロクロ成形の甕である。やや細身で、粘土紐の痕跡が明瞭に残る。外面は縦方向の密なミガキで仕上げるが、全体に前段階の縦方向のハケ目が認められる。内面には横方向のハケ目が残るが、明らかに磨り消されている。外面とよく似た光沢があることから、おそらくミガキによるものと思われるが、単位が不明瞭なため判断できない。22 は、非ロクロ成形の甕である。21 と同一個体ではないかと思うくらい、大きさや調整方法、また色調までよく似ているが、21 と重複する体部下端の破片があることから、別個体と判明した。おそらく同じ工人によって作られたものであろう。体部内面のハケ目は 21 と同様に何らかの工具によって磨り消させている。縦方向の粗いミガキによると判断したが、非常に不明瞭で判断が難しい。体部外面の上半は密なミガキだが、上端部から頸部にかけて前段階の縦方向のハケ目が認められる。体部下半は 21 と酷似したミガキで、上半と異なり前段階のハケ目が多く認められる。下半内面は剥離しており調整不明。頸部は内面のみ横方向のミガキで、口縁部付近に僅かにハケ目が残る。外面はヨコナデのままで、粘土の接合痕が明瞭に残る。

＜SI03 竪穴住居跡＞

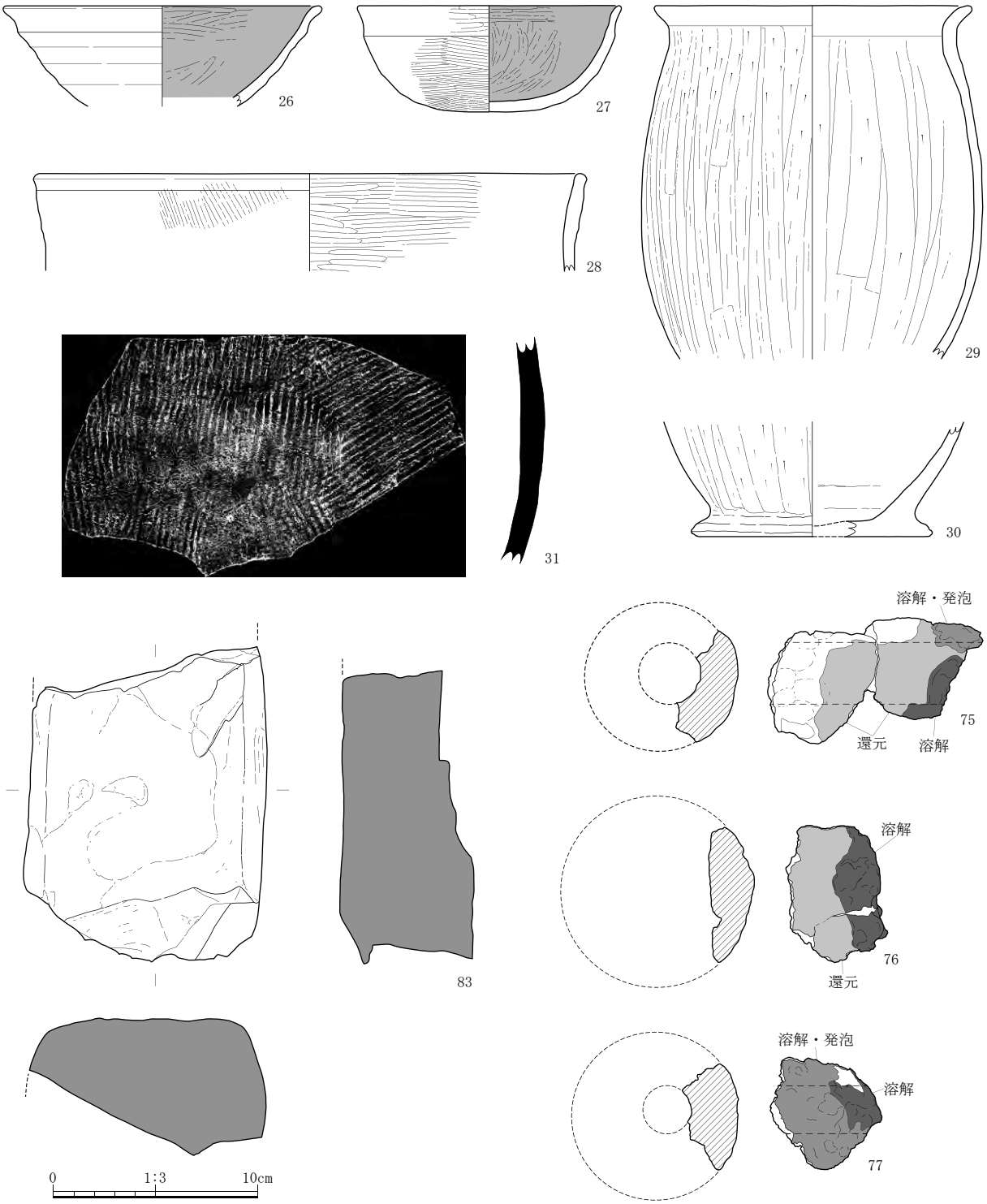
23・24・25 は、非ロクロ成形の甕である。いずれも頸部の小片。23 は上端部を強く外反させ、端部を丸く収める。内外面ともにヨコナデ。24 は端部に外形する面をもつ。内外面ともに横方向のミガキで仕上げるが、外面には前段階の縦方向のハケ目が、内面には横方向もハケ目が僅かに残る。19・20 によく似る。25 は内面にハケ目が明瞭に残る。

＜SI04 竪穴住居跡＞

26 は、ロクロ成形の坏である。外面は最上部のヨコナデがもっとも強く、口縁部が外反する。またそのナデの境が明瞭な段となる。内面は横方向のミガキ。27 は、非ロクロ成形で小型で丸底の杯である。口縁部は外面の強いヨコナデにより外反し、そのナデとの境が僅かな段となる。外面はその段より下部が横方向のハケ、内面は縦方向のミガキで、口縁部内外面は横方向のミガキで仕上げる。28 は、非ロクロ成形の甕の口縁部の小片である。外側への開きが小さく直立気味である。外面は斜

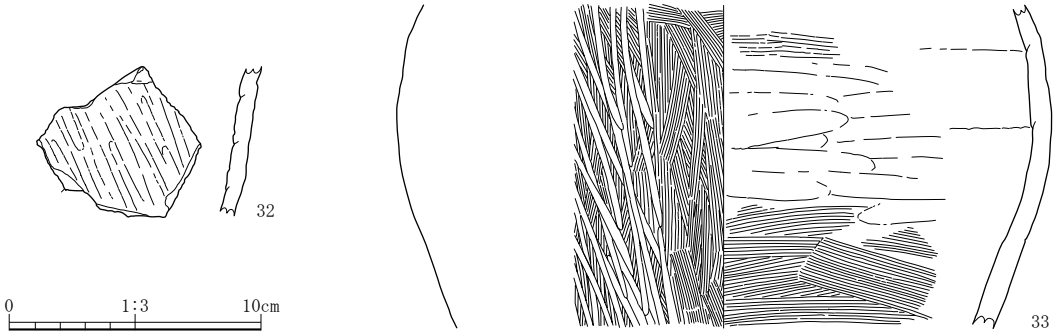


第 68 図　SI03 竪穴住居跡出土遺物



第 69 図　SI04 竪穴住居跡出土遺物

め左上がり、内面は横方向のハケで、内面の一部には僅かに横位のミガキも認められる。29 は、非ロクロ成形の甕である。接合しないが体部片と口縁部片がある。底部は欠損する。口縁部はヨコナデにより短く開く。体部外面は縦方向の板ナデと判断したが、工具によって引っ掻いている様子はどちらかと言えばケズリに近い。内面も板ナデとしたが、こちらは引っ掻くというよりもナデの意識が強い。いくつか砂粒の動きは認められるものの、強いナデのような筋状の痕跡が明瞭に残る。30 は、非ロクロ成形の甕の下端部の破片で、底部は潰れたように外側に大きく張り出す。体部外面はケズリ



第 70 図　SI05 竪穴住居跡出土遺物

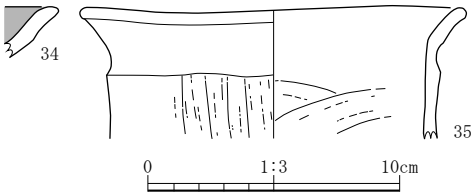
で、内面はナデ。31 は、須恵器甕の体部片である。

＜SI05 竪穴住居跡＞

32 は、非ロクロ成形の甕の体部の小片である。外面は縦方向のミガキ。内面は未調整で、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。33 は、非ロクロ成形の甕の体部片である。外面は細かいハケの後、非常に粗いミガキ。ミガキは全く施されていない部分も見られる。内面は横方向のハケで、体部最大径付近から上は横方向の細かいナデによって磨り消されている。

＜SI06 竪穴住居跡＞

34 は、非ロクロ成形の坏の口縁部の小片である。外面の強いヨコナデにより外反し、そのナデの下端部が僅かな段となる。35 は、非ロクロ成形の甕である。頸部はヨコナデにより強く外反する。体部外面は縦方向、内面は横方向のケズリ。



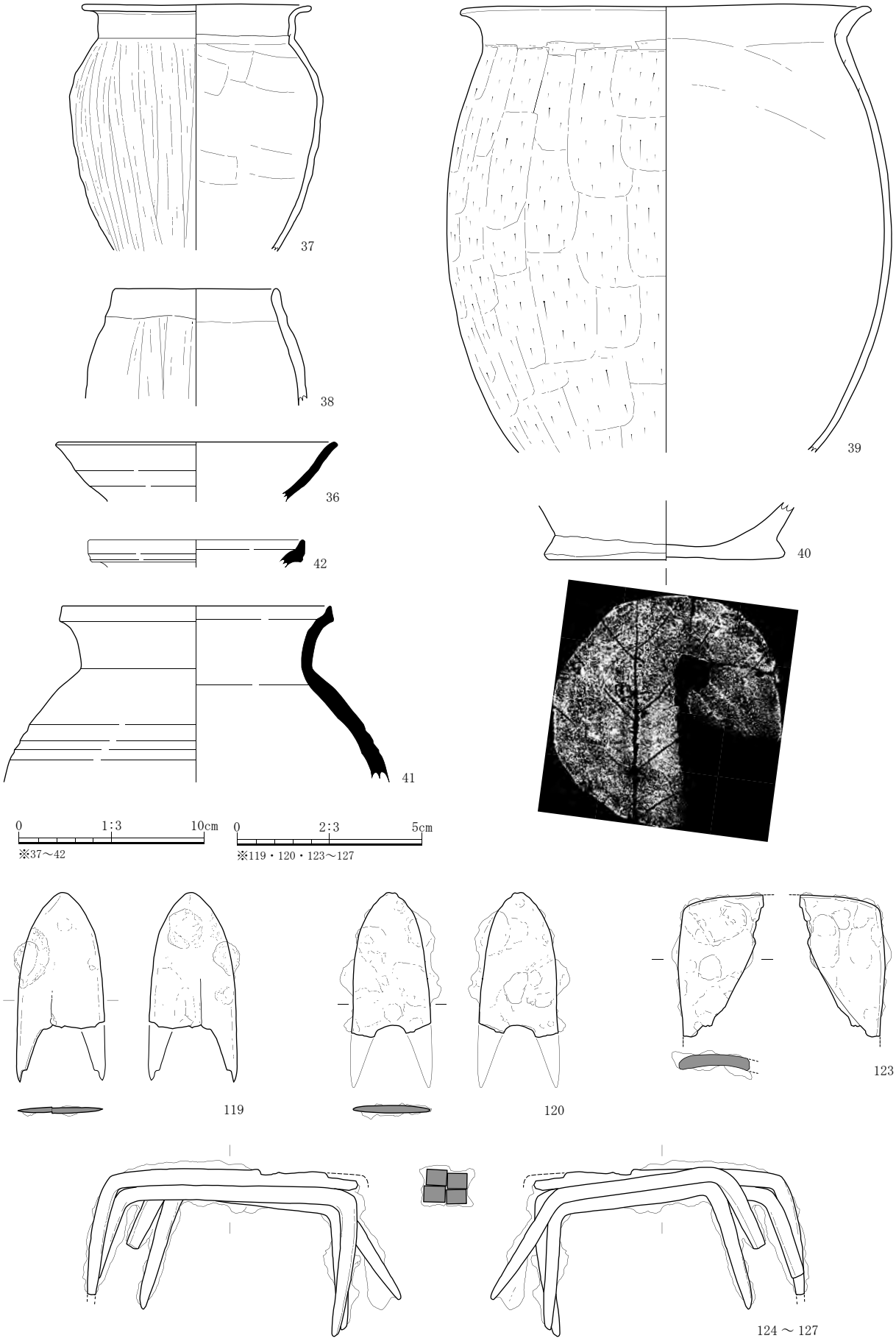
第 71 図　SI06 竪穴住居跡出土遺物

＜SI07 竪穴住居跡＞

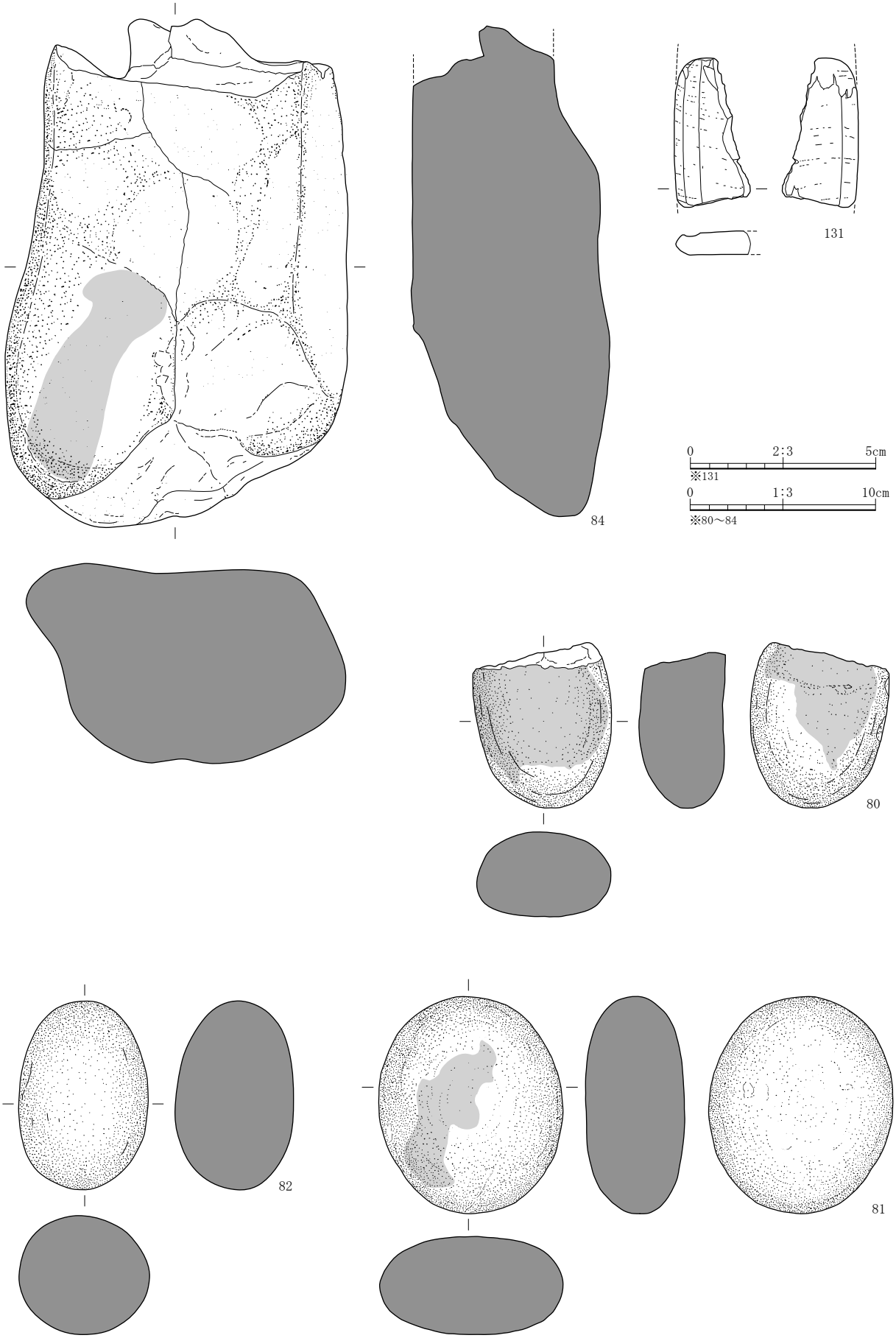
36 は、内黒須恵器坏で、口縁部が外反する。37 は、非ロクロ成形で短胴の甕である。頸部はヨコナデによって折り曲げられ、ほぼ水平方向に強くに開く。体部外面は僅かに砂粒の動きが認められるものの、工具の痕跡が筋状に明瞭に残っていることから、板ナデと判断した。内面は外面のような砂粒の動きが全く認められないことからナデとしたが、上半部、特に口縁部直下には頸部のヨコナデとは明らかに異なる板ナデ状の強い痕跡が残っている。38 は、非ロクロ成形の甕である。ヨコナデによって頸部を表現するが、非常に短く、外反も弱い。体部との境も明瞭でない。体部外面は 4 の外面とよく似ており、縦方向の板ナデと判断した、内面は横方向のナデ。39 は、非ロクロ成形の甕である。口縁部はヨコナデにより短く外反する。体部外面は下から上へのケズリで、内面はナデ。40 は、非ロクロ成形の甕の底部片である。外面に木葉紋が残る。41 は、須恵器壺で、丸い体部から、頸部を外反させ、口縁端部を上方につまみ上げる。42 は、須恵器壺で、長頸壺の口縁部片である。

＜SI09 竪穴住居跡＞

43 は、非ロクロ成形の甕である。37 の甕によく似るが、頸部のヨコナデによる折れ曲がりが 37 よりも弱い。体部外面は縦方向の板ナデで、工具の痕跡が筋状に残る。内面も 12 に似ており、横方向に板ナデ状の強いナデが見られる。



第 72 図　SI07 竪穴住居跡出土遺物（1）



第 73 図　SI07 竪穴住居跡出土遺物（2）

＜SI10 竪穴住居跡＞

44 は、非ロクロ成形の甕の体部片である。内外面ともに縦方向の丁寧なミガキで仕上げる。45 は、非ロクロ成形の甑である。頸部にくびれがなく、体部は丸みをもって内湾する。外面は縦方向、内面は横方向のハケの後、両面ともに僅かな隙間をもつ縦方向のミガキを施し、最終段階で口縁部直下の本来頸部となる部位に横方向のミガキを入れて仕上げる。

＜SI11 竪穴住居跡＞

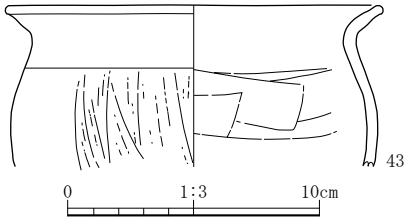
46 は、非ロクロ成形の甕の体部下半部の破片である。外面は 29 の外面に似ており、縦方向の板ナデと判断した。工具の当たり具合によってミガキのような筋状の光沢をもつ部分も見られる。内面は横方向のナデ。底部の大部分は欠損するが、僅かに木葉紋が認められる。

＜SI12 竪穴住居跡＞

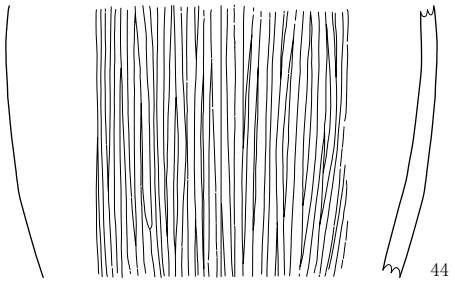
47 は、非ロクロ成形内黒の坏である。深い椀形で、外面には口縁部のヨコナデによって段を作る。口縁端部は外側に向かってやや尖り気味となる。底部はケズリによって丸底とし、そのケズリとナデの後に横方向のミガキを施すが、底部にまでは及んでいない。表面の磨滅によって磨り消えた可能性がある。内面も横方向のミガキで仕上げる。器壁が厚い。48 は、非ロクロ成形内黒の坏である。器壁が非常に厚い。体部外面はケズリで、口縁部付近にはヨコナデが認められる。表面が磨滅しておりミガキの有無は不明。ヨコナデの下端部には段の名残の浅い沈線がめぐる。内面は横方向のミガキで仕上げる。49 は、非ロクロ成形の甕の口縁部片である。内外面ともにヨコナデ。50 は、非ロクロ成形の甕の底部片である。外面は縦方向のケズリ、内面は横方向のハケ。51 は、非ロクロ成形の甕の底部片である。外面には縦、一部横方向に筋状の工痕が見られる。ケズリのような砂粒の動きは顕著でなく、板ナデと判断した。内面は横方向のケズリ。

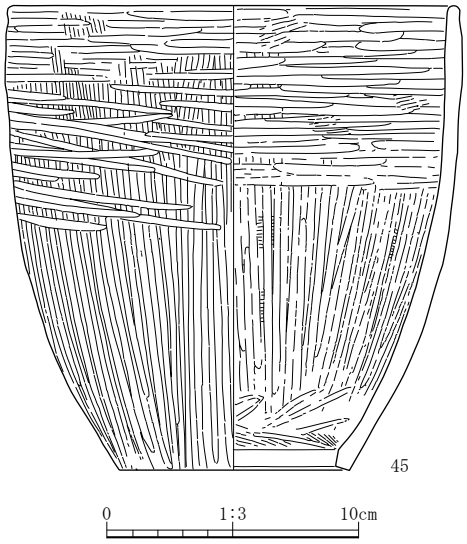
＜SI13 竪穴住居跡＞

52 は、非ロクロ成形内黒の椀形の有段杯で、口縁部はヨコナデにより外反する。丸底で、外面は底部まで密なミガキで仕上げるが、段より上には前段

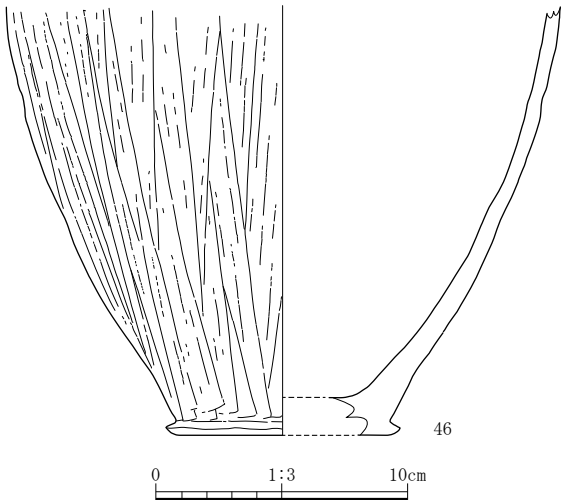


第 74 図　SI09 竪穴住居跡出土遺物

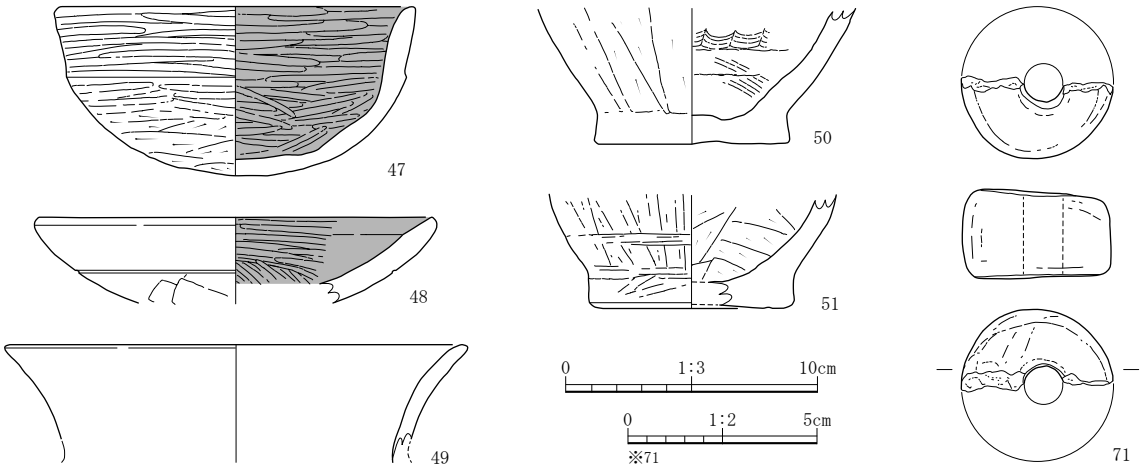




第 75 図　SI10 竪穴住居跡出土遺物



第 76 図　SI11 竪穴住居跡出土遺物



第 77 図　SI12 竪穴住居跡出土遺物

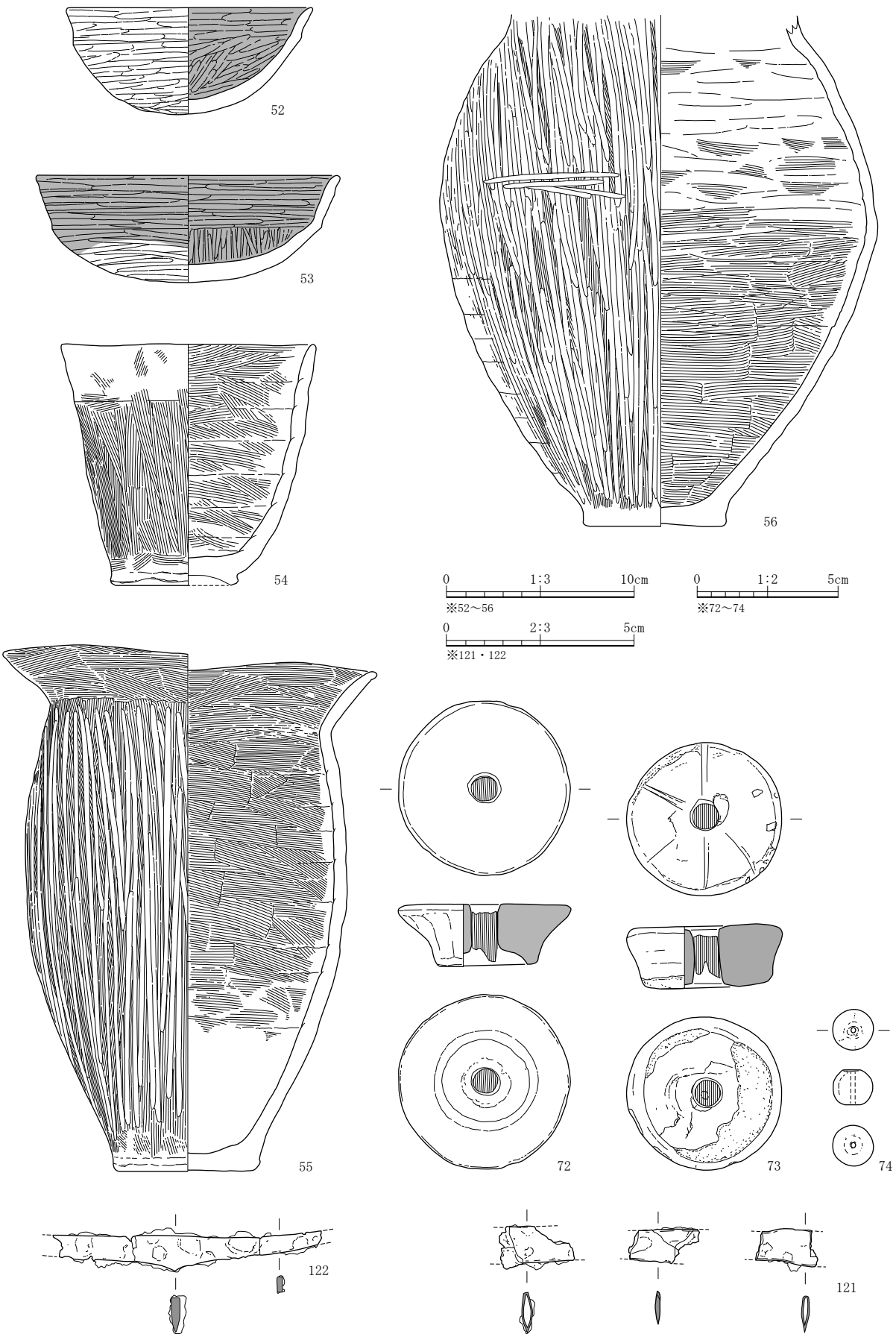
階の強いヨコナデが筋状に残る。内面は不定方向のミガキで、口縁部のみ横方向となる。53 は、非ロクロ成形内黒の丸底の有段坏である。外面は横方向のミガキだが底部までは及ばない。内面見込みは一方向のミガキで、段より上は外面同様の横方向のミガキで仕上げる。54 は、非ロクロ成形の甕である。頸部にくびれがなく、体部から口縁部までラッパ状に直線的に開く。外面は縦方向のハケであるが、頸部から口縁部にかけてはハケ目が及ばず、ヨコナデのままである。ただしこのヨコナデは２筋状に明瞭に残っており、ナデの前に横方向にハケ目をめぐらせていた可能性がある。内面は口縁端部まで横方向のハケであるが、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。55 は、非ロクロ成形の甕で、ほぼ完形である。内面から頸部外面にかけて横方向の雑なハケで、その後体部外面に縦方向のハケを施し、隙間の多い粗いミガキで仕上げる。頸部へのヨコナデは認められない。56 は、非ロクロ成形の甕である。頸部以上を欠損する。外面は丁寧なミガキで仕上げるが、その僅かな隙間に前段階の縦方向のハケ目が認められる。ミガキは縦方向であるが、体部最大径付近の一部には横方向のものも見られる。内面は丁寧なヨコハケであるが、体部最大径付近より上は横方向の強いナデによって磨り消されている。

＜SI14 竪穴住居跡＞

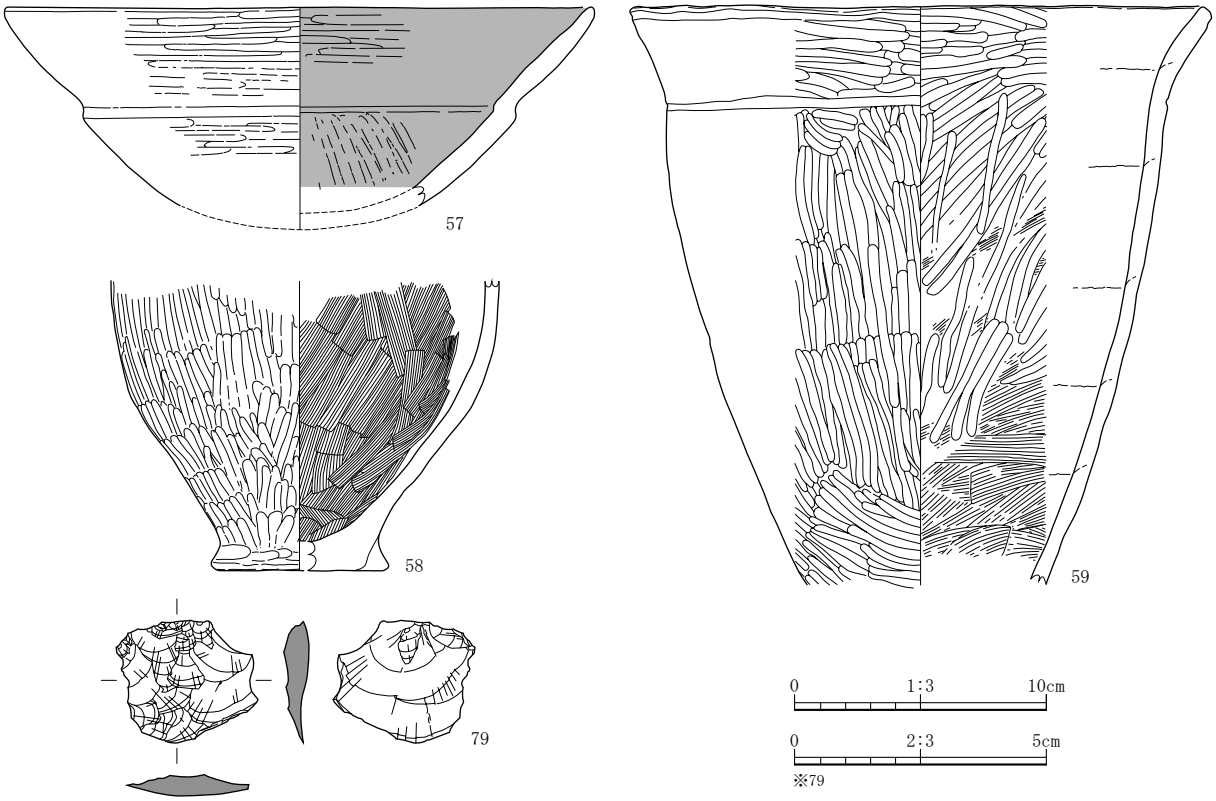
57 は、非ロクロ成形で内黒の有段杯で、内外の段は明瞭である。やや大型で、器壁が厚い。内湾が鈍く直線的に開く。外面は横方向のミガキであるが、段より下方は不明瞭である。内面はミガキによって光沢をもつものの、平滑に仕上がっておりミガキの単位はほとんど確認できない。58 は、非ロクロ成形の甕で、体部下半～底部が残存する。体部から底部にかけて急に窄まる器形で、底部付近が外側に張り出している。内面は密な縦ミガキで、底部周辺のみ横ミガキ。外面は、縦ハケメ調整。59 は、非ロクロ成形の甑で、口縁から体部下半が残存する。底部付近から口縁にかけて直線的に開く器形で、口縁部は、やや外反する。頸部に沈線によって区画を行っている。外面は、頸部より上が横位ミガキ。体部は縦ミガキだが、底部付近は横位ミガキ。内面は横位ハケメ後に口縁部付近は密な横位ミガキ。下半は斜位となり、粗くなる。

＜SI16 竪穴住居跡＞

60 は、非ロクロ有段内黒坏で、口縁から底部が残存する。底部丸底で、口縁にかけて緩やかに立ち上がる器形で、頸部段より上がやや外反する。外面は、口縁部が横位ハケメ後ミガキ、体～底部は



第 78 図　SI13 竪穴住居跡出土遺物

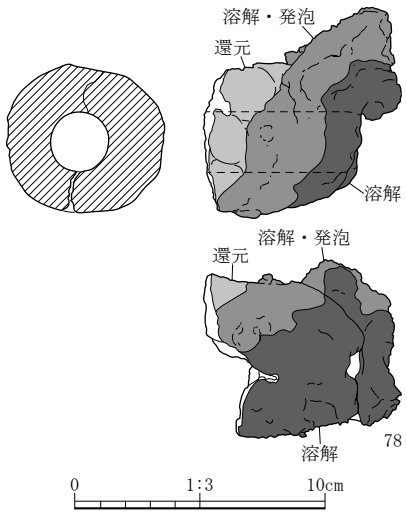


第 79 図　SI14 竪穴住居跡出土遺物

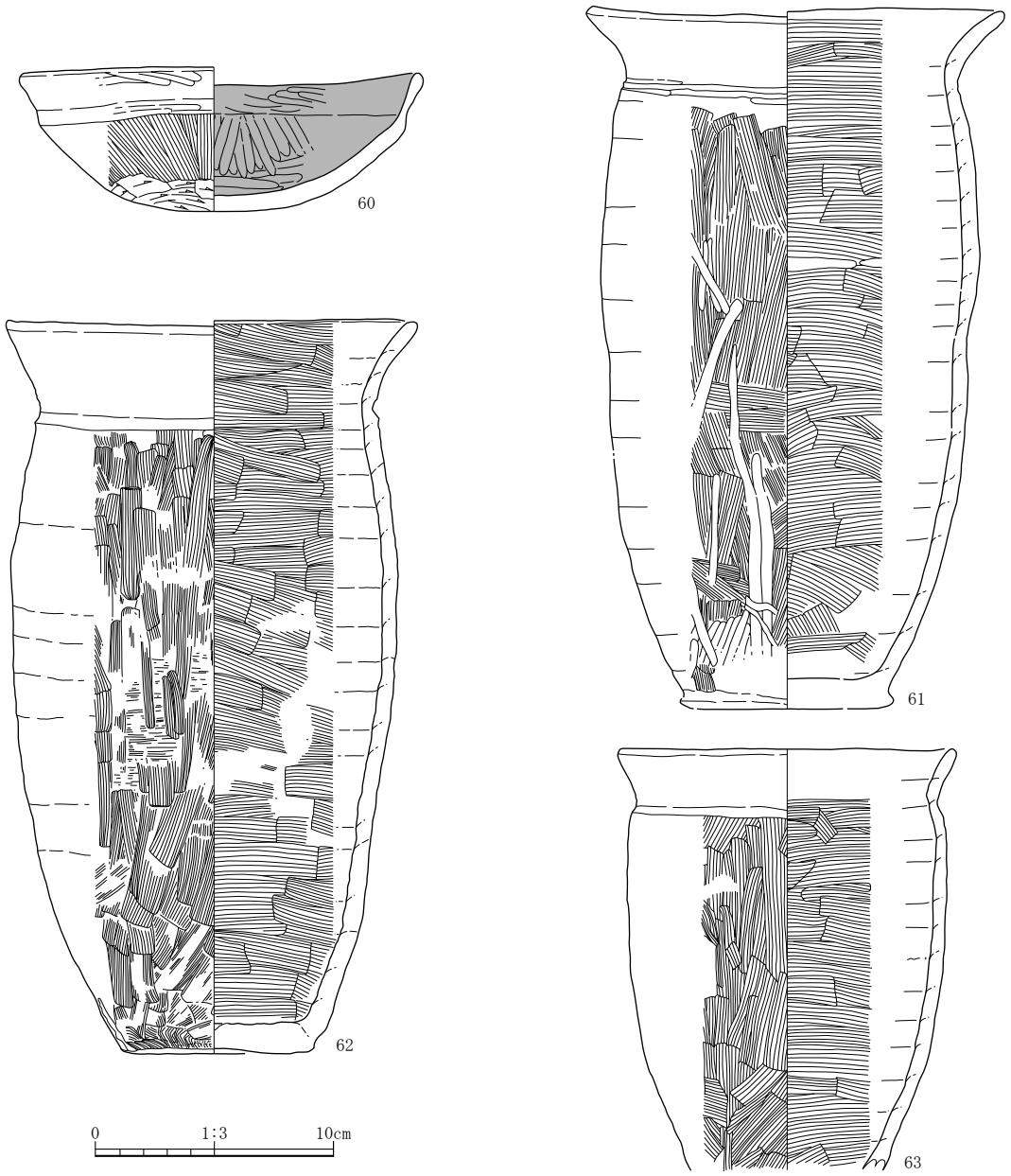
横位ケズリ後縦にハケメ調整を施している。内面は、横位ミガキ後に体部を縦位ミガキ、最後に口縁を横位ミガキ調整。61 は、非ロクロ成形の甕で、口縁～底部が残存する。口縁部に最大径を持つ長胴の甕で頸部に沈線を有する。また、底部付近がやや外側に張り出す。外面は、体部が縦ハケメ後に下半のみ粗い縦位ミガキ、口縁は横位ナデのみ。内面は、横位ハケメ調整されている。62 は、61 とほぼ同一の器形で、口縁に最大径を持つ長胴の甕である。略完形で、頸部に段を有する。体部は、横位ハケメ後に密な縦位ハケメ調整で、口縁は横位ナデのみである。内面は、横位ハケメのみで仕上げられている。63 は、非ロクロ成形のやや小さめの甕で、口縁部から体部下半が残存する。口縁部に最大径を持ち、頸部に段を有する。外面は、体部から頸部付近にかけて縦位ハケメ、口縁は横位ナデのみである。内面は、体部から底部付近にかけて横位ハケメ、口縁部は横位ナデのみ。

＜方形周溝 1 ＞

64 は、ロクロ成形の坏である。底部は糸切り後未調整だが、体部との境には 65 のような明瞭な段がなくなだらかである。体部は内湾し、外面には口縁部下方約 1 センチの箇所に強いヨコナデによる凹線状の窪みが 1 条めぐる。体部外面はやや粗い横方向のミガキで、この窪みには意図的にミガキを施していない。内面は細かい密なミガキで光沢をもつ。65 は、ロクロ成形による坏である。体部は丸みをもって内湾し、口縁部が外反する。底部は糸切り未調整。内面は黒色処理されるが、磨滅し調整は不明。66 は、ロクロ成形内黒坏の底部片である。外面



第 80 図　円形周溝 1 出土遺物



第 81 図　SI16 竪穴住居跡出土遺物

は糸切り後未調整。内面見込みは放射状のナデ。

67 は、ロクロ成形内黒坏の底部片である。外面は糸切り後未調整で、内面はミガキ。

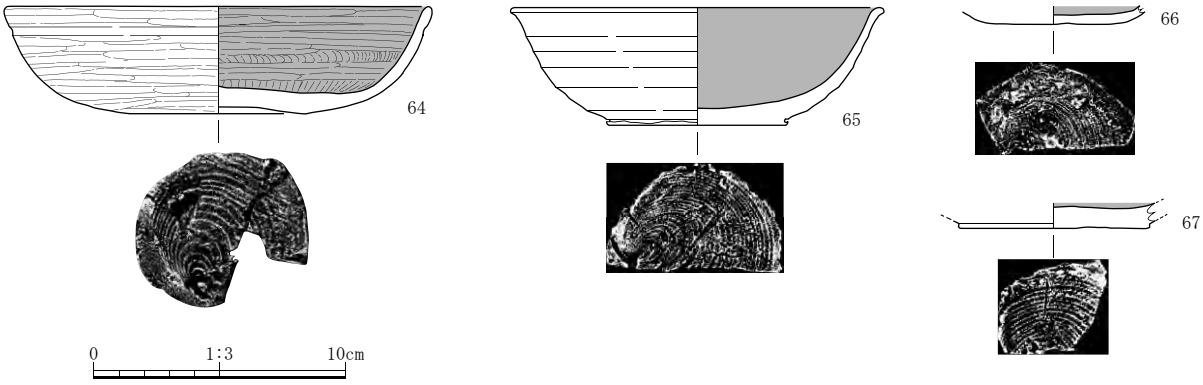
＜SD03 溝跡＞

68 は、ロクロ成形による坏である。底部は糸切りである。内面は黒色処理され、見込みには暗文風の放射状ミガキを施す。ミガキの幅は 6 ミリ程度とやや太い。外面に「十」の墨書あり。

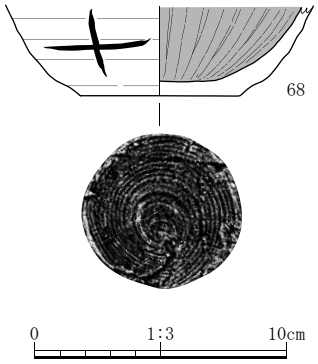
＜遺構外＞

69 は、須恵器甕の体部の小片である。外面はタタキで、内面には布目が認められる。瓦か。

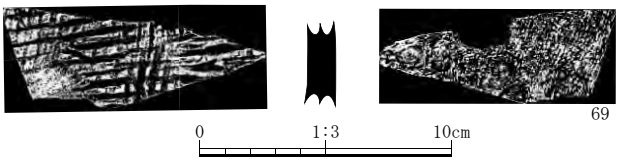
（伊藤）



第 82 図　方形周溝 1 出土遺物



第 83 図　SD03 溝跡出土遺物



第 84 図　遺構外出土遺物

（2）土　製　品

（第 67・69・77・78・80 図、写真図版 65）

70 ～ 73 の土製紡錘車 4 点、74 の土玉 1 点、75 ～ 78 の羽口 4 点の計 9 点を掲載した。70 は、表面が窪む形状で、裏面には孔を穿った際の粘土の盛り上がりがみられる。71 は、半分を欠損している。72 は、表面が窪む逆台形の断面形状を呈しており、孔の中に炭化した芯棒が残存している。73 も、72 に似た断面形状で、孔の中には同じく芯棒が残存している。また、裏面にはひもを縛った痕跡か放射状に傷が残る。74 は、球型中央に径 1 ㎜程の孔が穿たれている。器面はきれいに整えられている。75 ～ 77 は、SI04 から出土した羽口で、鍛冶に関連する遺物である。いずれも先端部付近が残存したもので、75 は内径が 3.1㎝、77 は内径 2.4㎝とみられ、小型である。SI04 床面から鍛冶炉 1 基が見つかっていることから、それに用いられたと考えられる。78 は、先端部の内径が 2.4㎝の羽口で、円形周溝 1 から出土した。SI04 出土の羽口とほぼ同じサイズであることから、鍛冶に使用されたものと推測される。（北田）

（3）石　　器

（第 68・69・73・79 図、写真図版 66・67）

79 ～ 118 の 40 点を掲載した（88 ～ 118 は写真のみ掲載）。79 は、SI14 床面から出土した黒曜石製の剥片である。古墳末の竪穴住居から出土しており、スクレイパーを製作する際に産出されたものと推測される。産地同定は実施していない。80 ～ 82 は、SI07 床面から出土した磨石である。古代に使用されたものである。83・84 は台石で、いずれも鍛冶炉のある竪穴住居のピット・床面から出土していることから、鉄床石として用いられた可能性がある。85 ～ 87 は、意図的な打撃によって割られた礫で、古墳時代にみられる方割石に類似する。88 ～ 118 は、遺構内を中心に出土した琥珀原石である。いずれも細片で、加工は施されていない。（北田）

（4）金　属　製　品

（第72・78図、写真図版67）

119～128の10点を掲載した。121・122刀子は、SI13出土で、それ以外は全てSI07から出土している。119・120は、鉄鏃で、いずれも無茎である。返し部分を欠損しているが、ほぼ同じ形状とみられる。121・122は刀子で、いずれも腐食が著しく、刃部を欠損している。123は、鉄鍋とみられるが、他の種類の可能性もある。124～127は、SI07床面から一括で出土した鎹で、錆によって固着している。断面四角形で、ほぼ同サイズである。（北田）

（5）木　製　品

（第73図、写真図版68）

131の1点を掲載した。焼失したSI07床面から出土した、盤状の木製品である。全体に炭化しており、不明瞭であるが、縁部分に窪みを有する。赤漆の可能性あり。（北田）

（6）動 物 遺 存 体

（写真図版68）

SI11埋土下位から一括で出土した貝類を写真掲載した（132）。詳細は、Ⅵ-3章貝類同定を参照されたい。同定結果から、ウニ類の殻・棘のほか、ヒメコザラ・エゾアワビ・チシマフジツボの殻が確認されている。（北田）

4　近　　世

（1）銭　　貨

（写真図版68）

129・130の2点が出土し、いずれも掲載した。青銅製の寛永通寶で、字体から新寛永と考えられる。新寛永は、寛文8（1668）年以降に鋳造された銅銭である。（北田）

第２表　柱穴状ピット計測表

（　）：残存値

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P１	X=12172.3 Y=83235.5	45	43	33	30	17	25.329	
P２								欠番
P３								欠番
P４	X=12171.6 Y=83232.3	45	43	20	8	20	25.278	
P５	X=12169.3 Y=83233.2	55	50	38	30	32	25.218	
P６	X=12175.3 Y=83230.7	35	30	8	8	21	25.179	SB06
P７	X=12174.4 Y=83229.6	45	38	18	15	54	24.849	SB06
P８	X=12173.0 Y=83230.3	33	25	13	10	21	25.038	SB06
P９	X=12173.7 Y=83228.1	35	33	13	10	64	24.780	SB06
P10	X=12172.2 Y=83228.7	48	43	15	13	54	24.879	SB06
P11	X=12169.9 Y=83231.6	30	25	8	5	33	25.158	
P12	X=12172.7 Y=83226.5	73	63	18	15	101	24.429	SB06
P13	X=12171.4 Y=83227.0	28	25	18	10	35	25.050	SB06
P14	X=12170.7 Y=83234.6	45	45	30	25	26	25.248	
P15	X=12169.5 Y=83228.6	25	23	10	8	33	25.170	
P16	X=12167.9 Y=83229.9	40	35	20	20	34	25.149	
P17	X=12169.2 Y=83227.8	40	33	25	18	18	25.350	
P18	X=12168.9 Y=83227.9	33	30	28	18	16	25.359	
P19	X=12168.9 Y=83228.2	25	25	18	15	13	25.368	
P20	X=12168.4 Y=83228.1	40	38	28	23	18	25.350	
P21	X=12164.4 Y=83230.4	30	28	15	15	28	25.449	
P22	X=12165.5 Y=83236.0	55	43	10	8	62	25.059	
P23	X=12164.9 Y=83236.6	55	50	10	10	70	24.978	
P24	X=12164.7 Y=83236.3	30	28	15	15	19	25.500	
P25	X=12164.7 Y=83237.7	38	35	20	15	16	25.548	
P26	X=12162.5 Y=83237.4	50	45	15	10	70	25.029	
P27	X=12161.6 Y=83237.8	50	35	20	15	21	25.578	
P28	X=12161.4 Y=83239.1	35	30	18	5	17	25.668	
P29	X=12162.0 Y=83238.4	38	35	13	10	32	25.458	
P30	X=12160.6 Y=83238.3	48	40	10	5	26	25.620	
P31	X=12164.7 Y=83233.8	55	53	23	23	35	25.308	
P32	X=12163.7 Y=83231.8	28	25	11	10	50	25.239	
P33	X=12163.1 Y=83231.9	35	30	13	13	65	25.110	
P34	X=12163.1 Y=83232.8	35	35	11	10	20	25.518	
P35	X=12160.4 Y=83235.1	38	35	15	10	38	25.440	
P36	X=12160.9 Y=83232.9	60	50	15	15	53	25.260	
P37	X=12162.5 Y=83231.5	75	58	18	15	38	25.410	
P38	X=12174.3 Y=83225.2	43	(33)	18	15	36	24.999	SB06
P39	X=12173.4 Y=83225.8	25	23	18	15	16	25.230	
P40	X=12171.7 Y=83224.5	48	48	20	13	47	24.978	SB06

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P41	X=12169.2 Y=83225.8	45	35	20	18	74	24.780	
P42	X=12157.3 Y=83230.5	25	20	18	15	12	25.758	
P43								欠番
P44	X=12162.8 Y=83223.8	50	45	23	18	43	25.260	
P45	X=12164.7 Y=83223.0	40	38	20	20	45	25.188	
P46	X=12166.5 Y=83222.4	33	30	20	15	43	25.158	
P47	X=12168.6 Y=83221.6	25	(15)	15	15	34	25.179	
P48	X=12169.9 Y=83221.1	28	(10)	15	(3)	41	25.080	
P49	X=12171.3 Y=83221.1	25	25	13	10	41	25.008	
P50	X=12172.5 Y=83223.1	25	23	15	13	25	25.140	
P51	X=12172.2 Y=83221.1	23	(18)	(15)	10	16	25.329	
P52	X=12172.9 Y=83222.3	25	(10)	16	5	34	25.158	
P53	X=12173.6 Y=83223.6	18	(5)	13	8	31	25.098	
P54	X=12170.5 Y=83226.6	25	23	20	15	16	25.338	
P55	X=12168.4 Y=83226.7	53	45	18	13	39	25.179	
P56	X=12153.7 Y=83228.8	18	15	15	8	14	25.920	
P57	X=12153.5 Y=83230.5	23	18	15	13	19	25.899	
P58	X=12166.8 Y=83224.0	40	35	13	10	33	25.230	
P59	X=12176.5 Y=83230.4	50	50	15	10	45	24.939	SB06
P60	X=12175.1 Y=83231.0	55	48	15	10	42	24.948	SB06
P61	X=12173.7 Y=83231.3	80	70	15	10	52	24.909	SB06
P101	X=12105.1 Y=83256.7	45	44	28	28	37	25.479	
P102	X=12102.4 Y=83255.9	(41)	38	16	13	47	25.479	
P103	X=12101.8 Y=83257.2	35	33	33	23	63	25.320	
P104	X=12098.7 Y=83256.8	28	25	18	15	59	25.410	SB02
P105	X=12098.9 Y=83256.9	(33)	25	(19)	13	45	25.569	SB02
P106	X=12096.9 Y=83258.1	28	25	19	18	31	25.659	SB02
P107	X=12095.6 Y=83258.9	28	23	18	15	30	25.668	SB02
P108	X=12094.1 Y=83259.6	28	25	18	13	48	25.470	
P109	X=12094.0 Y=83260.2	25	(23)	18	14	61	25.329	SB02
P110	X=12093.9 Y=83260.0	(40)	(36)	26	21	39	25.548	SB02
P111	X=12092.7 Y=83258.4	28	19	18	15	69	25.260	
P112	X=12092.2 Y=83257.6	35	33	21	16	61	25.350	
P113	X=12093.2 Y=83259.1	38	29	18	12	40	25.560	SB02
P114	X=12090.2 Y=83262.4	23	23	18	16	37	25.449	
P115	X=12089.4 Y=83264.9	35	30	25	14	49	25.248	
P116	X=12095.0 Y=83260.4	23	23	18	16	15	25.770	
P117	X=12087.7 Y=83265.0	30	23	15	13	47	25.209	
P118	X=12085.9 Y=83265.8	25	23	15	14	34	25.080	
P119	X=12085.3 Y=83264.8	32	25	23	20	94	24.498	塀跡１

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P120	X=12085.0 Y=83265.1	28	23	18	16	34	25.098	
P121	X=12082.6 Y=83260.4	38	35	28	23	55	25.059	塀跡 1
P122	X=12087.0 Y=83257.7	45	38	28	25	89	24.969	
P123	X=12098.8 Y=83265.8	30	28	18	15	30	25.488	
P124	X=12095.4 Y=83262.6	28	25	20	15	50	25.350	SB02
P125	X=12098.3 Y=83265.4	45	23	15	13	47	25.350	
P126	X=12098.2 Y=83266.1	30	28	18	10	43	25.350	
P127	X=12095.8 Y=83268.0	33	28	16	15	42	25.308	
P128	X=12096.7 Y=83264.5	33	28	15	13	54	25.278	
P129	X=12098.6 Y=83269.8	38	33	16	13	46	25.248	
P130	X=12091.6 Y=83269.7	45	43	26	23	56	25.110	
P131	X=12087.6 Y=83256.4	33	28	13	10	43	25.410	
P132	X=12088.9 Y=83255.9	33	25	20	8	45	25.380	
P133	X=12104.9 Y=83262.1	35	30	18	13	31	25.500	
P134	X=12104.7 Y=83277.3	33	33	15	14	45	25.038	
P135	X=12104.6 Y=83277.8	36	28	17	16	45	25.008	
P136	X=12081.1 Y=83256.7	35	34	18	15	51	25.170	
P137	X=12081.8 Y=83256.7	30	28	16	15	31	25.419	
P138	X=12083.5 Y=83255.9	36	30	15	13	72	25.029	
P139	X=12083.8 Y=83255.9	31	25	20	18	28	25.479	
P140	X=12085.1 Y=83255.9	28	25	15	13	66	25.080	
P141	X=12085.4 Y=83256.2	30	25	15	10	88	24.939	
P142	X=12085.7 Y=83255.7	38	30	23	20	90	24.918	
P143	X=12087.3 Y=83256.6	25	23	15	13	16	25.698	
P144	X=12106.5 Y=83262.1	45	38	29	25	18	25.599	
P145	X=12085.9 Y=83275.9	35	33	23	18	22	24.840	
P146	X=12083.6 Y=83258.9	45	35	20	18	50	25.158	
P147	X=12083.9 Y=83258.0	40	35	28	20	39	25.329	
P148	X=12092.8 Y=83264.8	39	28	20	15	42	25.389	
P149	X=12103.5 Y=83257.9	38	(30)	20	12	46	25.488	
P150	X=12103.4 Y=83258.1	35	(31)	13	12	52	25.428	
P151	X=12101.9 Y=83259.0	40	30	18	18	26	25.668	
P152	X=12100.6 Y=83259.6	40	35	25	20	28	25.650	SB02
P153	X=12100.8 Y=83260.6	31	26	23	19	17	25.710	
P154	X=12104.1 Y=83259.5	30	25	19	13	32	25.548	
P155	X=12104.3 Y=83261.7	30	25	13	8	15	25.668	
P156	X=12101.6 Y=83263.1	28	25	18	15	22	25.599	
P157	X=12098.7 Y=83264.6	34	28	23	16	41	25.419	
P158	X=12098.4 Y=83265.0	30	23	16	15	38	25.440	
P159	X=12088.8 Y=83263.6	28	23	18	15	48	25.269	
P160	X=12103.9 Y=83260.8	33	25	19	13	17	25.680	SB01

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P161	X=12102.7 Y=83261.7	46	40	23	12	44	25.419	SB01
P162	X=12100.7 Y=83263.0	(38)	33	20	18	67	25.140	SB01
P163	X=12098.8 Y=83264.1	35	28	20	16	61	25.248	SB01
P164	X=12096.9 Y=83265.1	38	28	28	18	43	25.380	SB01
P165	X=12096.7 Y=83265.3	(18)	26	(18)	24	18	25.620	
P166	X=12097.1 Y=83265.0	45	35	23	18	52	25.299	
P167	X=12100.8 Y=83255.4	38	34	19	15	65	25.320	SB01
P168	X=12099.3 Y=83256.1	42	38	38	28	52	25.479	SB01
P169	X=12097.5 Y=83257.3	40	33	20	19	68	25.320	SB01
P170	X=12095.6 Y=83258.4	38	33	30	26	37	25.608	SB01
P171	X=12093.6 Y=83259.7	55	33	42	27	68	25.278	SB01
P172	X=12103.2 Y=83259.6	38	34	33	28	50	25.389	SB01
P173	X=12102.0 Y=83257.6	40	38	30	27	60	25.359	SB01
P174	X=12101.9 Y=83260.3	37	34	35	23	41	25.488	SB01
P175	X=12100.7 Y=83258.2	39	35	29	24	62	25.368	SB01
P176	X=12096.0 Y=83263.8	42	39	27	25	47	25.380	SB01
P177	X=12094.8 Y=83261.7	45	43	36	30	65	25.230	SB01
P178	X=12093.6 Y=83262.5	35	30	26	24	52	25.359	SB01
P179	X=12099.6 Y=83260.2	30	28	23	17	36	25.590	
P180	X=12098.5 Y=83260.8	35	29	25	19	36	25.599	SB02
P181	X=12096.8 Y=83262.0	30	28	19	11	45	25.440	SB02
P182	X=12096.2 Y=83257.1	33	28	20	18	33	25.650	SB02
P183	X=12094.2 Y=83258.3	37	32	24	23	41	25.569	SB02
P184	X=12081.1 Y=83258.1	48	43	25	23	50	25.038	
P185	X=12081.3 Y=83258.4	38	30	18	15	55	24.918	塀跡 1
P186	X=12080.9 Y=83260.4	30	23	20	13	40	25.149	
P187	X=12095.9 Y=83261.0	40	38	35	32	45	25.479	
P188	X=12093.9 Y=83256.7	40	30	25	20	21	25.788	
P189	X=12106.0 Y=83266.0	40	35	24	15	19	25.479	
P190	X=12106.8 Y=83268.6	26	22	19	13	40	25.200	
P191	X=12105.5 Y=83269.6	25	25	18	17	24	25.359	
P192	X=12107.2 Y=83270.3	31	24	19	15	31	25.269	
P193	X=12083.9 Y=83262.6	36	35	21	21	53	24.990	塀跡 1
P194	X=12086.2 Y=83256.8	36	19	23	12	42	25.350	
P195	X=12087.8 Y=83258.9	28	26	26	20	46	25.368	
P196	X=12091.2 Y=83258.4	50	45	33	30	54	25.389	
P197	X=12100.7 Y=83263.3	(35)	30	23	15	55	25.260	
P198	X=12100.4 Y=83261.1	42	36	29	19	37	25.518	
P199	X=12103.4 Y=83259.8	19	14	11	10	11	25.749	
P200	X=12090.6 Y=83278.3	28	20	16	10	23	25.248	
P201	X=12094.6 Y=83277.7	40	35	20	20	42	25.110	

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P202	X=12095.3 Y=83277.7	23	18	18	12	13	25.398	
P203	X=12097.1 Y=83278.3	35	30	23	20	32	25.170	
P204	X=12098.6 Y=83278.7	34	31	23	20	38	25.110	
P205	X=12081.1 Y=83260.1	(28)	26	16	12	31	25.230	
P206	X=12084.4 Y=83257.2	40	18	29	12	45	25.218	
P207	X=12084.9 Y=83258.2	33	30	18	15	40	25.278	
P208	X=12089.7 Y=83257.2	45	40	26	22	72	25.098	
P209	X=12088.3 Y=83259.9	18	16	11	8	36	25.440	
P210	X=12084.9 Y=83260.8	25	15	25	11	26	25.419	
P211	X=12094.8 Y=83264.6	38	35	18	16	37	25.419	SB01
P212	X=12092.5 Y=83260.6	28	20	15	12	49	25.398	
P213	X=12092.8 Y=83275.4	20	15	15	7	25	25.218	
P214	X=12094.3 Y=83274.7	28	25	15	13	20	25.320	
P215	X=12100.3 Y=83278.1	30	26	25	20	32	25.128	
P216	X=12101.2 Y=83278.0	35	30	28	22	18	25.239	
P217	X=12102.0 Y=83277.8	30	24	22	20	37	25.038	
P218	X=12102.8 Y=83278.1	35	28	22	16	37	25.020	
P219	X=12106.1 Y=83275.7	30	16	15	11	25	25.158	
P220	X=12103.3 Y=83274.9	30	26	20	16	52	25.008	
P221	X=12105.4 Y=83274.1	28	23	23	16	47	25.029	
P222	X=12103.9 Y=83273.5	20	18	15	10	15	25.350	
P223	X=12104.0 Y=83272.5	49	47	45	40	24	25.230	
P224	X=12100.9 Y=83273.1	16	12	11	10	10	25.479	
P225	X=12086.1 Y=83263.9	59	44	40	33	20	24.999	
P226	X=12084.3 Y=83261.8	48	44	35	30	15	25.038	
P227	X=12092.1 Y=83260.4	(58)	40	34	30	63	25.239	SB01
P228	X=12098.7 Y=83271.4	25	20	18	15	35	25.290	
P229	X=12099.6 Y=83270.1	26	21	20	16	35	25.308	
P230	X=12100.9 Y=83268.9	25	18	14	11	44	25.209	
P231	X=12103.0 Y=83256.7	24	(20)	13	10	37	25.530	
P232	X=12096.3 Y=83280.5	28	28	20	19	30	25.179	
P233	X=12101.3 Y=83280.6	32	26	15	14	32	25.089	
P234	X=12089.4 Y=83276.4	39	35	16	14	70	24.738	
P235	X=12094.3 Y=83276.7	30	30	25	20	23	25.308	
P236	X=12094.8 Y=83276.5	41	36	29	25	43	25.110	
P237	X=12095.7 Y=83293.8	25	20	20	13	24	24.780	
P238	X=12100.5 Y=83294.9	25	24	20	15	22	24.699	
P239	X=12104.2 Y=83290.2	27	17	23	15	24	24.948	
P240	X=12103.9 Y=83289.5	29	22	19	14	18	24.960	
P241	X=12100.9 Y=83289.5	30	29	18	17	28	24.969	
P242	X=12129.7 Y=83250.4	50	48	25	23	43	25.239	SB04

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P243	X=12131.7 Y=83248.9	60	60	30	28	56	25.239	SB04
P244	X=12133.6 Y=83247.3	68	65	28	28	73	25.248	SB04
P245	X=12135.5 Y=83245.6	55	55	30	30	73	25.359	SB04
P246	X=12137.4 Y=83244.2	60	55	25	18	69	25.470	SB04
P247	X=12139.2 Y=83242.7	35	60	23	20	81	25.380	SB04
P248	X=12142.4 Y=83240.1	53	50	30	25	63	25.548	SB05
P249	X=12141.9 Y=83247.1	53	40	28	25	45	25.629	
P250	X=12094.5 Y=83256.5	32	30	23	15	24	25.770	
P251	X=12095.6 Y=83262.9	45	40	30	25	8	25.800	
P252	X=12147.1 Y=83246.0	35	30	20	15	33	25.500	
P253	X=12141.1 Y=83238.5	28	25	15	10	53	25.608	SB05
P254	X=12142.5 Y=83240.4	(48)	45	20	20	78	25.410	SB05
P255	X=12143.9 Y=83242.0	50	50	20	18	60	25.608	SB05
P256	X=12144.1 Y=83242.4	40	35	20	18	71	25.488	SB05
P257	X=12145.5 Y=83244.0	73	55	18	18	68	25.548	SB05
P258	X=12143.6 Y=83245.7	53	40	25	25	57	25.638	SB05
P259	X=12141.6 Y=83247.5	70	75	20	15	48	25.608	SB05
P260	X=12139.7 Y=83249.1	48	35	20	20	41	25.599	SB05
P261	X=12101.2 Y=83255.7	30	24	16	13	49	25.488	
P262	X=12098.2 Y=83255.7	40	35	28	23	13	25.920	SB02
P263	X=12080.1 Y=83256.4	38	35	25	22	64	24.960	塀跡 1
P264	X=12092.7 Y=83261.0	26	25	16	12	16	25.740	
P265	X=12074.7 Y=83273.6	38	37	19	19	39	24.082	
P266	X=12074.6 Y=83275.5	40	30	24	20	14	24.121	
P267	X=12093.8 Y=83274.5	80	73	51	48	95	24.620	

第３表　縄文・弥生土器観察表（１～６）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	備考	登録No.
										口径	底径	器高				
1	65	61	SI14 の西 中央土手の南	地山直上の暗褐色土中	6	6	縄文土器	尖底深鉢か	胴部	-	-	(15.6)	胴：羽状ＬＲ・ＲＬ結束第一種を横位展開	横位ナデ	縄文前期初頭～前葉 胎土粗く、植物質繊維多量含む	1
2	65	61	北側谷部 北側谷部 北側谷部	黒褐色土層 黒褐色土層（T1 の１層） 黒褐色土	6 5 1	12	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	-	-	(12.9)	口端：山形突起、口縁：単軸絡条体第３類Ｌ、胴：縄文ＬＲ・ＲＬ（非結束）	ナデ	円筒下層 植物質繊維多量	1
3	65	61	北側調査区北側 4D2 5E1 ～ 4	Ⅱ層 黒褐色土 表土下 暗褐色土 検出面	1 2 1	4	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(8.8)	胴：縄文ＲＬの上に多軸絡条体Ｒを部分的に施文	縦位ナデ	円筒下層ｄ 植物質繊維多量	2
4	65	61	6 ～ 7D 区	Ⅲ層 暗褐色土	1	1	弥生土器	甕	体下半部	-	-	(5.1)	体：縄文ＲＬ	縦位ナデ	弥生中期後半	3
5	65	61	SI02 QSE	埋土上位	1	1	弥生土器	甕	体上半部	-	-	(5.0)	体：縄文ＲＬ・横位沈線		弥生中期後半	4
6	65	61	6 ～ 7D 区	Ⅲ層 暗褐色土	1	1	弥生土器	甕	体上半部	-	-	(4.6)	体：横位沈線上に交互刺突文		弥生中期後半	5

第４表　土師器観察表（11 ～ 69）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点		層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
											口径	底径	器高					
11	66	61	SI01	カマド左側	土器１	3	3	土師器	坏	略完形	18.7	丸底	6.1	口縁～体：横位ミガキ、有段	口縁～体：横位ミガキ、体～底：ミガキ、有段内黒	密	非ロクロ	6
12	66	61	SI01	p1	埋土	4	4	土師器	小形甕	口縁～底部 1/3	-	5.6	(11.4)	体：縦位ハケメ→縦位ミガキ（粗）、下位ハケメ残り	体：縦位ミガキ（下位は摩滅）	密	非ロクロ	8
13	66	61	SI01	QNW カマド カマド煙道 QSW QNE QSE（ベルト） NS ベルト南側 QNW	崩落部直上 埋土 埋土上位 埋土上位（To-a 上 黒褐色土） 埋土上位（To-a 上 黒褐色土） 埋土上位 埋土上位 埋土下位（To-a 下 暗褐色土）	3 1 1 2 1 1 1 11	21	土師器	甕	口縁～体部	<25.4>	-	(15.0)	頸：縦位ハケメ（意図的）、体：縦位ハケメ→縦位ミガキ（一部横位）、補修孔か孔１箇所	体：ナデ→ミガキ（粗）	密	非ロクロ	9
14	66	62	SI01	カマド QSW QSW 6E1 6E 区 住居プラン（SI01） 6E 区 住居プラン？	崩落土中 埋土上位（To-a 上 黒褐色土） 埋土上位（To-a 上 黒褐色土） 黒褐色土層 To-a 上 黒色土 Ⅱ層 黒色土上面	1 2 1 1 1 2	8	土師器	甕	口縁～体部	<23.6>	-	(12.7)	頸：斜位ハケメ残存、体：縦位ミガキ	体：横位ケズリ	密	非ロクロ	10
15	66	61	SI01	5E1 6E 6E 区 住居（土管周辺）	黒色土 黒褐色土層 暗褐色土（Ⅲ層） Ⅰ層 黒褐色土	10 1 15 2	28	土師器	甕	口縁～体部	<24.5>	-	(17.2)	口縁：斜位ミガキ、頸：横位ミガキ、体：縦位ミガキ	口縁～体：横位ミガキ、体：ナデ後に縦位ミガキ（粗）	密	非ロクロ	11
16	66	61	SI01	QNE ベルト内 カマド カマド カマド 不明	床直 崩落土中 土器２ 土器２ 袖部構築土	1 9 22 1 3	36	土師器	甕	略完形	<16.6>	6.1	29.6	口縁～頸：横位ミガキ、体：縦位ミガキ	口縁～頸：横位ミガキ、体：縦位ミガキ	密	非ロクロ	12
17	67	62	SI02		土器３	4	4	土師器	坏	略完形	15.7	2.1	5.8	口縁～底：ハケメ後に横位ミガキ（粗）、有段	口縁～体：横位ミガキ、底：放射状ミガキ、沈線による有段内黒	密	非ロクロ	13
18	67	62	SI02	調査区北西側小山	褐色土	5	5	土師器	坏	口縁～体部	<18.4>	-	(4.4)	口縁～体：横位ミガキ、有段	口縁：横位ミガキ、体：放射状ミガキ	密	非ロクロ	14

掲載No.	図	写図	出土地点		層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
											口径	底径	器高					
19	67	62	SI02	QNE	土器2 土器2 検出面	1 5 8	14	土師器	甕	略完形	<13.6>	5.8	18.2	口縁：縦位ハケメ→横位ミガキ、体：縦位ハケメ→縦位ミガキ	口縁：横位ハケメ→横位ミガキ、体：横位ハケメ→縦位ミガキ（粗）	密	非ロクロ	15
20	67	62	SI02	QSE QNE	土器4 埋土上位 検出面	20 20 3	43	土師器	甕	略完形	14.4	5.3	20.7	口縁：縦位ハケメ→横位ミガキ、体：縦位ハケメ→縦位ミガキ	口縁：横位ハケメ→横位ミガキ、体：横位ハケメ→縦位ミガキ（粗）	密	非ロクロ	16
21	67	62	SI02	QSE QSE QSE QSE QNE	床直 埋土上位 埋土中位(To-a上黒褐色土)紡錘車 埋土中位（To-a上 黒褐色土） 検出面	1 1 1 6 2	11	土師器	甕	体～底部	-	7.0	(11.6)	体：縦位ハケメ→縦位ミガキ（粗）、下位ハケメ残り	体：横位ハケメ→ミガキ（不明瞭）	密	非ロクロ	17a
22	67	62	SI02	QNE	土器2 検出面	6 5	11	土師器	甕	口縁～体部下半	<15.4>	-	(29.1)	体：縦位ハケメ→縦位ミガキ	口縁～体：横位ハケメ→ミガキ	密	非ロクロ	17 b･c
23	68	62	SI03	カマド煙道	暗褐色土検出面から -10cm	1	1	土師器	甕	口縁部	-	-	(2.2)	口縁：ナデ	口縁：ナデ	密	非ロクロ	18
24	68	62	SI03	QNE	埋土下位（To-a下 暗褐色土）	1	1	土師器	甕	口縁部	-	-	(3.4)	口縁：縦位ハケメ→横位ミガキ	口縁：縦位ハケメ→横位ミガキ	密	非ロクロ	19
25	68	62	SI03	攪乱	検出面	1	1	土師器	甕	口縁部	-	-	(2.3)	口縁：ナデ	口縁：横位ハケメ	密	非ロクロ	20
26	69	62	SI04	QSE	埋土上位	4	4	土師器	坏	口縁～体部下半	<14.6>	-	(4.9)	口縁外反	口縁：横位ミガキ、体：放射状ミガキ	密	ロクロ・内面黒色処理	1
27	69	62	SI04	QSE	埋土中位	5	5	土師器	坏	口縁～底部	<12.8>	丸底	5.2	口縁：横位ミガキ、頸：有段、体～底:横位ハケメ	口縁：横位ミガキ、体：放射状ミガキ	密	非ロクロ・内面黒色処理	2
28	69	62	SI04	QNE	埋土上位	4	4	土師器	甕	口縁～体部上半	<27.0>	-	(4.8)	口縁：横位ナデ後に縦位ハケメ	口縁：横位ハケメ	密	非ロクロ	3
29	69	62	SI04	QSE p1 p11	埋土下位（床直上） 埋土 埋土下位	8 1 1	10	土師器	甕	口縁～体部下半	<15.6>	-	(17.3)	口縁：横位ナデ、体：縦位ケズリか	口縁：横位ナデ、体：縦位ナデか	密	非ロクロ	4
30	69	62	SI04	遺物１・２	床面	1	1	土師器	甕	体部下半～底部	-	(11.0)	(5.6)	体：縦位ケズリ、底：張り出し	体：横位ナデ	密	非ロクロ	5
31	69	62	SI04	遺物１・２	床面	1	1	須恵器	大甕	体部	-	-	(11.1)	体：タタキ目		密	ロクロ	6
32	70	62	SI05	カマド	燃焼面付近	1	1	土師器	甕	体部	-	-	(5.9)	体：縦位ミガキ、上部は横位ナデか	体：ナデ	密	非ロクロ	7
33	70	62	SI05	カマド	燃焼面上	1	1	土師器	壺	体部	-	-	(12.8)	体：細かい縦位ハケメ→粗い縦位ミガキ	体：横位ハケメ→最大径付近を横位ナデ	密	非ロクロ	8
34	71	62	SI06	QSE	埋土上位	1	1	土師器	坏	口縁部	-	-	(2.0)	口縁：横位ナデ、頸：有段か	不明瞭	密	非ロクロ・両面黒色処理	9
35	71	62	SI06	カマド	燃焼面直上	5	5	土師器	甕	口縁～体部上半	<15.0>	-	(5.2)	口縁:横位ナデ、頸:有段、体：縦位ケズリ	口縁：横位ナデ、体：横位ケズリか	密	非ロクロ	10
36	72	63	SI07	p8	埋土	1	1	須恵器	坏	口縁～体部上半	<15.0>	-	(3.2)	調整なし	不明瞭	密	ロクロ・内面黒色処理・土師器か	11
37	72	63	SI07	カマド カマド カマド直上 カマド カマド直上 QNW p4 QNW p5	崩落土上面 土器１（図有り） 前面土器４（図有り） 燃焼面上土器５ 埋土下位 埋土上位（黒褐色土） 埋土 埋土 床面炭５下	1 7 1 5 1 1 2 2 2	22	土師器	甕	口縁～体部下半	12.1	-	(13.2)	口縁：横位ナデ、頸：屈曲明瞭、体：縦位ケズリ（板ナデか）	口縁：横位ナデ、体：横位ナデ（板ナデ状）	密	非ロクロ、12・13同一個体	12・13
38	72	63	SI07	p5	埋土	1	1	土師器	甕	口縁～体部上半	<8.8>	-	(6.3)	口縁：横位ナデ、頸部境界不明瞭	口縁：横位ナデ、体：横位ナデ	密	非ロクロ	14

掲載No.	図	写図	出土地点		層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
											口径	底径	器高					
39	72	63	SI07	カマド QSW カマド QSW QNW p5	前面土器２（図有り） 燃焼面上土器５ 右袖部右側焼土下床面 埋土上位（黒褐色土） 床面 埋土	1 21 2 2 4 3	33	土師器	甕	口縁～ 体部下半	12.2	-	(24.1)	口縁：横位ナデ、頸部境界なし、体：縦位ケズリ（下→上）	口縁：横位ナデ、体：横位ナデ	密	非ロクロ	15
40	72	63	SI07	カマド QNW	前面土器３（図有り） 床面	1 2	3	土師器	甕	底部	-	<12.9>	(2.9)	底：外側へ張り出す、木葉痕	底：ナデ	密	非ロクロ	16
41	72	63	SI07	カマド カマド p6	燃焼面右側床面 右袖部右側焼土下床面 埋土	2 1 1	4	須恵器	壺	口縁～ 体部上半	<14.4>	-	(9.5)	体部上半が最大径		密	ロクロ	17
42	72	63	SI07	北東隅 p1	床面 焼土下黒褐色土（埋土下位）	1 1	2	須恵器	壺	口縁部	<11.6>	-	(1.5)	長頸壺の口縁部		密	ロクロ	18
43	74	63	SI09	QSE	埋土中位（暗褐色土）	3	3	土師器	甕	口縁～ 体部上半	<15.0>	-	(6.4)	口縁：横位ナデ、頸部境界不明瞭、体:縦位板ナデ	口縁：横位ナデ、体：横位板ナデ状	密	非ロクロ	19
44	75	63	SI10	南端水道管撹乱 水道管撹乱西調査区壁	住居を切る水道埋土 埋土	2 1	3	土師器	甕	体部	-	-	(10.8)	体：縦位ミガキ	体：縦位ミガキ	密	非ロクロ	20
45	75	63	SI10	QSE QSE 南端水道管撹乱	埋土中位（褐色土） 埋土上位（褐色土） 住居を切る水道埋土	12 4 15	31	土師器	甑	口縁～底部	<18.0>	<9.7>	18.6	頸部にくびれなし、口縁～底：縦位ハケメ→縦位ミガキ→上半のみ横位ミガキ	口縁～底：横位ハケメ→縦位ミガキ→上半のみ横位ミガキ、底付近に横位ハケメ残る	密	非ロクロ	21
46	76	63	SI11	南東隅 QSE 南側	埋土一括 埋土 床直上一括	5 1 2	8	土師器	甕	体部～底部	-	<9.4>	(17.0)	体：縦位板ナデ、底：外側へ張り出し・木葉痕	体：横位ナデ	密	非ロクロ	23
47	77	63	SI12	カマド煙道 床面	床面（図有り） 土器１	1 3	4	土師器	坏	口縁～底部	14.2	丸底	6.7	口縁：横位ナデ、頸部有段、体:横位ミガキ、底:横位ケズリ後にミガキか（摩滅）	口縁～底：横位ミガキ	密	非ロクロ・内面黒色処理	24
48	77	63	SI12	カマド	燃焼面直上（右袖部右内側）	1	1	土師器	坏	口縁～ 体部下半	<16.2>	-	(3.4)	口縁：ハケメ状の強い横位ナデ、頸:浅い沈線、体:ケズリか	口縁～体：横位ミガキ	密	非ロクロ・内面黒色処理	25
49	77	63	SI12	カマド	カマド直上埋土	1	1	土師器	甕	口縁部	<18.4>	-	(4.7)	口縁：横位ナデ	口縁：横位ナデ	密	非ロクロ	26
50	77	63	SI12	床面	土器２	1	1	土師器	甕	体部下半～ 底部	-	7.8	(5.4)	体：縦位ケズリ、底：外側にやや張り出し	体：横位ハケメ	密	非ロクロ	27
51	77	63	SI12	QSW	埋土中位（暗褐色土）	1	1	土師器	甕	体部下半～ 底部	-	<7.8>	(4.5)	体：縦位板ナデ→一部横位、底：ナデ	体：横位ケズリ	密	非ロクロ	28
52	78	63	SI13	QNW	カマド付近床面 床面土器４（図有り） 床面土器５（図有り）	2 3 4	9	土師器	坏	口縁～底部	13.2	丸底	5.7	口縁：横位ナデ、頸部有段、体～底：横位ミガキ	口縁：横位ミガキ、体：不定方向のミガキ	密	非ロクロ・内面黒色処理	29
53	78	63	SI13	QNW	カマド付近床面 床面土器４（図有り） 床面土器５（図有り）	3 1 5	9	土師器	坏	口縁～底部	16.2	丸底	5.7	口縁：横位ミガキ、頸：有段、体～底：やや隙間のある横位ミガキ	口縁：横位ミガキ、体～底：一方向のミガキ	密	非ロクロ・内面黒色処理	30
54	78	63	SI13	床面土器３（図有り）	床面土器３（図有り）	23	23	土師器	甕	口縁～底部	<13.4>	<6.2>	12.8	口縁：ヨコナデ、体：横位→縦位ハケメ	口縁～底：横位ハケメ、輪積痕明瞭	密	非ロクロ	31
55	78	64	SI13		床面土器２（図有り） 床面土器６（図有り）	88 1	89	土師器	甕	略完形	19.9	7.3	29.4	口縁：横位ハケメ、体：縦位ハケメ後に粗い縦位ミガキ	内面：横位ハケメ	密	非ロクロ	32
56	78	64	SI13	QNE	床面一括土器 床面土器１（図有り）	5 7	12	土師器	甕	体部上半～ 底部	-	7.2	(27.2)	体：縦位ハケメ→縦位ミガキ（体部最大径付近に一部横）	体：横位ハケメ→上半は横位ナデ	密	非ロクロ	33
57	79	64	SI14	中央区北西側境界 住居プラン	埋土	2	2	土師器	坏	口縁～体部	21.8	-	(7.9)	口縁～体：横位ミガキ、有段	口縁～体：ミガキ、有段内黒	密	非ロクロ	7
58	79	64	SI14	p2	土器１ 土器２	2 7	9	土師器	甕	体部下半～ 底部	-	<7.1>	(11.5)	体：縦位ミガキ	体：縦位ハケメ	密	非ロクロ	2

掲載No.	図	写図	出土地点		層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
											口径	底径	器高					
59	79	64	SI14	p2	土器１	41	41	土師器	甑	口縁～体部下半	23.1	-	(22.9)	口縁：縦位ミガキ・頸部沈線、体：上半は縦位、下半は横位ミガキ	口縁～体：横位ハケメ→口縁は横位、体は縦位ミガキ	密	非ロクロ	3
60	81	65	SI16		床面土器２（写図有り） 床面土器２（断面付近）	11 2	13	土師器	坏	口縁～底部	<16.8>	丸底	5.8	口縁：横位ハケメ後の横位ミガキ・頸部有段、体：縦位ケズリ後の縦位ハケメ、底：横位ケズリ	底：横位ミガキ後に、体：縦位ミガキで最後に口縁：横位ミガキ	密	非ロクロ・内面黒色処理	4
61	81	65	SI16	Ｙ字路追加区西	床面土器１（写図有り） 床面上	52 11	63	土師器	甕	口縁～底部	17.5	<9.0>	29.6	口縁：横位ナデ・頸部沈線、体：縦位ハケメ→下半に粗い縦位ミガキ	口縁～底：横位ハケメ	密	非ロクロ	5
62	81	64	SI16	Ｙ字路追加区西	床面土器１（写図有り） 床面上	9 39	48	土師器	甕	略完形	17.3	8.2	31.8	口縁：横位ナデ・頸部有段、体：横位ハケメ→縦位ハケメ	口縁～底：横位ハケメ	密	非ロクロ	6
63	81	65	SI16	Ｙ字路追加区西	床面上 床面土器２（写図有り） 床面土器２	3 2 11	16	土師器	甕	口縁～体部下半	<14.2>	-	(17.7)	口縁：横位ナデ・頸部有段、体：縦位ハケメ	口縁：横位ナデ、体：横位ハケメ	密	非ロクロ	7
64	82	65	方形周溝１	断面Ａ付近 南辺溝（ベルト際）	埋土 埋土	3 5	8	土師器	坏	口縁～底部	<16.8>	6.9	4.2	口縁～体：横位ミガキ、頸：沈線状、底：回転糸切り後未調整	口縁～体：横位ミガキ、底：放射状ミガキ	密	ロクロ・内面黒色処理	34
65	82	65	方形周溝１	断面Ａ付近	埋土	5	5	土師器	坏	口縁～底部	<14.6>	6.8	4.7	底：回転糸切り後未調整	摩滅してミガキ不明	密	ロクロ・内面黒色処理	35
66	82	65	方形周溝１	東区マウンド側溝際	埋土	1	1	土師器	坏	底部	-	<5.8>	(7.0)	底：回転糸切り後未調整	底：放射状ミガキ	密	ロクロ・内面黒色処理	37
67	82	65	方形周溝１		２層褐色土上位	1	1	土師器	坏	底部	-	<7.6>	(1.0)	底：回転糸切り後未調整	底：ミガキ	密	ロクロ・内面黒色処理	38
68	83	65	SD03		埋土下位（写図有り）	4	4	土師器	坏	体部下半～底部	-	6.2	(3.6)	底：静止糸切り後未調整、体部に「十」の墨書あり	体下半～底：暗文風の放射状ミガキ（太い）	密	ロクロ・内面黒色処理	39
69	84	65	22G 区		検出面	1	1	須恵器	大甕	体部	-	-	(3.3)	体：タタキ目	体：布目	密	瓦か	41

第５表　土製品観察表（70 ～ 78）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	残存位置	計測値（cm）					重量（g）	胎土	備考	登録No.
							長さ	幅	厚さ	外径	内径				
70	67	65	SI02・QSE	埋土中位（To-a 上黒褐色土）	紡錘車	略完形	4.9	4.7	1.9	-	-	46.9	密		21
71	77	65	SI12・p1	床面	紡錘車	残存 1/2	(2.2)	(4.1)	(2.5)	-	(1.0)	18.9	密		42
72	78	65	SI13・土製品１	床面	紡錘車	完形	6.1	6.2	1.2	-	0.9	65.8	密	孔内に炭化した芯棒が残存	43
73	78	65	SI13・土製品２	床面	紡錘車	完形	5.5	5.5	2.4	-	0.9	76.4	密	孔内に炭化した芯棒が残存	44
74	78	65	SI13・カマド右袖石内面	埋土下位	土玉	完形	1.5	1.5	1.3	-	0.1	2.6	密		45
75	69	65	SI04・QSE	埋土下位	羽口	先端部のみ	(10.5)	-	-	<7.5>	<3.1>	215.5	粗	指頭痕あり	46
76	69	65	SI04・カマド燃焼部付近	燃焼部直上	羽口	先端部のみ	(5.0)	-	-	<9.3>	-	51.1	粗		47
77	69	65	SI04・p1	埋土	羽口	先端部のみ	(5.6)	-	-	<8.2>	<2.4>	57.2	粗		49
78	80	65	円形周溝１・断面Ｃ付近	埋土下位（４層黄褐色混じり土下）	羽口	先端部のみ	(8.0)	-	-	<6.0>	<2.4>	175.0	粗		48

第６表　石器観察表（7 ～ 10・79 ～ 118）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	欠損部位	計測値（cm）			重量（g）	自然面	備考		登録No.
									長さ	幅	厚さ					
7	65	61	SI01・QSW	埋土上位（To-a 上黒褐色土）	石鏃	頁岩	北上山地	先端･茎部欠	(3.2)	1.5	0.4	2.0		有茎	中生代	39
8	65	61	南側調査区東ベルト	黒褐色土	石鏃	頁岩	北上山地	先端	2.8	1.7	0.5	1.4	無	無茎凹基		1
9	65	61	SI07・QNW	埋土下位（暗褐色土）	石匙	頁岩	北上山地		3.8	4.8	0.8	9.1		横型	中生代	52
10	65	61	方形周溝 1・北側	埋土（黄褐色土）	スクレイパー類	頁岩	北上山地		5.6	2.9	0.9	11.2		削器	中生代	57
79	79	66	SI14・西半	床面	剥片	黒曜石	奥羽山脈		2.4	2.8	0.5	2.6			時代・産地不明	50
80	73	66	SI07・p5 右側 30cm	カマド右側床面	磨石				(8.5)	7.4	4.6	431.7				53
81	73	66	SI07・p5 右側 30cm	カマド右側床面	磨石	花崗岩	北上山地		11.7	9.9	5.3	870.7			中生代白亜紀	54
82	73	66	SI07・カマド左袖部左側礫 1	床面	磨石				10.1	7.0	6.4	640.8				55
83	69	66	SI04・p1	床面	台石				(15.5)	11.9	7.6	1741.0				51
84	73	66	SI07・カマド右側礫 1	床面	台石				(27.2)	18.5	10.5	7500.0				56
85	68	66	SI03	検出面	方割石	ホルンフェルス	北上山地		7.3	5.9	2.9	193.9	有		中生代（変成は中生代白亜紀）	25
86	68	66	SI03	検出面	方割石	花崗岩	北上山地		7.1	5.7	2.9	174.1	有		中生代白亜紀	26
87	68	66	SI03・QSE	埋土中位（To-a 下黒褐色土）	方割石	ホルンフェルス	北上山地		13.5	6.1	2.1	198.8	有		中生代（変成は中生代白亜紀）	30
88	-	67	SI01 北側住居プラン	黒褐色土中	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	2.6		細片	中生代白亜紀～新生代古第三紀	35
89	-	67	4C1	表土下暗褐色土	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.8		細片	中生代白亜紀～新生代古第三紀	36
90	-	67	5E3	黒褐色土中	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.4		細片	中生代白亜紀～新生代古第三紀	37
91	-	67	北区南西側基 1 西際付近	褐色土（表土直下）	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	5.9		細片	中生代白亜紀～新生代古第三紀	38
92	-	67	SI07・p1	埋土	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	2.6		細片		58
93	-	67	SI08・カマド	燃焼部上崩落土	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.7		細片		59
94	-	67	SI12・中央付近	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.8		細片		60
95	-	67	SI12・N ベルトカマド直上	埋土下位～床直上（暗褐色土）	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	10.6		細片		61
96	-	67	SI12・カマド左側付近	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.6		細片		62
97	-	67	SI12・QNE カマド付近	埋土上位（黒褐色土）	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	2.3		細片		63
98	-	67	SI12・QNE	埋土中位	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.6		細片		64
99	-	67	SI12・QSE	床直上	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	3.1		細片		65
100	-	67	SI12・S ベルト	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.1		細片		66
101	-	67	SI12・QNW	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.5		細片		67
102	-	67	SI12・p1	埋土	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.3		細片		68
103	-	67	SI12・p1	埋土	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.2		細片		69
104	-	67	SI13・コハク 1	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.9		細片		70
105	-	67	SI13・コハク 2	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.7		細片		71
106	-	67	SI13・北西隅	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	5.4		細片		72
107	-	67	SI13・土器 3 下	床面	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	2.3		細片		73

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	欠損部位	計測値（cm）			重量（g）	自然面	備考		登録No.
									長さ	幅	厚さ					
108	-	67	SI14・HW	埋土上位（黒褐色土）	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.0		細片		74
109	-	67	SK17	埋土	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	3.3		細片		75
110	-	67	SI14	埋土・コハク 01	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.6		細片		8
111	-	67	SI14	埋土・コハク 02	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	2.2		細片		9
112	-	67	SI14	埋土・コハク 03	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	3.0		細片		10
113	-	67	SI14	埋土・コハク 04	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.8		細片		11
114	-	67	SI14	埋土・コハク 05	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	2.7		細片		12
115	-	67	SI14	埋土・コハク 06	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	1.6		細片		13
116	-	67	SI14	埋土・コハク 07	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.4		細片		14
117	-	67	SI14	埋土・コハク 08	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	0.6		細片		15
118	-	67	SI14・p2	埋土・コハク 09	琥珀原石	コハク	野田周辺		-	-	-	6.7		細片		16

第７表　金属製品・銭貨観察表（119 ～ 130）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	残存部位	計測値（cm）			重量（g）	材質	備考	登録No.
							長さ	幅	厚さ				
119	72	68	SI07 QSW（中央寄り）	床面	鉄鏃	返し欠損	6.8	3.1	0.2	12.6	鉄		58
120	72	68	SI07 p1	底面	鉄鏃	返し欠損	(5.1)	(2.9)	0.3	11.4	鉄		59
121	78	68	SI13・鉄製品１・カマド右側	床面・埋土中位	刀子	刃部欠損	(9.6)	1.5	0.3	7.3	鉄	3 個	60
122	78	68	SI13 QSE	床面	刀子	刃部のみ	(7.1)	1.4	0.2	3.7	鉄	4 個（うち２個のみ接合可）	61
123	72	68	SI07 カマド左側	床面	鍋	口縁部のみ	(3.4)	(5.0)	0.4	28.2	鉄	1 個	62
124	72	68	SI07 南西隅	床面	鎹		5.3	9.5	0.7	109.7	鉄	124 ～ 127 固着	63
125	72	68	SI07 南西隅	床面	鎹		4.4	9.8	0.6		鉄		64
126	72	68	SI07 南西隅	床面	鎹		4.4	7.3	0.5		鉄		65
127	72	68	SI07 南西隅	床面	鎹	先端部欠損	4.6	(9.2)	0.6		鉄		66
128	-	68	SK04	堆積土上位褐色土	不明鋳造品		(7.1)	2.8	0.7	37.6	鉄		40
129	-	68	4D4	Ⅱ層黒褐色土上面	寛永通寶	完形	外径 2.4	内径 0.6	0.1	2.3	青銅	新寛永	41
130	-	68	5D1	表土層	寛永通寶	完形	外径 2.3	内径 0.6	0.1	2.5	青銅	新寛永	42

第８表　木製品観察表（131）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	残存部位	計測値（cm）			重量（g）	材質	備考	登録No.
							長さ	幅	厚さ				
131	73	68	SI07・カマド左側	床面	盤状木製品	縁のみ	(2.7)	(5.4)	0.8	7.1	木	炭化。赤漆塗布か。	67

第９表　貝類観察表（132）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	残存部位	計測値（cm）			重量（g）	材質	備考	登録No.
							長さ	幅	厚さ				
132	-	68	SI11	埋土下位	ウニ・アワビなど	-	-	-	-	21.8			68

Ⅵ　自然科学的分析

1　放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

中平遺跡は、岩手県九戸郡野田村大字野田第 13 地割字大平野地内（北緯 40°06′38″、東経 141°48′28″）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡と方形周溝から出土した炭化材３点と木炭６点である（表１）。

2015・2016 年の試料が出土した竪穴住居跡の時期は、出土遺物に基づき、SI01 が古墳時代末～奈良時代初め（７～８世紀）、SI02 が古墳時代末（７世紀）と推定されている。さらに９世紀代の土師器を伴出していることから、2018 年の試料の年代は平安時代（９世紀）と推定されている。

（2）測 定 の 意 義

試料が出土した住居跡の構築年代と遺構の構築時期や存続時期を明らかにする。

（3）化学処理工程

〈１〉メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
〈２〉酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１㏖／ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001 Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
〈３〉試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
〈４〉真空ラインで二酸化炭素を精製する。
〈５〉精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
〈６〉グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測　定　方　法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算　出　方　法

〈１〉δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
〈２〉^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を

使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

〈３〉pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

〈４〉暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下１桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（６）測　定　結　果

測定結果を表１、２に示す。

2015 年試料の ^{14}C 年代は、NKT-１が 1560±20yrBP、NKT-２が 1290±20yrBP、NKT-３が 1270±20yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、NKT-１が 430 ～ 540cal AD、NKT-２が 680 ～ 765cal AD、NKT-３が 689 ～ 767cal AD の間に各々複数の範囲で示される。SI01 出土の NKT-１は、出土遺物から推定される年代より古い値となった。SI02 出土の NKT-２と NKT-３は、ほとんど同年代を示し、出土遺物による推定とも整合する。

2016 年の試料５点の ^{14}C 年代は、1420±30yrBP（NKT-６）から 1190±20yrBP（NKT-８）の間にある。暦年較正年代（1σ）は、最も古い NKT-６が 618 ～ 652cal AD の範囲、最も新しい NKT-８が 779 ～ 878cal AD の間に３つの範囲で示される。

2015・2016 年の試料の炭素含有率はすべて 60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

2018 年の試料の ^{14}C 年代は 1180±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は 778 ～ 887cal AD の間に３つの範囲で示される。推定年代の９世紀におおむね一致する結果となった。

2018 年の試料の炭素含有率は 70％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１．放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-142932	NKT-１	SI01 竪穴住居・QNE・埋土下位	炭化材（木炭）	AAA	−25.16±0.27	1,560±20	82.32±0.24
IAAA-142933	NKT-２	SI02 竪穴住居・床面 炭化物１	炭化材（木炭）	AAA	−22.60±0.34	1,290±20	85.20±0.24
IAAA-142934	NKT-３	SI02 竪穴住居・床面 炭化物２	炭化材（木炭）	AAA	−24.56±0.38	1,270±20	85.38±0.25
［IAA 登録番号：#7124］							
IAAA-152264	NKT-４	SI07 竪穴住居　床面	木炭	AAA	−27.69±0.25	1,310±30	84.91±0.26
IAAA-152265	NKT-５	SI09 竪穴住居　床面	木炭	AAA	−24.95±0.32	1,210±30	85.98±0.30
IAAA-152266	NKT-６	SI12 竪穴住居　床面	木炭	AaA	−25.76±0.24	1,420±30	83.85±0.26
IAAA-152267	NKT-７	方形周溝１・断面Ｂ　埋土中位	木炭	AAA	−25.24±0.29	1,250±30	85.61±0.27
IAAA-152268	NKT-８	方形周溝１・東辺ベルト内　埋土	木炭	AAA	−25.37±0.36	1,190±20	86.23±0.26
［IAA 登録番号：#7714］							
IAAA-172140	NKT-９	方形周溝１・ベルト AA'の北側　底面	木炭	AAA	−25.77±0.26	1,180±20	86.35±0.24
［IAA 登録番号：#8889］							

表２．放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-142932	1,570±20	82.30±0.24	1,562±23	430calAD - 493calAD（55.9%） 512calAD - 517calAD（ 3.4%） 529calAD - 540calAD（ 8.9%）	424calAD - 549calAD（95.4%）
IAAA-142933	1,250±20	85.62±0.23	1,286±22	680calAD - 714calAD（40.4%） 744calAD - 765calAD（27.8%）	668calAD - 731calAD（59.5%） 736calAD - 770calAD（35.9%）
IAAA-142934	1,260±20	85.46±0.24	1,269±23	689calAD - 725calAD（40.7%） 739calAD - 767calAD（27.5%）	675calAD - 773calAD（95.4%）
［IAA 登録番号：#7124］参考値					
IAAA-152264	1,360±20	84.44±0.26	1,314±25	661calAD - 694calAD（50.4%） 747calAD - 763calAD（17.8%）	656calAD - 721calAD（71.5%） 741calAD - 768calAD（23.9%）
IAAA-152265	1,210±30	85.99±0.29	1,213±27	770calAD - 779calAD（ 6.8%） 789calAD - 872calAD（61.4%）	695calAD - 700calAD（ 0.6%） 710calAD - 745calAD（11.4%） 764calAD - 890calAD（83.4%）
IAAA-152266	1,430±20	83.72±0.26	1,415±25	618calAD - 652calAD（68.2%）	597calAD - 661calAD（95.4%）
IAAA-152267	1,250±30	85.57±0.27	1,248±25	689calAD - 750calAD（56.6%） 761calAD - 774calAD（11.6%）	679calAD - 779calAD（78.5%） 790calAD - 868calAD（16.9%）
IAAA-152268	1,200±20	86.16±0.25	1,190±24	779calAD - 793calAD（11.7%） 801calAD - 846calAD（35.9%） 852calAD - 878calAD（20.6%）	769calAD - 894calAD（94.5%） 931calAD - 938calAD（ 0.9%）
［IAA 登録番号：#7714］参考値					
IAAA-172140	1,190±20	86.21±0.24	1,178±22	778calAD - 792calAD（13.0%） 804calAD - 842calAD（30.9%） 860calAD - 887calAD（24.2%）	772calAD - 895calAD（92.3%） 928calAD - 940calAD（ 3.1%）
［IAA 登録番号：#8889］参考値					

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al.2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

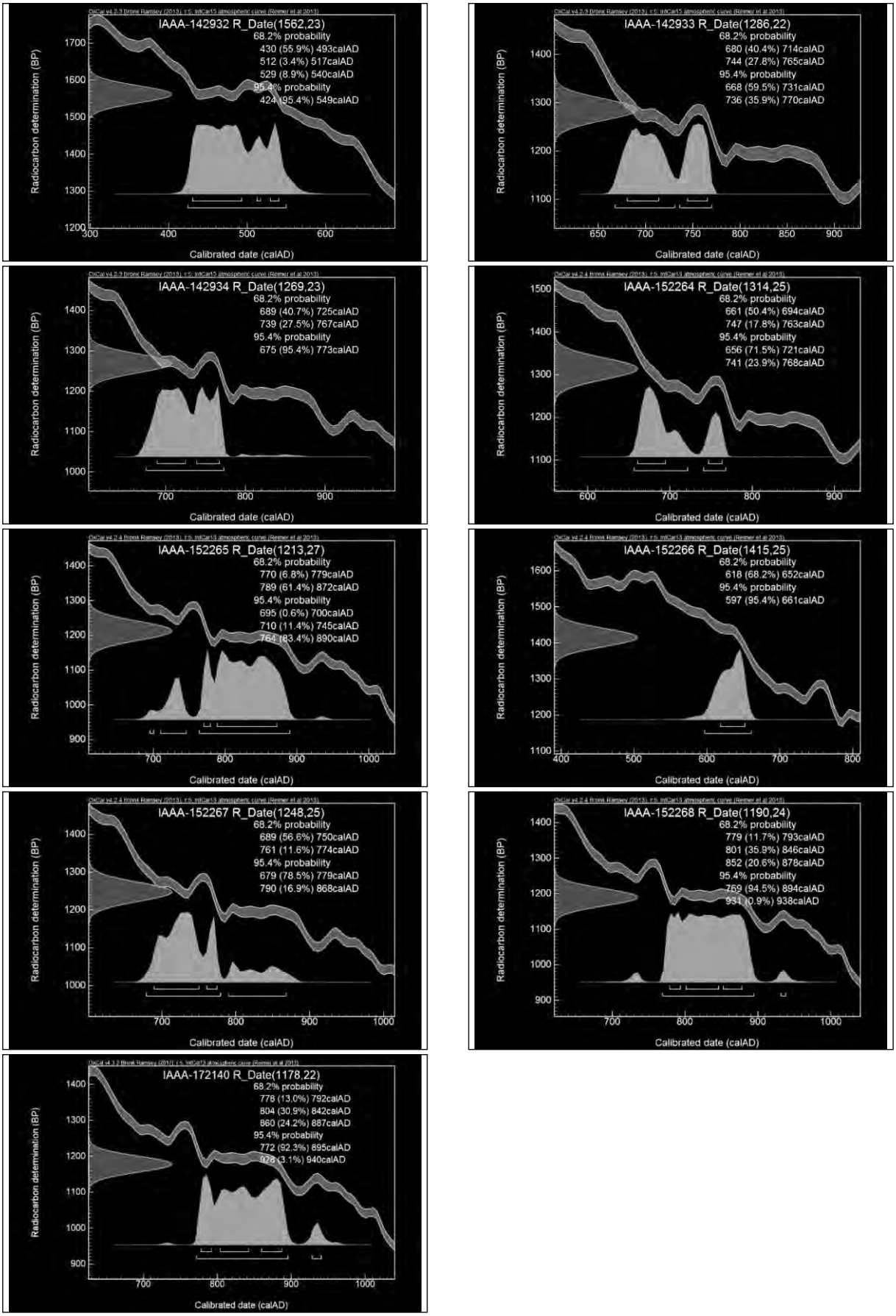


図１．暦年較正年代グラフ（参考）

２　炭化材同定（１）

吉川純子（古代の森研究舎）

（１）は　じ　め　に

中平遺跡は野田村大字野田の明内川と泉沢川により形成された海岸から約１㎞の河岸段丘上に立地している。本遺跡の古代～平安と考えられる集落跡は半数近くが焼失住居とみられる竪穴住居跡で、炭化材が多く検出された。そこで当時の住居構築材等の木材利用状況を調査する目的で分析をおこなった。今回分析に供した試料は 20 点で、平安時代とみられる住居 SI07 から８点、SI09 から４点、古墳時代末～奈良時代とみられる住居 SI12 から４点、SI13 から４点となっている。炭化材は自然乾燥後に剃刀で横断面、放射断面、接線断面の３方向に割り実体顕微鏡及び反射光式顕微鏡で同定した。

（２）同定結果及び考察

本遺跡の住居跡から出土した炭化材同定結果を表１に示した。20 点のうち 12 点がコナラ属コナラ節と最も多く、クリが７点、１点はヨシ属であった。以下に出土した炭化材の形態記載をおこなう。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）

年輪はじめに大きい道管がほぼ単独で数列配列しその後径が急減して薄壁の角張った小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し、放射組織は平伏細胞のみの同性で単列である。試料のうち NKT-13 はやや焼けただれており、確認できる範囲が小さいが広放射組織は確認されなかったためクリと同定した。

・コナラ属コナラ節（Quercus sect. Prinus）

年輪はじめに大きい道管がほぼ単独で数列配列しその後径が急減して波状ないし火炎状に配列する環孔材で小管孔は薄壁で角張っている。道管は単穿孔を有し、放射組織は平伏細胞のみの同性でクリに酷似するが、単列と幅の広い複合型の広放射組織がある。

・ヨシ属（Phragmites）

稈は中空で表皮には縦に細い溝状の凹凸があるため横断面最外層は規則的な凹凸を呈する。維管束は３つの大きい道管と外側が小道管数本の束でできている。この維管束が横断面内にまばらに多数分布することからイネ科ヨシ属と同定した。

本遺跡で炭化材が出土した住居跡は焼失住居と考えられ、炭化した木材のほとんどは住居構築材と考えられている。全体としては 60％にコナラ節が利用され 35％がクリであった。表２には時期別の樹種毎集計表を示した。古墳～奈良では全てコナラ節が利用されており、平安時代ではクリのほうが多く利用されている。東北の平野から丘陵にかけては

表１．中平遺跡出土炭化材同定結果

番号	時期	遺構	層位	地点	分類群
NKT-４	平安	SI07	床面	炭１（⑤柱部分）	コナラ節
NKT-５	平安	SI07	床面	炭１（④図あり）	クリ
NKT-６	平安	SI07	床面	炭２（図あり）	クリ
NKT-７	平安	SI07	床面	炭３（図あり）	クリ
NKT-８	平安	SI07	床面	炭５（図あり）	クリ
NKT-９	平安	SI07	床面	炭 12（図あり）	コナラ節
NKT-10	平安	SI07	床面	炭 16（図あり）	コナラ節
NKT-11	平安	SI07	床面	炭 19（図あり）	ヨシ属
NKT-12	平安	SI09	床面	炭１	コナラ節
NKT-13	平安	SI09	床面	炭２	クリ
NKT-14	平安	SI09	床面	炭３	クリ
NKT-15	平安	SI09	床面	炭４	クリ
NKT-16	古墳～奈良	SI12	床面	炭２	コナラ節
NKT-17	古墳～奈良	SI12	床面	炭３	コナラ節
NKT-18	古墳～奈良	SI12	床面	炭４	コナラ節
NKT-19	古墳～奈良	SI12	床面	炭５	コナラ節
NKT-20	古墳～奈良	SI13	床面	炭１（図あり）	コナラ節
NKT-21	古墳～奈良	SI13	床面	炭２（図あり）	コナラ節
NKT-22	古墳～奈良	SI13	床面	炭３（図あり）	コナラ節
NKT-23	古墳～奈良	SI13	床面	炭４（図あり）	コナラ節

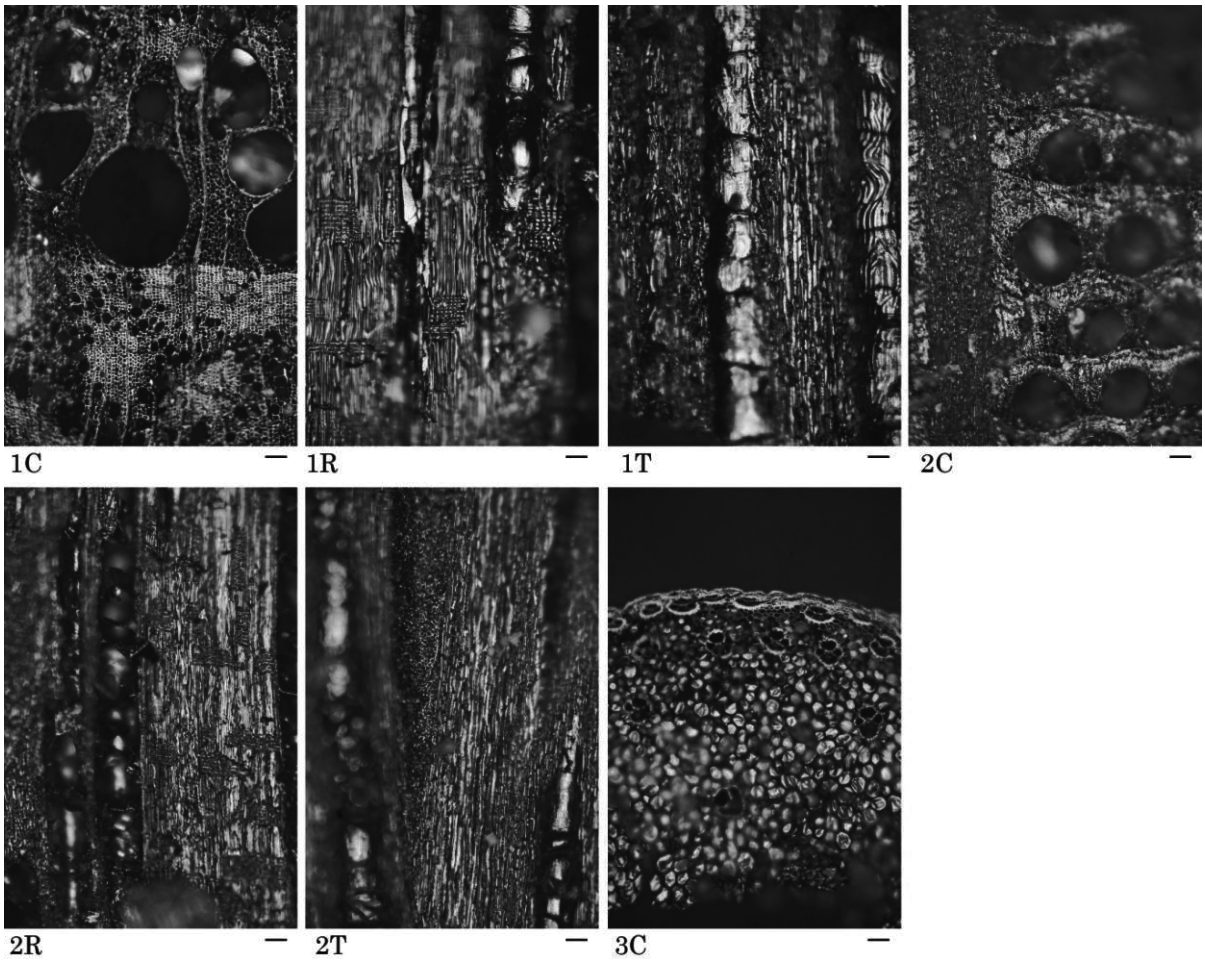
表２．集計表

時期	分類群	個数
平　安	クリ	7
	コナラ節	4
	ヨシ属	1
古墳～奈良	コナラ節	8
	総数	20

コナラなどの落葉広葉樹を主体とした二次林が広く分布しており、縄文時代以降クリは広範囲に栽培され土木建築材として耐久性に優れているため木材も連綿と多用されてきたと考えられる。過去の中平遺跡における奈良～平安の炭化材調査では59点全てコナラ節と同定されており、いっぽうで隣接する大平野遺跡では１点であるがクリが同定されている。この地域ではコナラ節とクリを優先的に利用していたことがうかがえる。岩手県の奈良～平安時代にかけての焼失住居における炭化材出土例では、一戸町小井田Ⅴ遺跡の古墳末～平安とみられる住居構築材109点のうち約80％をコナラ節材が占める例があるが、同時期の一戸町上野遺跡ではシナノキ属やケヤキが多くコナラ節はわずか５％である例もある（伊東・山田2012）。なお１点同定したヨシ属は束状で出土しており壁あるいは屋根材に利用されていたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久　編．2012．木の考古学　出土製品用材データベース．449pp. 海青社



図版１　中平遺跡から出土した炭化材の顕微鏡写真

１．クリ（NKT-６）２．コナラ属コナラ節（NKT-４）３．ヨシ属（NKT-11）
Ｃ：横断面，Ｒ：放射断面，Ｔ：接線断面，スケールは0.1㎜

３　炭化材同定（２）

株式会社古環境研究所

（１）は　じ　め　に

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、中平遺跡より出土した炭化材について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

（２）試 料 と 方 法

試料は、中平遺跡で出土した焼失した竪穴住居（SI01 住、SI02 住）の部材などの炭化材３点である。遺構の時期は、古墳時代末から奈良時代に位置づけられている。試料の詳細は、結果とともに表１に記す。

樹種同定の方法は、以下のとおりである。まず、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製した。同定、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（３）結　　果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

〈１〉コナラ属コナラ節（Quercus sect. Prinus　ブナ科　袋番号１、２）

表１．中平遺跡における樹種同定結果

袋番号	出土地点	層位	内容	時代	結果（学名／和名）
1	SI01 住 QNE	埋土下位	炭１	古墳時代末～奈良時代初め	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
2	SI02 住		炭化物１	古墳時代末	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
3	SI02 住		炭化物２	古墳時代末～奈良時代初め	Acer カエデ属

年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15 m、径 60㎝ぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

〈２〉カエデ属（Acer　カエデ科　袋番号３）

横断面では小型で丸い道管が散在する。放射断面では道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在するがやや不鮮明になっている。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で１～６細胞幅である。

以上の特徴よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、

大きいものは高さ 20 m、径１mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

（４）所　　見

同定の結果、中平遺跡の炭化材は、コナラ属コナラ節２点、カエデ属１点であった。

コナラ属コナラ節は、袋番号１（SI01 住 埋土下位 炭１）、袋番号２（SI02 住 炭化物１）の炭化材であった。強靭で弾力に富み、建築材としても用いられる木材である。東北地方では、建築部材にはクリが最も多く利用されるが、次いでスギ、コナラ属コナラ節が利用されている。なお、岩手県では古くは御所野遺跡（縄文時代中期）の住居跡から出土しており、本遺跡と同時期では米沢遺跡の竪穴住居跡から出土している。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹で日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素、二次林要素でもあるコナラや、海岸沿いで生育するカシワなどが含まれる。これらは当時、本遺跡周辺にも生育し分布していたと考えられる。

カエデ属は、袋番号３（SI02 住 炭化物２）の炭化材であった。カエデ属は、重厚で耐朽性、保存性は中庸、また堅硬な材であり切削・加工はやや困難な材である。そのためあまり長材はとれず、加工前の乾燥が難しく収縮から狂い割れが生じることが多く、現代では建築部材としての利用はあまり見られない。表面の仕上がりは光沢が出て美しいことから、家具や楽器などに利用されている。少ないながら縄文時代から江戸時代にかけて、北海道から中部地方で建築部材としての報告例を見ることができる。なお、同時期にカエデ属が建築部材として利用される例は岩手県の小井田Ⅴ遺跡で見られ、竪穴住居跡から出土している。やや湿気のある肥沃な土壌を好み、谷間あるいはこれに接する斜面に生育する。カエデ属のうち、本州中部以北から北海道に多い樹種としては、カラコギカエデが低山の湿地に、オガラバナ、ミネカエデが低山から亜高山の林縁等に生育する。

同定された樹種はいずれも温帯に分布する樹木である。どちらも建築部材と考えられるが、コナラ属コナラ節は岩手県でも古くから建築部材として利用される樹木で、カエデ属はどの地域でも建築部材にあまり利用されない樹木であった。これらの樹木は遺跡周辺にも生育する樹木で植生を反映しており、遺跡周辺からか地域的な用材としてもたらされたと考えられる。

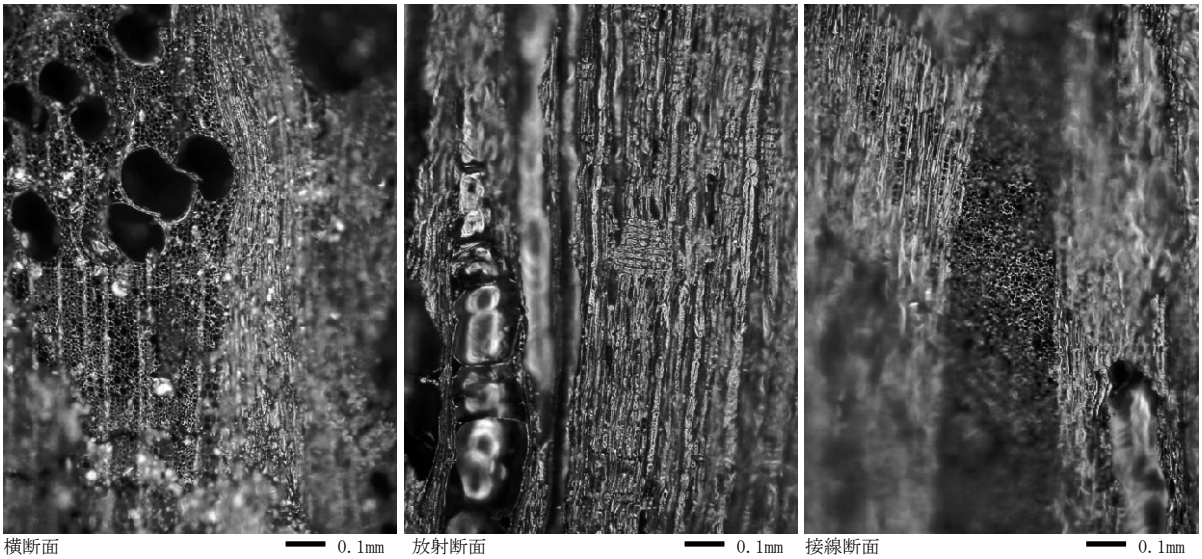
参考文献

伊東隆夫･山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
佐伯浩・原田浩　（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩　（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
高橋利彦　（2002）1999 年度二戸市米沢遺跡出土炭化材の樹種同定，「米沢遺跡発掘調査報告書　東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業関連発掘調査」，岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 376 集，（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，p.183-186.
パリノ･サーヴェイ（1998）小井田Ⅴ遺跡から出土した住居構築材の樹種，町内遺跡発掘調査報告書　一戸城跡・小井田Ⅴ遺跡，一戸町文化財調査報告書第 39 集，一戸町教育委員会，p.22-28.
パリノ･サーヴェイ（2004）鑑定及び分析，御所野遺跡 II，一戸町文化財調査報告書第 48 集，一戸町教育委員会，p.276-287.
山田昌久　（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

中平遺跡の木材

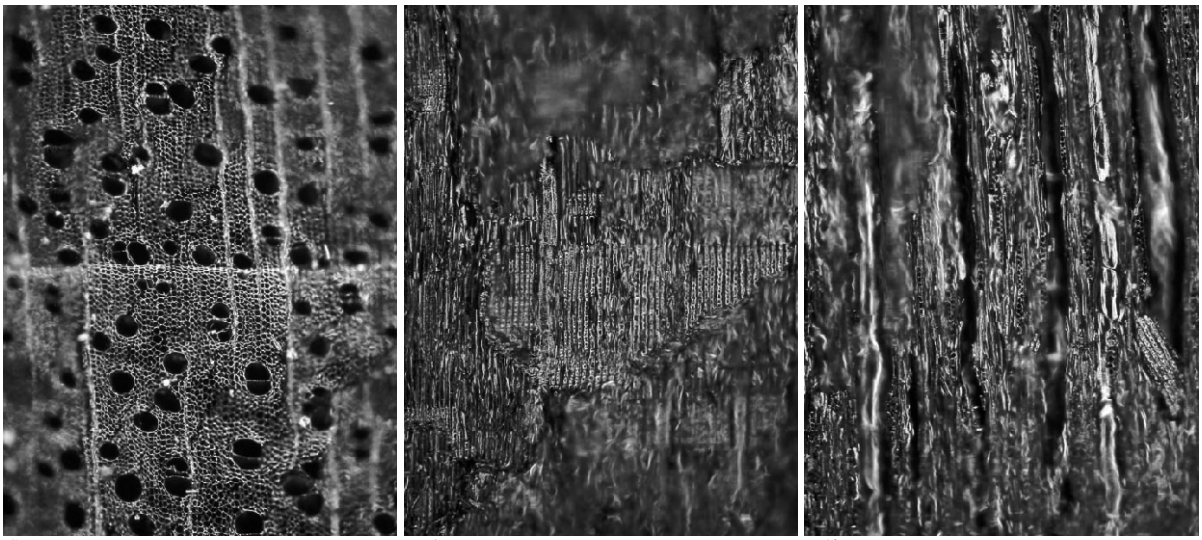
横断面　0.4mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

コナラ属コナラ節　袋番号１ SI01住 QNE 埋土下位 炭１



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

コナラ属コナラ節　袋番号２ SI02住 炭化物１



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

カエデ属　袋番号３ SI02住 炭化物２

４　貝　類　同　定

パリノ・サーヴェイ株式会社

（１）試　　料

中平遺跡（岩手県九戸郡野田村野田に所在）は、明内川の右岸に形成された河岸段丘上に位置し、これまでの調査により縄文時代の陥し穴、奈良～平安時代の竪穴式住居跡・円形周溝・方形周溝・溝、古代以降の掘立柱建物跡・土坑・溝・柱穴状ピットなどが確認されており、縄文時代の狩り場と古代の集落であったと考えられている。

本分析調査では、奈良時代の竪穴式住居跡から出土した貝類について同定を実施し、当時の食物利用について検討する。

（２）分　析　方　法

試料は、奈良時代の竪穴式住居跡であるSI11から出土した貝類とされる２試料（試料名：貝殻１・２）である。いずれもクリーニングされた状態にあり、微細な破片である。

（３）結　　果

確認された種類は、ウニ綱１種類（ウニ類）、腹足綱２種類（ヒメコザラ（シボリガイ型）・エゾアワビ）、顎脚綱１種類（チシマフジツボ）である（表１）。いずれも被熱しない。以下、結果を表２に示し、以下試料ごとに記す。

貝殻１は、ウニ類の棘である。346点が確認される。紫色を呈する棘、緑色を呈する棘などがみられる。また、本試料中には、貝殻片が１点含まれる。

貝殻２は、エゾアワビの破片である。これらの破片に混じって、ウニ類の殻や棘、ヒメコザラ（シボリガイ型）の殻、チシマフジツボの殻片が含まれる。

表１．検出分類群の一覧

棘皮動物門	Echinodermata
ウニ綱	Echinoidea
ウニ類	Ord. et. fam. indet.
軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
カサガイ目	Order Patellogastropoda
エンスイカサガイ亜目	Suborder Acmaeoidea
ユキノカサガイ科	Family Lottiidae
ヒメコザラ（シボリガイ型）	Patelloida pygmaea
古腹足目	Order Vetigastropoda
ミミガイ科	Family Haliotidae
エゾアワビ	Haliotis (Nordotis) discus hannai
節足動物門	Phylum Arthropoda
甲殻亜門	Crustacea
顎脚綱	Class Maxillopoda
鞘甲亜綱	Subclass Thecostraca
無柄目	Order Sessilia
フジツボ亜目	Balanina
フジツボ科	Family Balanidae
アカフジツボ亜科	Subfamily Megabalaninae
チシマフジツボ	Balanus cariosus

（４）考　　察

本分析調査で同定されたエゾアワビは、北海道南部から本州東北地方沿岸部に棲息する種である。また、ウニ類、エゾアワビが竪穴式住居跡内から出土している点を考慮すると、いずれも食用資源として近隣の沿岸岩礁域で採取され食用とされたものと考えられる。

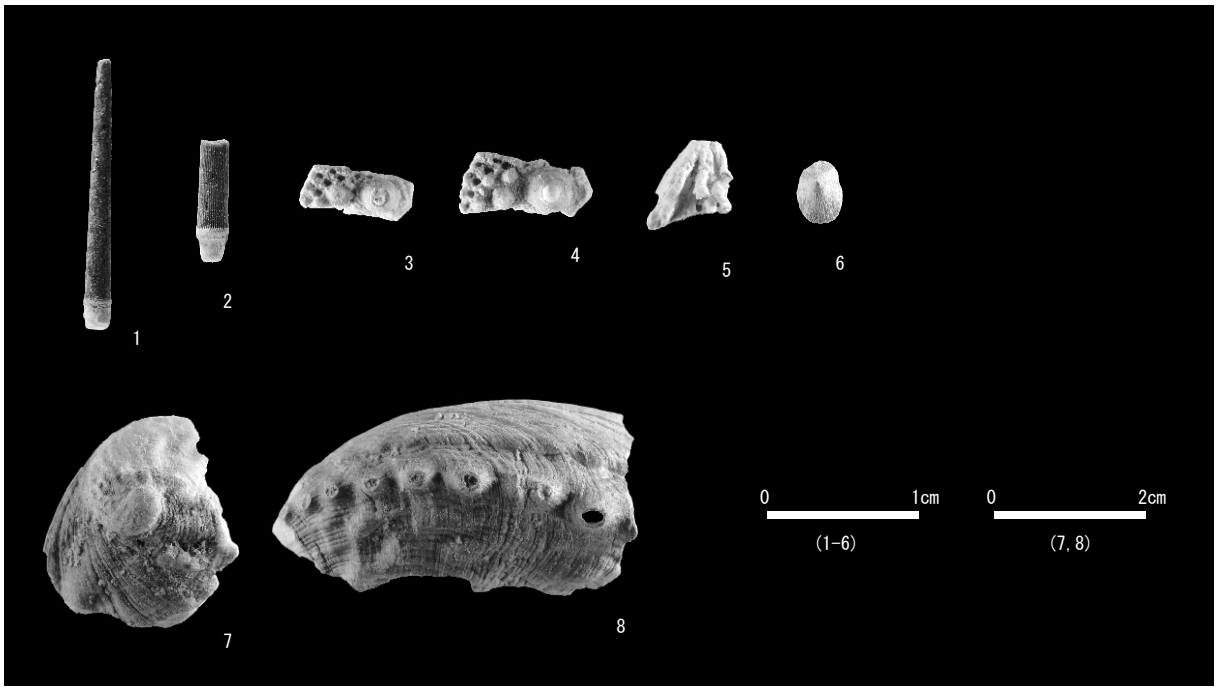
なお、ウニ類は、棘が紫色や緑色を呈する棘などが見られることから、ムラサキウニ類やバフンウニ類など、複数種が含まれている可能性もある。貝殻２試料では、エゾアワビの他に、ヒメコザラ（シボリガイ型）、チシマフジツボがみられる。これらは、小型な破片であることから、食料資源として持ち込まれたものでなく、エゾアワビなどに付着していたことが考えられる。

以上のような結果から、奈良時代には沿岸部で採取されたウニ類、エゾアワビ等を食料として利用していたことが考えられる。今後、本遺跡および周辺の遺跡でも同様の分析調査を実施し、本地域の古代における食物利用について資料を蓄積し、検討することが望まれる。

表２．骨貝類同定結果

試料名	遺　構	番　号	種　　類	部　位	部　分	数　量	被　熱
貝殻１	SI11	(78)	ウニ類	棘	破片	346	
			貝類	殻	破片	1	
			残渣			0.03 g	
貝殻２	SI11	(77)	ウニ類	殻	破片	22	
				棘	破片	5	
			ヒメコザラ（シボリガイ型）	殻	略完	1	
			エゾアワビ	殻	破片	１＋	
			チシマフジツボ	殻	破片	4	
			礫			1	
			残渣			2.36 g	

図版１　出土貝類



１．ウニ類 棘（貝殻２）　２．ウニ類 棘（貝殻２）　３．ウニ類 殻（貝殻１）
４．ウニ類 殻（貝殻１）　５．チシマフジツボ（貝殻２）　６．ヒメコザラ（シボリガイ型）（貝殻２）
７．エゾアワビ 殻（貝殻２）　８．エゾアワビ 殻（貝殻２）

Ⅶ　調査のまとめ

1　縄　文　時　代

４ヵ年の調査で、陥し穴状遺構 73 基、遺物包含層 1 箇所を確認した。

陥し穴状遺構は、平面形から円形 7 基、溝状 66 基に分けられる。円形基調の陥し穴状遺構は中央調査区東側にまとまって検出されており、標高 24.5 ～ 25.0 ｍの獣道沿いに仕掛けて、獲物を狩る目的で構築されたと考えられる。このうち、SK62・73 の埋土上位には To-Cu テフラが混入していることから、降下時には廃絶されていたと考えられ、遺構は推定されるテフラ降下時期の縄文時代前期中葉（約 5,500 年前）より古いと推定される。溝状基調の陥し穴状遺構は調査区全域から見つかっており、いくつかの列状に並んで配置されていることから、水場である遺跡北側を東流する明内川に来た獲物を捕獲するために獣道沿いに設けられたと見られる。南調査区では溝状の陥し穴状遺構同士が切り合って検出されていることから、複数の時期に亘って設置されたと考えられる。遺構には鍵層となる火山灰の堆積は認められず、遺物も出土していないことから詳細な時期は不明であるが、中央調査区の SK63・65 の切り合い関係から、前期中葉以前の円形の陥し穴状遺構よりも溝状の陥し穴状遺構が古いことが確認されている。この事例から、溝状の陥し穴状遺構の存続時期は前期中葉以後と広く捉えておきたい。

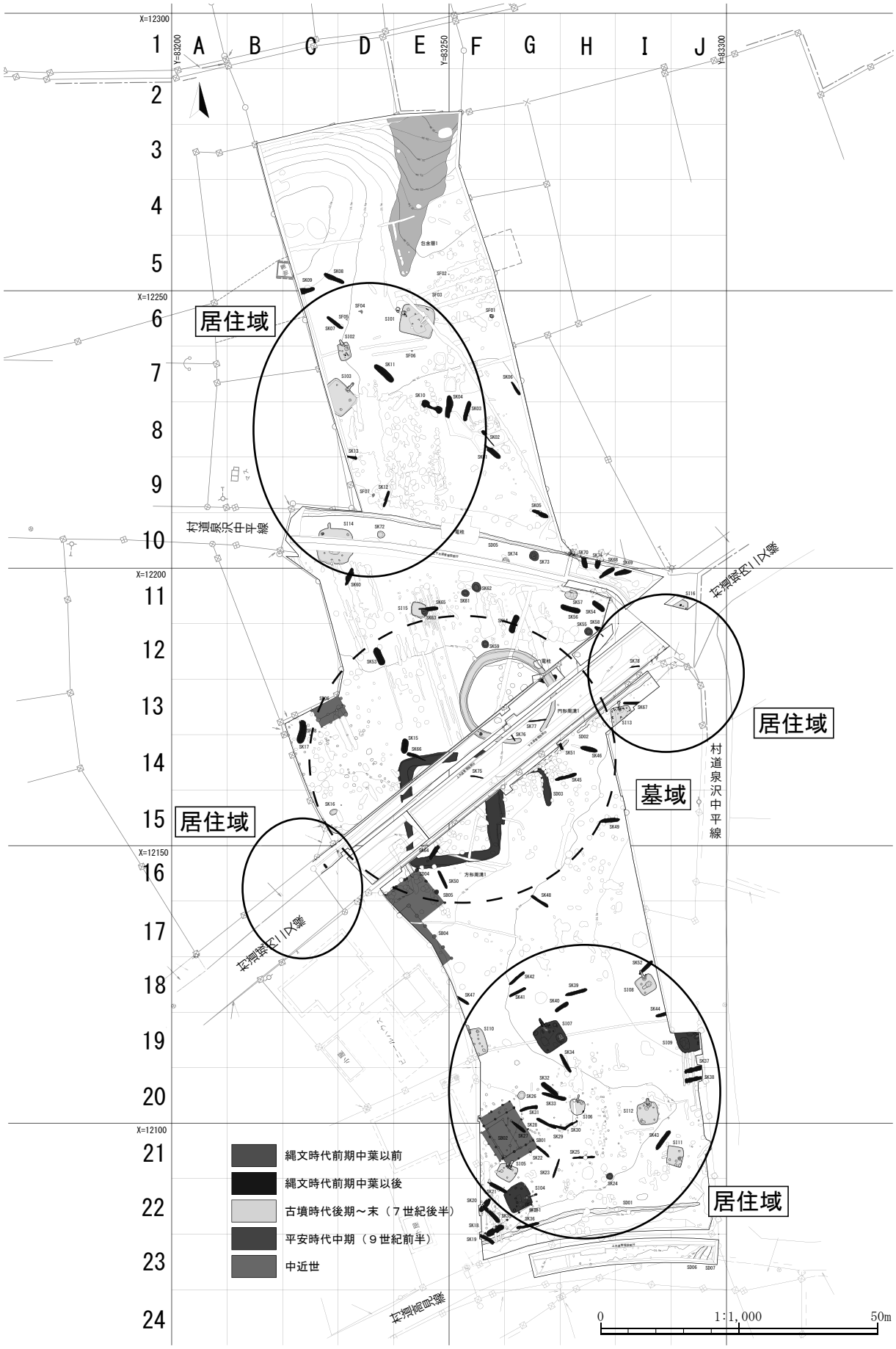
遺物包含層は、北調査区北端の小さな谷部分で確認した。包含層の範囲は約 200㎡で、層厚 0.1 ～ 0.4 ｍと薄い。包含層からは縄文時代前期前葉の遺物を少量出土しているが、非常に希薄である。調査区内では、ほかに縄文時代の遺構・遺物は確認されておらず、流れ込みと見られるが、調査区外の東側もしくは西側に該期集落の存在が推定される。

2　古　　代

古代の遺構は、古墳時代後期～末（７世紀後半）の竪穴住居跡 12 棟、平安時代中期（９世紀前半）の竪穴住居跡３棟、古代～中世の竪穴住居跡１棟の計 16 棟と、古墳時代後期～末の円形周溝１基、平安時代中期の方形周溝１基、土坑、焼土、溝跡が確認された。これら遺構の分布について、第 85 図に時期別の調査全体図を示した。

古墳時代後期～末の集落は、中央調査区から平成 30 年度調査区にかけて造られた円形周溝１を中心に、やや空白域を設けてドーナツ状に広がっていると考えられる。円形周溝１は、台地上に営まれた集落の中で標高 25.0 ～ 25.5 ｍ付近に位置しており、周辺の竪穴住居跡からみるとやや小高い丘の上に立地している。主体部を含む墳丘部分は既に削平されて残存していないが、周溝埋土の観察から、内部盛土からの流入土が認められることから、低墳丘を伴っていた可能性がある。周溝の周辺には、竪穴住居が造られずにやや空白域を設けていることから見ても、円形周溝のある墓域と竪穴住居の分布する居住域は明確に分けられていたと考えられる。

また、平安時代中期の集落は、古墳時代後期～末に廃絶した円形周溝１に隣接するように構築された方形周溝１を中心に、東西に広がりを持っていると推定される。円形周溝１と同じく、周辺の竪穴住居跡からやや小高い丘に立地している。また、方形周溝１も円形周溝１と同様に墳丘部分は既に削平されて残存していないが、周溝埋土に内部盛土からの流入土が観察されることから、こちらも低墳



第 85 図　時期別調査全体図

丘を伴っていたと見られる。平安時代中期の集落景観は、前時期に構築された円形周溝１も墳丘を伴った状態で残存していたと考えられ、また古墳時代後期～末に廃絶した竪穴住居の埋土上位にTo-aテフラが二次堆積していることからみて、窪地として認識できる状態であったと推察される。平安時代中期の集落は、前時期に構築された円形周溝１や竪穴住居と重複することなく方形周溝１を造り、同様に空白域を設けて竪穴住居を配置していたと推測され、古墳時代後期～末に形成された墓域と居住域を踏襲するように意識して明確に土地利用が行われていたと考えられる。

青森県の古代の墓制について纏めた小谷地によれば、古代北東北では末期古墳の直接的な系譜を引く円・方形周溝が造営されるが、９世紀後半には、火葬の可能性がある円形土坑主体部が取り入れられ、展開していったとし、末期古墳から円・方形周溝への転換は、１期（末期古墳併行期で７世紀前葉から８世紀代）の円形周溝を末期古墳とすると、２期（９世紀前半）段階、ロクロ土師器導入期に大きな画期を持つ（２期以降は長方形主体部を持つ末期古墳未検出期）、３期（９世紀後半）までは太平洋側中心に分布し、阿光坊・丹後平古墳群の造営が続く。また、４期（10世紀前半）には津軽地方に爆発的な分布がみられ、追葬や平面形の変化など、大きな変化がみられ、５期（10世紀中葉以降）には、津軽地方で継続するとともに上北地方にも再び造られるとしている（小谷地2016）。

調査で見つかった円形周溝１と方形周溝１は、いずれも915年降下とされるTo-aテフラ、943年降下が有力なB-Tmテフラを含まず、後者については埋土から出土した９世紀前半に比定されるロクロ土師器、埋土下位から出土した炭化材の年代測定値から、前者は１期、後者は２期となり、円形周溝１は１箇所が途切れる単独の末期古墳、方形周溝１はこれの系譜を引くものに位置付けられる。

遺物については、竪穴住居跡を中心に土師器54点、須恵器５点のほか、土製紡錘車４点を含む土製品、鋌４点などの金属製品、盤状木製品、ウニ類の殻や棘、ヒメコザラ・エゾアワビ・チシマフジツボなどの動物遺存体が出土している。

非ロクロ成形の土師器坏の特徴を見ると、SI01の11やSI14の57のように丸底の底部に体部で屈曲して長い口縁部が外反あるいは直線的になる坏と、SI02の17・18やSI04の27、SI12の47・48、SI13の52・53、SI16の60のように丸底の底部に体部で屈曲して長い口縁部が内湾する坏に分けられる（佐藤2008）。佐藤によると、前者は７世紀前半に最盛期を迎え、７世紀後半以降、客体化しながら８世紀中頃まで継続する器形で、後者は６世紀中頃に出現し、７世紀中葉以降、前者に代わって主要器種となって８世紀後半まで継続する器形となる（佐藤2008）。これを援用すれば、SI01・14出土の土師器坏はやや古手、その他はこれに後続する器形と考えられる。また、土師器甕・甑は、SI01の13・15・16やSI10の44・45のように内外面に密な縦位ミガキで仕上げるものや、SI02の19～22、SI13の55・56、SI14の58・59のように外面は密な縦位ミガキで、内面は粗いミガキか特に仕上げをせずに留めるものがあるなど器面調整に特徴がある。器形の変化は坏ほど顕著でないが、甕体部の膨らみが上半にあることや、底部が外側に張り出す器形からは、宇部の指摘する２期（７世紀中葉～後葉）と捉えられ、土師器坏についても体部の段、底部の丸みも弱いやや浅い坏という特徴も当てはまる（宇部2014）。ロクロ成形の土師器坏は、SI04の26、方形周溝１の64～67、SD03の68と少ない。いずれも内面黒色処理が施されており、口縁が確認できる26・65はやや外反気味である。また、64は体部に丸みを帯び、外面にも丁寧なミガキが認められる。68は底部が静止糸切りで切り離されており、外面には「十」が墨書されている。これら、器形・器面調整の特徴から、９世紀前葉～中葉の前半期に比定される。

以上、古代の遺構・遺物を概観したが、遺物からも７世紀後半、９世紀前半の大別２時期が捉えられた。中平遺跡は、台地上に広がる古代の大規模集落であることがこれまでの複数の調査から指摘さ

れているが、今回の調査から、その中でもいくつかのまとまりがあることが分かった。今後の周辺の調査にも期待したい。

３　中　近　世

今回の調査で、調査区の西側から掘立柱建物跡計５棟と塀跡１箇所を確認した。掘立柱建物跡は南調査区を中心に、中央調査区からも見つかっており、調査区の西側に広がりを持っていると考えられる。該期の出土遺物は寛永通寶２点のみで、詳細な時期は不明だが、野田村教育委員会が 2012 年に調査を行った際に、今回の北調査区の西側から中世と考えられる張り出しを持つ竪穴建物跡１棟が検出されている（野田村教委 2014）。また、本遺跡の明内川を挟んだ北側には、15 世紀後半に廃絶したと考えられる伏津館跡があることからも、中世の集落が広がっている可能性もある（岩文埋 2019）。

お　わ　り　に

４ヵ年の調査で、縄文時代、古代、中世～近世の３時期の遺構・遺物を確認することができた。特に、古墳時代後期～末（７世紀後半）と平安時代中期（９世紀前半）の古代集落は、明確な墓域と居住域を持ち、該期の岩手県沿岸北部における集落研究の一助となる成果を提供することができた。

今回の調査成果が、東日本大震災から復興する野田村の新しい歴史に寄与することを切に願います。

（北田）

＜参考文献＞

宇部則保　2014 「糠部沿岸の７～８世紀の土器と集落」『北三陸の蝦夷・蕨手刀』 岩手考古学会第 46 回研究大会資料

岩文埋　2019 『伏津館跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 695 集

北東北古代集落遺跡研究会　2014 『９～ 11 世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北遺跡の実態的研究』 2011 年度～ 2013 年度明治大学大久保忠和考古学振興基金奨励研究研究成果報告書

小谷地肇　2016 「末期古墳の展開と終焉－古代の墓制－」『北東北９・10 世紀社会の変動』 一般社団法人日本考古学協会 2016 年度弘前大会第Ⅱ分科会研究報告資料集

佐藤敏幸　2008 「牡鹿半島における在地社会の変動と古代陸奥国の律令体制形成過程の研究」 東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻博士課程学位論文

野田村教委　2014 『中平遺跡 84・128・309 地点　大平野遺跡 20 地点　古館山遺跡 61 地点発掘調査報告書』 野田村埋文調報第４集

林正之　2015 「東北北部「末期古墳」の再検討」『古代』第 137 号　早稲田大学考古学会

藤沢敦　2016 「末期古墳と蝦夷社会の特質」『月刊考古学ジャーナル９』No.688　ニュー・サイエンス社

平凡社　1990 『岩手県の地名』日本歴史地名大系３

写　真　図　版

遺跡遠景（北西から）

平成 27 年度調査区遠景（北東から）

写真図版１　遺跡遠景、近景（１）

北調査区全景（東から）

中央～南調査区全景（北から）

写真図版２　遺跡近景（２）

平成 29 年度調査区全景（西から）

平成 29 年度調査区全景（直上・上が北）

写真図版３　遺跡近景（３）

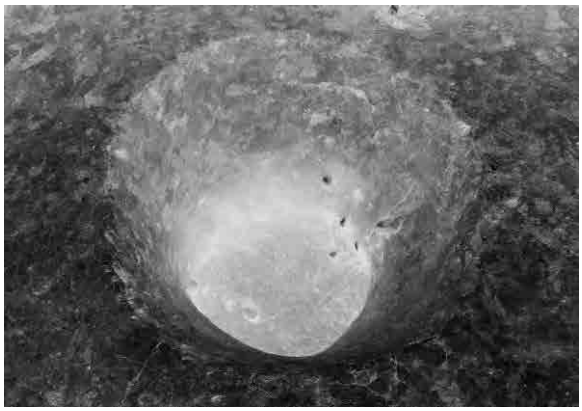
平成 30 年度調査区全景（西から）

SI07 竪穴住居跡　焼土・炭化材出土状況（南から）

写真図版４　遺跡近景（４）

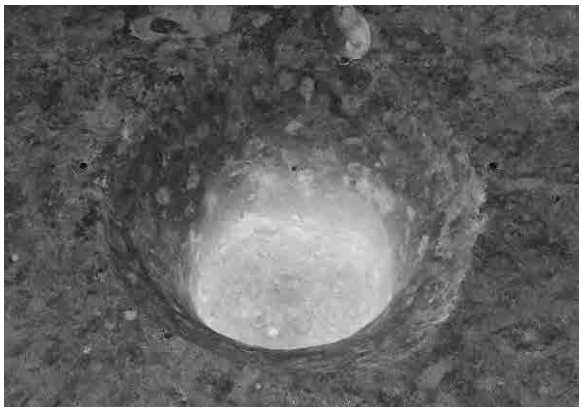
SK24 全景（南から）

SK24 断面（南から）



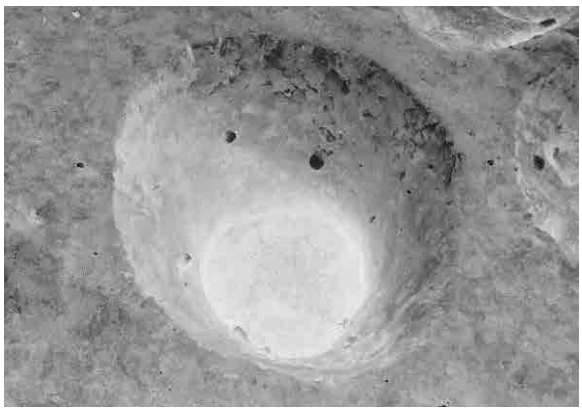
SK55 全景（北から）

SK55 断面（北から）

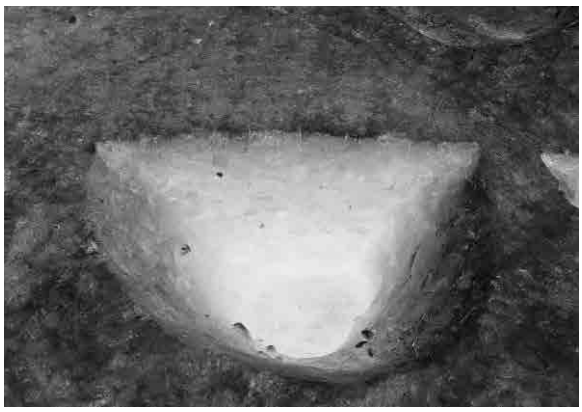


SK59 全景（南から）

SK59 断面（南から）

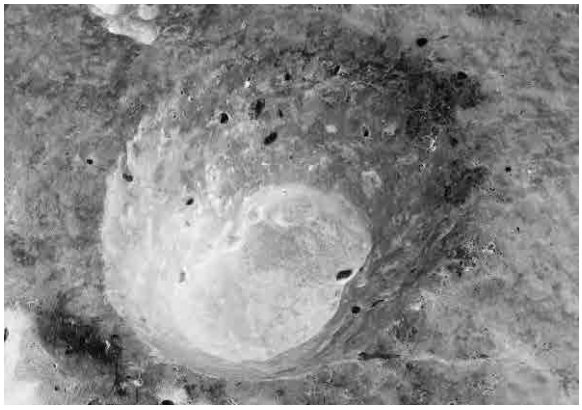


SK61 全景（東から）



SK61 断面（東から）

写真図版５　SK24・55・59・61 陥し穴状遺構



SK62 全景（東から）

SK62 断面（東から）

SK63 全景（南から）

SK63 断面（南から）

SK73 全景（北から）

SK73 断面（南から）

北調査区作業風景

写真図版６　SK62・63・73 陥し穴状遺構

SK01 全景（南東から）

SK02 全景（南東から）

SK03 全景（南西から）

SK04 全景（南から）

SK01 断面（南東から）

SK02 断面（南東から）

SK03 断面（南西から）

SK04 断面（南から）

写真図版７　SK01 ～ 04 陥し穴状遺構

SK05 全景（南東から）

SK06 全景（南東から）

SK07 全景（南東から）

SK08 全景（南東から）

SK05 断面（南東から）

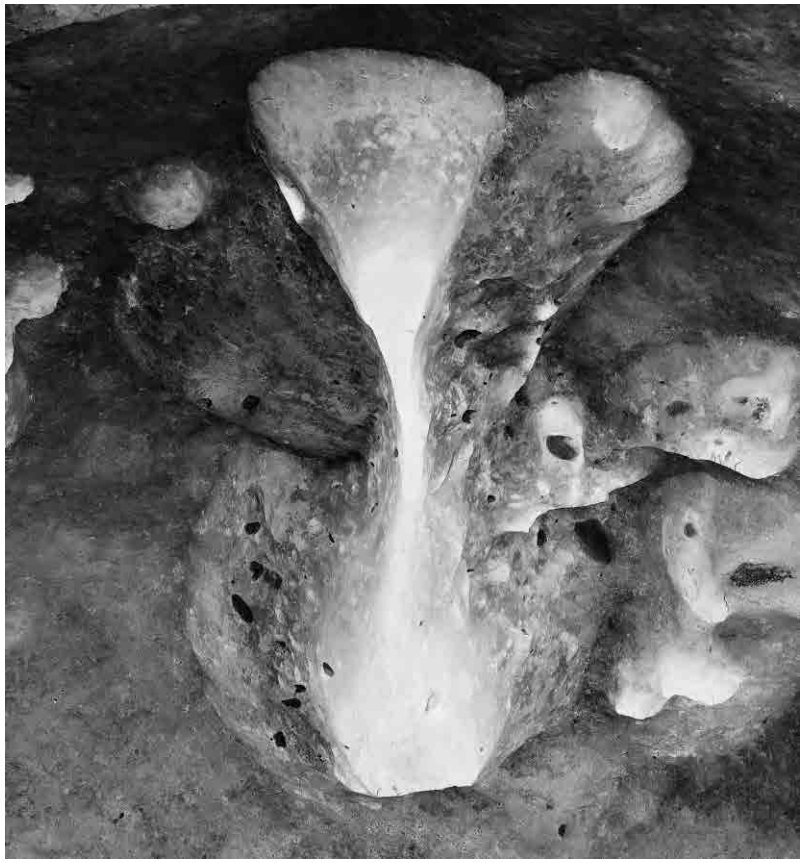
SK06 断面（南東から）

SK07 断面（南東から）

SK08 断面（南東から）

写真図版８　SK05 ～ 08 陥し穴状遺構

SK09 全景（南東から）



SK10 全景（西から）

SK11 全景（南東から）

SK09 断面（南東から）

SK10 断面（西から）

SK11 断面（南東から）

写真図版９　SK09 ～ 11 陥し穴状遺構

SK12 全景（南から）

SK14 全景（南西から）

SK13 全景（南東から）

SK12 断面（南から）

SK14 断面（南西から）

SK13 断面（南東から）

作業風景

写真図版 10　SK12 ～ 14 陥し穴状遺構

SK18 全景（東から）

SK15 全景（南から）

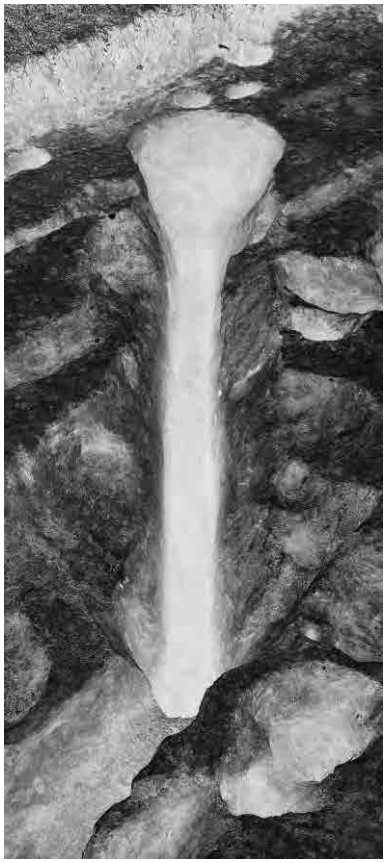
SK19 全景（南東から）

SK15 断面（南から）

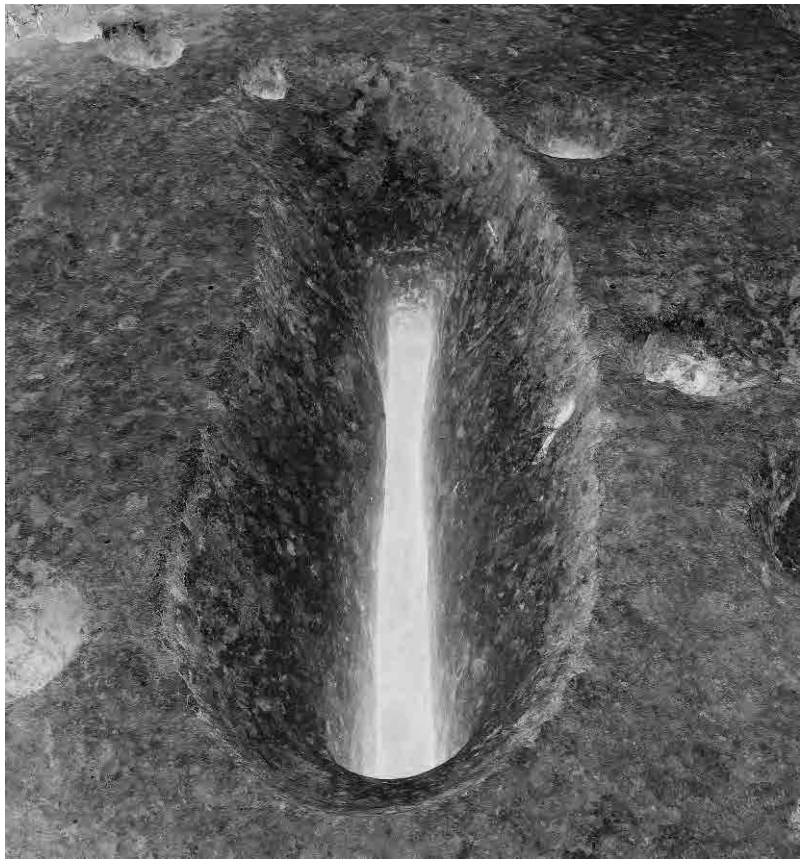
SK18 断面（東から）

SK19 断面（南東から）

写真図版 11　SK15・18・19 陥し穴状遺構



SK20 全景（南東から）



SK17 全景（南西から）

SK21 全景（南東から）

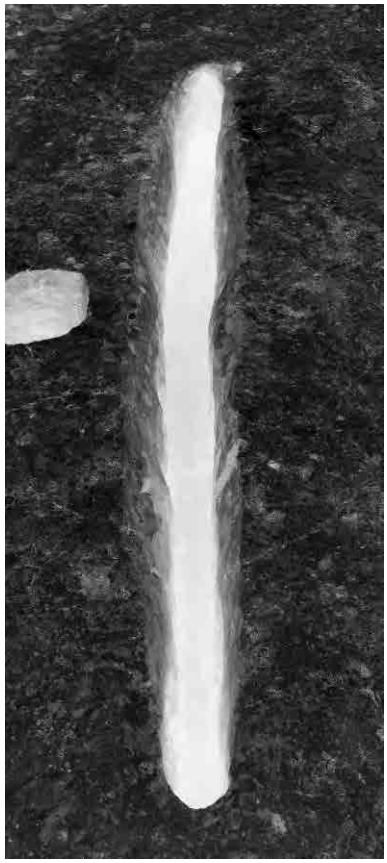
SK17 断面（南西から）

SK20 断面（南東から）

SK21 断面（南東から）

写真図版 12　SK17・20・21 陥し穴状遺構

SK22 全景（北西から）



SK23 全景（北から）

SK25 全景（東から）

SK27 全景（南東から）

SK22 断面（北西から）

SK23 断面（北から）

SK25 断面（東から）

SK27 断面（南東から）

写真図版 13　SK22・23・25・27 陥し穴状遺構

SK28 全景（東から）

SK29 全景（東から）

SK30 全景（東から）

SK31 全景（東から）

SK28 断面（東から）

SK29 断面（東から）

SK30 断面（東から）

SK31 断面（東から）

写真図版 14　SK28 ～ 31 陥し穴状遺構

SK32 全景（東から）

SK33 全景（東から）

SK34 全景（南から）

SK35 全景（南西から）

SK32 断面（東から）

SK33 断面（東から）

SK34 断面（南から）

写真図版 15　SK32 ～ 35 陥し穴状遺構

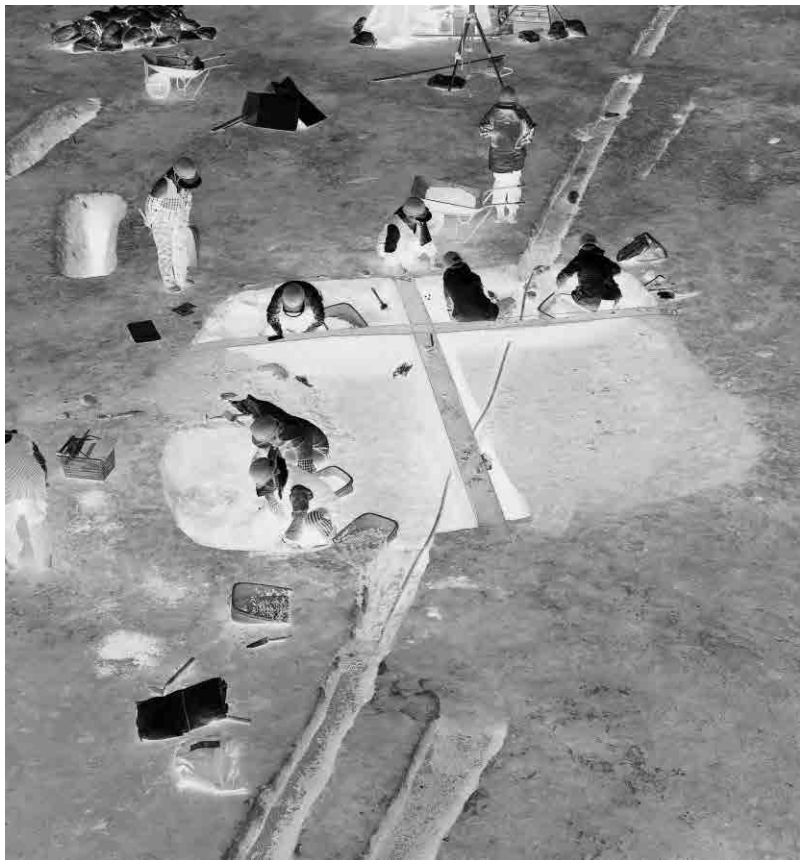
SK36 全景（東から）

SK35 断面（南西から）

SK36 断面（東から）

SK39 断面（東から）

SK39 全景（東から）



SI07 作業風景

写真図版 16　SK35・36・39 陥し穴状遺構

SK37・38 全景（西から・左が 37・右が 38）

SK40 全景（東から）

SK37 断面（西から）

SK38 断面（西から）

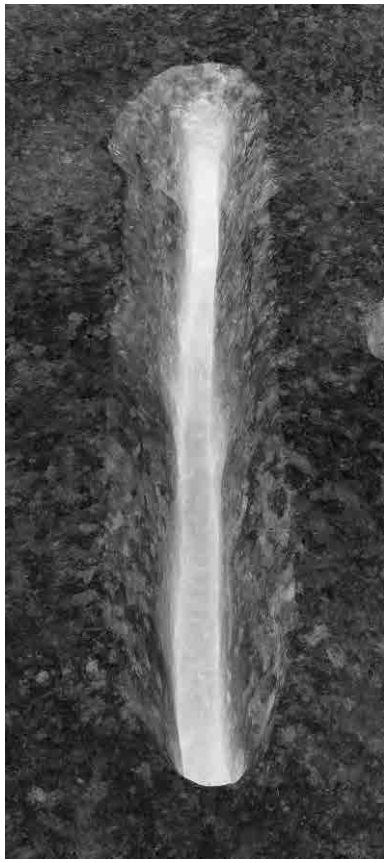
SK40 断面（東から）

SK44 作業風景

写真図版 17　SK37・38・40 陥し穴状遺構

SK41 全景（東から）

SK42 全景（東から）



SK43 全景（南西から）

SK44 全景（西から）

SK41 断面（東から）

SK42 断面（東から）

SK43 断面（南西から）

SK44 断面（西から）

写真図版 18　SK41 ～ 44 陥し穴状遺構

SK45 全景（南東から）

SK46 全景（南東から）

SK47 全景（南東から）

SK48 全景（南東から）

SK45 断面（南東から）

SK46 断面（南東から）

SK47 断面（南東から）

SK48 断面（南東から）

写真図版 19　SK45 ～ 48 陥し穴状遺構

SK49 全景（東から）

SK50 全景（南から）

SK51 全景（南から）

SK52 全景（北東から）

SK49 断面（東から）

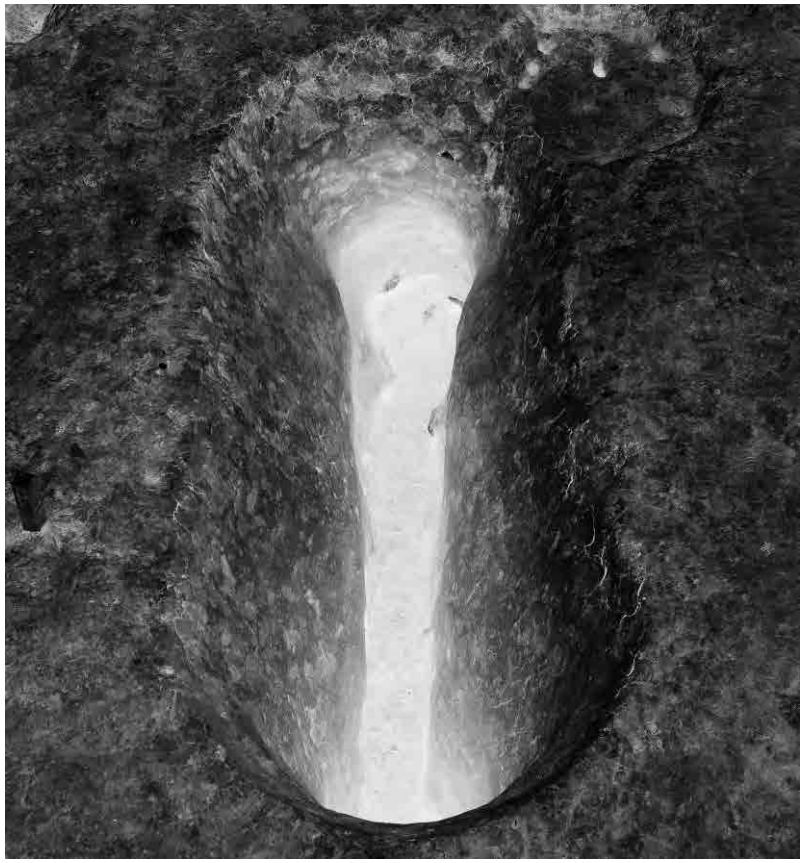
SK50 断面（南から）

SK51 断面（南から）

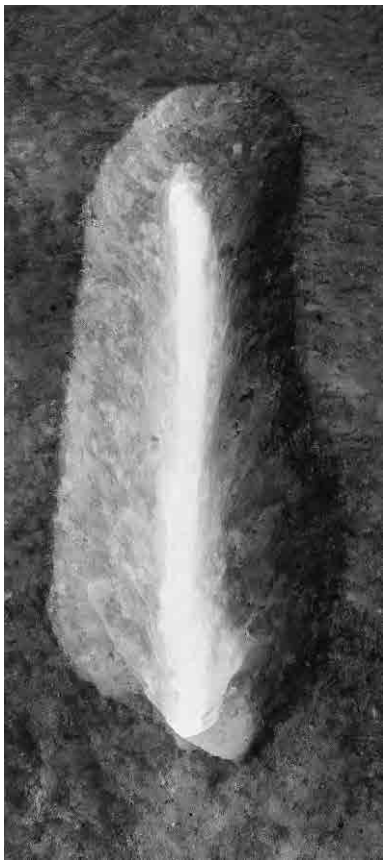
SK52 断面（北東から）

写真図版 20　SK49 ～ 52 陥し穴状遺構

SK54 全景（西から）



SK53 全景（南から）



SK56 全景（東から）

SK54 断面（西から）

SK53 断面（南から）

SK56 断面（東から）

SK58 全景・断面（北から）

写真図版 21　SK53・54・56・58 陥し穴状遺構

SK60 全景（南西から）

SK64 全景（南西から）

SK65 全景（東から）

SK34 作業風景

SK60 断面（南西から）

SK64 断面（南西から）

SK65 断面（東から）

写真図版 22　SK60・64・65 陥し穴状遺構

SK66 全景（南東から）

SK67 全景（西から）

SK68 全景（南西から）

SK69 全景（南西から）

SK66 断面（南東から）

SK67 断面（西から）

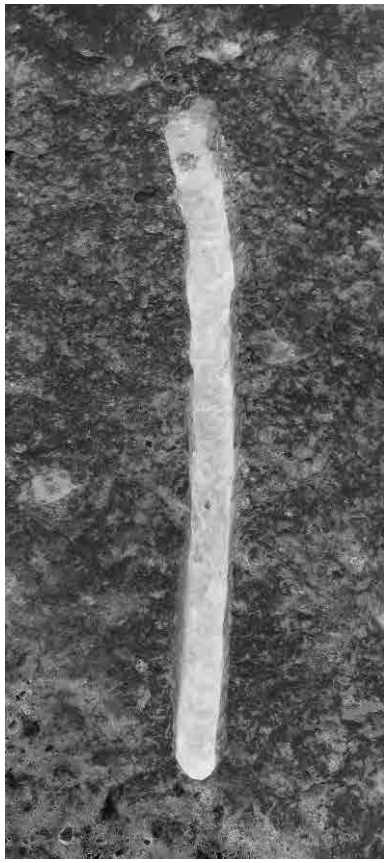
SK68 断面（南西から）

SK69 断面（南西から）

写真図版 23　SK66 ～ 69 陥し穴状遺構

SK70 全景（南から）

SK71 全景（南から）



SK75 全景（南東から）

SK76 全景（南から）

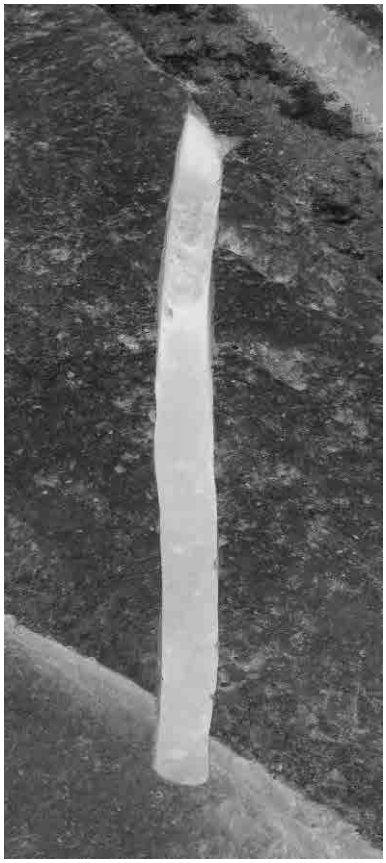
SK70 断面（南から）

SK71 断面（南から）

SK75 断面（南東から）

SK76 断面（南から）

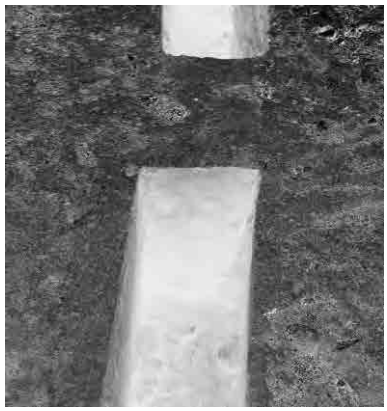
写真図版 24　SK70・71・75・76 陥し穴状遺構



SK77 全景（東から）

SK78 全景（東から）

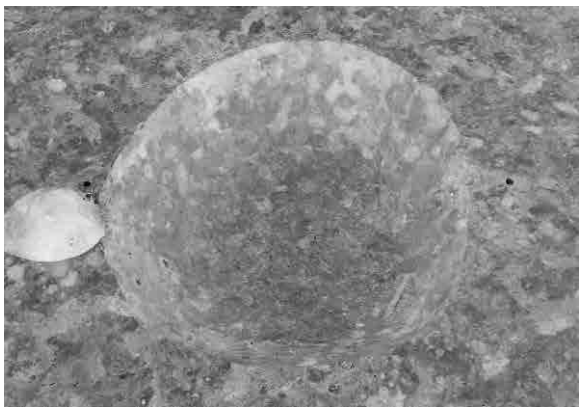
SK77 断面（東から）



SK78 断面（東から）

SK16 全景（東から）

SK16 断面（東から）



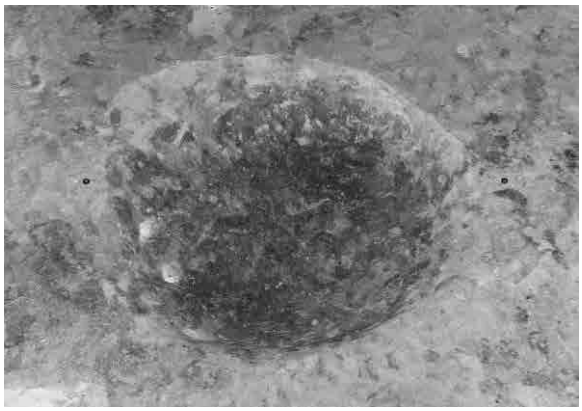
SK26 全景（南から）

SK26 断面（南から）

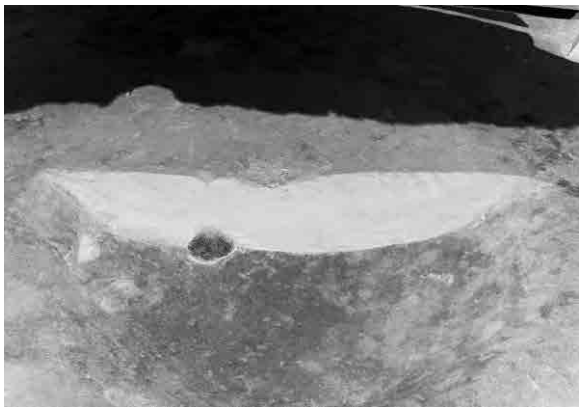
写真図版 25　SK77・78 陥し穴状遺構、SK16・26 土坑

SK57 全景（東から）

SK57 断面（東から）



SK72 全景（南から）



SK72 断面（南から）

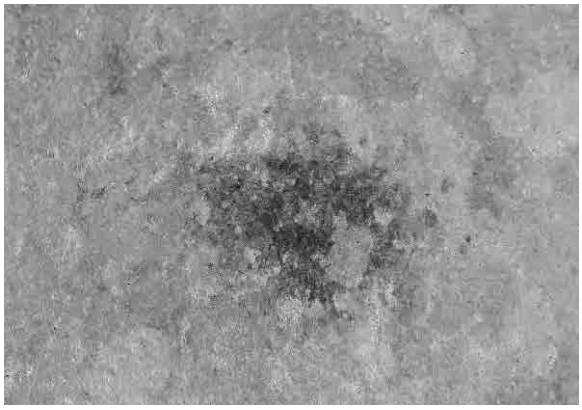
SK74 全景・断面（北から）

北調査区現況（南東から）

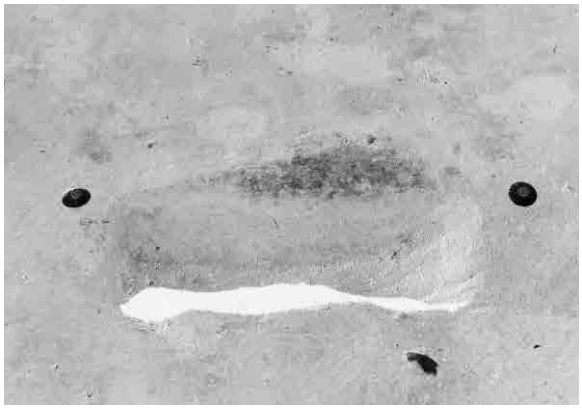
SF01 全景（南西から）

SF01 断面（南西から）

写真図版 26　SK57・72・74 土坑、SF01 焼土遺構



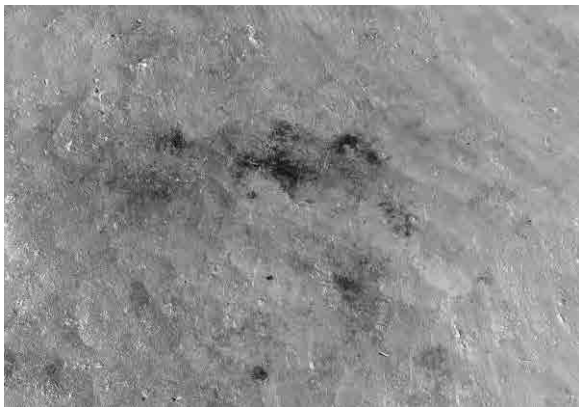
SF02 全景（南西から）



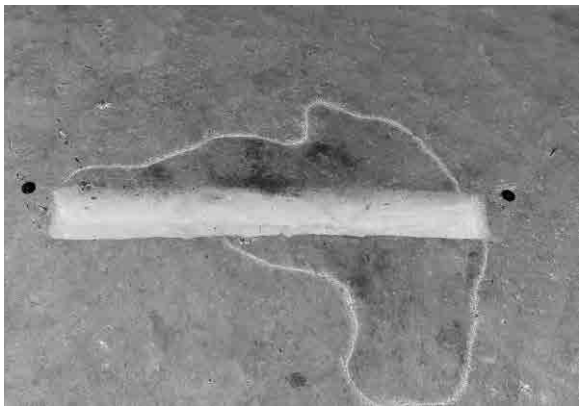
SF02 断面（南西から）

SF03 全景・断面（南から）

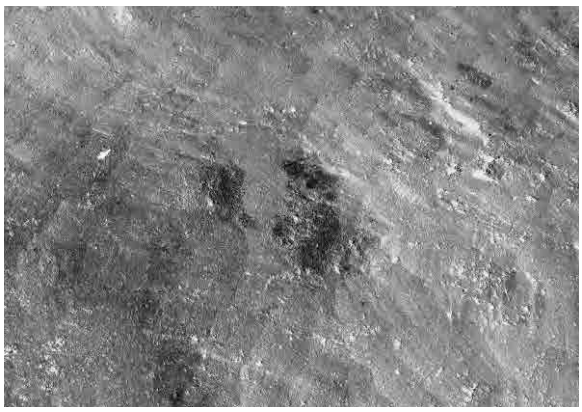
現地説明会風景



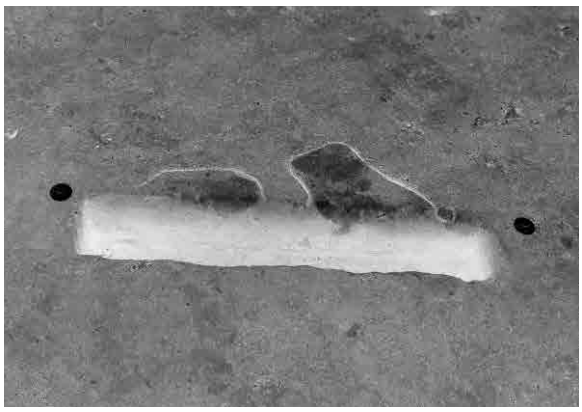
SF04 全景（南から）



SF04 断面（南から）



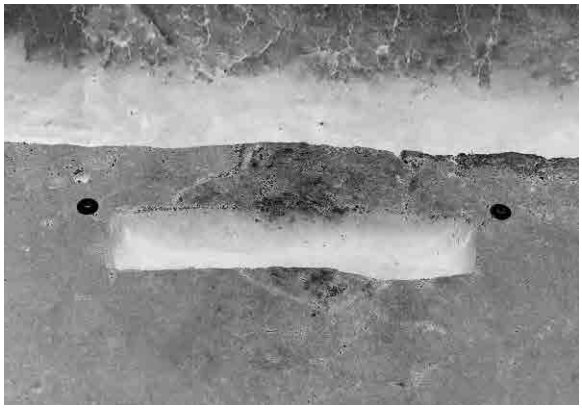
SF05 全景（南から）



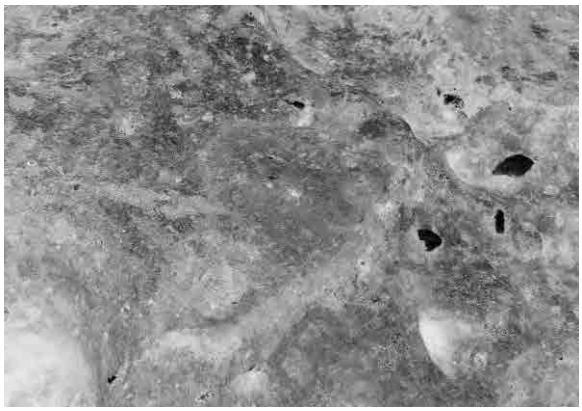
SF05 断面（南から）

写真図版 27　SF02 ～ 05 焼土遺構

SF06 全景（南から）



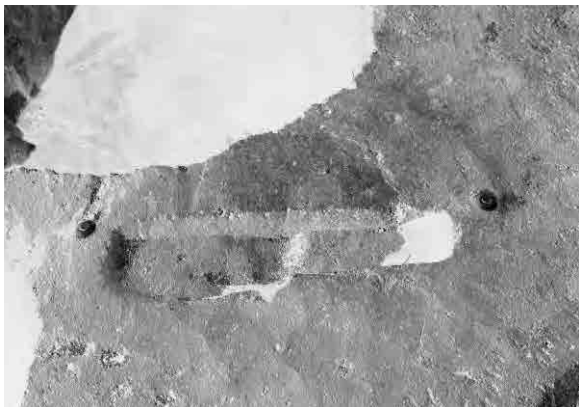
SF06 断面（南から）



SF07 全景（南から）

SF07 断面（南から）

SF08 全景（西から）

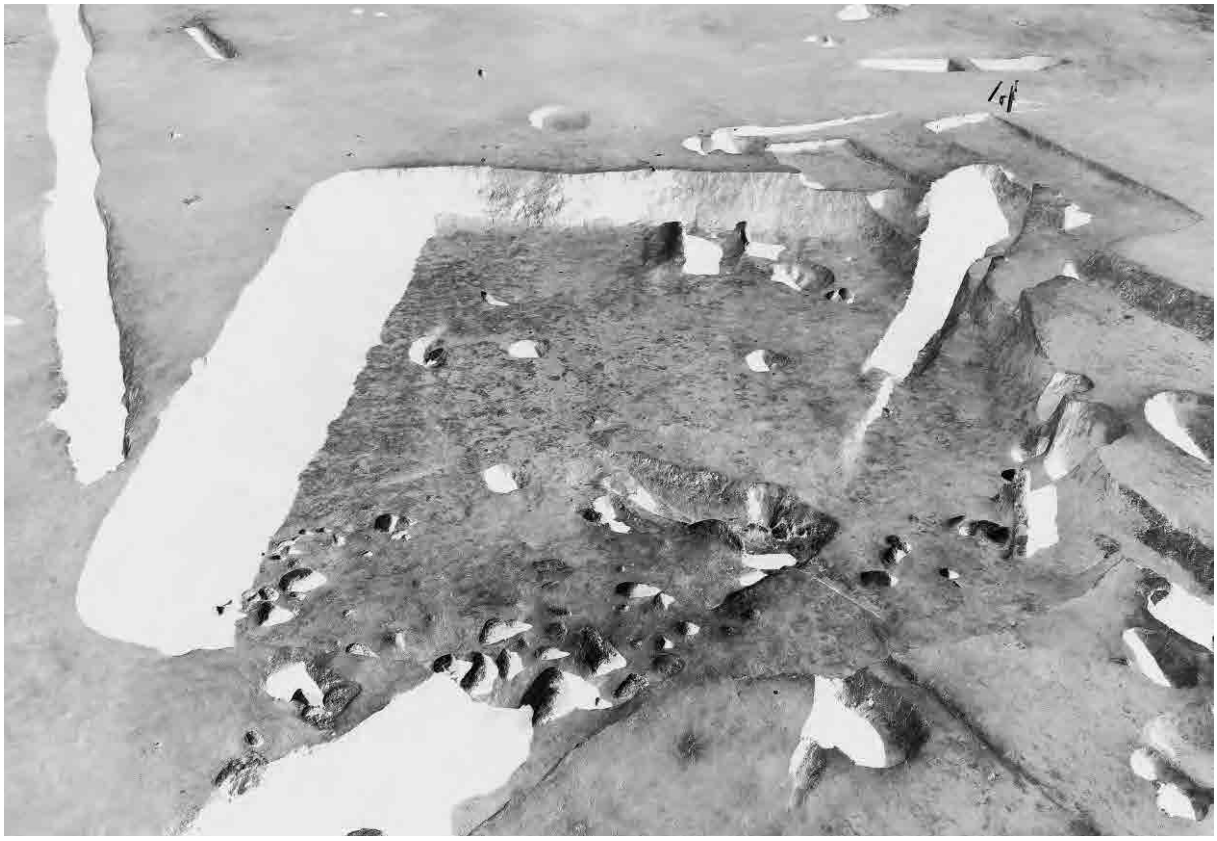


SF08 断面（西から）

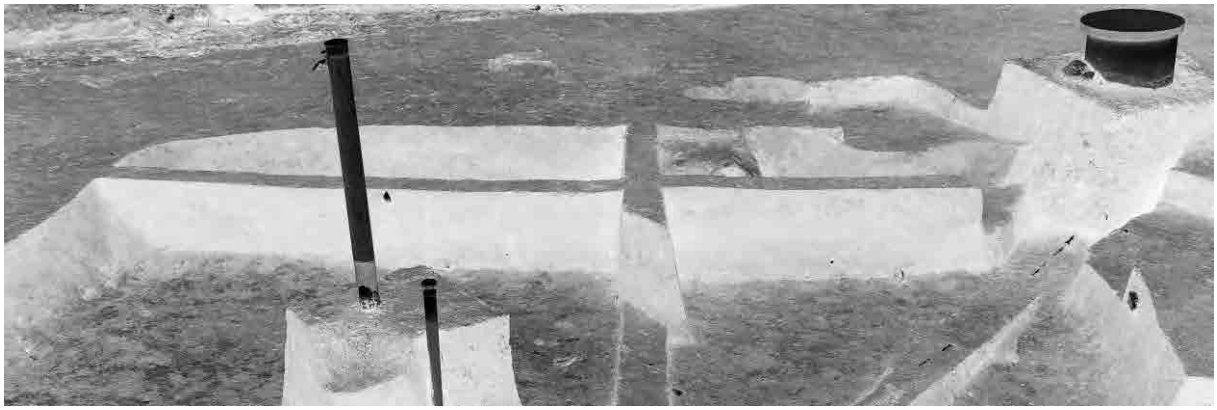
北側谷部断面 A（南西から）

北側谷部断面 B（南西から）

写真図版 28　SF06 ～ 08 焼土遺構、北側谷部



全景（東から）



断面（東から）

カマド全景（東から）

カマド土器出土状況（東から）

写真図版 29　SI01 竪穴住居跡

全景（南から）

断面（南から）

カマド全景（南から）

床面土器出土状況（南から）

写真図版 30　SI02 竪穴住居跡

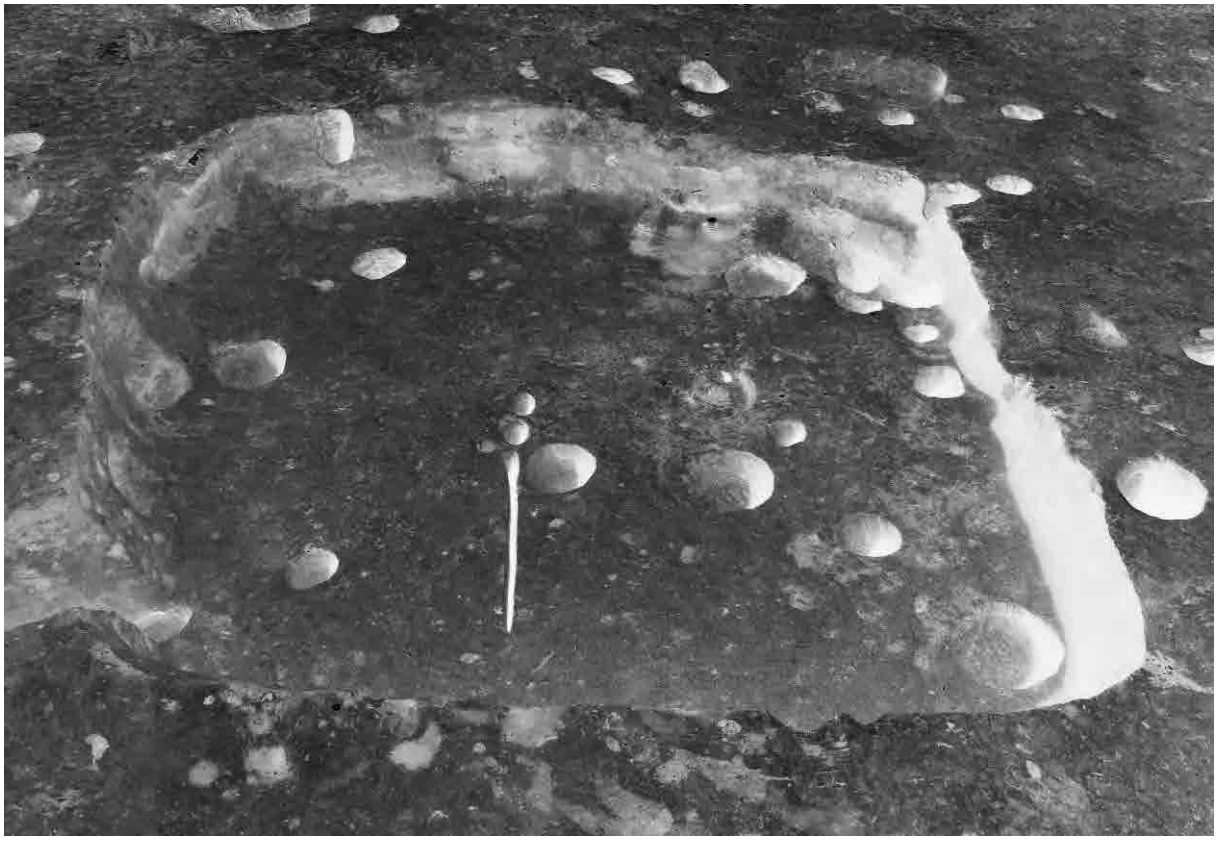
全景（南西から）

断面（北東から）

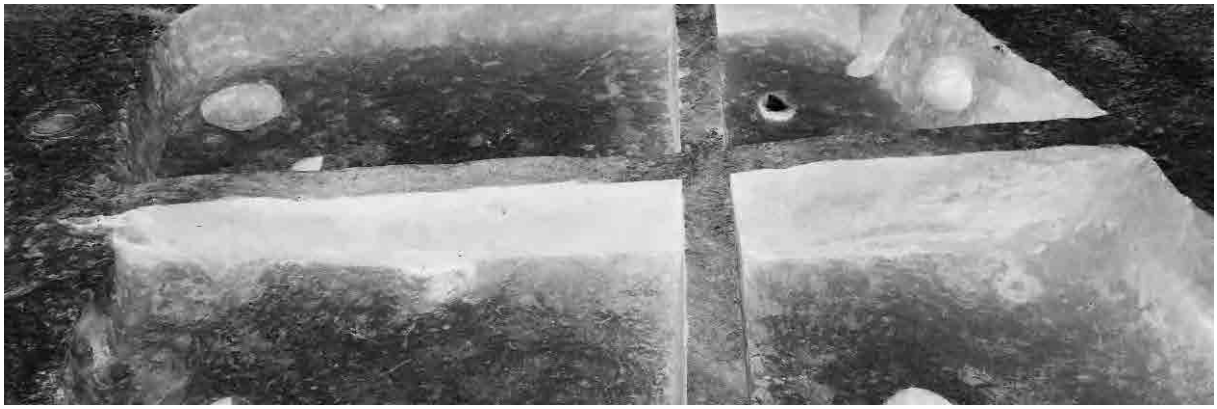
完掘（北東から）

p1 断面（南から）

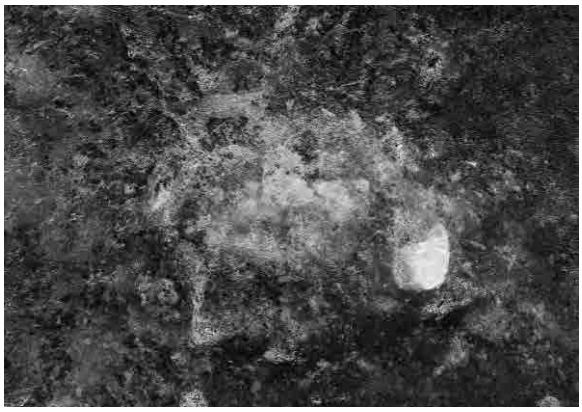
写真図版 31　SI03 竪穴住居跡



全景（西から）



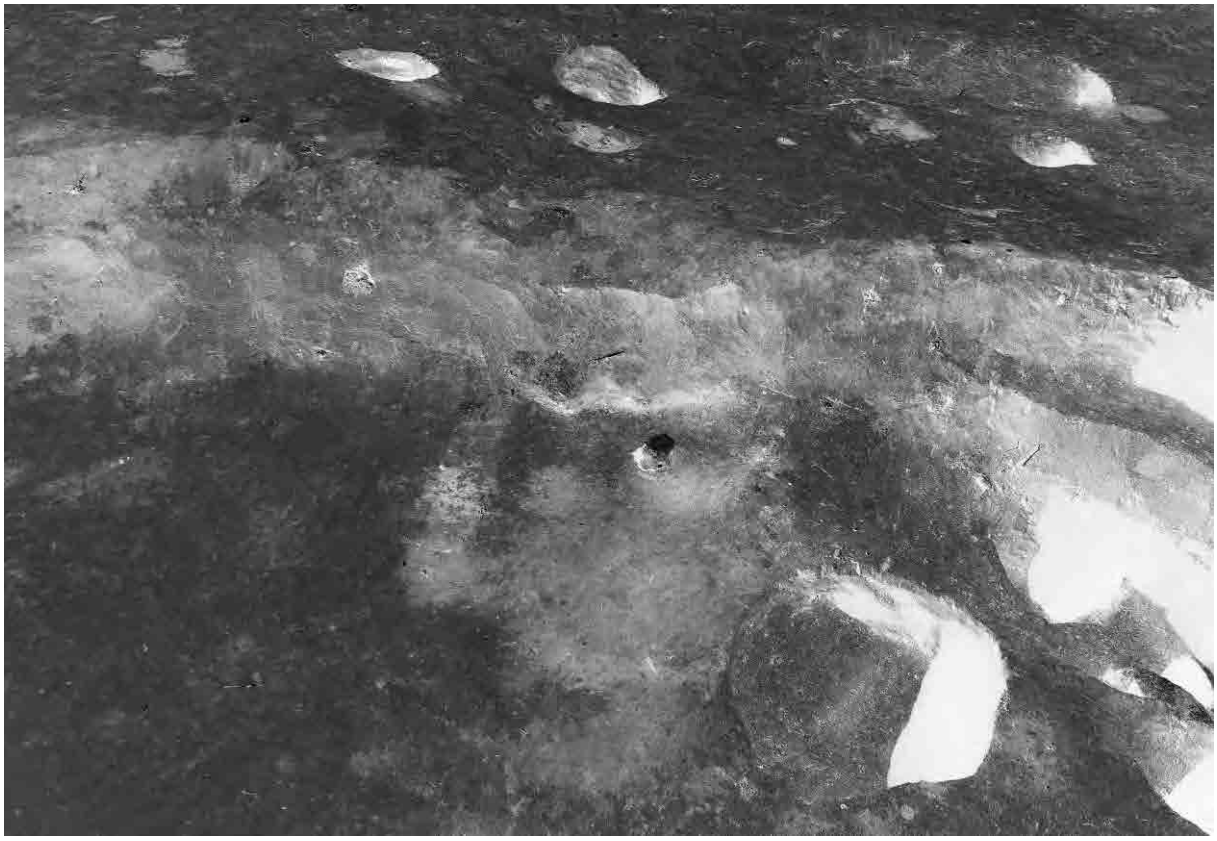
断面（東から）



p1 鍛冶炉全景（南から）

p1 鍛冶炉断面（東から）

写真図版 32　SI04 竪穴住居跡（1）



カマド全景（西から）

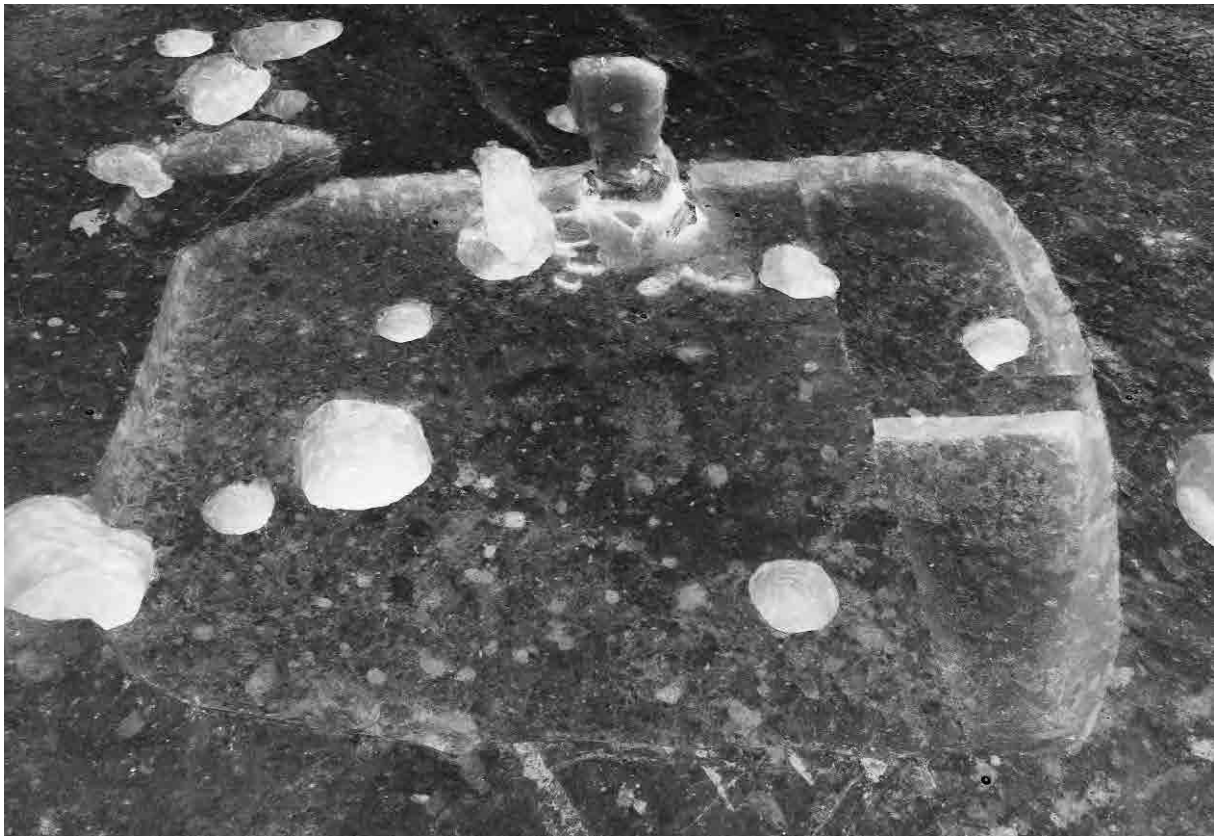
カマド煙道部完掘（南西から）

カマド煙出部断面（南から）

p8 断面（南から）

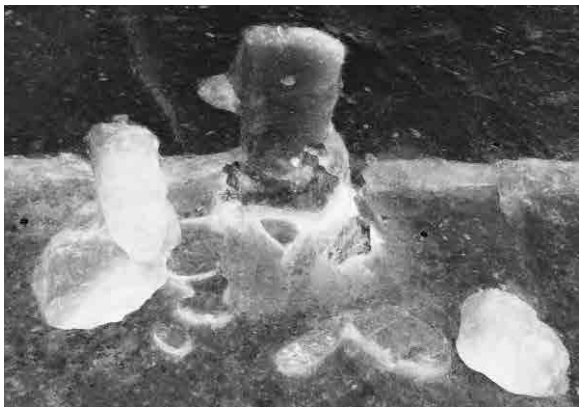
床面須恵器大甕片出土（南から）

写真図版 33　SI04 竪穴住居跡（2）



全景（南から）

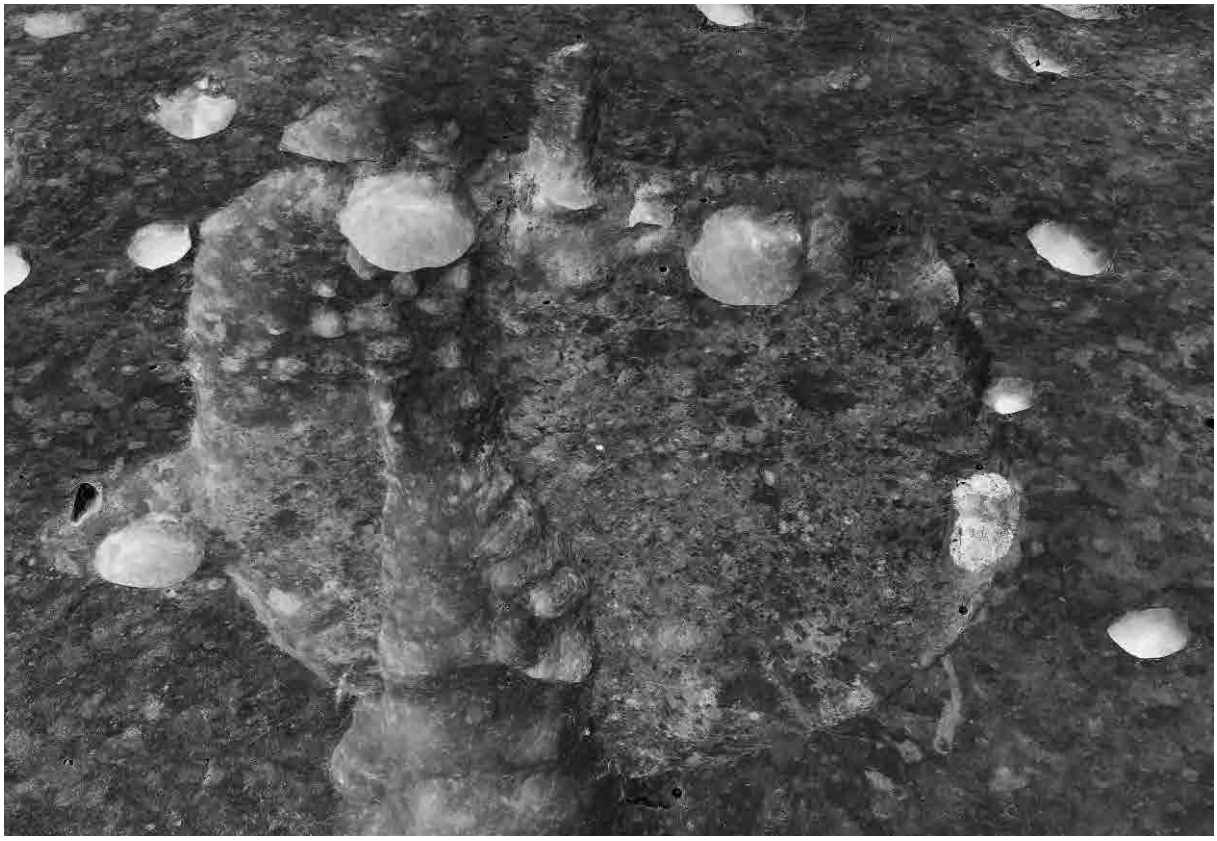
断面（南から）



カマド全景（南から）

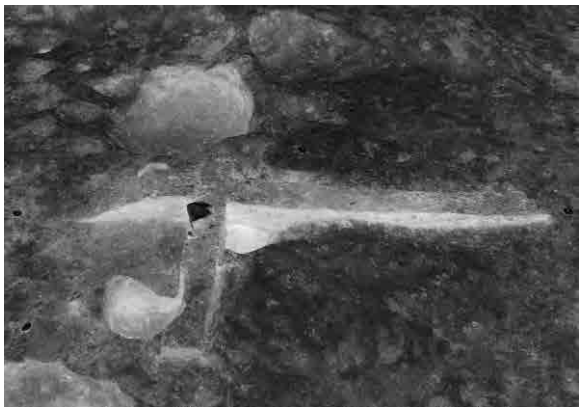
カマド断面（東から）

写真図版 34　SI05 竪穴住居跡



全景（南から）

断面（南から）



カマド断面（東から）

p1 断面（南から）

写真図版 35　SI06 竪穴住居跡

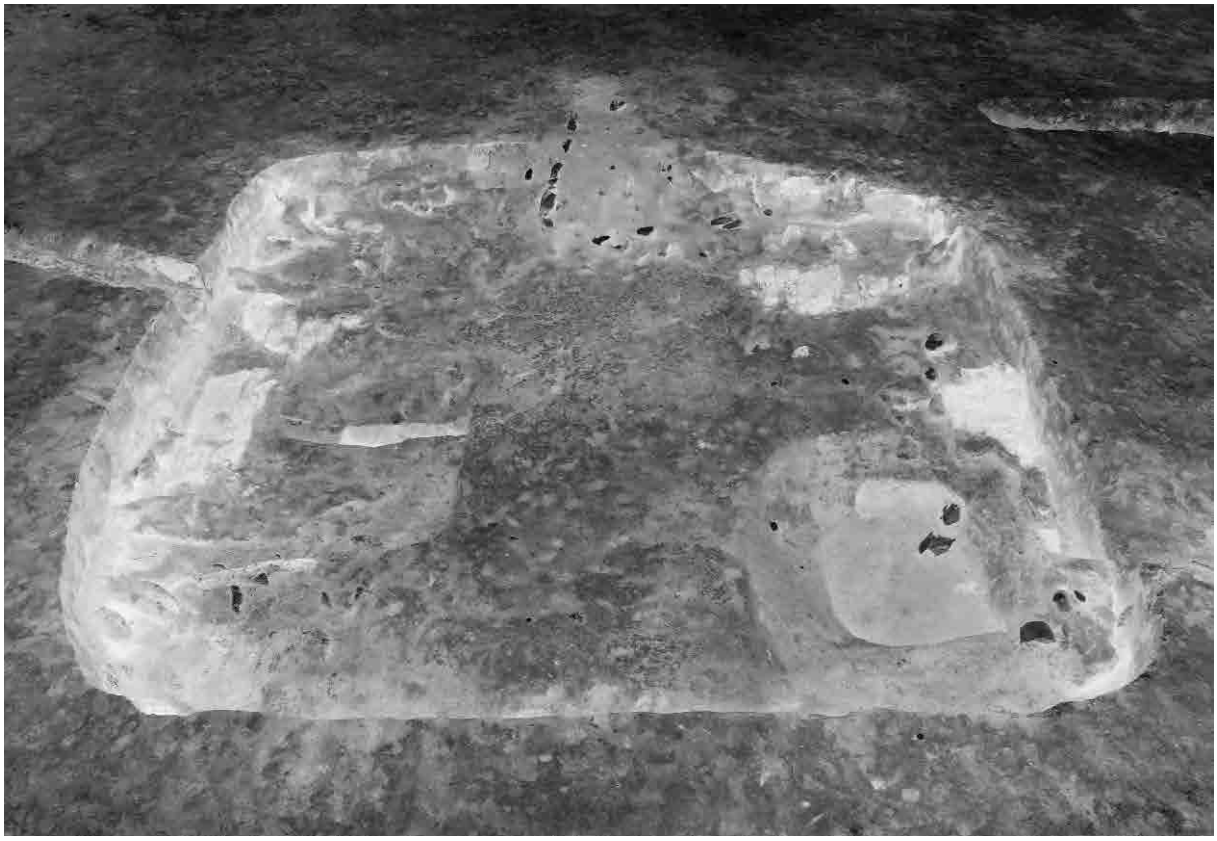
全景（南から）

断面（東から）

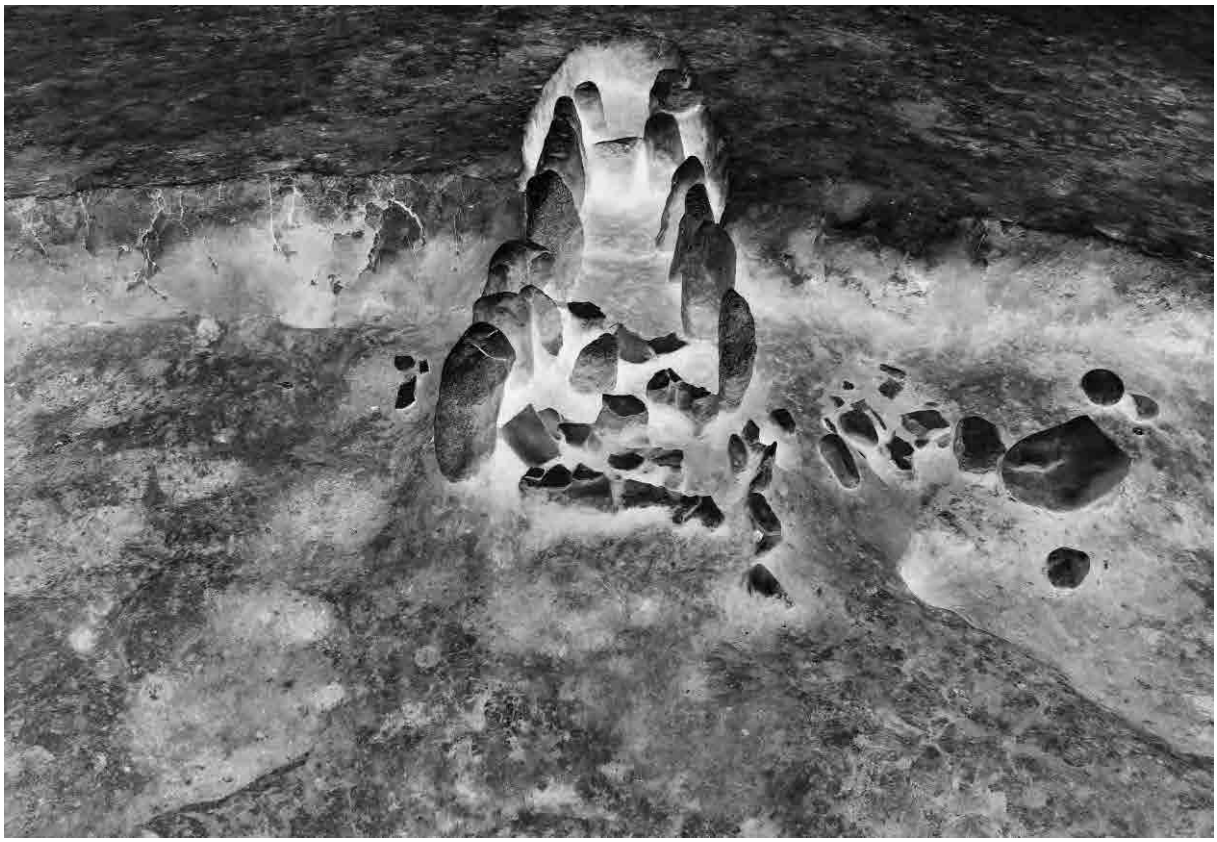
検出（南から）

カマド断面（東から）

写真図版 36　SI07 竪穴住居跡（1）

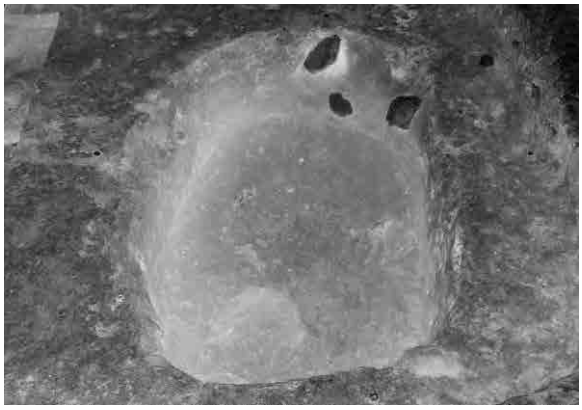


焼土・炭化物出土状況（南から）



カマド全景（南から）

写真図版 37　SI07 竪穴住居跡（2）



p1 掘り方全景（南から）

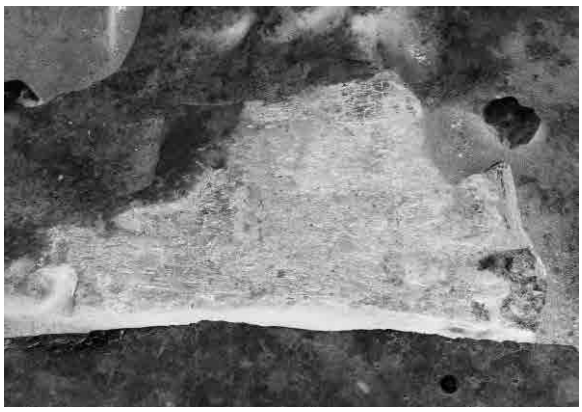
p1 全景（南から）

p7 全景（南から）

p7 断面（南から）

北東壁際炭化屋根材出土（北から）

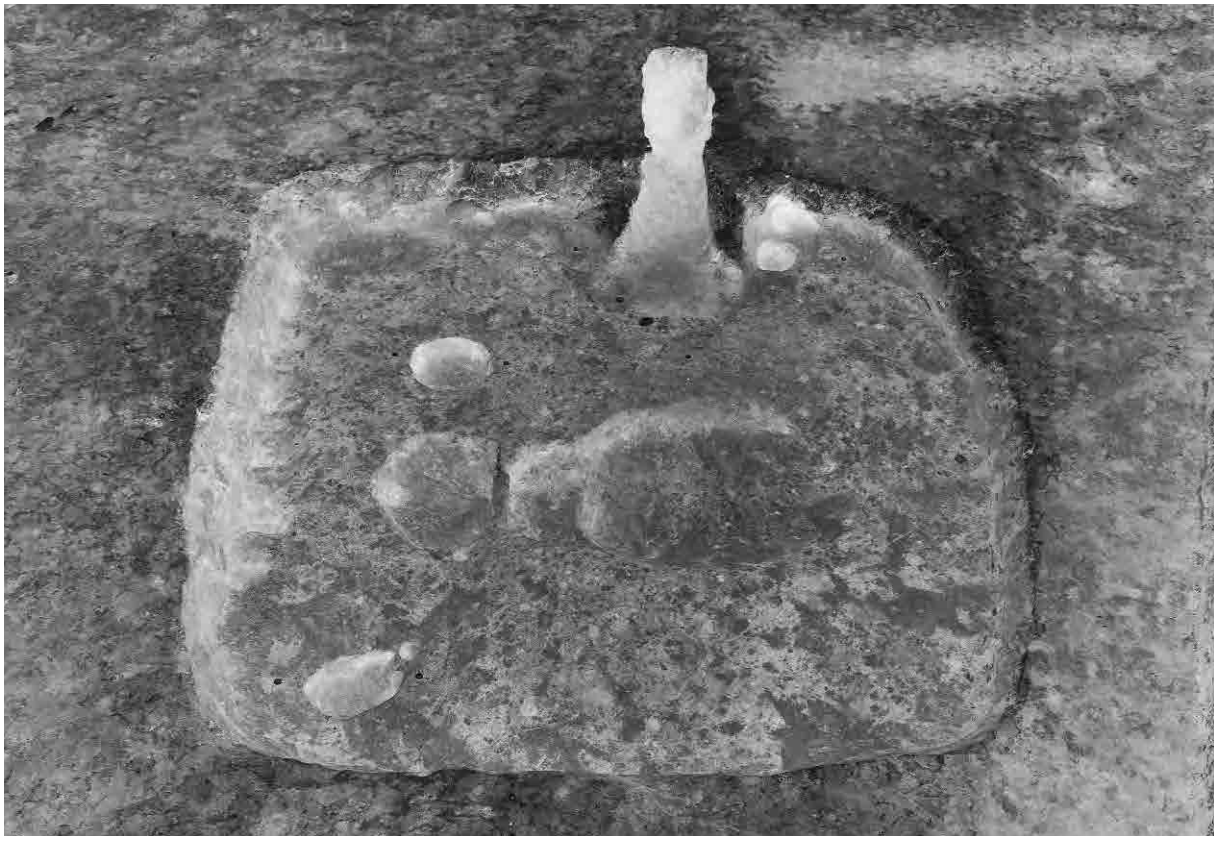
西壁際炭化板材出土（東から）



東壁際炭化板材出土（東から）

西壁際炭化板材と杭材の出土（南東から）

写真図版 38　SI07 竪穴住居跡（3）



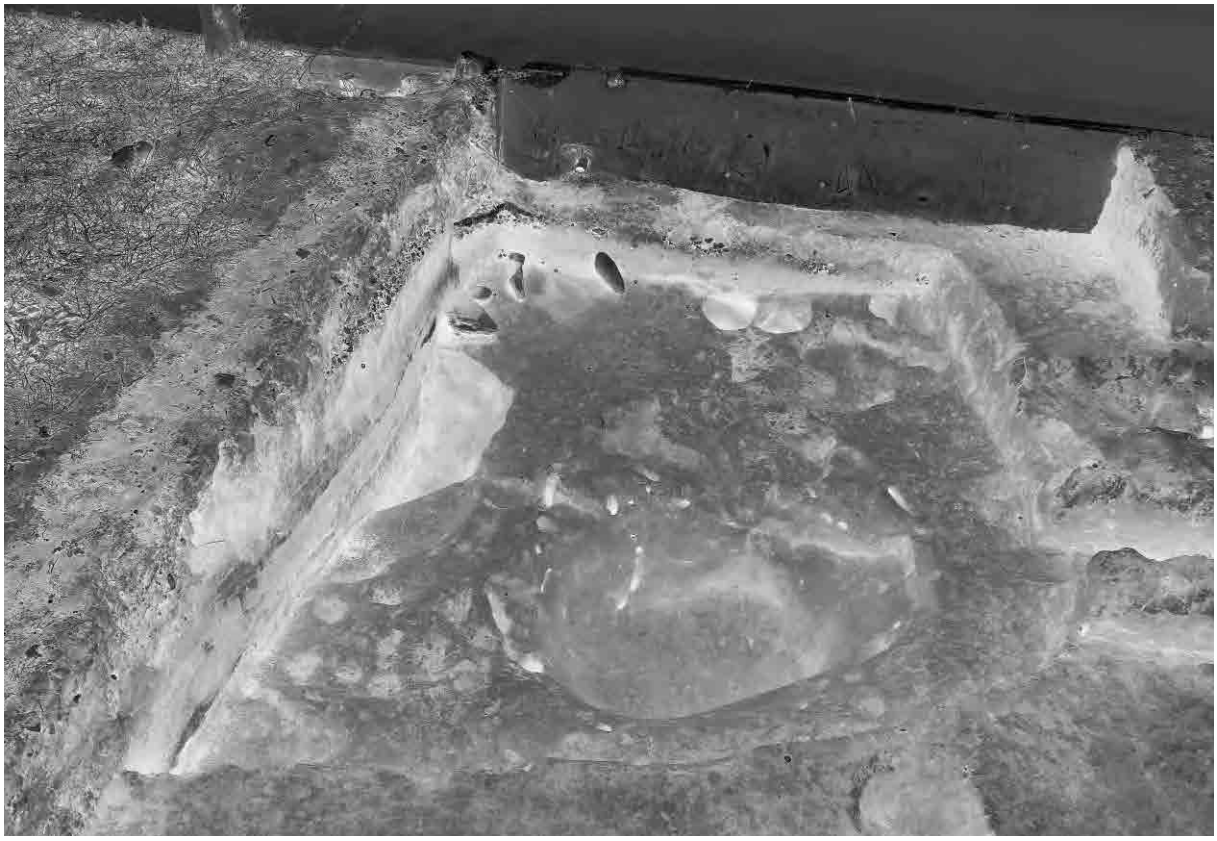
全景（南から）

断面（南から）

カマド全景（南から）

p1 断面（南から）

写真図版 39　SI08 竪穴住居跡



全景（西から）

断面（西から）

カマド全景（西から）

p1・2 断面（西から）

写真図版 40　SI09 竪穴住居跡（1）

焼土・炭化材出土状況（東から）

焼土・炭化材出土状況（南東から）

写真図版 41　SI09 竪穴住居跡（2）

全景（南から）

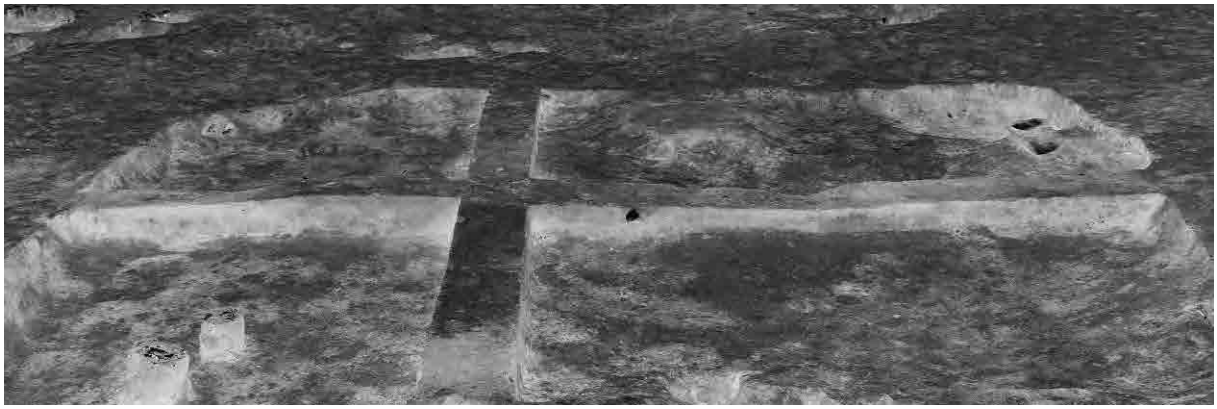
断面（東から）

カマド全景（南から）

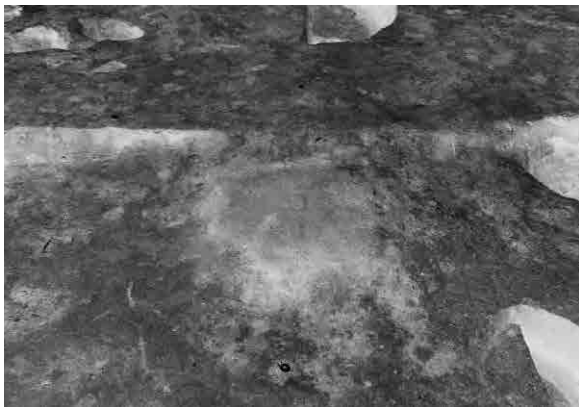
p1 断面（南から）

写真図版 42　SI10 竪穴住居跡

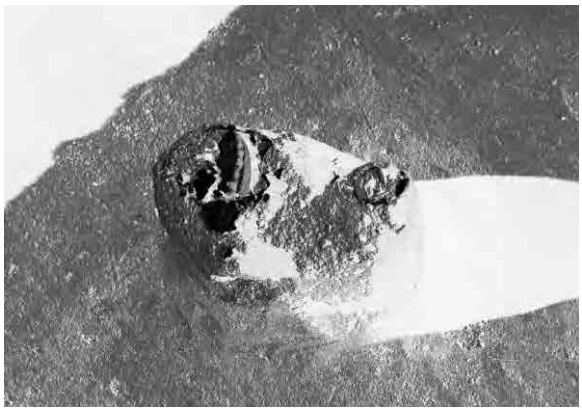
全景（西から）



断面（西から）

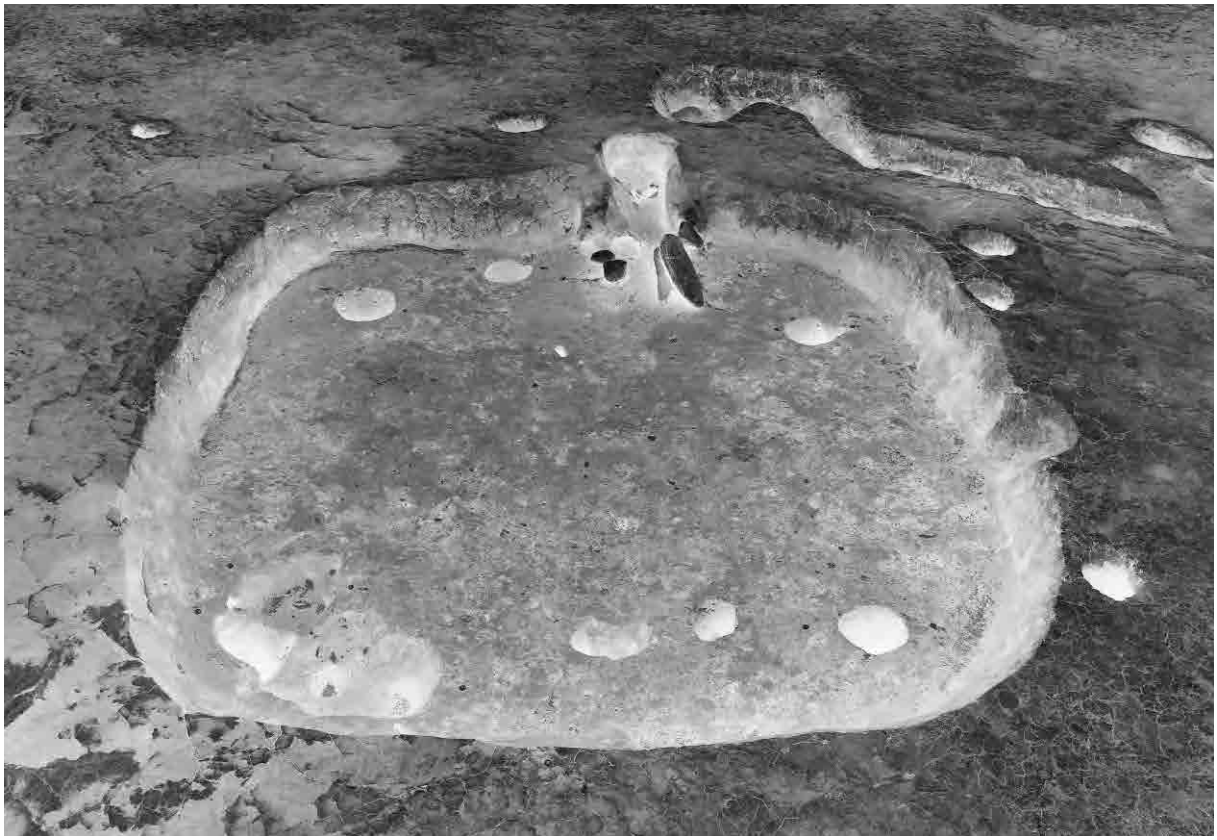


カマド全景（西から）

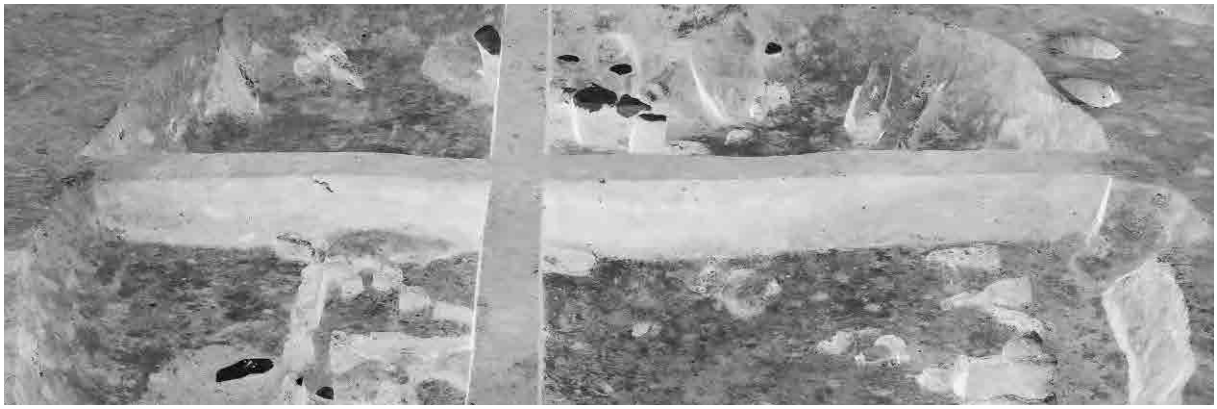


埋土上位貝殻出土状況（南東から）

写真図版 43　SI11 竪穴住居跡



全景（南から）

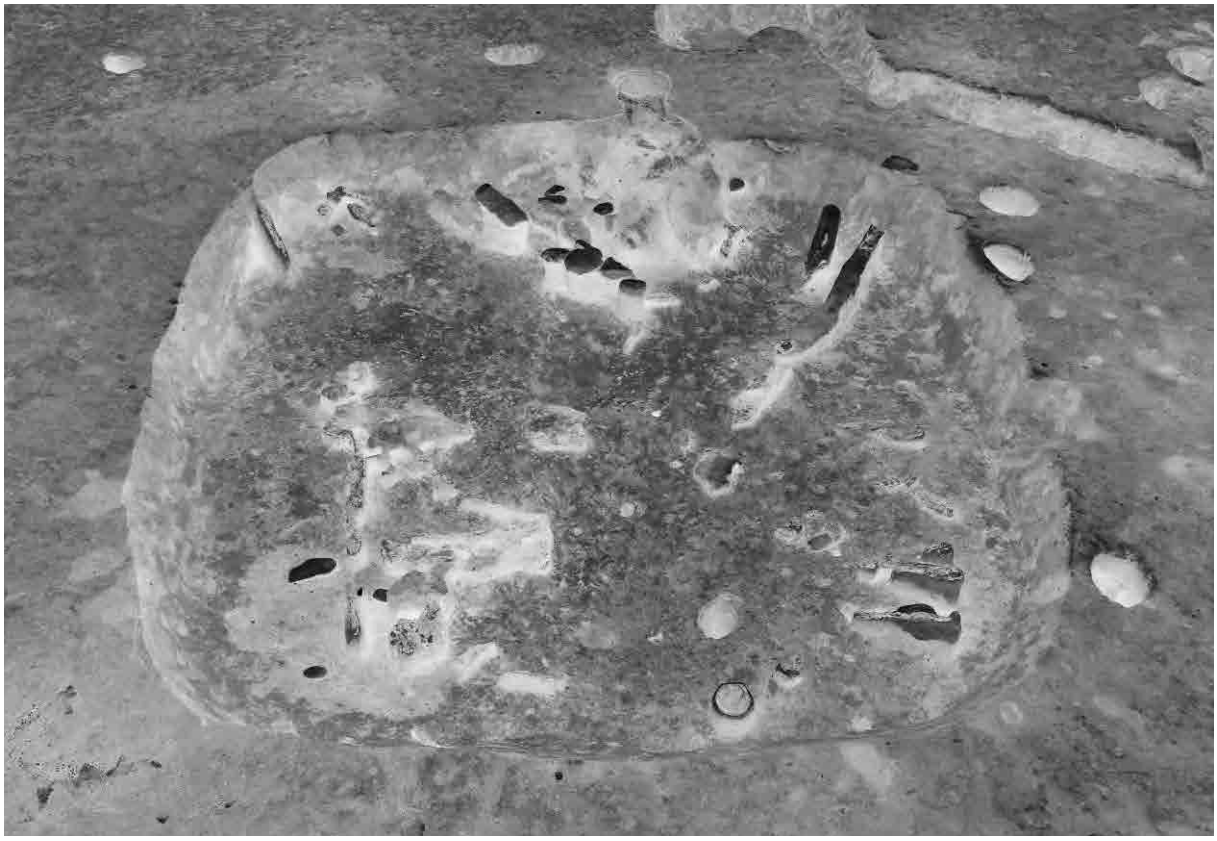


断面（南から）

カマド全景（南から）

カマド断面（東から）

写真図版 44　SI12 竪穴住居跡（1）



焼土・炭化物出土状況（南から）

カマド崩落状況（南から）

写真図版 45　SI12 竪穴住居跡（2）

全景（北から）

断面（南から）

遺物出土状況（南東から）

遺物出土状況（南東から）

写真図版 46　SI13 竪穴住居跡（1）

カマド全景（南から）

遺物出土状況（南東から）

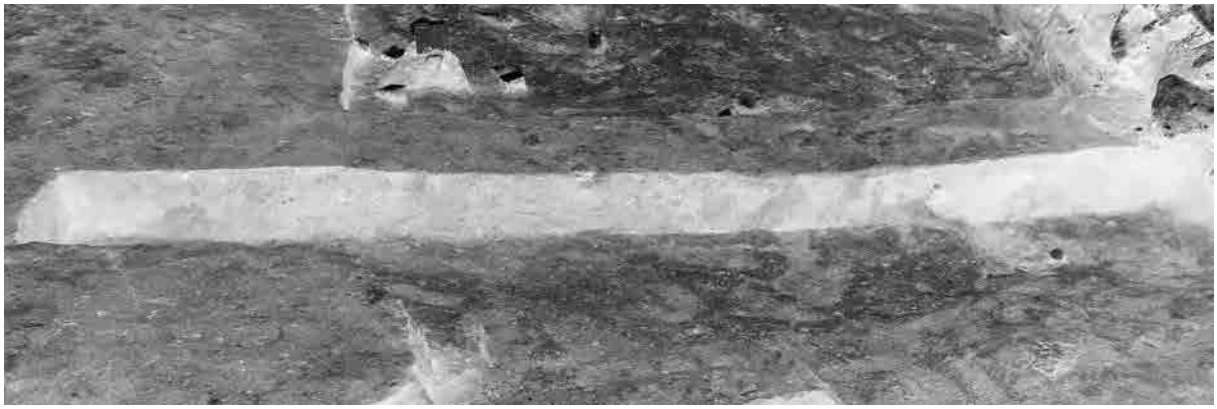
遺物出土状況（南東から）

遺物出土状況（南東から）

遺物出土状況（西から）

写真図版 47　SI13 竪穴住居跡（2）

全景（南から）

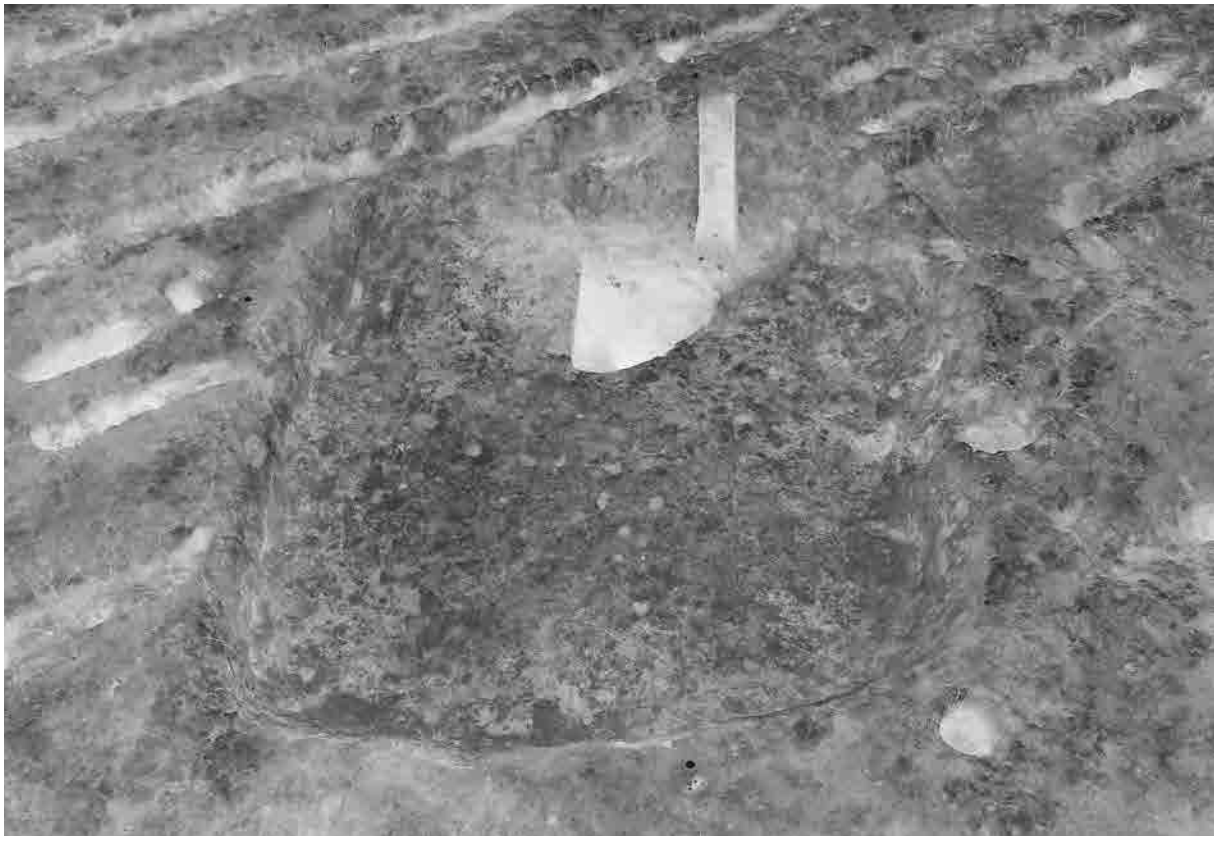


断面（西から）

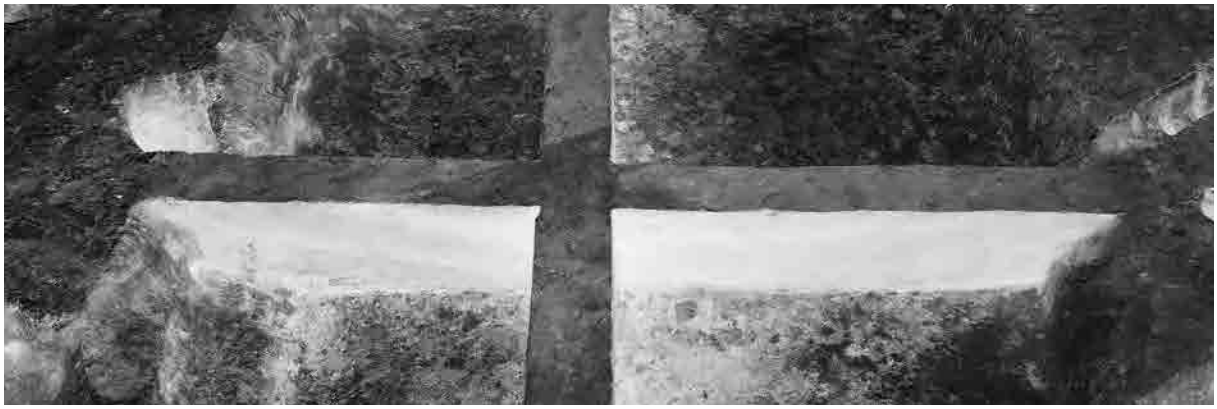
遺物出土状況（北西から）

カマド断面（西から）

写真図版 48　SI14 竪穴住居跡



全景（西から）



断面（東から）

断面（南から）

写真図版 49　SI15 竪穴住居跡

全景（北から）

遺物出土状況（東から）

遺物出土状況（東から）

遺物出土状況（東から）

p1 断面（南から）

写真図版 50　SI16 竪穴住居跡

全景（北から）

全景（西から）

断面 A（南から）

断面 B（南西から）

断面 C（北西から）

写真図版 51　円形周溝（1）

全景（直上から）

全景（北東から）

断面Ｄ（南から）

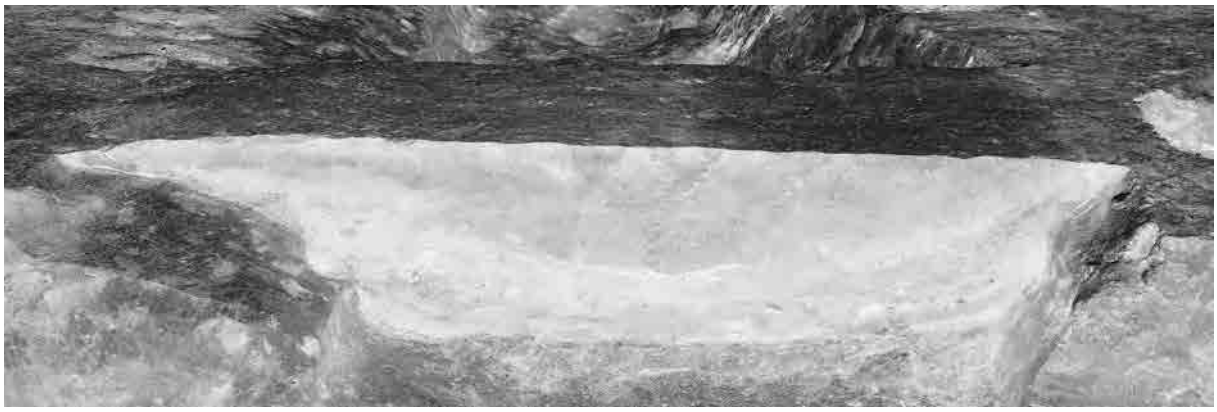
断面Ｅ（西から）

断面Ｆ（南から）

写真図版 52　円形周溝（２）

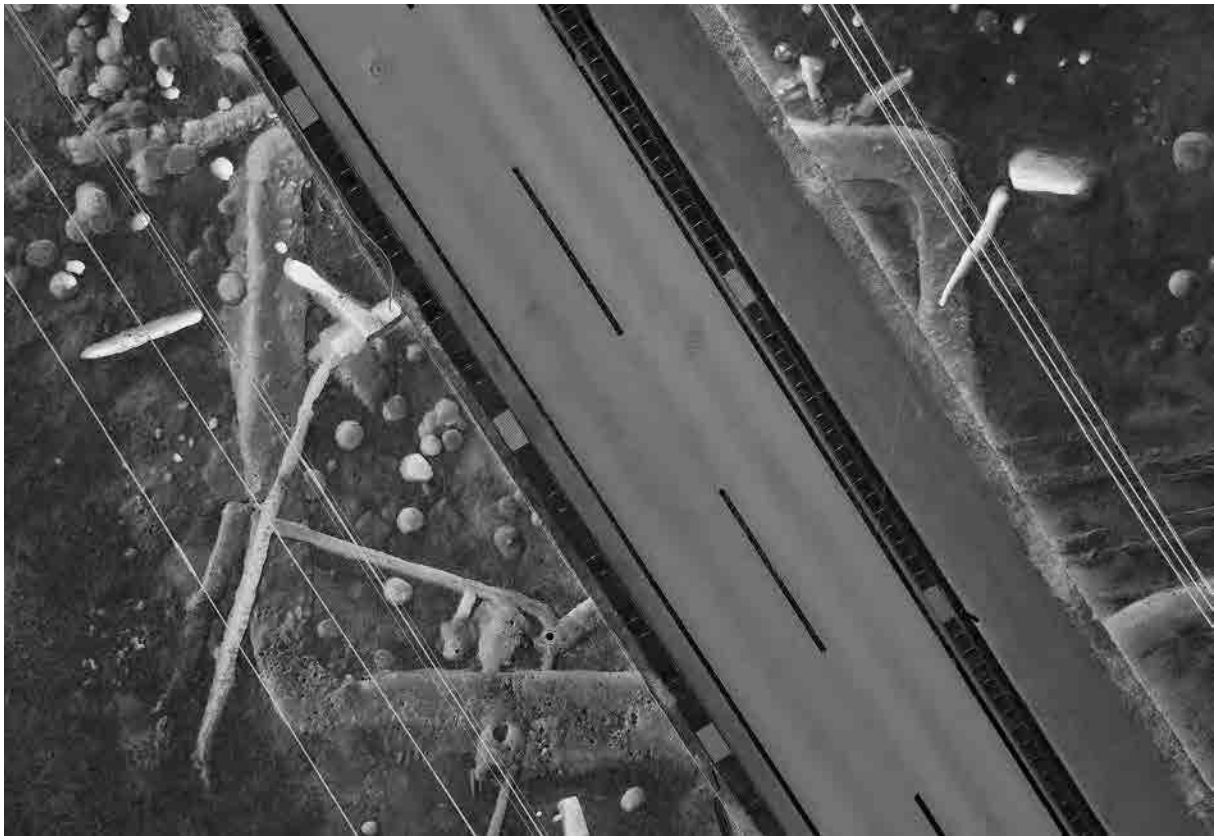
全景（西から）

断面 A（東から）



断面 B（北から）

写真図版 53　方形周溝（1）

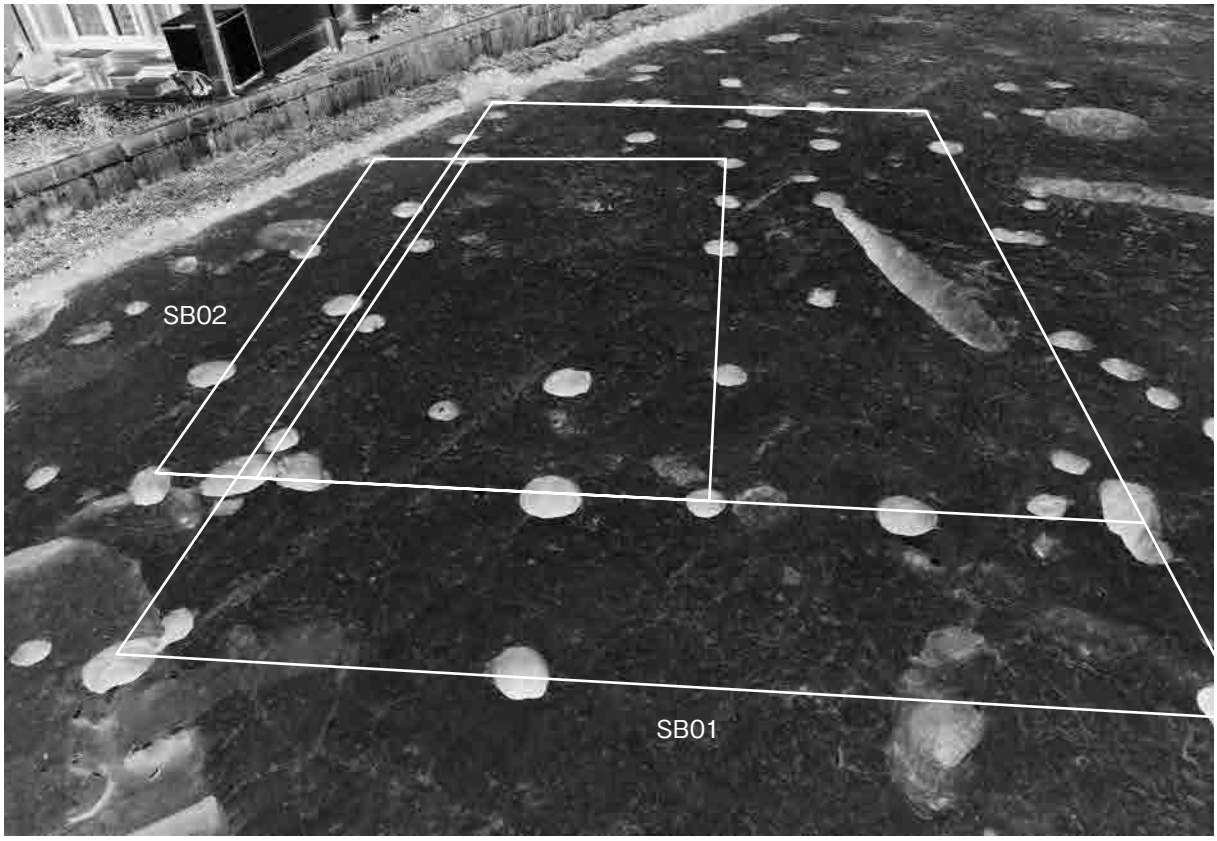


全景（直上から）

断面Ｃ（東から）

断面Ｄ（北東から）

写真図版 54　方形周溝（２）



SB01・02 全景（南から）

P161 断面（東から）

P163 断面（東から）

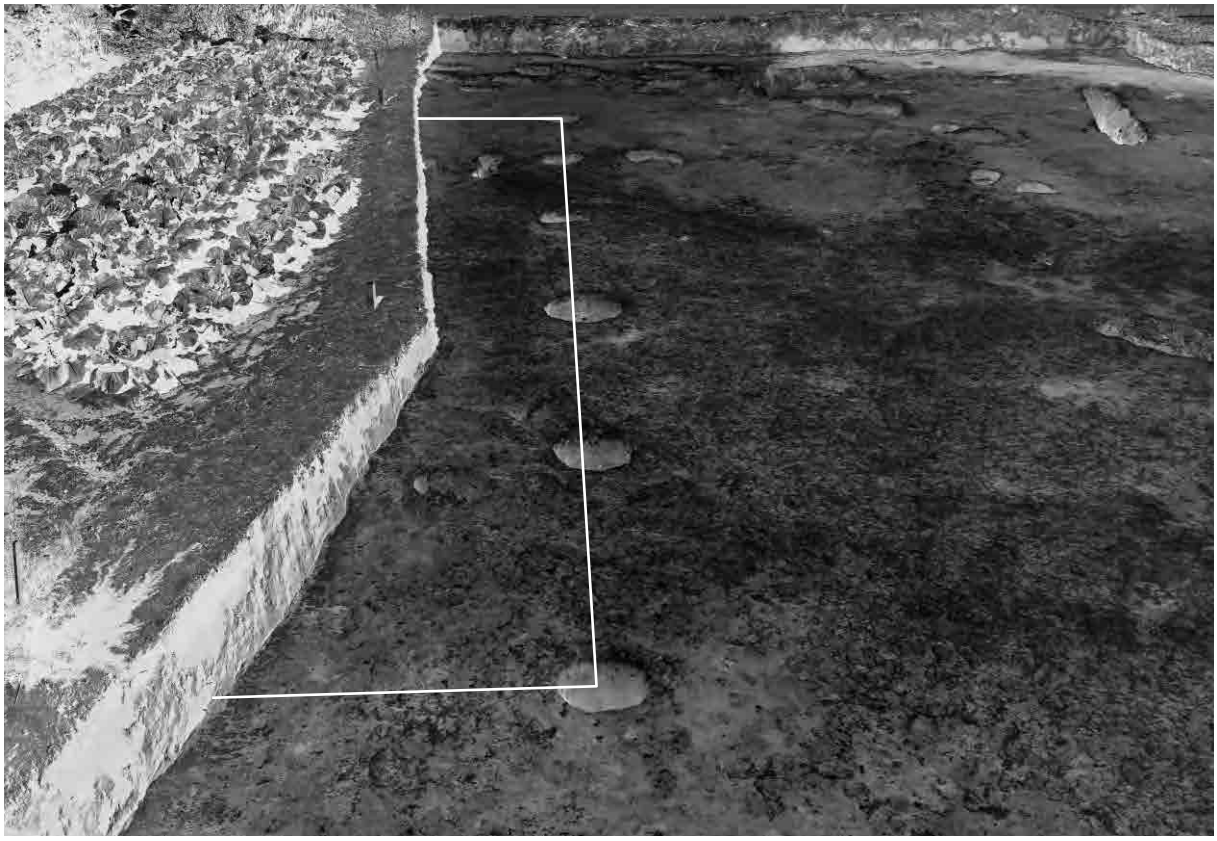
P168 断面（西から）

P169 断面（西から）

P170 断面（西から）

P171 断面（南から）

写真図版 55　SB01・02 掘立柱建物跡



SB04 全景（南から）

P242 断面（東から）

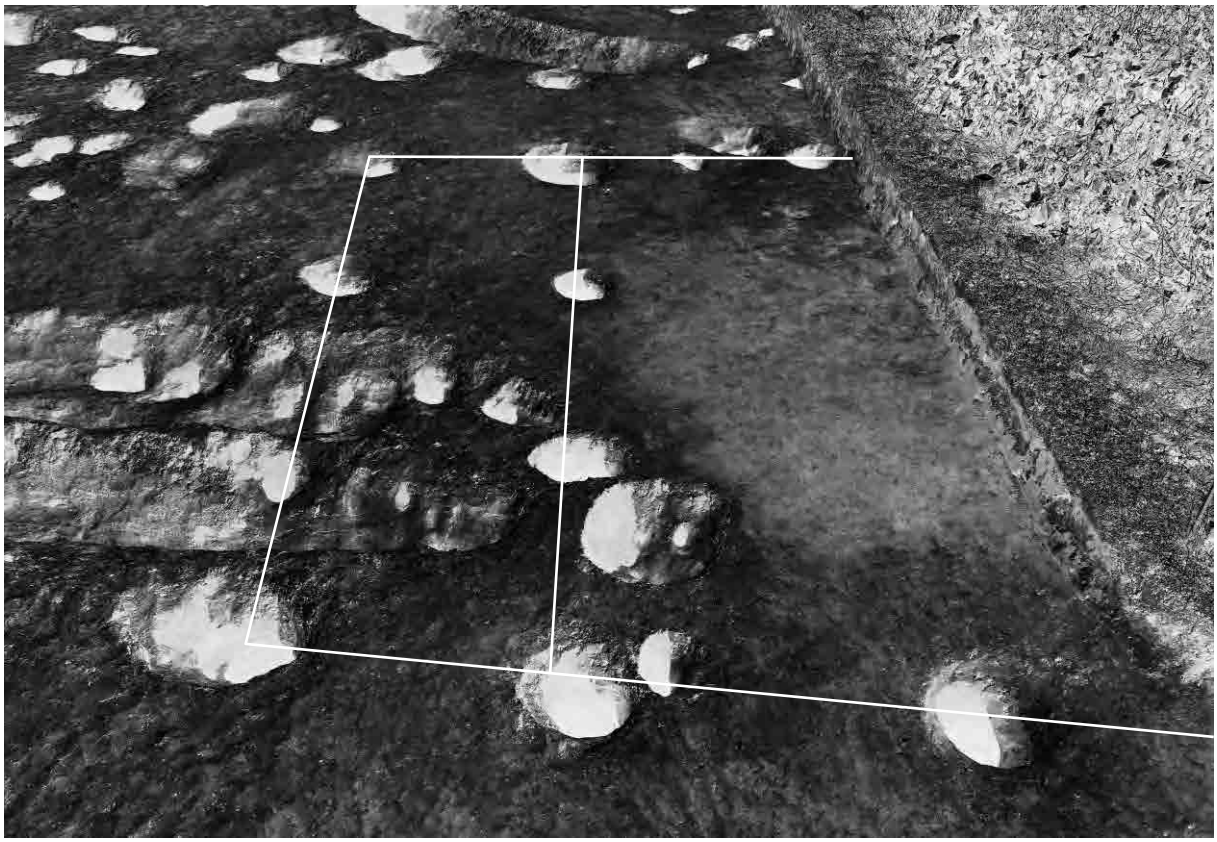
P244 断面（東から）

P245 断面（東から）

現地説明会風景

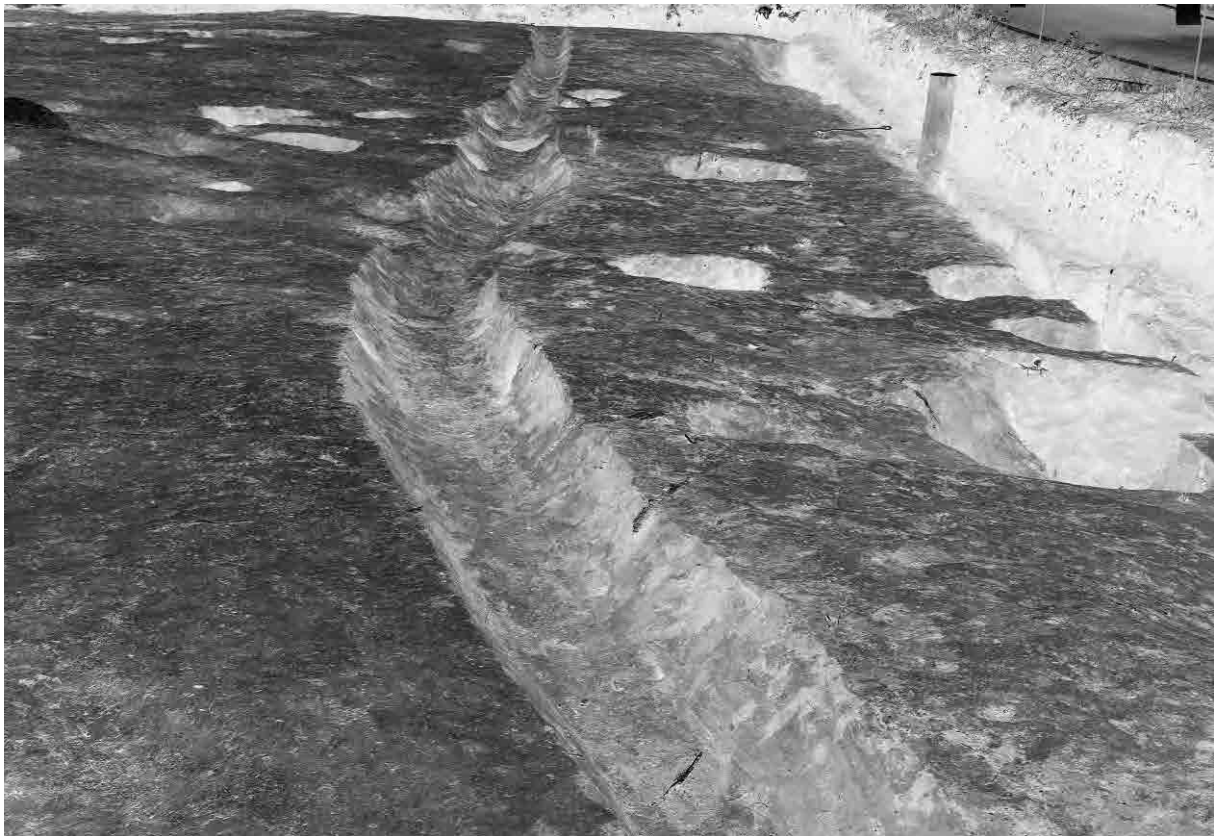
写真図版 56　SB04 掘立柱建物跡

SB05 全景（南から）



SB06 全景（東から）

写真図版 57　SB05・06 掘立柱建物跡



SD01 全景（西から）

SD02 全景（北東から）

SD01 断面 A（西から）

SD02 断面 C（西から）

写真図版 58　SD01・02 溝跡

SD03 全景（南から）

SD03 断面（南から）

SD03 遺物出土状況（西から）

SD04 全景（南東から）

SD04 断面（南東から）

現地説明会風景

写真図版 59　SD03・04 溝跡

SD05 全景（東から）

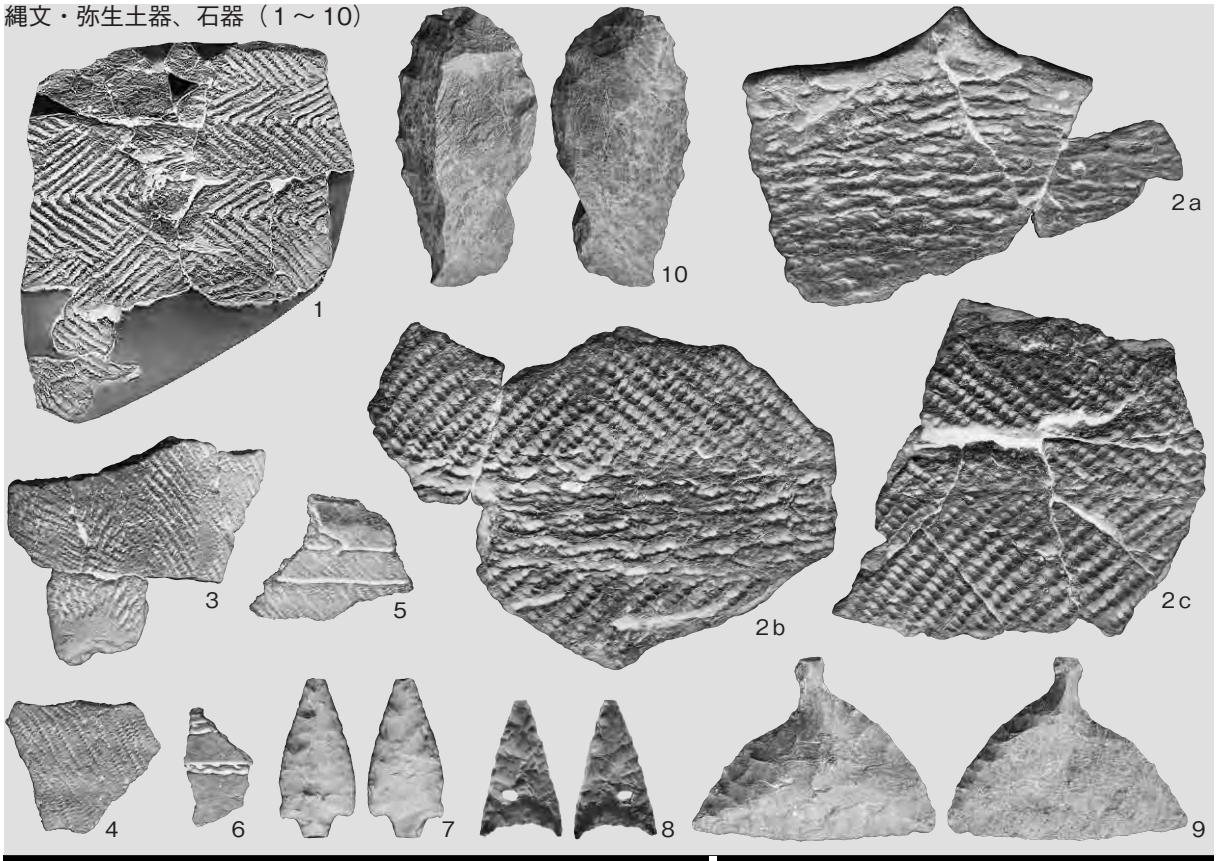
SD05 断面 B（東から）

SD05 断面 C（東から）

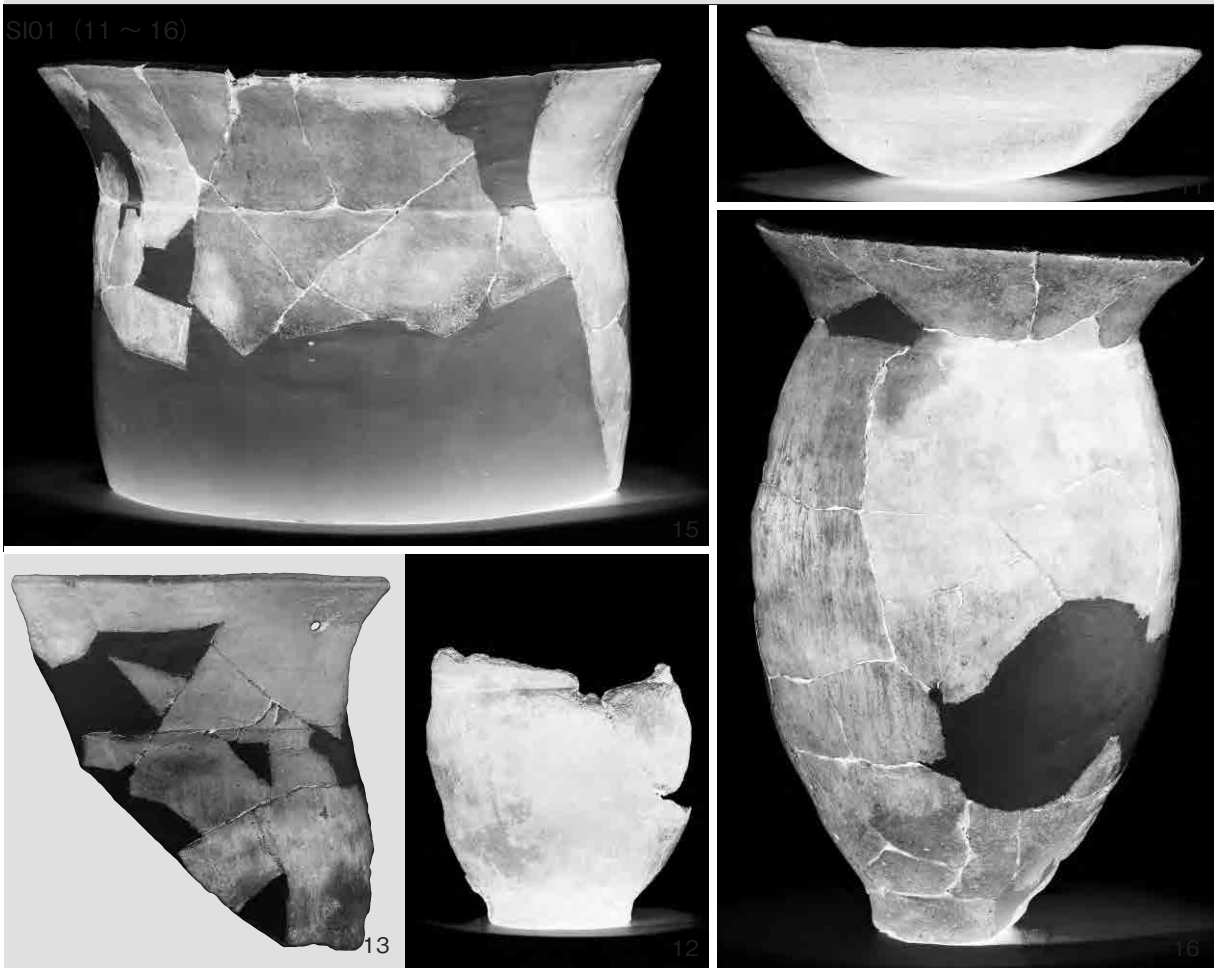
SD06・07 全景（西から）

写真図版 60　SD05 ～ 07 溝跡

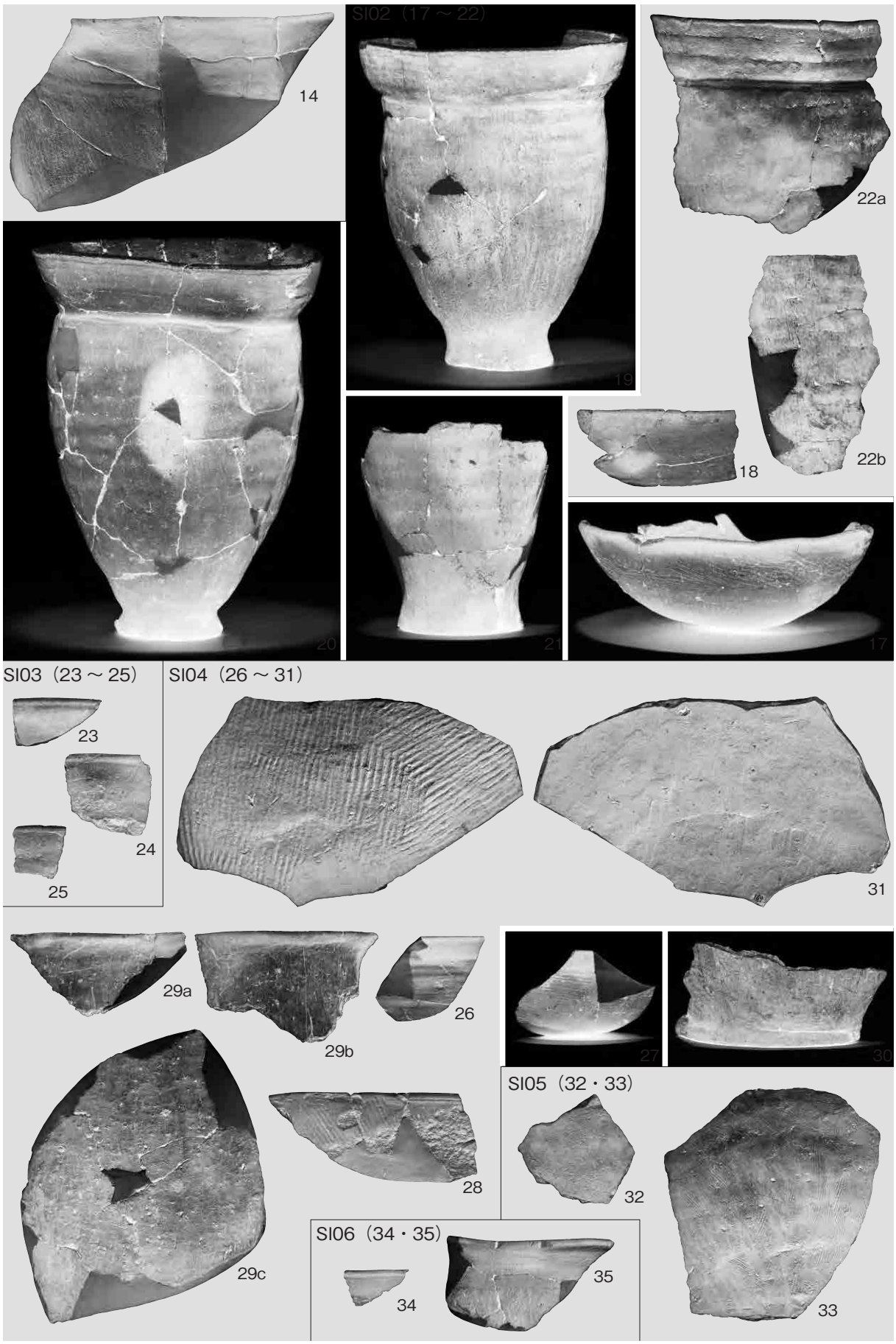
縄文・弥生土器、石器（1～10）



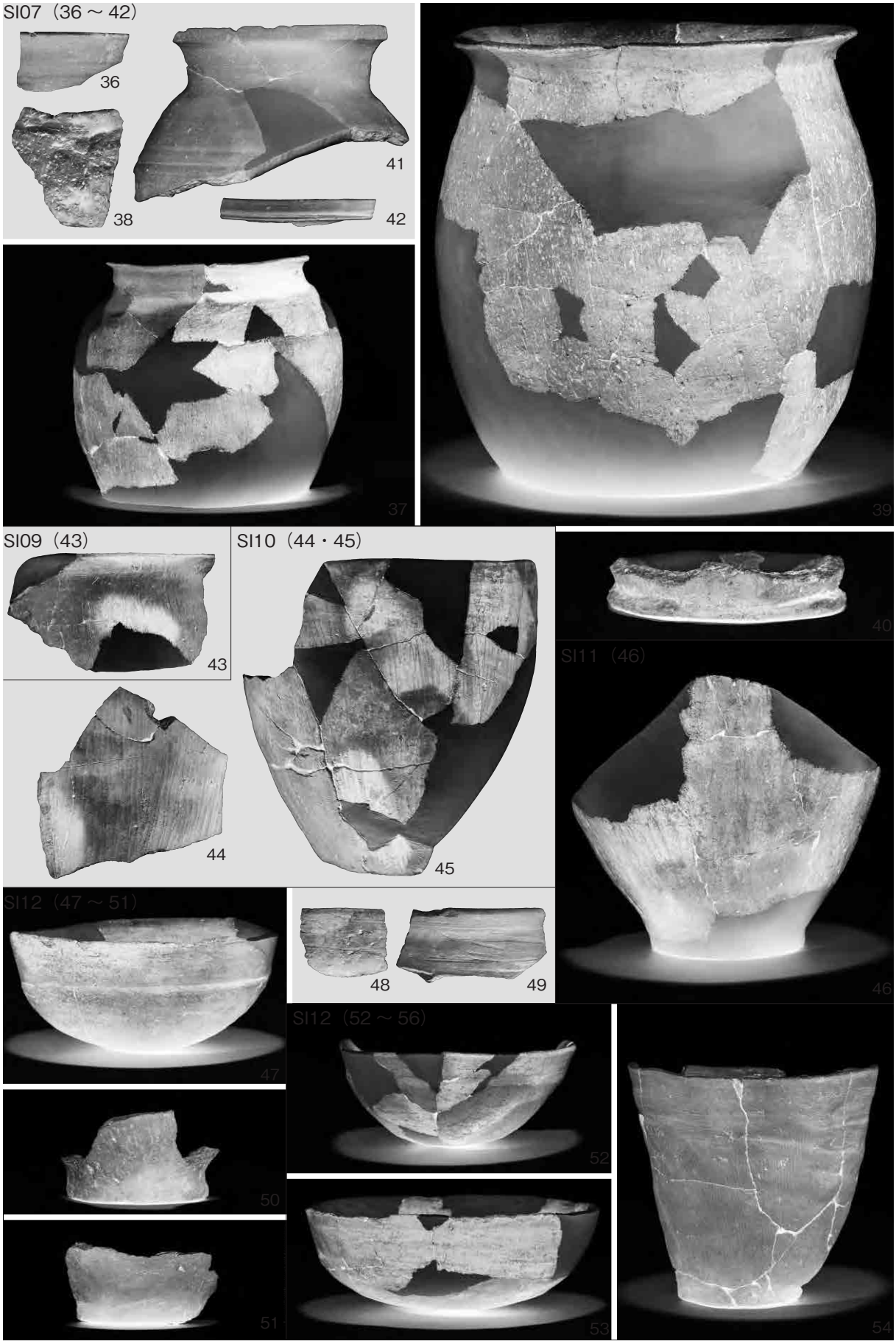
SI01（11～16）



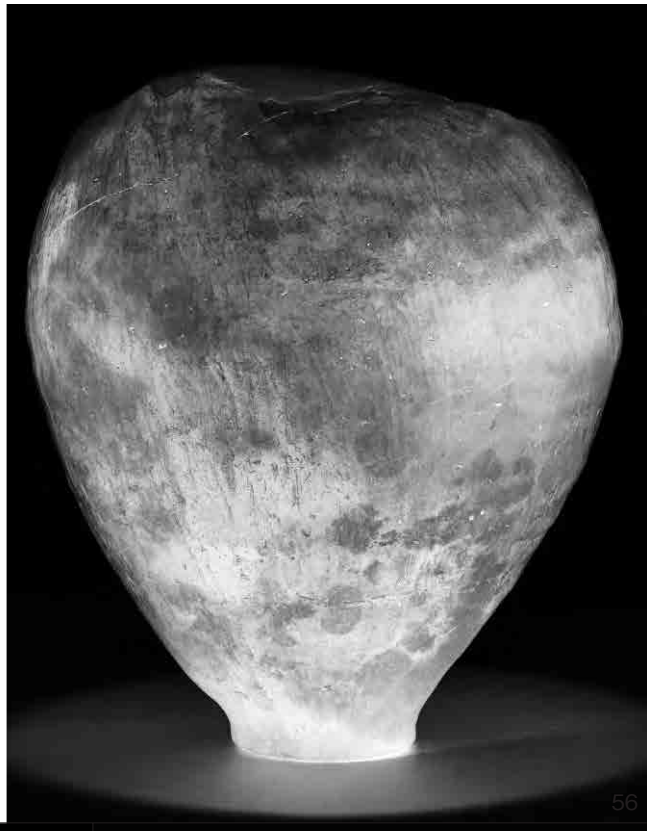
写真図版 61　土器（1）


SI02（17～22）
14
19
22a
20
21
18
22b
17
SI03（23～25）
23
24
25
SI04（26～31）
31
29a
29b
26
27
30
SI05（32・33）
29c
28
32
33
SI06（34・35）
34
35

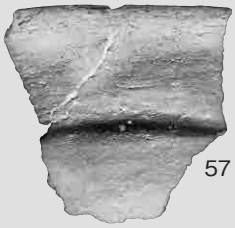
写真図版 62　土器（2）


SI07（36～42）
36
38
41
42
37
39
SI09（43）
43
44
SI10（44・45）
45
40
SI11（46）
46
SI12（47～51）
47
48
49
50
51
SI12（52～56）
52
53
54

写真図版 63　土器（3）

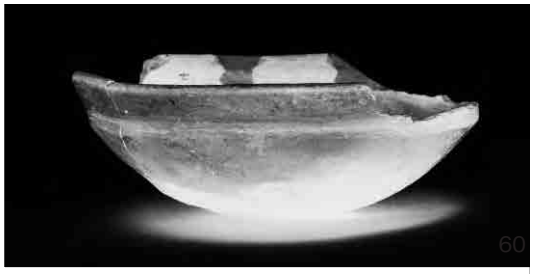


SI14（57～59）

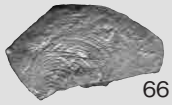


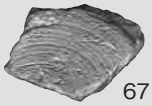
SI16（60～63）

写真図版 64　土器（4）



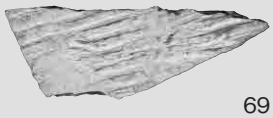
方形周溝１（64 ～ 67）



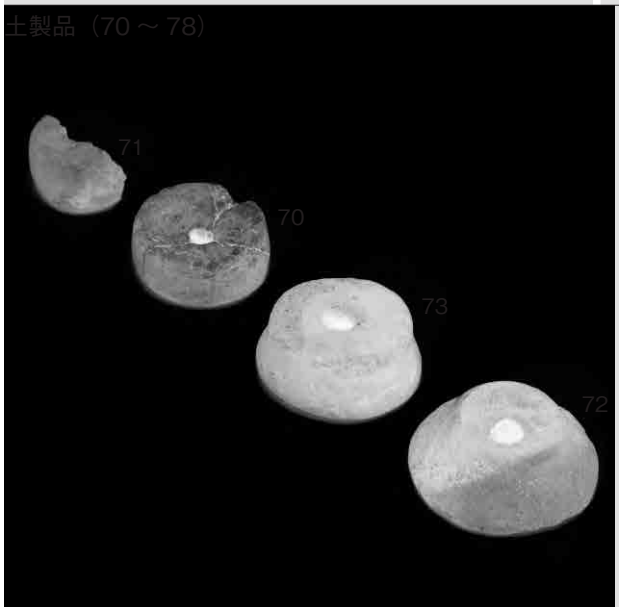


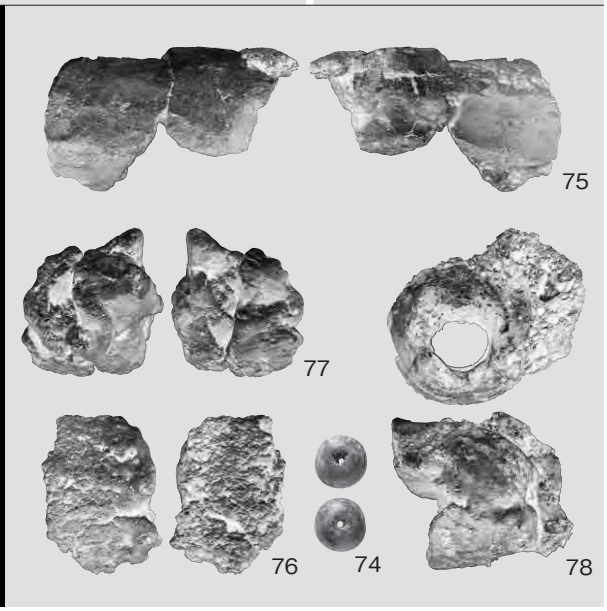
SD03（68）

遺構外出土遺物（69）



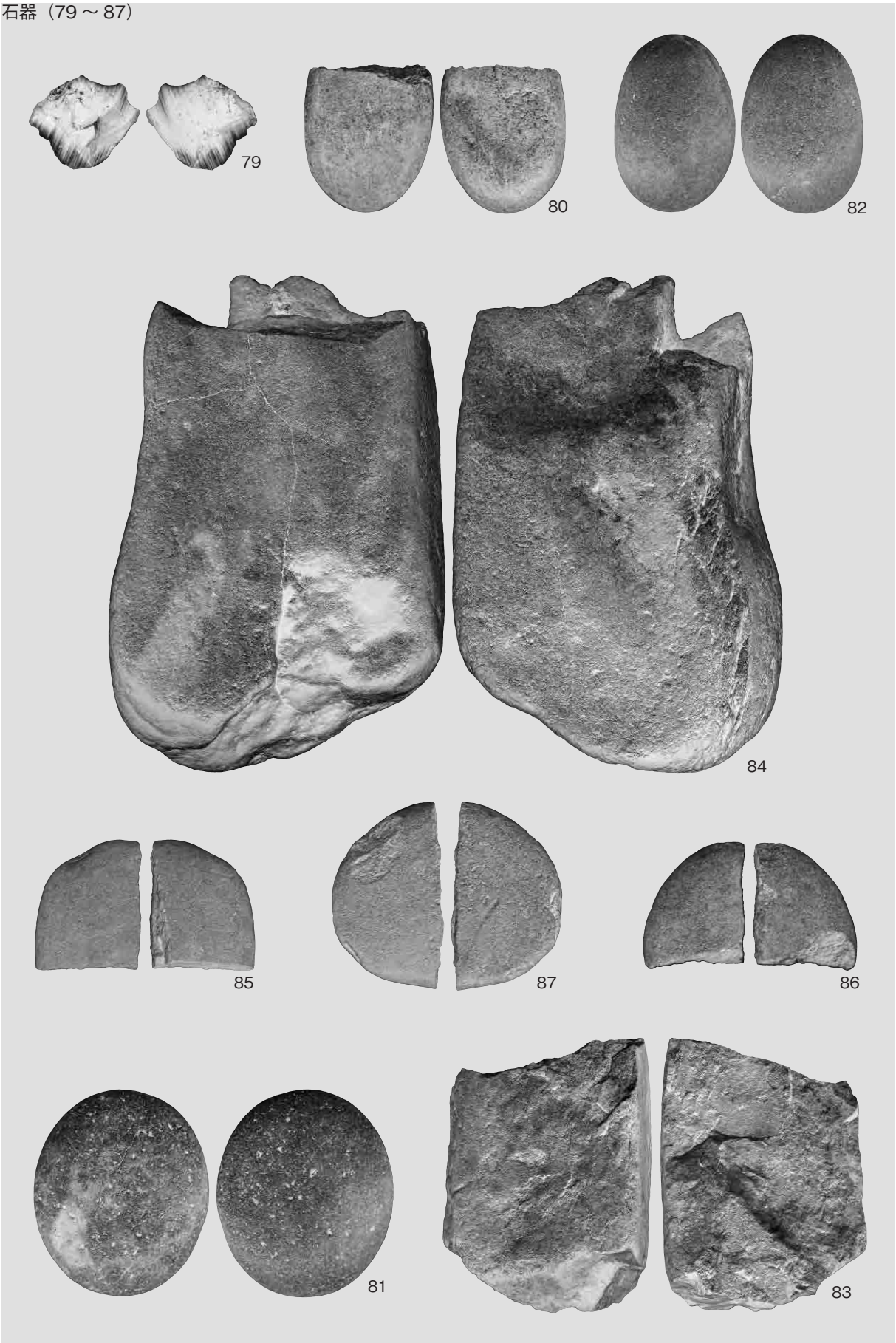
土製品（70 ～ 78）





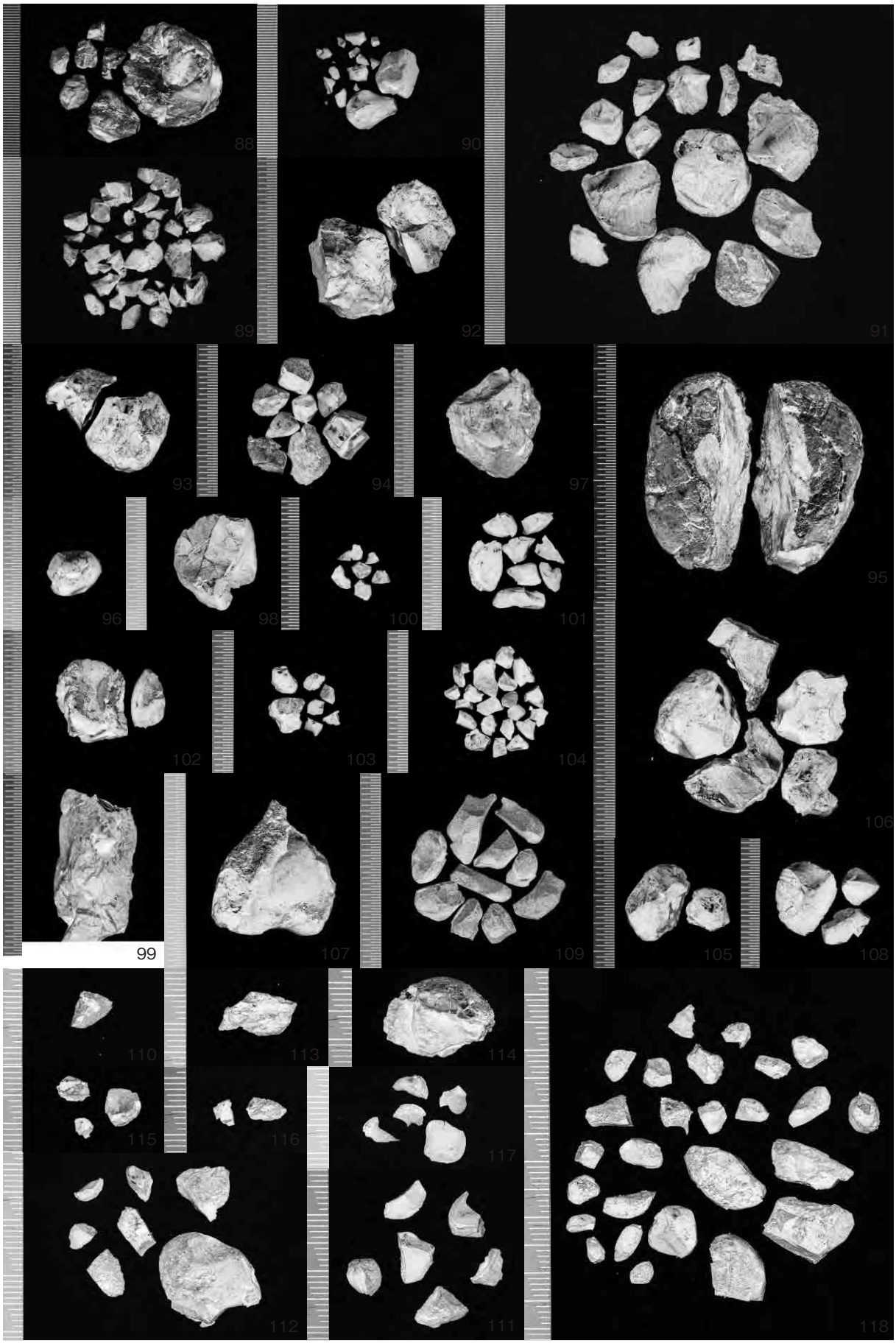
写真図版 65　土器（５）・土製品

石器（79 ～ 87）

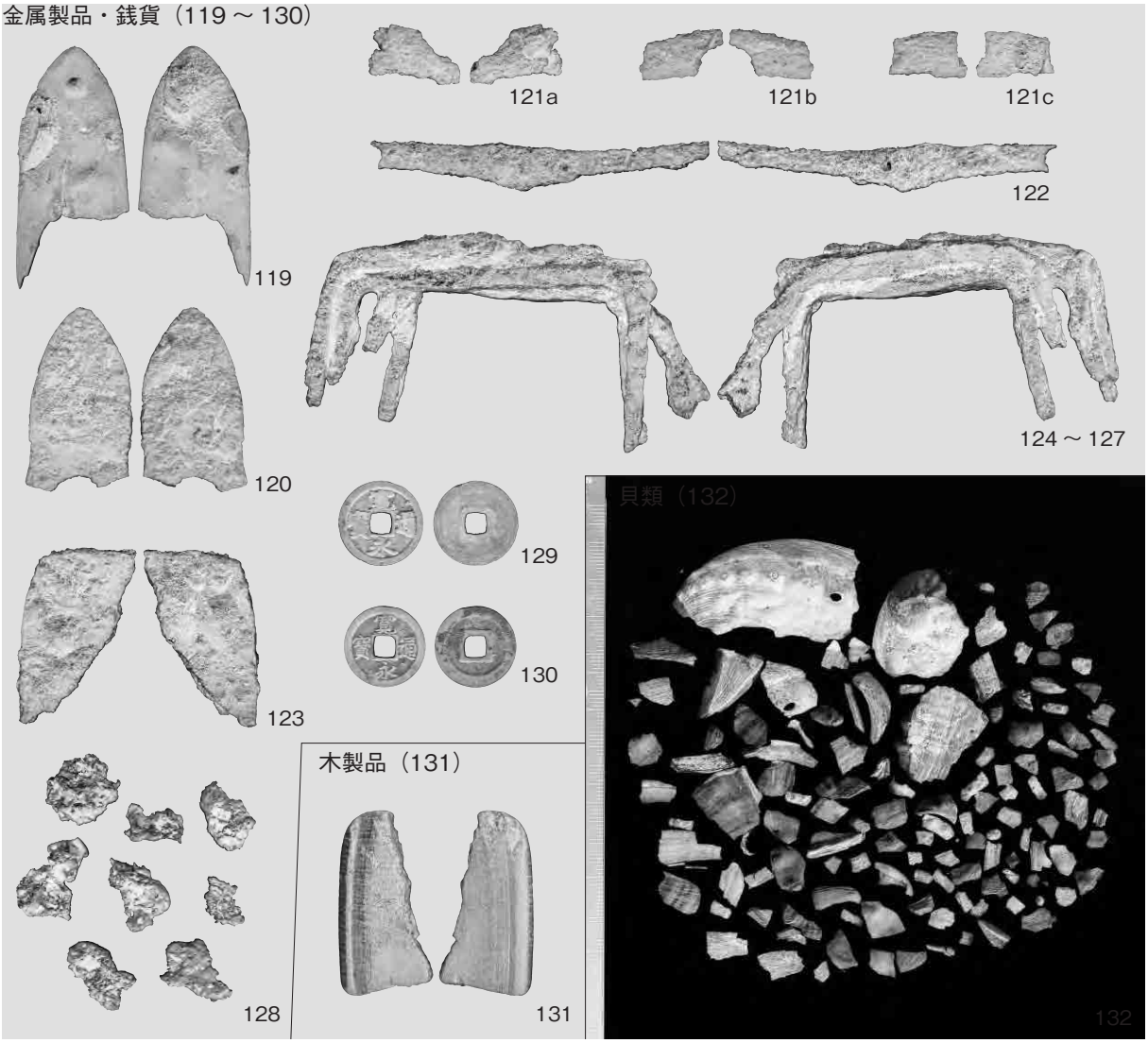


写真図版 66　石器

琥珀（88 ～ 118）



写真図版 67　琥珀



写真図版 68　金属製品・銭貨・木製品・貝類

ふりがな	なかたいいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	中平遺跡発掘調査報告書
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 710 集
編著者名	北田 勲
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒 020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	2020 年 3 月 13 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なかたいいせき 中平遺跡	いわてけんくのへぐんのだむらおおあざのだいち わりおおだいらの 岩手県九戸郡野田村大字野田第 13 地割大平野地内	35033	JG60-0258	40° 06′ 20″	141° 48′ 36″	2014.10.01 ～ 11.21 2015.08.03 ～ 11.06 2017.11.01 ～ 12.07 2018.04.05 ～ 05.15	2,600 ㎡ 5,200 ㎡ 552 ㎡ 689 ㎡	三陸沿岸道路建設事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中平遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴状遺構 73 基 遺物包含層　1 箇所	縄文土器（前期） 石器（剥片石器）	To-Cu テフラを堆積する円形基調 7 基と、これを切る溝状基調 66 基の陥し穴状遺構を確認。
		弥生時代		弥生土器（中期後半）	
		古　　代	竪穴住居跡　16 棟 円形周溝　1 基 方形周溝　1 基 土坑　5 基 焼土遺構　8 基	土師器 須恵器 土製品（紡錘車・土玉・羽口） 石器（方割石・台石・磨石） 金属製品（鉄鏃・刀子・鋏） 木製品（盤状） 貝類（ウニ・アワビ） 琥珀原石	古墳時代後期～末（7 世紀後半）の竪穴住居跡 12 棟、平安時代中期（9 世紀前半）の竪穴住居跡 3 棟を確認。
		中近世以降	掘立柱建物跡　5 棟 塀跡　1 列 柱穴状ピット 157 個 溝跡　6 条	銭貨（寛永通寶）	周辺の過去の調査で中世の遺構が確認されており、該期の建物群の可能性がある。

要　約

4 ヵ年の調査で、縄文時代には狩り場と周辺に集落、古墳時代後期～末（7 世紀後半）と平安時代中期（9 世紀前半）には明確な墓域と居住域を持つ集落、中近世には建物群が存在していたことが分かった。特に、古墳時代後期～末と平安時代中期の集落の中心には各々に円形周溝と方形周溝が位置しており、周溝周辺には竪穴住居が造られないことから、代々墓域として受け継がれてきたと考えられる。円形周溝と方形周溝は、上部を既に削平されているが、堆積状況から内部に低墳丘を伴っていた可能性があり、末期古墳またはこれを継承する形態と考えられる。本遺跡を含む周辺の遺跡には、多くの古墳時代後期～末に比定される遺構・遺物が確認されていることから、同一時期に複数の集落が点在しており、岩手県沿岸北部の中でも該期の拠点的な地域と推察される。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第710集

中平遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷　令和２年３月11日
発行　令和２年３月13日

編集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019)638-9001
発行　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029　岩手県宮古市藤の川４番１号
電話　(0193)62-1711
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話　(019)654-2235
印刷　（有）セーコー印刷
〒020-0877　岩手県盛岡市下の橋町2－23
電話(019)651-3606

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2020